

# The Adventure of The Purloined Mirror

盗まれた鏡をめぐる冒険

THE ADVENTURE OF THE PURLOINED MIRROR

2012/12/24

Merry Christmas!

(C) めーこ@bliss

## もくじ

まえがき 1 .....	4
まえがき 2 .....	6

### 第一章 豪華列車の旅……話はぜんぜんはじまらない

ミッドガル壱番街ステーション .....	10
車内で一泊 .....	21
とんがり屋根と雪の街 .....	41
ようやく保養地へ .....	66

### 第二章 休暇は来たりて……そして去りゆく

自然の中 .....	73
あやしい雲行き .....	87

小休止その 1 .....	101
---------------	-----

### 第三章 巻きこまれ型人間たちのあやしい跳躍

大人ぶった訪問 .....	103
ザックス・フェア社、設立される .....	110
ザックス・フェア社、殷賑を極める .....	117
セフィロスが都会でも場合によってはまともに暮らせることに気がつく…	124
報告会 .....	131
ベテラン新聞記者、捜査に導入される .....	135
新米記者ストライフ君、華麗に登場する .....	143
資料室での攻防 .....	146
新米記者ストライフ君の奮闘 .....	158
それぞれのたいへんな一日 .....	165
ひとつの決断と、みんなの眠れぬ一夜 .....	180

小休止その2 .....	193
第四章 普通じゃない遺跡調査 .....	195
みんな出発	
いにしへの神殿で、じりじりする待機 .....	202
発砲騒ぎ .....	205
絶体絶命 .....	211
ソルジャー二名の活躍 .....	218
逃亡と、こっぱみじん .....	224
第五章 事件のあと	
クラウド熱を上げ、その効果的対処法が考案される .....	234
息子と母親のための一章 .....	244
たくさんのお見舞いと、同じくらいたくさんの勧誘 .....	258
クリスマスとこのお話のおしまい .....	273

まえがきその1……おもに二次創作特有の諸問題を片づけるために書かれた

暦は巡りて、もう年末です。早いものです。うちのそばのお宅では、サンタクロースが壁によじ登り、あるいは電球がちりばめられたトナカイが首を振り、教会の木は電球をぺかぺかやっています。見ていると楽しいです。そして楽しいことは、なんでもお腹にいいとムーミンママが云っていました。わたしもそう思います。

楽しくて、陽気な気持ちにさせてくれるものは、どんなものでもすばらしいものです。現実ってなかなかそうはいかないけれど、せめてクリスマスのこの楽しい時期くらい、そういうもので満たされているといいなあという願望から、わたしはこれを書きました。

お話はもうできあがっています。ですから、いつでも好きなときに、まあそれでさしつかえないのなら、好きなところから読みはじめることができます。とはいえず、話のはじまっても肝心な話はなかなかはじまらないのです。というのも、この世界では移動にそこそこの時間がか

かるし、それにセフィロスさんとザックスさんとクラウドさんの三人が集まったらよいことがたくさん起こるし、そのよいことが、二次創作に宿命的に課せられた役割だったりするからです。だから事前に、「あんまり普通の小説を読むように読んではいけません」の立て札をかけておくために、まえがきが必要なわけです。そうしないと、誠実なひとが腹を立ててしまうでしょう。そういうものに特にこだわりのあるひとは、まえがきその2へお進みください。

それから、二次創作には原作があります。原作がある以上、譲れない設定があるという方は、「この話に限っての設定資料」に目を通してみてください。そうして、受け入れられるかどうかのご判断をお願いします。

最後に。このお話は、これに先立つた皆さんの偉大な冒険小説、探偵小説、児童文学、それにユーモア小説がなかったら、きつと生まれていませんでした。こうしたものはわたしたちを楽しませ、日常生活でこんがらがった脳みそを適度にほぐしてくれます。あるいはまた、わ

たしたちを鼓舞し、前に進む勇氣と、寛大な精神をはぐくんでくれます。これはほんとに大事なことです。見せかけだけの、表面をなでているだけの感動じゃなくて、魂の底の底まで響くような、力のある作品であること。でも、肩の力を抜いて、寝転がって鼻なんかほじくりながら読めること。このふたつが調和する地点に、いわゆるエンターテインメント作品の、ひとつの頂が見えるように思います。

それではセフィロスさんとクラウドさんとザックスさんのクリスマスの冒険劇を、ちよつと覗いてみることにしましょう。眼精疲労には注意してくださいね！ くれぐれもよろしく。

まえがきその2……ゲームジャンル二次創作における小説的手法の諸問題について

このまえがきその2は、小説作法を重んじる方々、つまり小説の構成やその効果をついついまじめに考えてしまふ、くそまじめな方々のために書いています。よって、そんなことは気にしない健全な精神を持ち合わせの方は、読み飛ばしてしまつてぜんぜん構わない。

あらゆる創作物に対し、くそまじめな姿勢しか取ることはできないひとは……わたしはそういううちよつとかわいそうなひとが確かにいることを期待しているのだけれど……続きを読むで、わたしのささやかな葛藤を知ってほしい。もしかしたら、同じことで悩んでいるひとがいるかもしれない。悩めるひとにとって、似たようなことで悩んでいる誰かの告白は慰めになるはずだ。わたしはそう信じる。

あまりにも不条理！

ゲームを下敷きにものを書くとしたとき、真つ先にぶち当たった壁がこれだった。悩みを抱きつつ、わたしはネットの海に転がるいろいろな作品を読んでみた。そして絶望にたどりついた。みんな、この不条理を、少なくとも表面上は快く受け入れているか、あるいはたぶん無視している。

考えてみてほしい。ゲームというひとつのシステムを構築するための縛りの、なんと非現実的なことだろう。

一、モンスターが金を落とすのか？ やつらは、金を見つけると飲みこむ習性でも持っているのだろうか？

一、そもそも、モンスターというものがやたらと徘徊する世の中に、人間はまともに生息できるのか？ そのほかの動物の生態系は？ そして、モンスターの強さが地域によつてばらばらだが、どうなっているのか？

一、ワールドマップというものがあるが、町や村が少なすぎやしないか？

一、そして、その世界でそれなりに発達しているテクノロジーに対して、移動手段たるやあまりにも原始的ではないか？

一、一、一、……………

こういうことは「云ってはいけない」なのかもしれない。けれども、これは大事なことだ。少なくとも、わたしにとつて。ゲームを構成するにあたつてどうしても生じてしまうこれら「ファンタジーとしても現実的でないこと」と、いったい書き手はどのように折り合いをつけていけばいいのだろうか？ だって、考えてみてほしい、アイシクルエリアはどこかしこも万年雪に覆われているらしいけれど、もしそうだとしたら、そこに住む羊たちはいったいいつ毛皮の刈り取りをするんだろう？ 羊は、人間との長い長い歴史の中で、自らの力で毛代わりする習性を失ってしまった。何年も管理されずに放置された羊は、ほんとうにあわれだ。ゲームの作り手は、羊のことなんか考えなくていい。でも、物語の書き手はそうはいかない。

そういう細かいことは無視する？ それは簡単だ。ゲームシステムに迎合する？ それもまた簡単だ。けれども、少なくともこうした「ゲーム独自の、客観視するとちよつと笑つてしまう部分」が登場することによって、作品がまじめであればあるだけ、なにかがしらけてしまう。わたしの場合は。もしも、ゲームジャンルの二次創作に親しんでいる方全員が、そんなものは気にしない、むしろ、それは尊ぶべきものであり、変更は認めない、とおっしゃるなら、わたしはしつぽを丸めて、門外漢であることを認め、すごすごと逃げていくしかない。

わたしは決して、そういうシステムが悪い、と云っているのではない。あてこするつもりもないし、ばかにするつもりもない。RPGゲームということで考えたときには、わたしはその発想に万歳を三唱する。ただ、小説や、あるいはマンガもそうだと思うけれど、その中で展開されるべきこと、これはしかけも効果もまるで別なのだ。同じ歌劇の要素があるからって、能の舞台の真つ最中に、前触れもなく太ったオペラ歌手が機械のような声

で歌いだしたら、観客はたぶん怒るか、笑いだしてしまう。そういうこと。

作品におけるシステム（あるいは秩序）の統一と、リアリティはとても大事なのだ。ちよつとでもまがいものやそぐわないものがまぎれこんでいると、すぐにばれる。読み手は、そういうものに対して驚くほどの鋭い感度を持ち合わせている。リアリティを逸脱する場合は、逸脱しているなりの宇宙を、そこでのリアリティを兼ね備えていなくてはならない。作品は生きているからだ。血が通っており、呼吸をする。作品に登場する舞台も、人間も、生きている。リアリティを殺すことは、その舞台を、人間を殺すことだ。そうしてそうなったとき、その作品自体も死んで、腐敗がはじまる。

なにが云いたくてこんなことを書いたかという、ゲームシステムとしてのルールを、作品の中で厳密に展開していくことは、わたしには不可能であると悟った、ということ、ひとこと断っておかなくてはならないと思っただからだ。次からようやくはじまるお話の中で、わた

しはいくつかの本編に出てこない街を作ったし、施設を作ったし、当然、そこにひとを配置して、そのひとたちが生活しているところを書いた。大自然の森の中に、変な攻撃をしかけてくるぶつそうなモンスターは出てこない。そういうところにいるのは、ごく当たり前の動物たちだ。そして、ゲーム中に出てくるいくつかのものについて、自分なりに考えたものを書いてみた。

これは、ゲーム作品の二次創作を骨抜きにしてしまう行為だろうか？ そう思われたなら、わたしは前記したとおり、平謝りしてからしつぽを巻いて逃げる。けれども、その原作といかに向き合うか……結局、書き手の誠意というものは、そこにあるのだとわたしは思う。書き手の自由、書き手の葛藤。原作に対してそうであるように、書き手というものは、読み手に対しても誠実であらねばならない。わたしはそう思う。そしてわたしにとつて誠実であるということは、読み手にいささかも、物語全体の調和を乱す場面を見せないこと、そして、骨の髄までわたしであることを貫くこと、なのだ。



わたしが臆面もなくあれこれ創作した箇所を、みなさまが笑って流してくださることを願って。まじめなまえがきおしまい。

## 第一章 豪華列車の旅……話はずんずんはじまらない

### ミッドガル壱番街ステーション

蒸気機関車が真つ黒な煙を吐いてホームにのろのろと進んでくると、クラウドはベンチから立ち上がって、大急ぎで首にぶら下げていたボラロイドカメラを構え、その威風堂々といった姿をばちりとやった。大きなものは、なんでもそんなふうに見える……特に、動いているあいだは。この列車は、神羅カンパニーが技術（と金）の粋を尽くして作成した、豪華旅客列車だ。乗客たちは、食堂車でくつろぎながら食事を堪能することもできるし、ベッドや洗面台がしつらえられた個室で、のんびりと自分の時間を満喫することもできるのだ。係の男たちはよく訓練されているので、たとえ揺れる車内であっても音もなく移動し、客が必要とするときにはなぜかその場に必ず居合わせることができるというすぐれた特技を身につけている。車体はシックな黒みがかった赤で、窓枠には金の縁取り、先頭車両にだ

け、大きな例のカンパニーロゴがくつついている。

プレジデントはこれを作成するにあたり、技術者たちに「動くホテル」なるものを要求した。というのも、プレジデントは船旅や空の旅があまり得意ではなく、移動するならばバスか列車で、という、いくぶん古風な考えを持っているのだった。だがいざ社長の地位を手に入れて贅沢暮らしに慣れてみると、どうも身の丈にあった列車がない。ないならば作ってしまえ、ということ、制作に十年を費やした未完成したのがこの「神羅・コンチネンタルエクスプレス」だった。コンチネンタルとは大陸という意味だけれど、この列車は大陸というよりは世界を一周していて、ミッドガルを出て、海峡を渡ってアイシクルエリアに立ち寄り、コレルを通過したのちウータイに寄り道し、コスモキャニオンの真つ赤な大地を通り抜けてジュノンからミッドガルへ戻る、というコースを取る。これをあくまで大陸と主張したのにはプレジデントのささやかな願望がその根底にあり、つまり、ひとつの大陸を掌握するように世界を掌握してしまえという、なかなか大それた、けれどもらしいと云えばらしい願望なのであった。そして、金持ちに

よくあるように、作った本人がそれに乗る機会はどこかへ出張する場合に限られていた。列車を利用するのは主に別の金持ち連中で、けれどもまともにこの列車で世界旅行をしようとするとてもない日数がかかるので、乗客たちは当然、どこか適当な区間に限って、ほとんど娯楽のために利用することになる。

クラウドは満足げな笑みをもらし、のろのろとホームに滑りこんでくるやつを感じたように見つめながら、赤くなつた鼻を鳴らし、しょっちゅうずれが生じる灰色のフェイクファアの耳当てをなおした。こいつはクラウドがまだ子どものときから使い続けている代物なので、いまの彼の成熟した頭蓋骨には、はつきり云って合っていないかつた。おかげでちよつとした振動でも、すぐにずり上がっていつてしまう。おそろしく不便そうだけれど、でも本人は替えるつもりなんかこれっぽっちもないらしい。耳当てといえど世の中にこれひとつきりしかないとも思っているみたいに、クラウドは毎年毎年同じものを使い続けている。彼は、そういう子なのだ。

機関車はぎしぎし苦しうめいてから完全に停止し

た。整備を完了して車庫から出てきたばかりの列車は、いよいよこれから運行に向け、食料や備品をつめこむのだ。赤帽が何人か駆け寄り、車掌は降りてきてホームをいかめしい顔でうろつく。クルーたちがきびきびと動きまわって、箱詰めの食料を積みこむ。こういう光景を眺めているのは面白い。セフィロスは喧噪から一步離れたホームの隅のベンチで、そうした動きを見守つた。太ったコックらしき男が、積みこまれる箱を数え上げている。乗客たちがどこからともなく集まりはじめ、赤帽が、かわいそうに顔を真つ赤にしながら重たい荷物を運ぶ。乗客はみんな例外なくコートを着て、手袋をはめ、真冬の寒さから身を守っている。ものすごいとしか云いようのない毛皮のコートを羽織つたご婦人が、赤帽にキンキン声で命令している。

「気をつけてちようだいよ！ 鞆に傷をつけないで……」  
ご婦人は太っており、猪首型で、ボリユームのあるコートを着ているものだから、頭がコートから生えているように見える。おまけに結い上げられた髪はこれでもかとはかりに後頭部にてんこ盛りになっているので、云ってはなんだがそのさまはひどく滑稽だった。傷をつけたくない鞆な

んか、はじめから買わなければいいのではないか、とセフィロスは思った。鞆は、しょせん入れ物なのだから。このご婦人は、金持ちになってからまだ日が浅いと見える。

セフィロスは微笑して、毛皮おばさんから視線をはずす。

駅とは、不思議な空間だ。都会の空気と、田舎の空気が混じり合う。どちらに乗り入れるにしても、汽車のドアを開けた瞬間に、ちょっとした異文化の空気が、そこからもたらされるわけだ。降りてくるひとたちのまとう雰囲気、持ち物、呼吸、いろんなところにそいつは潜んでいて、いずれ溶けてなくなってしまうのだけれど、少なくとも駅のホームには、まだその気配が色濃く残っている。やってきた乗客たちの視線、身振り手振り、服の色使いのようなものまで、都会を、あるいは田舎を感じさせるような気がする……。

クラウドの撮ったポラロイド写真が出来上がった。彼はそうすれば仕上がりが早くなるとでも思っているみたいに写真をしきりに振って、やたらと光にすかして見たりしていたが、満足げな息をもらし、小走りでセフィロスの座るベンチへ戻ってきて（そのあいだ、彼はどうしても頭から

外れようとする耳当てを少なくとも四回は整えなければならなかった、それを見せた。なかなかよく撮れていた。うなずいてやると、クラウドは手持ちのバッグから小ぶりのアルバムを取り出し、写真をはきみこんだ。アルバムを開じた拍子にまた耳当てがずれたので、彼は云うことをきかない子どもをなだめるみたいな手つきでそれをなおした。クラウドはこのところポラロイドカメラに凝っている。セフィロスつきの家政婦、気のいいグロリア未亡人がひと月ばかり前にくれたのだ。「お下がりでごめんなさいね」と彼女は云った。

「わたしの甥の持ち物だったの。一時期はかみみたいに凝っていたのよ。でも、寄宿制の学校へやられてから、すっかりひとが変わってしまつて。まじめになったと云つていいのかしら。いいえ、違うわね。毎日、頭からけぶが出るほど勉強させられて、上級生に意地悪されて、ショーペンハウアーだかシオランだか、とにかく意固地な年寄りの本ばかり読んでるうちに、なんだか悲観主義者みたいな雰囲気をもとうようになってしまつたわ。なにかも見下すという感じで。でも、そういうのつてあるタイプの子どもに

は、思春期に必ずかかる病気みたいなものでしょう……」

そういうタイプの子どものことはよくわかるし、セフィロス自身、哲学者だのモラリストだのといった連中とは、それなりに関わりを持って生きてきた。寄宿制学校に通わず、うるさい上級生の意地悪もなく、哲学書は読まず、したがってそういうタイプでもないクラウドは、それ以来すっかりカメラマン気取りになってしまつて、なにからなにまでポラロイド写真に収めようとする。機関車や街の風景なんてものはまだまっとうな被写体と云えそうだけれど、セフィロスはたとえば、自分の足の裏とか、目玉だとか、あるいは食卓テーブルの脚の下なんてものが被写体にふさわしいとは、あまり思えない。

クラウドが隣に腰を下ろした。古い木製のベンチはすこしぐらついた。

「ザックス、まだかなあ」

彼はポケットからチョコレートバーを取り出し、口につっこみながら、黒いブーツに覆われた脚をばたばたやつた。待つのが嫌いなのだ。

「ザックスがいま来たところで、どうせこの汽車はたつぷ

りあと三十分は動かない」

セフィロスはチョコレートバーのせいで手がふさがっているクラウドにかわつて、足をばたつかせた際にずり上がった耳当てをなおした。

「根本的な問題としてき、駅員のろまんなんだよ。汽車は早いのに。社内掃除だの備品交換だのなんか、ちゃつちゃとやっちゃえばいいじゃないか。駅員のやつら、時給かせぐためにのろのろやつてるとしか思えない。おれなら、秒速で終わらすよ。ゴミはまとめて袋にぶちこんで、床と柵をモップでさあつとやつて、見えたら都台の悪いところは猫を置くか、なんかしちゃうんだ」

「人間と機械を比較する方が間違っていると思うが」

セフィロスは云つて、チョコレートバーの殻を受け取り、ベンチ横にあるゴミ箱に捨てた。

「それはそうと、そろそろ薬を飲んでおけ」

セフィロスはコートのポケットから空色のゾウのイラストがついたかわいらしい布袋を取り出した。これはクラウドが三歳のときから使い続けているお薬袋で、裏にはちゃんと名前と、クラウド印の雲マークが刺繍されている。ク

クラウドは眉をしかめて、セフィロスが取り出した白い錠剤を口に入れた。彼は乗り物酔いがひどいので、乗り物に乗る前には必ず薬を飲むことにしている。でも本人が忘れやすいうえに、ゲロゲロやられて被害に遭うのはだいたいセフィロスなので、いまではクラウドのお薬袋はセフィロスが持ち歩くことにしていた。

陽気なザックスが陽気な足取りで戻ってきた。彼は真冬、だというのに丈の短い黒のダウンジャケットの前をはだけ、おそろしいことにその下には薄手のニット一枚しか着ていない。これで「南国生まれのザックスちゃんは、こんな北のはずれみたいなミッドガルで、冬ともなりやあ寒い思いしてんのよ」などと云ってはばからないのだから、たいしたものだ。彼には、連れがあった。やたらと身体にフィットした濃紺の制服をまとった中肉中背のひげ男と、その後ろからくっついてくる、痩せ型の、こちらはちよつとぶかぶかに見える制服を着た、ひよろりと背の高い男。さらにその後ろから、まだ年若い赤帽がふたりついてくる。

「お待ちせお待ちせ。いやおれだけですませるはずだったんだけどさあ、どうしても、挨拶したいって云うもんで。」

紹介するわ。このひと駅長さん（と云ってザックスはひげ男を指さした）、で、こっちのひとが、副駅長さん。あとのふたりは荷物持ち」

セフィロスは立ち上がり、駅長とやらから差し出された手を握った。駅長はやたらしゃつちよこばった顔をして、自分が駅長でいるあいだにサーのような高名な方をお送りできることをたいへんに誇らしく思うしました、それはこの駅にとつてもたいへんに名誉なことであります、と述べた。セフィロスは久方ぶりの「サー」なる呼称に身震いしそうになったが、自分が無断欠勤常習犯の長期休業中であることや、週末ともなれば牛と戯れ、土いじりに精を出しているということなどは、駅長にはなんの関係もないことであると思い改めて、身震いを制した。続いて彼は副駅長と握手を交わしたが、痩身のこの男のほうは、駅長のように鼻を膨らまして美辞麗句を並べ立てるようなことはせず、ただ静かに頭を下げてただだった。駅長は次いで、ポラロイドカメラをいじくり回しているクラウドをどうしようか悩みはじめたようだったが、相手がいつこう立ち上がる気配も、こちらを気にかけるそぶりも見せないことから、深入

りしない方が得策と考えたようだった。赤帽ふたりが、サー・セフィロスに握手をする許可を求めてきた。彼は断る方が面倒だったので応じた。赤帽ふたりは同年代のクラウドの上に、羨望と嫉妬と疑問の入り交じった複雑な視線を投げたが、すぐに無表情に戻り、ふたたび駅長の後ろで待機姿勢に入った。

「こんなところでお待ちにならずに、駅長室へいらしてくださいださればよかったのに」

駅長は残念がるそぶりをみせた。セフィロスは、そういうのがわずらわしいのでザックスを自分の代わりに挨拶に行かせたのだが、というのもこの駅長はプレジデントの母親の父親のはとこの腹違いの妹の娘の子ともだかなんだかで、とにかくよくわからないが例の一族の血縁者であり、いろいろな事情の手前、挨拶をしないわけには行かなかった。セフィロスは曖昧な微笑を浮かべながら、駅の中を見物したかったことと、また冬の寒さは健康によいことでもあり、ご遠慮したのだと述べた。駅長は微笑み、なおしばらく本人にとつてもっとも高尚であると思われるにちがいない話題を連発していたが、クラウドがやたらに大きなあ

くびを連発しはじめ、それにつられてザックスも大あくびをはじめたので、セフィロスはしめたとはかりに手持ちのバッグを抱え、やかましい駅長を残して列車に近づいた。ザックスがあとに続いた。赤帽たちが大慌てで荷物を受け取って、きびきびと運びこみ、駅長は取り残された。列車の入り口で、クルーのひとりが案内をしていて、セフィロスを見ると帽子を持ち上げ、挨拶した。

「サーは、最後尾車両、特別室になります。お連れの方は、そのお隣の部屋です」

セフィロスは礼を云って、そそくさと乗りこんだ。ちらりとホームを見やると、残された駅長が、名残惜しそうにふたりを見つめていた。せつかくの上物の獲物を取り逃がしたというような目だった。セフィロスはぞつとした！ あんな男に絡まれるのはごめんだ。

車内は空調が効いて、非常に温かった。見事なガラス細工のランプが、壁に等間隔でかかっており、淡いオレンジの光をあたりに投げている。ひとひとり通るのがやつとな細い廊下の、片側は窓で、もう片方に部屋が並んでいる。ザックスはひらひらと手を振って、一番奥から二番目のド

アを開け、中へ入っていった。セフィロスも自室に足を踏み入れた。

コンパートメントは、夜になれば二段ベッドに変身する大きなソファ、窓際にくっつけて設置されているテーブル、電話ボックスほどの大きさの、コンパクトな洗面台で成り立っている。広さは四畳半みたいなものだったけれど、プレジデントがセフィロスに気を利かせて部屋をふたつぶち抜いて続けた特別室なんぞあてがったために、さながらちよつとしたリビングルームに見えた。純粹に構造が同じ部屋がふたつ、鏡あわせにくっついているだけだが、それだつて一般の部屋の倍の広さには違いなかった。ソファは紺碧のビロード張り、クッションがふかふかしていて、セフィロスは小さくため息をつく、持ちこんだトランクを開き、クラウドの歯磨きコップと歯ブラシ、空色のタオル、ブタの室内履きなどを出してふさわしい場所においた。ごそごそやっている、ザックスがひよいと現れた。

「わーお、さすが特別室。広いね。いいねえ。おれ狭くて死にそうよ。ところでボス、ハンガー余分に持ってない？ あつたら貸してくんない？」

セフィロスは、母さんみたいになんでも予備を持っていた。折りたたみ式のやつをひとつ取り出して、ザックスに渡した。

「あんがとさん。助かった。まーったくもう。こんな列車で移動なんて、ほんとに勘弁。おれ発狂しちゃうよ。トラツクの荷台で移動するほうがマシ。プレジデントのやつ、ほんとにあんたのこと愛してるよなあ」

ご一行が、こんなふざけた成金主義の車両のやつかいになりかけているのは、立派な、やむを得ないわけがある。理由のわかりやすいところから述べれば、プレジデントがセフィロスのことを熱烈に愛している、ということがあげられる。プレジデントは、カンパニーの大事な商品であるセフィロスを非常に重んじるところがあつて、彼がそろそろ引退したいと申し出たときにはさすがに腰を抜かしかけたが、正面切つて否定はせず、無期限休養を許可、のみならず、心身のリフレッシュが必要であろうという心遣いのもと、実に様々な提案をしてきた。コスタのリゾートでのゆつたりとした休暇、ミディールの温泉での静かな休暇、ウータイでの異国情緒あふれる観光、コレルでゴルフ三昧



ゴールドソーサーの貸し切り、などなど、カンパニーの慰安施設と特権とを駆使し、いわばなんとかセフィロスのご機嫌をとろうと四苦八苦してきたわけだ。当然、セフィロスとしてはそういうすべてをはねのけてきたのだが、プレジデントのあまりの熱心さに、ザックスなどはつれない女に求愛し続ける男のごとしと云い、クラウドは『ぞっこん』と称した。そしてセフィロスはというと、例の金髪狸社長のことを、少々気味が悪いと思っている。いつだって本気の情熱は、伝えたい相手にこそ伝わらないものなのだ。

今回の豪華列車使用の旅は、プレジデントの最後の切り札と見えた。

「これを彼がうんと云わなければ」

仲介役をしたザックスの話によれば、プレジデントは社長室のばかでかい椅子の上であえぎあえぎ云ったということだ。

「わたしはもう八方ふさがりだ。どうか、頼むから首を縦に振ってくれたまえと、彼に伝えるんだ」

そうしてザックスが預かってきたプレジデントからの手紙は、要約すれば以下の通りだった。

「これまでのわたしの提案は、君と君の感性にとって見当違いであつたということにようやく気がついた。つまり、君はまったくの田舎趣味なのだ。田舎はいい。田舎の健康効果については、われわれも大いに着目しているところだ。君に、とっておきの場所を紹介しよう。アイシクルロッジのそばに、大がかりな保養施設があることは知っているだろうか。森の中の、湖のほとり、かなり広い土地に立派なコテージがいくつも点在しているのだ。もともとはサナトリウムだったが、医療の進歩によつて肺病は不治の病ではなくなつたため、サナトリウムは閉鎖され、豊かな自然を体験できる別荘へと変身した。湖はこの時期、すっかり凍つてしまつているのでスケートもできるし、氷に穴を開ける気があれば魚釣りもできるだろう。少なくとも半径三口以内にはひとが集まる場所はない。少し離れたところに小さな村があるが、そこから用聞きが毎日チヨコボ車でやつてくる。もちろん、散歩をしても構わないのだ。これぞ、正真正銘の田舎ではないかね……………」

プレジデントは、万が一の場合を考え、護衛としてザックスをくつつけてやることを提案し、雪の中で静かなクリ

スマスを過ぐす、という案をこり押ししてきて、ザックスを青くさせた。クリスマスといえば、男にとって一世一代のイベントだ、と彼は力説したそうだが、当然ブレジデントには通じなかった。夢破れ、田舎など行きたくもないザックスは、腹いせにクラウドを連れていくことにした。そこで、例によって例の顔ぶれが、よりによってクリスマスにはまだ遠い十二月の一日に、不釣り合いな豪華列車に乗りこむことになったわけなのだ。ザックスはクリスマスMASの時期に都会を離れなければならない我が身を嘆き、わからず屋のブレジデントを呪った。

「あの出っ腹の金髪の狸じい、地獄に落ちりゃあいんだ。こんな金のかかった箱の中に善良な一般市民をぶっこみやがって。エアリスちゃんには、同行を断られたし。そんな長い期間、お母さんをひとりにしておけないでしょ、とか云って……あーあー！ いい子とつきあうって、つらいわあー！」

彼はぶつくさ云いはじめたが、セフィロスはいつまでもつても見慣れた金髪がやってこないことに疑問を抱いた。

「あの子はどこへ行ったんだ」

ザックスは知らない、と云った。廊下へ出て、ホームを見渡したが、駅長が副駅長と赤帽を従えて頑固にホームに居座っているほか、誰の姿も見あたらない。だが、どうも一団は、なにか車両の先頭のほうを、気づかわしげに見やっている。セフィロスは大変いやな予感がして、その方向に目を転じた。そうして心臓が止まりそうになった。クラウドが、あろうことか煙を吐き出す煙突のすぐそばによじ登っており、熱心にカメフラを構えているのだった。しかも、悠長に耳当てをなおしたりなどしている。

「あのばか」

彼はつぶやき、あわてて外へ出ようとして、通りがかった年配の給仕服を着た乗務員に呼び止められた。

「どうかなさいましたか？」

給仕服は穏やかに訊ねた。セフィロスは連れのばかさ加減を説明した。乗務員は青い顔をしてあわててホームに降りた。セフィロスは車両から身を乗り出して、行方を見守った。

「お客様！」

給仕服はホームを一直線に走って行って、絶叫した。つ

るつるのエナメル靴を履いているために、彼は何度も滑りそうになった。

「お降りください！　そこから出る煙はたいへんお熱うございます！　万が一当たりでもしましたら、いわゆる……焼けただれてしまわれます！」

クラウドはのんびりホームに目を転じ、あわてず急がず煙突をばちりとやってから、降りてきた。給仕服は高みの見物を決めこんでいた駅長一行をうらみがましく見やり、はた迷惑な客をきつちり車内へと連行した。セフィロスは給仕服に礼を云った。

「とんでもありません。ご無事でなによりでした。ただいまご挨拶に伺うところでした。わたくし、あの特別室を長年担当しております。特別室だけは、専用の係がつくことになっております。ですから今回はお客様のご担当になるわけです。ウィリアム・ウィリアムソンと申します」

クラウドはいま撮ったばかりの写真を振り回しながら、目を丸くした。

「それ、すっごくいい名前ですね」

彼は云った。

「さようでございますか？」

今度はウィリアムソン氏が目を丸くした。

「だって、ウィリアムと、ソンだけ覚えればいいってことでしょ？　おれみたいに、クラウドとストライフのふたつも覚えなきゃならないって、おれにしては大変なことだったんです」

セフィロスはこらえきれずに吹き出した。ウィリアムソン氏はまだ面食らった顔をしていたが、やがて普段の顔を取り戻して、それからなんとも云えない微笑をほんの一瞬だけ浮かべ、御用の際にはいつでもベルでお呼びくださいと云って、いなくなった。セフィロスは部屋に戻ると、クラウドに「め」をした。

「だってさ、かつこよかったんだ、煙突」

クラウドはポラロイドカメラを大事そうに机の上に置いて、生意気な顔になった。

「それにさ、いいだろ、どうせ停車中だもん」

「停車中だからといって、煙を吐き出さない保証はない」セフィロスは怖い顔をした。

「なんでもなかったからよかったものの」

クラウドは肩をすくめて、耳当てを外し、ソファに座って三度跳ねた。クラウドの声を聞きつけて、ザックスがふたたびやってきた。

「いい写真撮れたかよ、閣下」

ザックスはにやにやしながら訊いた。

「もちろん。おれ、軍人やめたらカメラマンにだってなれるね。見る？ 正面だろ、側面だろ、アップ、車輪も撮ったし、ほかにもいろいろ。あとで、母さんに送るんだ」

それから、クラウドは思い出したように辺りを見回し、天井からぶら下がっているシャンデリアを見つけて、げらげら笑った。

「シャンデリアだってさ！ 列車にシャンデリアだってさ！ つけてどうすんだろ？」

「知るかよ。プレジデントに聞けよ」

ザックスがげんりしたように応えた。

給仕服のウィリアムソン氏が、三人のウェルカムドリンクを携えてふたたびやってきた。クラウドはザックスに、ウィリアムソン氏の榮譽ある個人的な名前について話をし

た。

「音楽的な名前ってやつですね」

ザックスはしみじみ云った。

「なんていうか、くりかえしの……リズムが」

「覚えやすくていいっておれは云ったんだ」

クラウドが云った。

「普通のやつは、名前覚えて、名字も覚えなくちゃならないけど」

「だよな。つづりの問題がなくていいよ。おれの名字なんて簡単な方だけど、それだって学校に上がるまで書けるようにならなかったもんな」

「おれも。名前しか書けなかった」

「要するに、おれたち……」

ザックスは頭の横でひとさし指をくるくるやった。クラウドは笑い転げた。

この頭の横でのひと指し指くるくるは、ウィリアム・ウィリアムソン氏にはるか昔の子どものころのことを思い出させた。彼の父親は古きゆかしき植字工で、その方面の腕は確かだが、やんわりと云えば少々おつむが足りなかった。

一点豪華主義の脳みその持ち主だったのである。時代の流れて、父親は年々稼ぎが悪くなり、母親はとうとう一念発起して理容師の免許を取り、自宅を改装して商売をはじめた。父親は昼間から酔っぱらってふらふらするようになり、母親は息子たちに……彼は三人兄弟の末っ子だった……よく頭の横で指をくるくるやっては、父親のような阿呆にはなるなど云いかせていたのだった。けれどもウィリアムソン氏としては、母親を尊敬するように、父親もまた尊敬している。なぜなら彼はこの世に存在するほとんどすべての字体を網羅しており、何ポイントのウェイトいくつ、というのをすぐさま見分けられる。ウィリアムソン氏は子どもころ、父の勤めていた印刷所に遊びに行ったことがある。そこで彼は父親の、ほかに並ぶもののない素早さを誇る仕事ぶりを見た。そうして、自分も将来はなにか、父のように徹底して訓練された職人になろうと思ったものだった。不幸にして手先の器用さを持ち合わせなかったため、彼はホテルのボーイになった。もともと目端的に利く性格であるのに加え、生来の生真面目さを頼みにして、彼は客室係の責任者にまでのぼりつめた。その丁寧な仕事ぶりでプ

レジデントに顔を覚えてもらい、定年より少々早く退職してからは、この仕事に引きぬかれ、六十を目前にした現在でも、立派にこなしている。彼は、有り体に云えば自分と自分の仕事に誇りを持っていた。父親と同じように。ウィリアムソン氏は、なつかしい気持ちに囚われながら引き下がった。

ピーーっという発車の合図が、ホームに響き渡った。まだホームでぐずぐずしていた駅長は、もくもくと煙を上げながら走り去る汽車を見送り、ため息をついた。そうして、結局ひとことも喋らなかつた副駅長を従えて、駅長室に戻っていった。

幼なじみである赤帽ふたりは、ようやく長い見送りから開放されて、こんな会話を交わした。

「あの一緒にいた金髪野郎、なんだろうな？」

「知らねえよ。どうせ荷物持ちかなんかだろ。おれらみたいなもんだよ。散々こき使われんだ。ざまみろ。ああいう色の薄い金髪の男って、ろくなやつがいねえよ。ウィンジーがそうだろ。あの野郎、休みつちやあバーに通つて、女のケツ眺め回してるんだ。あいつの頭がすつからかんなの

と同じで、あの金髪だつて頭空っぽだよ。さっきの見ただろ？　悠長に煙突になんかよじ登りやがつて。でも、いいご身分だよな。コンチネンタルで移動するんだぜ。おれも軍人になりやよかったかな。切符切つてるいところが、口添えなんかしなかったらな」

「それで、おれはおまえに誘われたりなんかしなかったらな。そしたら、おれホテルマンか給仕になったよ。向こうの方が、チップの割がいいだろ」

ふたりはそれで、しまいにけんかになった。まあ、そういうのつて、よくあることだ。

車内で一泊

ウエルカムドリンクを飲み終わり、気分が落ち着いて、ザックスも部屋に戻ったところで、セフィロスは部屋の片方を寝室、もうひとつをリビングがわりとすることを決めて、車内に持ちこんだ細々した荷物をせつせと移動させはじめた。

「なんでザックス別部屋なの？　だってここ四人は寝れるよ」

クラウドはソファにどっかりと座りこみ、ピーナッツ入りのチョコレートバーを取り出してかじりはじめた。最近彼はこのメーカーのチョコレートバーがたいへん気に入っていて、こればかり食べている。好きな理由は、パッケージについている牛のイラストがつぶらな瞳でかわいいからだ。彼はこれをごっそり六ダース買いこんで、トランクに詰めて預けてある。

「プレジデントのはからいだ。おれにはいい部屋をよこして、ザックスにごく普通の部屋をあてがってある。おまえのことは考えもしなかったろうが、おまけについてきた場

合、おれとセットにするしかあるまい。ザックスと一緒にいいなら止めないが。おれに静かな時間を提供してくれる気があるのか？」

「ないね」

クラウドはきつぱり云った。

「楽隊みたいにやかましくするよ」

セフィロスは肩をすくめた。クラウドはせつせとブーツを脱いで裸足になり、母さんが編んで送ってくれた毛糸の温かい靴下を履き、ブタの室内履きに履きかえた。それからかっこいいけれどちょっぴり窮屈な上着を脱いで、部屋着の空色セーターに着替え、耳当ては大事に毛並みを整えて、壁に打ちつけられていたフックに、コートと一緒にかけた。彼は衣替えにすっかり満足して、乗り物酔い対策に窓を数ミリ開けた。ぞっとするほど冷たい空気が徐々に車内に流れこんできた。が、これはクラウドにゲロゲロやられないために、セフィロスがどうしたって堪え忍ばなければならなかったのだ。

それからクラウドは、ポケットからルーペを取り出し、窓の鍵にほどこされた飾りを熱心に眺めはじめた。セフィ

ロスは従僕のようにまめまめしく動き回って、クラウドが持ちこんだチョコボとモーグリとトンベリとブタのぬいぐるみを倒れないようにバランスよくソファの上に並べ、彼が脱ぎ散らかした上着をはたいてハンガーにかけ、靴はきっちりそろえて部屋の隅に置いた。昼食と夕食は食堂車で摂ることにしているのだが、食堂車には正装をしていかなければならないので、セフィロスは皺にならないようにクラウドの買ったばかりのスーツを一度広げて、ほこりを取り除いた。

「そのかつちりした服さあ」

クラウドは窓枠に肘をついてむくれた顔を向けてきた。

「着ないとだめなの？ 正装って、誰が考えたの？」

「そういうルールだ。正装を最初に考えたひとが誰かは、残念ながら知らないな」

「おれ、そのつことつかまえて皮剥いでやりたい」

クラウドはいまいましそうに云った。彼はかつちりした服が大嫌いなのだ。

「人間はさ、好きな格好してるべきだよ。仕事以外は。母さんが、せっかく気合い入れて空色のセーター編んでくれ

たのに。これがおれの正装なんだって云つてもだめ？」

セフィロスは微笑して、クラウドの毛嫌いのスーツをハンガーにかけると、ソファのところへ行った。彼は背が高く、よって歩幅も大きかったので、ソファまではひと足だった。クラウドが、尻を動かしてちよつとよけた。セフィロスはできた隙間に座った。

「いいかげんにあきらめろ」

クラウドは鼻を鳴らした。セフィロスはクラウドの空色のセーターをちよつと引つ張った。確かにそれは脱いでしまふのがもつたないくらい、すごくクラウドに似合っていた。袖と裾のところに白いラインが入っていて、袖と丈はちよつと長め。クラウドの母さんは、毎年冬になる前に必ずクラウドのためにセーターとマフラー、手袋、帽子、靴下などを編んで、送つてよこす。クラウドはそれを大事に着る。でも彼はいま成長期なので、去年のセーターなんかは大きさが合わなくなってしまう。そうすると、クラウドはそれを潔く送り返す。母さんはそれを受け取ると、毛糸をほぐして、また別のものを編むのだ。この旅行が決まったとき、クラウドの母さんは最高に気合を入れて、息子の



ために大きな箱を三つ送つてよこした。新しく編んだ服や、細々したものがたくさん入っているやつだ。それを開けて、ゴミ箱を漁る飢えた犬みたいに猛烈に中をひつきまわしていたクラウドが、これはあんたにだ、と云つて、セフィロスに小さな箱を投げてよこした。その中には、すごく暖かそうな黒のマフラーが入っていて、こんな手紙が添えられていた……

## 息子二号（仮）へ

あんたの好みはよくわからないから、一応マフラーだけにしておいた。黒って好き？ 訊くの忘れたけど、まあいいよね？ ところで毎年聞くけど、あんたほんとにうちの息子になる気があるの？ 男ってなんで十八からじゃないと結婚できないか知ってる？ あたしは知らないけど、そういうのってばかばかしいことよね！ こないだ思ったけど、クラウドのこともう三年くらい早く産んであげればよかったかも。だって、そしたらあんた犯罪者にならずにすんだでしょ？ でもそしたら、あたし十五で母親ってことね。これはこれで、犯罪的かも。まあとりあえず、身体に

気をつけること！ あと、クラウド寝相が悪いから、冬場は風邪引かないように気をつけてやってね。寝る前にひと汗かいてうんと温めること推奨！ あんたの仮のママより

そのマフラーを、セフィロスはちゃんと首に巻きつけてきた。黒は嫌いではなかった。少なくとも、真つ赤とか、真緑とかよりはよほど好感が持てる。けばけばしい色は、存在を際立たせるので好ましくない。ただでさえ、身長が長すぎるために感じてしまう妙な存在感に苦しんでいるというのに。

クラウドがふたつめのチョコレートバーをかじりながら立ち上がった。

「おれ、ザックスの部屋見学してくる」

そう云つて、隣の部屋にずかずか入っていった。セフィロスはクラウドが開けっ放しにしていたドアを閉めに立ち上がった。昼食までは二時間ほどある。さあ読書だ！ うるさい子が帰ってこないうちに。彼はカバンからシュティフターの短篇集を引っ張り出す。人間のちからを信じられる書物が、彼は好きだ。もうすっかり死滅してしまつた、

そしておそらくこんにちでは口にすることすらはばかられるようになってしまった「徳性」なるものを、同胞のうちに信じられるような書物。読みはじめてしばらくして、ザックスとクラウドがいるはずの隣の部屋から、ふたりぶんのけたたましい笑い声が響いてきた。セフィロスは本から視線を外して、この部屋と隣室とを隔てている壁を見やる。あの部屋にあるのは若さだ。彼は思う。自分のそれはとつくの昔にどこかへ行ってしまったけれど……否。セフィロスは、年齢的に若かった十代のころよりも、最近のほうが己の身体に若さというものが馴染んできたという気がする。染みこんでいつ、同化しはじめている……クラウドのせいで。彼の喜怒哀楽。ばかばかしいふるまい。天性の悪戯者であり永遠の子どもである彼は、セフィロスの中で息も絶え絶えになっていたその部分に、復活のくちづけを与えた。クラウドが大はしゃぎで部屋中を駆けまわり、ばか笑いし、塩と砂糖の置き場を逆にし、夕食のテーブルのミネラルウォーターを酢にすりかえたりするとき、セフィロスはだから眉をしかめつつほんとうはとても楽しんでいるのだ。だから、彼のやかましさを、迷惑極まりない行動の

数々を、非難する資格などどこにもない。

彼は本を閉じた。大笑いは、断続的に続いている。セフィロスは車窓の風景を眺めはじめた。いまや列車はミッドガルを離れ、草原の中を走りはじめている。空はどんよりと曇り、きびしい冬の、灰色の風景だ。人間があんまり早く移動することを彼は好まないが、高いビルや櫛比する家々のないのんびりとした風景は、流れる時間をゆるやかに感じさせ、彼の目を楽しませた。田舎へ行くのだ！ふいに彼は実感した。そうして、気分が高揚してきた。列車から降り、目的地へ着いたら、うんと手足を伸ばすのだ。規則的な、規律のある生活を送ろう。朝は早く起きて散歩をし、日に三度の食事と、読書と。

クラウドが慌てた顔で戻ってきた。

「セフィロス！ おれ、枕ちゃんと荷物に入れた？」

セフィロスは微笑んで、うなずいた。

「ちゃんと専用のトランクに入っている」

クラウドは安心したように、またザックスの部屋に戻った。ドアを開けっ放しにして。セフィロスはまた、立ち上がった。ついでにクラウドが開けた窓も閉めた。

「やれやれ」

彼はひとりごちた。

「あの子のあとを、まるつきりついて回らなければならぬ  
いようだ。旅行中は普段よりはいくらか平穩な暮らしがで  
きるよう、神に祈るしかあるまい」

結論から云えば、神はどうやらこの祈りを聞き届けなかつたか、無視することにしたようだ。

昼食の時間になると、クラウドは食堂車へ行くための正装に最後の最後まで抵抗して、スーツのジャケットは着ず、表と裏で微妙に色の違うチョッキを着た。表が赤銅色で、細かな蔦の模様が入っており、裏が暗赤色で模様は入っていない。彼はこれに、シャツの第一ボタンはわざと開けて、ゆるめに黒の蝶ネクタイをしめた。鏡の前で三十分も髪の毛をいじって、本人が完璧にかわいいと納得するクラウドくんになってから、彼は非常に意気揚々と食堂車に向かった。セフィロスはスーツ姿で慌てて追いかけた。

食堂車は左右の窓際に、白いテーブルクロスをかけられた四人がけのテーブルがずらりと並んでおり、天井には、

まがいものだろうけれどシャンデリアがぶら下がっていた。床は真紅のふかふかした絨毯で覆われており、どこかの高いレストランにでも行ったような雰囲気だった。すでに乗客たちが集まりはじめており、皆思い思いの顔でメニューを眺めたり、おしゃべりに興じたりしていた。華やかな女性たちは華やかなドレスやワンピースで着飾っていて、セフィロスが入って行くと好奇心むき出しの目で彼を見た。ホームで見かけた、毛皮のコートのご婦人もいた。テーブルにひとりで座っている男がいて、それが彼の目を引いた。非常に立派な、濃い茶色の口ひげを生やし、口ひげが立派なひとというのはかなりの割合でそうだが、頭髮の方は無慈悲な時の流れとの抗争に敗れ、不釣り合いなほど後退してしまっている。目はうるんでいて、どこか夢見がちだった。年齢は五十を数年過ぎているだろうか。どこか落ちつかない様子で、目を瞬かせながらあたりを眺め回している。セフィロスは彼のことをどこかで見たことがあるという気がしたが、いつまでもじろじろ眺め回すわけにもいかなかった。そっと視線を外した。隅っこのテーブルに、ザックスが慣れないスーツ姿できまり悪そうに座っていたので、

セフィロスはそこへ移動した。

「おれ見てくれよ！ この格好！ どう思うよ。田舎の母ちゃんが見たら、死ぬほど笑う。おまえにやあ悪いけど向いてないよ、スーツなんちゅう、都会のシロモノは、とか云つてさ。あーあ、なんかおれ、おれじゃないみたい。閣下も閣下じゃないみたいよ。セフィロスはまあそういうのもありだね」

彼がひとしきりわめいているところへ、ウィリアムソンの手によつて食事が運ばれてきた。すさまじいとしか云いようがないほど豪勢で、贅沢で、金がかかつていた。食前酒にはじまり、前菜からデザートとコーヒーまでのフルコースだ。セフィロスとしては考えただけで悪寒が走るが、出てくるものは仕方がない。クラウドは鴨肉を生まれてはじめて食べてひどく興奮した。

「鴨って、食べられるんだ。おれ、よろよろ歩いてるやつをつかまえたことあるけど、あいつの切り身ってこと？」

セフィロスはそのひとことで、鴨肉を見るのも嫌になった。それで、全部クラウドにあげた。クラウドは「鴨、鴨」と云いながらフォークを振り回し、「グエ、グエ」と鳴きま

ねをした。通りがかったまだ若い給仕が、それを見てかすかに眉をしかめた。

乗客たちの多くは昼食後もしばらくその場に残つて、胃の中のものを消化しつつ、コーヒーなど楽しんでた。ザックスはコーヒーをブラックで飲めないクラウドをからかつていて、セフィロスは満ち足りた気持ちで車内の話し声が織りなすざわめきを楽しみながら、あたりを見るとなしに見回していた。それぞれのテーブルに、いかにも金持ちらしい身なりの人間たちが収まっている。社会的な地位と、財産を手に入れたひとたち。もちろん、金があることは人生を送る上でひとつ、有利な点であると云える。けれども、だからといって苦労がないとは決して云えない。みんなそれぞれの仮面の中に、いったいどんな不幸を隠しているものか、わかりはしないのだ。そんなことを考えながら、食後のすこし怠い感じをやり過こしていた。

「あのう、失礼ですが」

ふいに頭上からそう声をかけられて、セフィロスは顔を上げた。ザックスもクラウドをからかうのをやめたし、クラウドもコーヒーを睨みつけるのをやめた。まだ若い、お

そらく三十に手が届くか届かないかというような年齢の、オレンジがかった薄い茶色の髪をした血色の良い青年が、眼を見張るほど美しいブロンドの女性を伴ってテーブルの傍らに立っていた。

「突然すみません。僕はマグリムと申すものですが、僕の父があなたに……」

セフィロスは軽く目を見開いて立ち上がり、青年に手を差し出した。

「これは、大佐自慢のご子息とはあなたのことでしたか。いえ、それ以上説明なさらなくて結構です、どこか面影がある」

青年は肩をすくめた。

「横顔が父に似ているとよく云われます。あなたのことは、父の口からさんざ聞かされていました。あなたは命の恩人だと……」

「いえ、それは逆だ」

セフィロスは思わずきつい調子で云った。

「あのときこのぼけた頭を目覚めさせてくれたのは大佐でしたから」

ザックスがふいに「ああ！」と叫んだ。

「マグリム……マグリム大佐だ！ 廊下を直角に曲がるあの……」

「ザックス」

セフィロスはたしなめたが、マグリム青年は笑い出した。「そうです。父は子どものころから軍隊式に育てられたんですよ。いつでも規律正しくきびきびと行動するように命令されてね。祖父も軍人でしたから。マグリム家は軍人一家ですからね。僕は違いますが。父が、好きにさせてくれたんです。大学は私立の経道学部に行かせてくれましたし、独立資金を援助してくれたおかげで、一応二国一城の主です。貿易会社をやってます」

ザックスはまたも「ああ！」と云った。

「親父さん、そういえば云つてたなあ。息子がひとりいるって。あ、おれザックス・フェアです。ソルジャークラスファースト。まぜものみたいなもんだけど。親父さんには、ペーパーのときジュノンですごく世話になって」

ザックスは席を立て、ふたりにそこへかけるよう勧めた。そうしておいて、彼は通路を挟んだ向かい側のテーブル

ルに移動した。ちょうど空いていたからだ。そこに座っていたのは年をとった婦人とその息子らしき人物だったが、食事のあとすぐに部屋へ戻ったのだった。

マグリム氏は、傍らのブロンド美女を自身の婚約者のマティルダ・ラスカ嬢であると紹介した。父親が大手出版社の社長だということだったが、確かに彼女がいわゆるお嬢さまであることはひと目で知れた。品のいい服に、よく手入れされた手とブロンド、そして独特の、ぎすぎすしていない、生活に追われていない雰囲気。セフィロスはうやうやしく彼女に挨拶したのち、自分のブロンドのことを紹介した。

「マグリム大佐は数年前までジュノン駐屯軍の責任者を勤めていた方だ。古きよき時代の、最後のひとりだったかもしれない。われわれソルジャー連中が、軍全体の規律も風習もなにかもを台なしにしてしまったようなものだ。おまえももう少し前に軍に入っていたら、また居心地が違っていただろうが」

クラウドはまだ若かったので、セフィロスが云っている古きよき時代というものがどんなものかまるでわからな

ったし、ソルジャーが軍をだめにしたなんてことはぜったいにないと思った。彼は初対面の人間にはすぐに打ち解けられない子だったため、幾分ぶっきらぼうに挨拶した。ザックスはというとこれ以上社交的な人間はいないというほど社交的なので、マティルダ嬢にもうやうやしく一礼し、お知り合いになれて光栄ですと云った。マティルダ嬢はちよつとはにかむように微笑んだ。まんざらでもないようだった。

「あなた方というより、神羅が介入してきたことで、云ったほうが正しいのではありませんか？」

青年は首をちよつと引っこめて、微笑した。

「これは父の意見なんです。よくこぼしていましたよ。あの会社ときたら、武器製造をしたところからろくでもなかったが、やっぱりろくなことをしないってね。ソルジャーは一種の生物兵器だ、そんなものを作ることは間違っているって」

「かもね」

ザックスは笑って云った。

「おれなんて、さしずめ人造人間なんたらーみたいな感じ。」

時速百二十キロで走り、百万馬力の怪力の持ち主、ジャンプさせりゃあ月まで届くし、しまいにや月夜の丘でガオオー……」

ザックスのばか話はそこで中断させられた。マティルダ嬢が笑い出したからだ。

「面白い方ね」

ザックスはにやっと笑った。

「そう云っていただけてなによりです。面白いだけがおれの取り柄だね。あとはなーんにも」

マティルダ嬢はまた笑って、隣の青年にちよつともたれかかった。青年は彼女の肩をそつと抱き寄せた。クラウドはそういうものをあからさまに見せられることに嫌悪感を抱く年ごろだったので、心のなかで舌を出した。でも、マティルダ嬢はすごくきれいだと思った。

「ところで、父上はお元気で？」

セフィロスは笑いが静まったのを見て話題を戻した。

「非常に元気ですよ」

マグリム氏は明るく笑いながら云った。

「軍役に就いていたころより健康的です。趣味の骨董品集

めと釣りに精を出してましてね。いまはミディールに家を買つて温泉に浸かりながらすつかりふやけてますよ。このほうがよかつたんです。父はあまり軍人向きではありませんでしたからね。僕はちよつと北の方で商用を済ませてから父に会いに行くところなんです、先日ミッドガルのオークションで古い壺を落札したので、その報告を兼ねてね」

「目がさめるような値段でしたのよ」

育ちのよさそうなマティルダ嬢が、心地よいソプラノで話に加わった。

「わたし、びつくりしました。あんな小さな壺に、あんなに丸がいくつもある値段がつくなんて」

「母が嘆いているんです」

マグリム氏は苦笑いを浮かべた。

「そのお金があれば、わたしの花壇がうんと立派になるんだけど、って」

「古いものには、独特の魔力がありますからね」

セフィロスは微笑して云った。

「昔のものをしていると、古と現在とのはざまに、立つような気がします」

「確かにね」

マグリム氏が感慨深げに云った。

「古いものといえば、わたしのこの鏡なんて、二千年以上前のものなんだそうですよ」

マティルダ嬢が小さな夜会用のバッグから、丸い銀のケースを取り出し、ミスリル製の美しい鏡を取り出した。マティルダ嬢の手のひらよりひと回り大きなもので、ふちどりに小さな赤いマテリアのかけららしいものがいくつかはめこまれてあった。表面はきれいに磨かれていて、窓からの光を受けてきらきらと光った。

「この鏡はもともと、祖母の持ち物だったんです。一年ほど前に、病気で亡くなってしまつて……わたしがこれをもつたんです。形見として。祖母はどこかへ出かけるときはいつもこれを持ち歩いて、化粧室で取り出して使つてましたわ。わたし、とてもうらやましくて……これを持つていると、なんだか祖母が近くに来てくれているような気がします」

マティルダ嬢は微笑んだ。

「とても素敵な方でした」

マグリム青年も同意するようにうなずいた。

「彼女と知り合つて間もなく亡くなつてしまつたから、ほんの短いおつきあいだったけど……優しくて、チャーミングな方でした」

一同はなんととはなしにため息をつき、マティルダ嬢の手の中の鏡をのぞきこんだ。炎の中で丹念に鍛え上げられ、磨かれたに違いない全体が青緑の光沢を帯びていて、それに対抗するような赤いマテリア片のきらめきが、なにかこの世のものではない幽玄な雰囲気を感じさせる。一同はしばしそれに見入つていた。ことにセフィロスは、ものを見るときには徹底して見るくせがあつたので、マティルダ嬢から鏡を受け取つて、まじまじと見つめた。裏側には、複雑な凹凸の蔦模様が刻まれていた。

「ほんと、なんか不思議な気持ちになる鏡ねえ」

ザックスが奥さまみたいに云った。

「マテリアのせいかもしれないな」

セフィロスは目を皿のようにして鏡を仔細に観察しながら云った。

「ほんの小さなかからでも、なんらかの力を秘めているも



のだ。もちろん、不完全故に人間に感じ取れるほどの力を發揮するわけじゃないが、マテリアというのはひとつのエネルギーの結晶、太古からの、星の叡智の結晶だ。人間のある種のエネルギーに反応する……しかし」

セフィロスは唇を持ち上げた。

「古代種たちというのは、たいそうな技術の持ち主だったんですね。二千年も前に、完全な円形を作ることができたのだから」

「古代種？」

ザックスが頓狂な声を出した。彼は、自分の彼女であるエアリス嬢が、そのいにしえの種族たちと並みならぬ関係のあることを知っていた。

「これは、古代種美術品の一種なんですよ。そのひとたちの不思議な力かしらないけれど、この鏡、ちよっと布切れでお手入れすれば、いつまでも曇らないし、汚れもつかないんです」

マティルダ嬢は微笑して、それをそのまま自分の婚約者へ向けた。

「わたしも、詳しくは存じませんが」

彼女の婚約者も肩をすくめた。

「ねえねえボス、古代種美術品ってなんなのさ」

ザックスがボスをつついた。ボスは、おれも専門家ではないが、と前置きして、

「古代種たちは、文明的、文化的に、非常に洗練され、発達したものを持っていた。彼らの残した神殿をはじめとする建築物、壁画、彫刻、装飾品のたぐい、こういったものは、繊細で美しく、現代の芸術家や職人たちにも真似の出来ない独特の様式と、美意識でもって作られている。たとえばこの鏡は」

セフィロスは手の中の鏡をテーブルに戻した。

「おれのかじりかけの知識が正しければ、いまから二千五百年ばかり前のものだが、古代種の年ごろの女性たちがほとんど持っていたものとされている。古代種たちは文字を持たなかったので、映像を非常に重要視らしい。イメージを記録し、再生する装置が世界各地で見つかっているし、鏡も、姿を映すものという意味でとても重要なものだったらしいな。似たような装飾を施された鏡が、世界中でいくつも出土している」

「ふうん」

ザックスは鼻を鳴らした。

「そういうわけなので、この鏡自体にひどく価値があるというわけじゃないんですの。仮に売ったとしても、たいした値段にはならないそうなんです」

マティルダ嬢がかわいらしく云った。

「でも、わたしにはとつても大事なものです」

彼女ははちよつと肩をすくめて、鏡を銀のケースに入れて、カバンの中へ戻した。

乗客たちは徐々に自室へ引き返しはじめ、気がつくとき食堂車に残っているのは一行と、数人の乗客たちだけになっていた。それで、彼らもまた夕食までそれぞれの部屋へ戻ることにした。

ザックスは早朝から活動するという慣れないことをしたので昼寝の必要があると云つて、部屋に引っこんだ。でも別にそんないいわけをしなくても、ザックスが隙あらばベッドへ潜りこむくらい寝ることが好きだというのは、彼と関わりあつたことのあるひとならたいがい知っていた。

クラウドは部屋へ戻るなり、あのマティルダ嬢はすごくきれいだと思奮した調子でわめきはじめた。

「あんなきれいなひと、久しぶりに見た。あのひと、女優かなんか？」

セフィロスは首を傾けた。

「たぶん違つだろう。育ちのいい、善良なお嬢さんという感じがする。それに、マグリム大佐のおひとがからからして、そういつたいゆるゆる浮ついた階層との交際を息子に許すはずがないという気がする」

「そのひと、ガチガチじいさんなの？」

クラウドは遠慮なく云つた。セフィロスは微笑した。

「いいや。そういうわけじゃないが。まあしかし、軍人なんてものは大概保守的だから、おまえからしたらガチガチに見えるかもしれないな。おれだって、おまえから見た場合すいふんと面白味のないやつだということになるだろうし」

クラウドはひとにいたずらをしたあとのサルみたいな、すごく生意気な顔をした。

「まあ、あんたおつさんていうか、もうじいさんの域だか

らね。云うこととか、やることとかさ」

セフィロスはわざとらしく眉をつりあげた。

「退屈なら、別のやつに乗り換えてもいいぞ」

「うん、じゃあおれ、あのマティルダさんにする。略奪愛だ。一回やってみたかったんだ。おれたち、お互いの手を握りあって、北の大地を逃亡するんだよ。それで、小さい家に住むんだ。ひっそりね。おれあのなんとかさんっていう男のひととかその父さんに、生涯ひとでなしの色きちがいつとか云われて、蔑まれるんだ。わくわくするよ」

ふたりがそういう他愛もないおしゃべりを楽しんだりしているうちに、アフタヌーンティーの時間になった。およそ午後三時に、クルーたちが各部屋を巡回して、お茶とお菓子を運ぶ決まりになっているのだ。彼らのところへは、熟練のウィリアムソン氏がやってきた。小さなケーキと焼きたてのスコーンが、銀のお盆に乗っかっているのを見たとなん、クラウドが発情した雄猫みたいに鼻息を荒くしたので、セフィロスは耐えきれずに嘔き出してしまった。

ウィリアムソン氏は、この部屋の温度がよそに比べて非常に低く、その原因は窓がわずかに開いているためだとい

うことに気がつく、かすかに眉をしかめた。

「換気が心配でございますか？」

ウィリアムソン氏はお茶を淹れながら、なにげないふうをよそおって訊ねた。客の中には、絶えず外の空気を入れなければ酸素がなくなるとか、こもった空気は病原菌が多く身体に悪いとか、実にいろいろなことを云うひとがいるものなのだ。

「いえ、この子の乗り物酔いが少々」

セフィロスは穏やかに答えた。

「外の空気に触れられなければ酔ってしまうので。密閉された空間が苦手です」

ウィリアムソン氏は「ああ！」と軽い調子で云った。

「それでしたら、ご心配には及びませんよ。その丸い出っぱりが（と云ってウィリアムソン氏は窓の斜め上にある、銀色のドーム型のものを指さした）通気口なのです。この車両は空気の流れを計算して設計しておりますので、絶えず空気が入れ替わり、つまるところ、循環するようにできております。それというのも、効率的な空調管理のためです」

これはウィリアムソン氏がよく説明する内容のひとつであつたので、ことばは手回しオルガンの音みたいに機械じかけでもあるかのように、実になめらかに発せられた。クラウドがいぶかしげな顔で銀の丸い出っぱりを見上げた。「ほんとうでございます。そのおかげかわかりませんが、このコンチネンタル・エクスプレス内でひどい乗り物酔いになつたお客さまはひとりもいらっしやいません。実を申せば」

とウィリアムソン氏は声をひそめた。

「御社のプレジデントさまもそれはひどい乗り物酔いをお持ちでございまして、わたくし、何度もこの汽車でお世話しておりますが、一度も酔つたことがございません。というより、そのために特別に設計されておりますので」

クラウドはそれで、ようやく納得したらしかった。寒々しい空気を運んでくる窓を閉め、もう一度銀の出っぱりを見やったが、やっぱり窓は開けるなどとわめき出すことはしなかつた。ウィリアムソン氏はそれを見て微笑み、給仕が終わるとそと引き下がった。

「あのじじいが乗り物酔いするなんて知らなかつたよ」

クラウドは云つて、ウィリアムソン氏が運んできたお茶を飲んだ。それは目がさめるようなおいしさだった。入り組んだ馥郁とした香りがふんわりただよい、「お茶の時間」などと呼ぶこともはばかれるような、深い官能的な気持ちにさせられる。セフィロスはセフィロスで、お茶を口の中であつちへ転がしこちへ転がししながら、香りを存分に楽しんでいた。

「社外秘なんだ。神羅カンパニーの社長ともあろう人間が、みつともないと考えたんだろう。おまえが必死に乗り物酔いを隠そうとするのと同じことだ。傍目には、無様にも不恰好にも見えないのだが、これは本人のプライドの問題だからな」

クラウドはちよつと唇を尖らせた。彼は乗り物酔いは世界一かつこ悪いことのひとつだと思つていたからだ。同じ悩みを抱えるプレジデントに、うっかり親近感を抱いてしまいそうになるくらいには悩んでいる。ぶすつとした顔で唇を突き出していたら、ふいに頭をなでられて、彼は顔を上げた。セフィロスがカップを片手に笑つていた。

「窓を閉めても平気なら、お互いに寒い思いをしないで済

んで助かったというものだ。それはそうと、スコーンは熱いうちに食べたほうがいい。その昔、クロテッドクリームを乗せて、だから流しながら食べるのが一番だと云ったご婦人がいた」

「それ、つきあつてたひと？」

クラウドは慌てて焼きたてのスコーンをひとつ取り、わざと下世話な方向へ話を持っていた。セフィロスの氣遣いがこそばゆかったからだ。

「いいや。しかしいいゆるる上等な部類の婦人だった。グロリア未亡人のようにおしゃべりで……」

おしゃべりをしながらの、熱々のスコーンに上等なクロテッドクリームはすごくおいしかった。クラウドはスコーンをふたと、ケーキをふたきれ食べた。つまり、セフィロスのぶんを全部食べてしまったけれど、これはまあ、いつものことだった。それに彼は優しい子だったので、どちらもと口ずつ、セフィロスにちゃんとあげたのだ。これは、なんといつても氣高い行爲だった。

夕食は、昼食の倍くらい豪勢だった。昼間の豪華さを考

えると、これは驚異なことだった。クラウドは数時間前にあんなにおやつを食べたのに、もうそんなことなんかけろりと忘れてしまったようにがつがつ食べた。どの食材も新鮮で、そこいらに売られているものとは質が違った。ナントカカントカ牛というひどく難しい名前の牛肉は、口へ入れたとたんに中でとろけたし、はつとするようなオレンジ色のソースはフルーティなどという形容詞は子どもっぽすぎると拒絶するような複雑な哲学的味がした。つけあわせのパンすらふんわりして、嗅いだこともないような酵母の甘い豊かな香りがした。ジャムもただの砂糖で煮詰めたようなものではなく、奥行きのある香りを持ち、バターなんか、ひっくり返りそうなくがあった。クラウドは頭がクラクラした。それで、けなげな彼はこう考えた……おれ、いつか母さんをこの汽車に乗せてあげなくちゃ！

クラウドよりはいくらかこうしたハイクラスな食事に慣れている大人たちは、もっと冷静に、しかし軽やかに食事の時間を楽しんでいた。向かいのテーブルにはマグリム青年とその婚約者、うるわしのマティルダ嬢が座っており、セフィロスとザックスと四人でワインを楽しみつつにぎや

かに会話をしていた。

「そうすると、古代種というのは超能力者なんでしょうか？」

マティルダ嬢がかわいらしい声で訊ねた。彼らは、昼間の鏡の話から古代種のことを話題にしていた。

「さあ、どうでしょう。しかしそもそもわれわれ自身にももつと秘められた能力があるように思うのです。ヨガの行者ですごいのがいますし、そういう超越的な能力を、人間は文明に溺れる中で失っていったのではないかと思うことがある」

セフィロスが微笑しながら答えた。

「彼らの精神性もまた非常に魅力がありますね。もちろん僕は学校で習うようなことしか知りませんが、哲学にしろ倫理観にしろ、古代の人間たちのほうが、なにか真理というものをしつかり掴んでいたという気がしませんか？」

マグリム青年が云った。

「身体性と精神性は、そうすると相互に関連があるという仮定もできそうですね」

「いや、そうとも云いきれません。われわれのように」

とセフィロスは自分と、ザックスを顎で指した。

「身体だけはやたらに発達しているようなのがいる。これは、中身を伴っているとは云いきれません」

「まあねえ。ボスはともかく、おれの頭なんてスポンジより軽くてスッカスカで、綿菓子よりふわふわだからなあ」

マティルダ嬢が笑った。

「ザックスさんて、ほんとうに面白い方ですね」

ザックスは直接には答えず、ウィンクした。普通の男がやろうものなら、婚約者のマグリム青年が目を剥いて怒りそうな行爲だったが、ザックスの場合は彼のひとがらと陽気さが功を奏して、色ものというより単なる少年の茶目っ気という感じがした。

クラウドは話についていけないのでひたすら食べて、セフィロスのも食べた。どういうわけだかクラウドより身体の大きいセフィロスは、あまり食べなくてもちゃんと生きていった。彼はこれをゴリラや馬やチョコボのような立派な体格の、力強い動物が草食性であるのと同じことだといったが、これはクラウドにはすくなく納得できることだった。でも、立派な身体に憧れがあるからといって自分も小食に

なれるかと云ったらそんなことはないので、クラウドはたくさん食べて、いつかセフィロスをやり返すのだと思っている。

「ところで、そちらのかわいい方のお話を聞きたいわ」

クラウドは反射的に、これは自分のことだと思って顔を上げた。誰かがあの子はかわいいと素敵だとかいったらそれはだいたいクラウド・ストライフのことなのだ。経験からいって、これは間違いないことだった。クラウドがマティルダ嬢を見ると、目があった。彼女の唇がそっと持ち上げられ、灰色がかったブルーの目が、ちよつときらめいた。

「ずっと黙っていらっしゃるんだもの。どんな方なのかとつても気になるわ」

「こいつはシャイボーイなんですよ」

ザックスがにやつきながら云った。

「ひと見知りで、打ち解けるのが苦手。おれの友だちで、仕事の上じゃあ一応部下なんだけど、でも私生活だとどこちかっつたら王さまって感じで……」

彼はべらべらしゃべりはじめた。それで、クラウドはテ

ーブルの下でザックスの脚を思いきり蹴飛ばした。

「あづっ……!」

「どうかなさいまして?」

「え? いや、ちよつと。たいしたことじゃないんだけど……」

ザックスは涙目でクラウドを睨んだ。クラウドはほくそ笑んで、また食事を再開した。セフィロスはそのやりとりになにやついていたが、口は出さなかった。クラウドは結局マティルダ嬢とそんなに親しくことばを交わすことはなかったが、食事から戻って歯磨きをしながら、セフィロスにやつぱりあのマティルダ嬢はすごくきれいだ、と云った。

「あんなに気遣いができて、いいひとで、やさしくて、きれいだなんて。おまけに年上なんだ。おれ大好きだ、そういうひと。心が舞い上がっちゃう。ここがこんなに気取った場所じゃなくて、おれが着てるのもこんなかつりした服なんかじゃなくてさ、もっとクラウドがクラウドっぽくしてられる場所だったらなあ。そしたら、おれあのひととすぐ友だちになって、それで、うまくいけば恋人になっちゃうのに」

「そうか」

セフィロスは穏やかに云った。

「おまえはきれいでやさしくていいひとで、年上が好みなんだな」

彼は銀色の小ぶりのトランクから、クラウドのダサイバラ柄の枕を取り出して、上段のベッドの上に広げてやった。なにしろこの枕がなくては、クラウドは一睡もできないのだ。

「うん。そうなんだ。ストライクゾーンまつしぐらだよ。

あのマティルダさんってひと。それで、おれの世話をしてくれる家庭的なひとだったらもう文句な……」

クラウドはふいに押し黙った。年上でやさしくて家庭的な人物が、まさに目の前にいるひとそのひとであることにふいに気がついたからだだった。彼は一気に真っ赤になった。それで、あわてて歯ブラシをくわえなおして、洗面室に駆けこむと、大きな音をたててうがいをしはじめた。セフィロスは笑った。ザックスがすさまじい音がいの音にびつくりして部屋を覗ぎに来て、怪獣でも出たのかと云った。

「いや、幸いにして」

セフィロスは云った。

「もっとも、人間を怪獣と称していいのなら、一匹いないこともない」

ザックスはにやにや笑った。

「まあね。閣下は怪獣だね。間違いない。あんまり暴れさせないようにしてよ。いっとくけど、大声出したら丸聞こえだからね。ここ、あんまり壁が厚くないから」

セフィロスはわかってしていると云った。ザックスは自分のボスにお休みを云い、そして洗面所の怪獣閣下に向かって大きな声でおやすみを投げつけると、また部屋へ戻っていった。

怪獣はしばらくしてようやく洗面所から出てきた。顔の赤みは引いていたけれど、まだどこかばつが悪そうな顔をしていた。セフィロスは入れ違いに洗面所へ入ったが、入る前に、どうか今晩はベッドから落ちてくれるかと頼んだ。蹴りが飛んできたので、セフィロスはあわてて避けた。

十一時を回ると、汽車の中はしんと静かになった。乗客はみんな眠っていた。でもザックスは夜型なので、まだ寝ていなかった。彼は音楽を聴きながら、ミッドガルにいる



愛しのエアリス嬢にメールを打っていた。「食事はアホみたいに豪華だった。閣下ときたら馬みたいに食って、セフィロスのぶんも食って、食事の席にはマティルダさんというすげえ美人がいたけど、でも美人といえはおれにはエアリスちゃんのことだから……」

セフィロスはベッドサイドの小さなランプをつけて、昼間読みそこねたシュティフターを読んでいた。クラウドは彼の上のベッドで、いつもの枕に頭をうずめて、その横にチョコボとモーグリとトンベリとブタのぬいぐるみを並べて、格子縞のかわいいパジャマを着て眠っていた。やがてセフィロスはランプを消した。窓の外は真つ暗で、星が出ていた。よく目を凝らしてみれば、なだらかな草原の風景が、横へ横へと流れているのがわかる。今夜のうちに、汽車は海峡の橋を渡り、雪原のエリアへと分け入ってゆくのだ。そうして、明日はいよいよ目的のコテージへと足を踏み入れることになる……セフィロスは微笑んだ。上にいるクラウドが寝返りを打った。耳を澄ませると、汽車が走行するかたなかたんという規則的な音に混じって、小さな寝息が聞こえてくる。セフィロスは満ち足りた気持ちになっ

て、胸の上で手を組み、眠りについた。

真夜中に、クラウドがトイレに起きた。セフィロスは目覚めるともなく目覚めて、彼がたてる物音を聞くともなしに聞いていた。やがてクラウドは戻ってくると、なぜかはしごを登らずに、セフィロスのベッドへ倒れこんだ。セフィロスは仰天して飛び起きた。クラウドときたら、寝ぼけているのだった。

「クラウド」

彼は呼びかけた。

「おまえのベッドは上だ」

クラウドはもごもご口を動かしたが、セフィロスの胸にべったり貼りついて、起きる気配がなかった。セフィロスはため息をついて、クラウドを乗せたまま静かにベッドに横たわった。クラウドの母さんが今回の旅行のために用意してくれた新しい格子縞のパジャマは、もこもこしたすくく暖かい素材でできていて、ただでさえ寝ると体温が高くなるクラウドを抱いていると、正直なところ、暑かった。セフィロスは毛布をクラウドの首までかけて、自分はちょ

つとはみ出るようにした。腕を毛布の上に出して、クラウドの髪の毛をなんととはなしに梳いているうちに、また眠気がおそつてきて、彼は眠った……セフィロスは、ふたりが融け合うみたいな夢を見た。とても官能的で、美しい夢だった。クラウドが腹の上でもぞもぞやるたびに、セフィロスはうつすら目覚めて、クラウドが汗をかきすぎていないか確認し、また寝るのだが、そのたびに夢の続きを見て、ひどく幸福な気持ちになった。

## とんがり屋根と雪の街

翌朝クラウドが起き出す前にそっとベッドから抜けだしたセフィロスは、すぐに窓を開けて外を見た。窓の外は一面の雪原だった。昨夜のうちに汽車は海峡を渡り、アイシクルエリアに入ったのだ。雪を乗せた蝦夷松が立ち並ぶ中を、汽車は調子を落とすことなく走っている。はるか遠くに、小さな集落が吐き出す煙がぼんやりと見えた。太陽はまだ顔を出したばかりで本調子でなく、おぼろげで、重たい空気の中を上を目指してじりじり進んでいた。セフィロスは朝の澄明な、清々しい空気を存分に吸いこんで、あたりの風景を長いこと楽しんだ。

クラウドはまだぜんぜん起きそうにない。上質な毛布の下に格子縞のパジャマを隠し、ぐっすり眠りこんでいる。朝食は八時半ごろ、部屋にやってくるはずだ。それまでには起こさなければならぬ。セフィロスはこの朝の静かな時間を利用して、目を閉じてゆったりと精神を寛げ、それから本を開いた。シュティフターはもうやめて、ウータイの詩人の作品を広げ、雪についての美しい一遍を読んだ。

七時半をすぎると、大部分の人間が起きだして、それぞれがごそごそやりはじめ、車内はとたんに活気づいてくる。乗客の誰かが大きな声で笑い、クラウドはそれで目を覚ましてしまった。不機嫌な顔で目をこすり、それから自分がなぜ下のベッドで寝ているのかわからず、半分閉じたような目でセフィロスに云った。

「あんた、ゆうべおれのこと拉致監禁した？」

セフィロスは笑い転げた。その声でザックスが起きて、クラウドと似たような眠気を引きずった顔で朝の挨拶にやってきた。

「よく眠れたかよ、閣下。おれはだめだったね。なんつっても、ベッドが狭いよ。それにこの、なんつうの、微妙な移動感？ これでさあ、トラックの荷台とかなら、おれ逆にくっすり眠れるんだけど、中途半端はよくないね。半端にホテルみたいで、半端に移動してるって感じ。どうせなら、ぐらぐら揺れて、がたがたやりやあいんだよ、毛布の一枚あてがわれただけでさ。したら、おれすやすや寝ちやう」

「朝からしゃべりすぎだよ」

クラウドはびしやりと云った。彼は格子縞のパジャマをまだ着ていて、というより、脱ぐ気がなかった。それを着ている自分がすごくかわいいことを知っていたからだ。

「そんだけしゃべれたら、ちゃんと寝たのとおんなじだよ。それにおれ、そんな移動ごめんだ。ぜったい吐く。昨日の鴨とか牛とか、全部戻しちゃうよ。せつかく食べたのに」

ひとのいいザックスは肩をすくめた。

上等なパンとバター、卵にサラダにスूपのたつぷりした食事を終えると、そろそろ下車の準備にとりかからなくてはならない時間だった。クラウドはお定まりの三十分かけたヘアセットを終えると、遠心力と重力の実験と称してぴょんぴょん跳ねるだけでなにもなくなったので、セフィロスは彼の枕をまたトランクへ戻し、連れこんだぬいぐるみを袋へ入れて、バッグにつつこんだ。クラウドはいつの間にか、おそらく脳内再生されているなかの音楽にあわせて踊っていて、セフィロスを見るとすごく生意気な顔をして舌を出した。

昼前に、汽車はアイシクルエリアの玄関口であるトルギボリに着した。ここは北の万年雪エリアのもっとも南に位

置する、もっとも大きな都市で、ミッドガルほどではないけれど、世界の中でも機械化、文明化が特に進んでいる都市のひとつだ。トルギボリとはもう歴史の澱に埋もれてしまった古い古いことばで「高い塔の町」を意味するのだが、というのもこの地方に伝わる伝説によると、その昔、トルギボリにひとりの年老いた予言者がやってきて、次のように云った。「いまから数十年のち、ここよりはるか北の地に、星を揺るがす異変が起こる。高い塔を建て、空を監視せよ。

異変を察したら、すぐに逃げよ……」当時このあたりを治めていた王は、この予言者のことばを信じて、町の中央に塔の建設をはじめた。石のブロックを積み上げ、それこそ数十年かけて高さ百メートルを超える塔をこしらえた。それがいまでも残っていて、観光客はいつでも中へ入ることができる。研究者の説では、この予言者というのは古代種であり、星を揺るがす異変とは北の大地にクレーターをこしらえたなにかの衝突事故のことであって、実際昨今の研究で明らかになったことだが、このトルギボリ周辺は、衝突場所の割合にそばであったにも関わらず、人的被害が少なかったようである……云々。

歴史や神話まで踏みこまなくとも、トルギポリはたいへんきれいで魅力的な街だ。はるか遠くからでも、他を圧倒する高さの石の塔が見え、それを囲むように円形に作られた街は、石づくりの古い建物が並んでいるのだけれど、どの建物も雪が積もらないように傾斜の急な三角屋根がびんととんがっている。大通りは広くて、チヨコボ車が二台余裕ですれ違えるくらいの幅がある。雪道に一番強いのはチヨコボだから、この街ではいまでも、燃料を食う自動車ではなくチヨコボ車が幅を利かせている。天然ガスが豊富に出るので、道にはガス灯が等間隔で並び、どの家もガスを引いて室内を温め、煙突からもうもうと煙を吐き出している。ヴラデミロス・ガスという会社が、その採掘や各家庭への配給を一手に引き受けているのだが、エネルギーを独占しているにもかかわらず、神羅のように独裁的な雰囲気は持っていない。これは現在では会長の座に収まっている二代目エリック・ヴラデミロス氏の温厚な性格のためである、と云われている。エネルギーを魔眼だけに頼らないこの街は、神羅との過度のかかわり合いを避け、独立独歩を貫く希少な都市でもある。街を出て少し北に行くと神羅軍

のアイシクル基地があるが、こちらの方でもトルギポリに不用意に干渉することは避けている。結局のところ、情勢の安定した都市に攻め入るための決定的なカードというのは、世界中を探してもないらしい。

塔の周辺はだだっ広い広場になっていて、向学心があればすぐそばの博物館や記念館でいろいろと勉強することが可能だ。塔には、いまでも伝統にのっとり管理人の男が泊まりこんでおり、毎日日の出とともに窓から空を眺め、異変がないことを確認すると、鐘を三度鳴らす。この音が響き渡ると、一日のはじまりだ。新聞配達少年たちはこの鐘の響きが終わる前に配達を完了するし、除雪車もこの時間までには道路の降り積もった雪をきれいにしながら、雪は郊外へ運び去ってしまう。前日の仕事の疲れを癒していたチヨコボが小屋の中で目をさますのもこの時間帯だ。いま、街はクリスマススの支配下にあり、どこもかしこも赤と緑に侵食されつつある。ショールウィンドウ、ガス灯とガス灯のあいだいに吊るされた豆電球、そこかしこに設置されるもみの木、そしてどこからともなく流れてくるクリスマススの音楽。

ほかの建物と同じく石づくりのどっしりしたトルギボリの駅に降り立ったご一行は、同じくここで商用をすませるマグリム氏とマティルダ嬢に、お別れのあいさつをした。

「お父上によりしくお伝えください」

セフィロスはそう云つて、マグリム氏と握手をした。

「もちろんですとも。僕があなたに会つたと云つたら、父はくやしがるでしょう。今度、ぜひミディールへ顔を出してやつてください。お忙しくなければ。どこかに住所が……父の名刺を持ち歩いているんですよ、あんな父でもなにかと役に立つことがあります……ああ！ あつた。これです。電話番号も書いてありますから。ほんとうに、気兼ねなくいらしてください。遠慮なさらずに。昔の話ができるひとに飢えているんです。それに、母も喜ぶでしょう。ええ？　なんだつて？　（と彼はなにやら彼に小声でささやいた赤帽に顔を向けた）車が待つている？　ああ、もう！　ベアトリスさんはせっかちだからいけない。よこす迎えの運転手までせっかちなんだから。では、僕たちはこれで」

この間、同じ汽車でやつてきたほかの乗客たちは次々とホームから駅舎の中へ移動して、誰もいなくなつてしまつ

た。セフィロスが誰だか思い出せない立派な口ひげの紳士もこの街に用があるらしく、大きな鞆を抱えて、握り口のところがアヒルの形になっている変わったステッキをついて、すたすた歩いていった。そしてザックスはマティルダ嬢となかなか念入りなお別れのことをばを交わしていた。

「あなたみたいな面白い方がご一緒に楽しかったわ」

マティルダ嬢は微笑んで云つた。

「こちらこそ、あなたみたいにきれいな方が一緒に目の保養ができましたよ」

ザックスはふざけて敬礼して云つた。そうして、ぱちんとウィンクした。マティルダ嬢はくつくつ笑つた。クラウドは、やつてらんねえよ、と心のなかで思い、耳あてを直して、首からぶら下げたボラロイドカメラで、駅の風景を写真にとつた。

「まあ、そうだね、わたしたち、記念に写真を撮りましょうよ」

マティルダ嬢がふいに云つた。彼女の婚約者がすぐに同意した。クラウドはそういうことが恥ずかしい年ごろなので、カメラマンに徹するつもりだったが、マティルダ嬢が

赤帽を呼びつけてしまったので、一緒に写真に収まった……といっても、大きなセフィロスの後ろにちよつと隠れるようにしていたけれど。写真は、お互いの手元に一枚ずつ残るように、二枚撮られた。マティルダ嬢は最後に、クラウドに声をかけていった。

「あなたがひと見知りなのは残念だったわ。またお会いできるといいわね」

そう云って彼女が微笑んだので、クラウドはちよつと赤くなつた。

「あのお嬢さん、なかなかやり手だぞ」

ふたりがいなくなると、ザックスは云つた。

「誰にでも愛想振りまかずにいられないひとっているけど、悪い意味じゃなくて。でも、男にや悪い意味だよなあ。だって、勘違いしちゃうもん。ありゃあ、旦那が苦労するね」

ザックスはふたりがいなくなった方に手を合わせた。

「天真爛漫というのも考えものだな」

セフィロスも首を傾けてつぶやいた。

「そうね、おれのエアリスちゃんも天真爛漫だけど、ああいうタイプじゃないもんね。こっちの閣下は真つ黒だしね」

クラウドはすっかり退屈していたので、ザックスのことにばに反応して、なに？ と云つた。ザックスは笑つて首を振つた。

ご一行はそろそろと駅舎の中へ移動を開始した。改札を抜けると、ひとがひっきりなしに行き交う長方形の、広い駅舎の喧騒の中へ突如として投げこまれたように感じる。天井が高く、床も石が敷きつめられていて、ひっきりなしにアナウンスが流れ、子どもが走り回り、天井からぶら下げられた大きな時計が時を刻む。ピカピカ光るクリスマスツリーが、駅舎の真ん中に設置されていた。そのまわりに椅子が並べられ、大きな石炭ストーブが置かれて、簡易待合室になっている。土産物屋や、簡易のカフェなどもあつて、そういったところに用事のあるひとたちが何人かひっかかっている。三人は、大きな荷物ほとんど事前に保養地に送つてしまつていたので、手持ちの荷物はとても少なかったが、その手荷物も赤帽が運び去つてしまつていたので、あたりの景色を楽しみつつのんびり歩いていった。クラウドは横に長い駅舎の中を歩きながら、さつき撮つた写真を眺めた。

「この写真、誰が保管すんの？」

彼は気になったので云った。

「おまえのアルバムにはさんどきやいいだろ」

ザックスがそう云って、横からひよいと写真を取り上げてじろじろ眺め、ふうん、と鼻を鳴らした。

「閣下、すげえ隠れてる。おまえってほんと、慣れてるやつとそうじゃないやつで態度違うよなあ。このシャイボーイめ」

セフィロスも写真を見た。クラウドは確かに自分の影になつてちよつとむくれたような顔をしていた。耳あてまでむかれて、ちよつと斜めになっている。マティルダ嬢はにこやかに微笑み、自らの人生の上に光が降り注いでいることを微塵も疑っていないという幸福な、打ちのめされたことのない雰囲気余すところなく発していた。待ち受けている結婚、そしておそらく出産……女の幸福とは、その程度のものだろうか？　そして不幸もまた？　夫の不理解、云いあらそい、破局……愛情をたつぷり注がれ、生活に窮したことのない、したがって魂がひねくれたこともない女性に、人生が与える試練とはどんなものだろう？　マグリ

△青年ではないことだけは確かだった。なぜなら彼はその父親がそうであるように実直誠実な青年であり、間違つても結婚相手を不幸にするような男ではない。彼女を不幸に陥れる原因があるとしたら、彼女のその無垢さ……相手を無差別に信頼し、好意を寄せる行動、に潜んでいるように思われる。とはいえ、こんなことは目下セフィロスには関係のないことであつて、彼は単にそういう印象をもつて、写真の中のマティルダ嬢の美しい顔を眺めただけだった。

この街から保養施設までは、チョコボ車を利用しなければ行くことができない。馬よりも頑丈な足をしたチョコボは、雪道や山道に驚くほどの力を発揮する。このあたりのチョコボは毛並みが長くて独特の羽毛を持っており、とても寒さに強く、大陸のチョコボより脚が太くて丈夫で、どんな具合の悪い雪道でも歩くことができる。なにより、自動車は高い燃料が必要だが、チョコボはある程度自然が養ってくれる。彼らがどんな少ない食料で、どれほどの力を発揮するかは驚くほどだ。

駅舎を抜け、ロータリーに出ると、二頭立ての立派なチョコボ車が三人を待ち構えていた。クラウドはチョコボに



狂喜狂乱して、あのかわいらしい黄色い鳥めがけて一直線に走っていった。

チョコボは、クラウドが知っているものと色形は大差なかったが、羽毛がふさふさしていて、身体を覆う毛も長くて厚かった。足がちよつと平べったくて、幅広だ。クラウドが近寄ると、チョコボたちは首をかしげ、彼を片目でじっくり見た。チョコボは鳥だから、ちゃんと見るときには片目なのだ。クラウドはしばらく観察させておいて、それからちよこちよこと近寄ると、そつと手を伸ばして、右にいるやつの中のあたりをちよつとくすぐった。この懐柔作戦は見事効を奏し、チョコボはクエクエ鳴いて、彼の金髪頭を、おかえしにくちばしでこちよこちよやりはじめた。左側のやつも同じようにしてやると、こつちはもつとひとなつっこいやつだったらしく、二、三回ステップを踏んで、クラウドの頬にくちばしをこすりつけてきた。クラウドはくすぐったくてけらけら笑った。

「おいや、こいつはなかなかだね」

ふいに背後で声がして、クラウドは振り返った。分厚いコートで着膨れした、パイプをくわえた男が立っていて、

クラウドを見ると古びた灰色のケーバ帽子（よくおじいちゃんや小学生がかぶっている、左右の耳カバーを頭のつべんで結べるようになっていて、キャップ型の帽子だ。わかるひとにはすぐわかるけど、生まれた場所の問題で、ぴんとこないひとがいるのはしょうがない）をちよつと持ち上げて、ばちんとウインクしてよこした。このチョコボ車の馭者に違いなかった。

「チョコボ好きかい、坊主」

クラウドはこくんとうなずいた。

「そうかそうか、そいつはいい。誰がなんと云おうと、人間の最高の相棒はチョコボだよ。犬なんか目じゃねえや。みんな個性的でな、人間みてえに、ゼーんぜん性格が違うんだ。こつちの右つかわのやつはちいとばつか難しい性格なんだ。根はいいやつだし、仕事はまじめにやるけど神経質でな。はじめてが苦手なんだよ。はじめて通る道、はじめての客。奥のやつは、ひとなつっこくて陽気ないいやつさ。でもちいっと思慮に欠けるとこがあるね。だからこの右つかわの」

と云って御者のおっさんは右のチョコボの首をなでた。

チヨコボはすぐうれしそうに目を細めた。

「まじめな先輩と一緒に仕事してんだよ。こいつらにも相性とか、癖とかいろいろあるってな。二匹一緒に仕事するとなりや、人選……いや、チヨコボ選か、なかなか大変なんだ」

クラウドはまじめな生徒みたいに神妙な顔で聞いて、二匹のチヨコボたちを見た。馭者のおじさんの話を聞いてから見てみると、なんとなく右のやつは厳しい顔つきをしていて、左の方のやつはおちゃらけた顔をしているように見える。クラウドはチヨコボの名前を訊いた。

「右のがケルバだよ。オス。今年で六歳だ。隣のやつがパング。こっちもオスで、四歳だ。まだ仕事はじめたばかりさ。ガキだよ、ガキ」

クラウドは手を伸ばし、ケルバのくちばしを触った。ケルバは自分のことが話題にされているのでおどけて、その手をくちばしで挟む真似をしたが、ほんとうに挟むわけじゃあなかった。

「いまのうちにそんだけ慣れりやあたいたもんだ。坊主、馭者台に乗るかい」

「いいんですか?」

「おうよ。手綱をやるわけにやあいかなえけどな。それから走ってるチヨコボに触ったらだめだぞ。しつぽに触りたくなるのはわかるけど、それやられるとこいつら気が散って仕事にならねえ。ケルバは特にだめだ。神経質だからな。そのかわり、丁寧な仕事する。こっちのパングは喜んじまって仕事どころじゃなくなる。ふざけるのが好きだからな」

クラウドはぜったいに触らないことを約束した。ザツクスがやってきて、契約についてはどうなっているのかという話をはじめた。

「契約もなにもねえさ。とにかく街で一番の馭者を十一時に駅によこせってトルギポリチヨコボ車連盟に連絡があつて、おれが選ばれたんだよ。まあ、光栄なことだね。おれはあんたら三人乗せて、北の保養地へ行行って指示を受けてるだけだ。日当はもうもらってある。こいつは内緒の話なんだけどな、ちいっとばつかふつかけたんだ。そしたら、あんたらの会社の人間は、チヨコボ車の賃金なんてなんにもわかつちやいねえんだなあ! 見事に云い値をくれたよ。」

だから、おれは今日一日あんたらのもんさ。さて、どうするね？　すぐに出発するかい？」

ザックスはふむふむ、と云つて、「ボス！」と叫んだ。

「保養地には、今日中につけばいいことになってるんだけど、どうする？　もう行く？　それともちよつと観光客になる？」

「会議を開こう」

ボスは云つた。ザックスとクラウドは彼を囲んだ。

「これより、臨時会議をはじめ。議題は、われわれは目的地へ向け移動中の旅行者という身分を保持すべきか、それとも一時的に観光客という身分をしたほうがよいか。本案は多数決により決定する。まず、このまま移動を続けたい者は挙手せよ」

誰も手を挙げなかった。セフィロスまたの名議長は眉を上げ、

「では、観光客になりたい者は挙手せよ。高らかに！」

ザックスは両手を上げ、クラウドは手を上げて飛び上がり、その際ずり上がった耳あてをあわててなおした。馭者のおじさんまで、帽子をとって振り上げた。

「では、賛成多数によりわれわれはこれより先、トルギボリの観光客となる。民の声は神の声なり。会議終わり」

「万歳！」

ザックスは叫んだ。

「じゃ、おじさん、悪いけど、おれたちおのぼりさんにつきあつてくれませんか？　まずは腹ごしらえ、つてのがいと思うけど。飯おごります」

「そうこなくっちゃ。この街はいいとこだらけなんだ。実はおれも案内したくてうずうずしてた。まずは飯だな。安くて、うまいとこを知ってるよ。それから、おれはゲインシユタルトつてんだ。おれの親父も、その親父も、その親父も親父もチョコボ車の馭者だった。自慢じゃねえけど、この街でゲインシユタルトつたら、ちよつとしたもんだよ」

「ブラボー、ブラボー」

ザックスは云い、クラウドは口笛をびいっと鳴らした。

セフィロスは拍手を送った。

「よし、それでは皆さまお乗りください。出発いたします、出発いたします。坊主、おまえはこっちだよ」

クラウドはゲインシユタルトさんのあとについて、馭者

台によじ登った。ゲインシュタルトさんが、馭者用の分厚いポンチヨを頭からかぶせてくれた。

「これで、嵐が来ようが吹雪が来ようが、寒くねえってなもんさ」

クラウドはわくわくしてきた。

「いいか、座るときは、背中をぴたつと後ろにつけるんだ。深く腰かけて……そうそう。で、走り出すときは、手綱をこういうふうに引いてやんだよ。ほい、頼むよ、おまえさんがた」

御者のおじさんがぐつと手綱を引き寄せると、チヨコボたちは小さく鳴いて、歩きはじめた。クラウドはしっかりと耳当てをなおした。

馭者台から見ると、世界はぜんぜん違ったふうに見える。視線の位置が高いし、移動速度も違うので、クラウドはなんだか自分が別の生き物になったみたいな気がした。独特のトンがり屋根の建物や、ガス灯や、店のきらびやかな飾り窓が、歩くのよりもすこしだけ速い速度で、ゆつくりとやってきては、流れていく。道を歩く小さな子どもなどは、チヨコボを見てびよんびよん飛び上がった、手を振った

りする。白く薄く雪が積もった地面を、チヨコボたちはしっかりと踏みしめて、リズムカルに歩いた。しばらくすると、チヨコボたちは汗をかきはじめた。それが冷たい空気に触れて、白い湯気となって薄く漂った。クラウドの息も白かった。ゲインシュタルトさんの息と、パイプの煙も白かった。クラウドはめちやくちやにうれしくなってきた。おれ、ぜんぜん知らない北国にいるんだなあ！

ゲインシュタルトさんは、手綱を握りながら自分のことをいろいろ話してくれた。彼は、子どものころからチヨコボ車を扱い続けて四十年になる、と云った。

「おれのおとうもこの仕事してたんだよ。そのおとうも同じさ。だもんで、おれは生まれたときからチヨコボ舎ん中にいたようなもんだよ。こいつらは頭のいい鳥だから、ひとの子どもだって育てられるんだ。ほんとさ。赤ん坊なんか置いとくだろ、そうすつと、みんなしてあやしてやるし、赤ん坊が寝ると静かにして、起こさねえように気をつけてる。おれは六人子どもがいるけど、仕事してるあいだ、だいたいそうやってこいつらに面倒見てもらってた。おれもそうやって育てられたしな」

クラウドは、そういうのってちょっといいな、と思った。

ある程度知能のある動物が、ほかの動物の子どもや赤ちゃんに對してすごく優しいというのは、クラウドもいろいろな例を見て知っていた。クラウドは生き物が好きだ。みんないいやつだからだ。耳をくるくる回す母さんやギとか、のんびり屋の牛とか、おせっかいなアヒルおばさんなんか、田舎にはたくさんいた。野生のチョコボもときどき見た。

チョコボは人間を見つけると、ちょっと首をかしげてしばらく見る。こっちに悪意がなくて、つかまえるつもりがないとわかると、チョコボはあいさつがわりにしつぽをふりふりしてから、そつといなくなる。人間が動物に興味があるように、動物のほうでも人間に興味があるのだ。二者間の興味と気分がうまくかち合えば、友だちになれる。そうじゃないなら、下手につつくとひどい目に遭うか、お互い傷つくだけで終わる。人間関係と一緒だ。

チョコボ車は、街を十五分くらい走り、大きなバブのよな店の前でゆっくり止まった。ゲインシュタルトさんは、「はい、どうどうどう」とやって、チョコボたちを止めた。クラウドはボンチョコを脱いで、馭者台から飛び降りた。セ

フィロスとザックスも降りてきた。セフィロスは、この間簡易的な変身を遂げていた。長い銀髪をあまり高くない位置でポニーテールにして黒いコートの中に隠し、フェルト地の黒い帽子をかぶっていたので、ぱつと見でセフィロスとわかる人間がいたら、それはよほどのフリークか、よほど観察眼のするどい人間に違いなかった。セフィロスはセフィロスだが、パブリックなセフィロスというのと、ほんとうのセフィロスというのはかなりの隔たりがある。セフィロスとしては、こんな楽しい旅行にパブリックなセフィロスを持ち出すのは、できれば避けたかった。

「さて、この飯はうまいよ。しかも、腹がはちきれそうなくらいの量を出してくれる。酒もうまい。で、会計は安い。お高くとまったレストランなんか行くより、こういうとこに来たほうが、この街がどういう街かわかるってものだ。おれはこいつらに飯をやってから行くから、あんたら好きにしてなよ。こっちもまあ、適当にやるから」

ゲインシュタルトさんはふたたび「はい、どうどう」をやって、チョコボたちを動かしはじめた。クラウドは「すごいなあ!」と云って、目を輝かせた。

店の入口に、奇妙な置物があつた。一メートル近い直立型のグリズリーで、そいつは丸い台座に乗つて、電力によつてぐるぐる回つていた。店の名前を見ると、この置物の由来がわかつた。「森のグリズリー亭」。三人は店の中に入つた。庶民的な酒場で、たいそう広く、昼間にも関わらず男たちが大きなジョッキでせつせとアルコールを摂取していた。おそらく、ガスの採掘に携わる労働者たちに違いない。作業着を着て、頑丈そうな身体つきをしている。大勢の声があたりにこだましている。天井でいくつも回つてゐるファンはどっちにしろ役立たずで、葉巻やパイプ、にくや香草、アルコールなどのおいが混ざりあつてあたりにたちこめてゐる。客たちが食べている料理を見ると、大きな皿にこれでもかとはかりに肉や野菜がもりつけられており、これはまったくいかにも庶民的であり、そして、ザックスが好きな店でもあつた。実際、ザックスは案内を待つあいだにスクワットをやつて、胃を調整した。

「大人三人。あ、ひとりはずいぶんか。なにがおいしいの？ ビール？ おすすめの料理つてある？ うまくて、量が多いやつね」

席につくと、ザックスがさつそく社交精神を發揮し、やつてきたウェイトレスの女性に……女性というより女の子だつたけれど……あれこれ話しかけはじめた。ライラといつて、十七歳で、赤茶けた黒髪に、すごく魅力的な灰色がかつた緑の目をしてゐた。ここの制服らしい、黒い丈が短かめの、タイトなスカートがよく似合つてゐた。

「おすすめは羊。鹿も牛も豚も鳥もあるけど。魚は白身の揚げたのがおいしいかな。イモ？ よく訊いてくれたわ、めちやくちやいっぱいあんの。店長の奥さんの妹が農家に嫁いでるんだけど、ちっちゃいこんぐらいの（と云つて彼女は親指とひと差し指で丸をつくつた）どうしようもないイモいっぱいくれたわけ。わかんでしょ？ 食べ物屋だからつて、押しつけられんの。去年はひん曲がつたニンジントラック一台。捨てるよりいいつてわけよね。イモはしょうがないからそのまま素揚げして出してるんだけど。消費してくれる？ ひと山？ いいわよ。山盛り持つてくるから。店長喜ぶ。あたしもいい加減毎日まかないについてくんのにうんざりしてんの。ビールはなんでもおいしいけど。あたしは黒が一番おいしいと思う。三人とも飲む？ 未成

年？　云わなきやばれないわよ。あたしも飲んでるもん。

山羊？　チーズがある。それも持つてくるね。あんたたちどんくらい食べんの？　ものすごく？　よだれ出てる狼みたいに飢えてると思えばいいわけね。だいたいわかった」

ライラ嬢は一同を隅から隅まで眺めた挙げ句、やはりもつとも社交的なザックスに目をとめて、ウィンクし、手をひらひら振ると、腰を左右に振りながら注文を言いつけに厨房へ消えていった。ザックスは去っていく彼女の後ろ姿を眺めながら、びゅうつと小さく口笛を吹いた。

「すごいおしゃべりだね。おまえみたい」

クラウドが耳あてを外しながら云った。

「なかなかやり手らしいな。あのウィンクひとつで、うんとこさチップをはずんでもらった上に、うまくいけばベッドの中にも引きずりこめる」

「ボース、そういうことはつきり云わないの。いいじゃんか、そういうのって大事よ」

クラウドはこの発言を頭の中にしつかりメモした。あとでエアリス嬢に云いつけるためだ。

三人はライラ嬢が運んできた、すごくたくさん料理を

食べた。チーズの盛り合わせには、クラウドの愛する山羊の乳からできたのがあって、クラウドはそれを黒パンと一緒にひとりで全部食べた。最後のひと切れを舌の上に乗せてしまつてから、山羊の乳が嫌いなザックスはともかく、セフィロスにもひと口あげるべきだったことに気がついた心優しいクラウドくんは、口から出して、それをセフィロスの皿の上に置いた。セフィロスはすごいやそんな顔をした。ザックスは気がついていないふりをした。チーズは、一分弱そのまま皿の上にあつた。そして消えた。もちろん、セフィロスの口の中にだ。クラウドはそれで、セフィロスもやっぱり食べたかっただと思ひ、おれつてなんて気の利くい子なんだろうと思つた。チーズはどれも、びつくりするくらいおいしかった。ビールもミッドガルで売られているものよりはるかに濃くて、いくら飲んでも悪酔いしなさそうだったし、羊の肉ときたら、まるごと一匹細切れにされて来たのかと思うほど大量だったけれど、ぜんぜん臭くなくて、いくらでも食べられた。クラウドはイモをひとりで一キロばかり食べた。確かに小さくていびつで、店で出すような料理には使えそうもなかったけれど、クラウ

ドにとってイモは胃に入るものだから、見た目なんてどうだってよかった。店の中を見回すと、馭者のゲインシュタルトさんが、カウンターの席で、同僚らしい数人の男たちとわいわいやりながらビールを飲んでいた。

食事が終わると、クラウドは一刻も早くチョコボに会うために、とつとと走って出ていった。ザックスが代表して代金を払った。その際、例のライラ嬢にすぐたくさんのチップを渡し、なにやら長いこと話があった。セフィロスは礼儀として耳をふさいでいた。会計が済んで外に出た遠端、セフィロスはぎよつとさせられた。クラウドがグリズリーの置物と一緒に、ぐるぐる回っていた。台座に上手に足をかけ、両手を指揮者のように振り回していた：…実際、指揮者の真似をしているに違いなかった。数日前テレビでまたまクラシックコンサートの中継をやっていた、クラウドはやたらと激しい動きをする指揮者を見て、げらげら笑っていたからだ。そしてクラウドが懸命に腕と頭を振り回しながら指揮を執るのにあわせて、ゲインシュタルトさんの二匹のチョコボが、首や羽を動かしていた。店に入っていくひとや、出ていくひと、通りかかるひとた

ちが、この光景に笑っていた。セフィロスもこらえきれずに笑い出してしまった。ザックスが演奏に加わって、ぐるぐる回るクラウドの前で、猛烈な勢いでバイオリンを弾く真似をはじめた。セフィロスはしばらく放置していた。

「バカ」

セフィロスが呼ぶと、バカは指揮をとるのをやめた。

「降りてこい」

バカは飛び降りた。バイオリンの演奏は止まり、チョコボはひよこひよこ動くのをやめた。

「なかなかいい指揮だった」

セフィロスは褒めた。

「あれは剣の舞か？」

世界的指揮者クラウド・ストライフ氏は、生意気に鼻を鳴らして、「チョコボのための準備運動交響曲っていうんだ」と云った。

「なるほど」

セフィロスは納得した。この「チョコボのための準備運動交響曲」はしかし、一定の効果があるらしかった。チョコボたちはますます力強く軽快に、街を走ったからだ。一



一般的な観光ルートに則って、ご一行はまず広場の高い塔を見に行った。レストランから広場までは十分ほどで、灰色の石づくりの建物と、白い雪と、黒いガス灯と、そういったモノトーンの街並みに、クリスマスのイルミネーションが明るいい色を添えていた。そのどこか幻想的な街並みを、みんな楽しんだ。クリスマス当日まではまだ二週間ばかりあるけれど、あちこちにサンタクロースやトナカイが出現し、あらゆる店がクリスマスプレゼントに自分のところの商品を選んでもらおうと躍起になっている。

広場に着いた。石畳の真つ平らな円形の広場のど真ん中に、見上げるほど高い塔がびよんと生えている。それがなんとなく変だった。ものすごく寒いのに、広場にはそれなりのひとがいた。三人はチョコボ車から降りて、ゲインシユタルトさんと二時間後に落ち合うことを約束し、歩きはじめた。変なじいさんがいて、このひとは黒い山高帽をかぶっていたのだけれど、それを一歩ごとに右手でちよつと持ち上げ、また頭にかぶせなおすのだ。「おまえみたいなやつがいんじゃない」とザックスはにやにや笑って云った。クラウドは自分の耳あてを直して、鼻を鳴らした。

塔にはアーチ型の門から入っていく。重たい木の扉が左右に開かれていて、見学時間は午前九時から午後五時までだと書かれた看板が取りつけてあった。その下に注意書きが添えられている……ただし、塔の上まで登る心づもりの方は、終了時刻一時間前までには中へお入りください。無理をなさらないでください。心臓の弱い方はご遠慮ください。運動不足の方、足腰の弱い方、ご高齢の方、ご注意ください。妊娠中の方も無理はなさらないでください。塔のてっぺんから外にものを落とさないでください。途中からも落とさないでください。特に固いものはご遠慮ください。けが人ができます。質問のある方は管理人室までお越しください。ただし、塔のてっぺんまで登る必要があります。「こりやまたご丁寧に」

ザックスは云った。

「百メートル以上延々階段を登るんだ。これくらい書かないと、死人もけが人も出るだろう」

セフィロスは云い、中に入っていた。塔は、七の階に区切られており、壁づたいに設置された螺旋階段がそれらをつないでいる。最上階は管理人室になっていて、緊急の

場合を除き、観光客は立ち入ることができない。そのさらに上に鐘が設置されていて、管理人の男が毎朝これを鳴らすのだ。もちろん、エレベーターだのエスカレーターだのは存在しない。我が足を頼みに一歩ずつ登っていくしかない。セフィロスはたいへん気に入った。彼は基本的に人力勝負が好きなのだ。

「これ、おれたちが登る必要あるの？」

クラウドがいやそうな顔をした。

「今朝まであんな豪華な列車で鼻歌歌いながら移動してて、午後はこれ？ それって、変だよ」

「そうだな、世の中は変だ。そしておれに云わせれば」

セフィロスはうきうきしながら階段を登りはじめた。

「豪華列車の方が変で、こっちが正しい」

「あーあ」

ザックスが云った。

「ボス、喜んでるよ。古くて手間がかかってやってらんねえようなの、好きだからなあ。云ったつけ？ その昔遠征中にな、ジャングルの中にあるちっちゃい村に立ち寄ったときにさあ、その村の水が川から汲み上げ式で、お湯は

たき火で沸かしてたんだ……ボス、大喜び。ありやそのうちジャングルの原住民に混じって暮らし出すね。間違いない。おまえ、覚悟しといた方がいい」

「そしたらおれ、離縁する」

クラウドはげっそりした顔になって、うなだれながら階段を登りはじめた。

「感想はどう？ ボス」

「実に気分がいい。街並みが見渡せて……あの森の向こうが、アイシクルロジの近くだろうか。明日はあそこを抜けるわけだな。クラウド、へばっていいないでこっちへ来い、チョコボが走っていくのが見える」

体質のせいで息ひとつ上がっていないセフィロスとザックスをよそに、クラウドはぜえぜえ云って床にうずくまっていた。

「チョコボなんかくそ食らえた」

クラウドは寒いというのに大粒の汗を流しながら、あえぎあえぎ云った。

「くそ、なんで観光中にこんな苦しい思いしなきゃなんな

「肺を鍛えたと思えよ。あと、脚力な」

「そりやあさ、いいよ、ミッドガルにいるときなら。でも、

「おれじゃねえしつてなによ。スクワットのこと？ だつ

そうして見せつけるようにしゅっしゅっしゅっしゅやりは

「いてえ！ マジで蹴った！ こいつマジで蹴ったよボス

クラウドはざまみろ、と云い、ふんと鼻を鳴らして、窓に向かつて設置された望遠鏡に右目に当てて、左目をつぶり、あたりの景色を観察した。たしかにセフィロスが云う

「おやおや、若いのにこんなところへ来るとは感心感心」

「こんにちは」

「若いひとたちは歴史に関心なんてないというのが定説ですが。観光ですか？」

ザックが云い、にやにやしてクラウドを見た。彼の耳当と老人の山高帽を見比べて、ひとり面白がっているのだ。老人は微笑んで、自らをエリック・エリックソンと名乗り、近所に住んでいるしがない年寄りだと云った。しが

ないとは云ったが、老人の着ているものはみんな派手ではないが洗練された雰囲気があって、金がかかっていることはひと目でわかる。老人が持っているステッキは、丈夫な櫟の木を加工したもので、どうやら一点もの、という感じがした。

「われわれは、北の保養地に行く途中です」

セフィロスが丁寧に説明した。エリクソンさんはちょっと眉をつり上げた。

「おやおや。あの、元サナトリウムのあった場所ですか？」

「ええ。ひよんなことから、冬の休暇をあそこで過ごすことになりました」

エリクソンさんは顎をこすった。

「そりやあまた、お若い方には珍しいことですねえ。あそこはなにしろ、そんなに有名ではないし、若いひとの興味をそそるような施設も、なにもないですからね」

「ま、それがいいんです。おれたち、自然の中で野生に帰ります」

ザックスがふざけてがおー、と吠える真似をした。

「そうですか、そうですか。まあ、楽しんできてください」

それから、優しいエリック・エリクソンさんは、新米訪問者たちのためにこの塔の歴史についてひとくさり講義をしてくれたが、そのあいだにもしょっちゅう帽子を持ち上げて、またかぶりなおした。

「エリクソンさん」

ザックスはとうとう話を遮って、我慢ならぬというように云った。

「帽子のなにか気に入らないんですか」

エリクソンさんはちよつとびつくりした顔をした。

「ああ、これですか？ いやそれがね、これ、プレゼントでして。せつかくくれたのに悪いと思ってかぶるんですが、サイズが大きすぎてねえ。ひと足ごとに気になって、なおしてしまふんですよ。でも、やつぱりすてきだし大事にかぶりたい。そういう話です」

「ほら」

クラウドが勝ちほこったように云って、自分の耳当てをしつかり装着した。

「世の中、ちよつとやさつとのことです脱ぎ捨てたり放り投げたりしたらだめなんだよ。一回好きになつたらさ」

「君、若いのにいいことを云いますねえ」

エリクソンさんは感心したように云った。

「愛着と、習慣。大事なものはこのふたつですよ。人生に規律と、滋味を与えてくれるものはね」

エリクソンさんは帰る前に、三人に名刺を取り出して渡した。名刺には小さな文字で、「所属クラブ S. O. N」と書かれてあった。

「この S. O. N ってなんですか？ 秘密結社？」

ザックスが興味深げに訊ねた。エリクソン氏は微笑した。「世の中には、たぶん両親のネタ切れか創意工夫のなさかまったくの冗談で、奇妙な名前を持ち合わせてしまったひとがいて、わたしもそのひとりです。そういうひとの会です。おわかりですか？」

クラウドが叫んだ。

「そっか！ 名前にプラス SON が名字のひとの会だ！」

「その通り」

エリクソンさんはうなずいた。

「もちろん、男性限定です。そういうひとがいたら、この会に入ることを勧めますよ。収入や職業に関係なく、誰でも

も入れます。全国に支部があつて……年に何度か交流会があつてね、なかなか面白いです。わたしはこのあいだ、ミッドガルで行われた交流会に参加して、元囚人というひとと友だちになりました」

「そのクラブには、会員がたくさんいらつしやるんでしゅうか」

セフィロスは興味本位で訊いた。

「大勢いますよ。数千人規模です。会長は、さる資産家だそう。です。もっとも、世間には本名では知られていませんがね。そういうひととはたくさんいます。地位のあるひとが、ピーター・ピーターソンとか、ウィル・ウィルソンなんてさすがにちよつとばかしかつこわるいじゃありませんか」

セフィロスは大いに納得した。

「そういえばおれたち、そういうひと、ひとり知ってます。

ウィリアム・ウィリアムソンさんっていうんですけど」

クラウドがはつとしたような顔で云った。

「それは立派に会員になる資格をお持ちだ」

エリクソンさんはまたうなずいた。

「今度会ったとき、会員かどうか訊いてみて、まだだった

ら勧めてみます」

エリクソンさんはぜひそうしてくれと云って、ごきげんようを云うと、階段を下りていった。

「健淡なご老人だ」

セフィロスは云った。

「少なくとも、あの年で毎日この塔を上り下りするとはたいへんな体力だ」

「そうね。なあ、もう降りない？ 約束の時間までに、もうちょっとあたりを見まわりたいしね」

ザックスも老人のあとを追うように階段を下りはじめた。

「登りはきついけど、下りは楽だね」

クラウドが階段を見下ろして云った。

「まあ、そうだろうな。登山と同じだ。膝にとつては下りの方が負担が大きいが」

セフィロスは云って、先へ促すようにクラウドの背中を優しく押した。クラウドは走って降りていって、ザックスに後ろから体当たりした。ザックスはよろけて、あわや階段を転がり落ちるかというところまでいったが、ぎりぎりで体勢を立て直し、クラウドにぎやあぎやあ文句を云った。

クラウドはけたけた笑って、あつかんべをすると、それこそ飛ぶように階段を駆け降りていった。

三人は灰色の街並みをずいぶんと奥深くまで堪能した。目抜き通りに並んでいる店をひとつひとつ点検し、商品を手にとつて眺め回したり、冷やかしたりしたが、それというのも三人ともクリスマスプレゼントのネタに困っていたからで、クラウドは母さんやグロリア未亡人や、ザックスや、そのほか旅先で知り合つた何人かのひとたちに贈るものを考える必要があつたし、セフィロスはクラウドの母さんに贈るものをまだ思いつかず、ザックスは愛しのエアリス嬢と、ゴンガガにいる両親、それにたくさんの友だちへのプレゼントを思いつかなくてはならなかった。クリスマスってなかなか大変なイベントなのだ。

目抜き通りには実に様々な店が軒を連ねていた。洋服屋、帽子屋というようなメジャーな店から、金物屋、年季の入ったクリーニング屋、靴屋、時計屋、そのほかたくさん。そのうちのひとつに、ピストルを扱っている店があつた。当然許可証がなければ買えないが、クラウドは飛び道具が

大好きだったので、そそくさと入っていった。ザックスも入っていった。セフィロスはその斜め前にある工芸店がシヨウウィンドウに飾りつけている彫り物に夢中になっていた。放つておいてもあと一時間は動きそうになかった。セフィロスの便利なところは、なにかものを与えておけばその観察に専念しておとなしくしているということ、クラウドはちょっと相手をするのが面倒になるとそういうことをする。もちろん、そうそうたくさんはないことだけれど。

クラウドとザックスはピストル専門店の棚をあこれ眺め回した。店にはシヨーケースががらがら並んでいて、いろんな大きさのピストルが飾られていた。天井からは、猟銃やマシンガンがぶら下げてあった。クラウドは訓練でそういうののひとつを使用するが、ほんのりと、実際使うなら銃じゃなくて断然剣だと思っていた。銃は、使っているのを見るぶんにはすぐこっかいけれど、なんとなくずるい感じがするからだ。ザックスはというと、ピストルは見るもので、使うものじゃないと思っている。だから当然ふたりは購入の意志などさらさらなく、ただ時間をかけて棚を見て回った。店の奥には太った中年の店主がいて、

真冬だというのにTシャツを着て、つまらなそうに足下に置いた小型のテレビを見ていた。

「ガス・ピストルだ」

ひとつの棚の前でクラウドが叫んだ。ザックスはそちらに歩いていった。「この棚にあるのは全部ガス・ピストルです」と丁寧に張り紙がしてある棚の前で、クラウドは釘づけになっていた。棚の中にはがらがらとピストルが並んでいたが、どれも見た目は普通のピストルと一緒だった。

「ガス式なんて、ただのおもちゃじゃんか」

ザックスがからかった。ガス・ピストルというのは火薬の代わりに専用のガスを使用してBB弾を発射するピストルで、実用ではなく趣味の分野に属するので、許可証がなくても買うことができ、手軽に「ぶっ放す」ことができる。

「ばかにすんなよ。これだって、ひとに向けてぶっ放したら気絶くらいするんだぞ」

「そいつなら許可証がなくてもいいよ」

カウンターの奥から店主が云った。

「まあ、おもちゃだけだな。おれは割と好きだね。ガキのころはそいつで遊んでたよ。缶なんかへこむぜ。鳥なんか

に当てたら死ぬかもな。当てたことないけど」

店主は重たい身体を揺さぶりながら苦労してカウンタールから出てきた。カウンタールは狭くて、店主は大きかったからだ。

「おすすめはこのリボルバーだね。本物とほとんど一緒なんだ。六発弾をこめて、連射できるし。ガス式なんて、見た目にやわかんないさ。気分になりたいときにやあいいよ」

クラウドは銃を好んで武器として使いたいとは思わないけど、おもちゃとしてガス・ピストルを持っているのはすごくかっこいいと思った。ポケットにピストル。クラウドだって、一応そこの少年並みに、子どものころは凄腕のガンマンとか、荒野の用心棒みたいな連中にあこがれを抱いたものだ。目にも止まらぬ早業で銃を連射し、缶を次々と打ち抜けたらかっこいいに違いない……そう思って、パチンコでずいぶん頑張ったりしたものだ。おかげでクラウドは、パチンコで枝の上のガラスだって撃ち落とせる。クラウドはガス・ピストルを買うことにした。セフィロスに向けてぶつ放したらどうなるか見てみたいというのもあった。たぶんセフィロスが勝つけれど、面食らうくらいは

見られそうだった。

店主は丁寧にガスの充填法を説明してくれた。グリップの下に空いている小さな穴にガスを充填する。クラウドは実際やってみて、すぐにこつをつかんだ。で、弾と一緒にこつそり買い求めた。

「わかつてるだろうけど、ひとに向けて撃つたり、ひとごみの中でぶつ放したらだめだぞ、坊主。あと、生き物もだ。動くものに対して撃つのはおすすめしない。万が一死んだら後味が悪いからな。いいか、マナーを守ることは大事なんだ。世の中つてのは、ちよつと変わった趣味を持つやつがなんかやらかすと、すぐその趣味にかこつけて、だから云わんこつちやないとか、あれこれ云うんだ。ひとと違うことをするやつは、普通のやつのは三倍は気をつけて、行儀よくしてなきやダメなんだよ。誰かひとりがルール違反すると、銃の愛好家みんながだらしないやつと思われて、迷惑する。わかつたか？」

クラウドはそれを店主に固く約束して、店を出た。セフィロスは相変わらず工芸店の前に引っかかっていた。クラウドは走って行って、セフィロスにいま買ったばかりのガ



ス・ピストルを見せた。セフィロスはそれをしげしげと眺めた。

「おまえ、銃が好きだったのか？」

セフィロスは眉をつり上げた。

「かつこいい武器はみんな好きだよ」

クラウドは胸を張って、男らしいところを示した。

三人はなおしばらく外をぶらぶらして、食料や水を買った。それから広場でゲインシユタルさんと合流し、いよいよ、北の保養地に向けて出発した。

ようやく保養地へ

ゲインシュタルトさんと二頭のチョコボは、息がぴたり合った仕事をした。二頭は街中をゆつくり抜けて、雪原に出ると、我が意を得たりとばかりにリズムよく駆けだした。先輩のケルバのほうがいいも少し先を行って、後輩が遅れすぎたり、勇みすぎたりすると、ぐつと踏みしめるようなきびしい歩調になってそれを諫めた。彼らは、道を身体で覚えているみたいだった。ゲインシュタルトさんが手綱を握っていたけれど、でも彼はほとんどチョコボに任せて、あんまり手綱をあつちに引いたりこつちに引いたりしないで、介添えをする程度だった。ゲインシュタルトさんとチョコボは、信頼しあつて、共同で仕事をしていた。「チョコボつてのは、最初つから思うように走ってくれるわけじゃねえのよ。育てないとだめなんだ。人間と一緒にな」

とゲインシュタルトさんは云った。

「この仕事には、集中力と忍耐が必要なんだ。どうしたつて必要な能力だけど、どっちもそうそう生まれつき備わっ

てるもんじゃねえ。ちいとばつか、訓練が必要だ。経験のあるチョコボと、そうじゃねえのをベアにして、一緒にやらせる。そうすつと、若い方もそのうちこつを飲みこんで、ちゃんと仕事するようになる。最近の連中は、ろくすつば仕事教えもしねえで、自分がチョコボを操作するんだなんて思うからいけねえや。やたらに手綱引つ張つたり、あつち向かせたり、こつち向かせたり。こいつらだつて、自分の考えとか、性格とか、プライドつてもんがあるんだ。大事なものはな、ちゃんと育てて、仕事しやすいようにしてやることさ。そしたらいい相棒になる」

クラウドは走っているチョコボを眺めながら、すごく感心してゲインシュタルトさんの話を聞いた。およそすべての生き物は、こつちが敬意を払つて、友だちに接するように接すると、ちゃんと友だちになれることをクラウドは知っている。だてに田舎の子じゃあないのだ。

ゲインシュタルトさんは、クラウドのそういうところを、なんにも訊かなくても理解できた。生き物が好きで、好きだから友だちになるタイプは、見ればわかる。繊細で、ちよつと引っこみ思案で、すごく優しい。はにかんだような

雰囲気をもとっているひとが多い。それは少年のころのゲインシュタルトさんもおんなじだった。彼は、少年に手綱を握らせてあげた。少年の目は輝いた。ゲインシュタルトさんが父親にはじめてチョコボ車を一台任せられたのも、これくらいの歳のころだった。そのときのうれしさといったら、いまでも思い出せる。彼はもう六人も子どもがいたけれど、こんな子どもがもうひとりかふたりいてもいいなと思った。子どもはいつだって、いいものだ。自然の賜物だ。チョコボや、彼の暮らすこの雪原とおんなじだ。でもたぶん年齢的に、子どもよりも孫を期待するのが自然つものだろう。

チョコボ車の中のザックスは、にやにやしながら馭者台の友だちを眺めた。

「閣下が手綱握ってるよ」

セフィロスは身を乗り出して、車の正面についている四角い小さな窓から馭者台を見た。

「あの子は、こういう仕事をするべきなのかもしれないな」  
セフィロスは感慨深げに云った。

「チョコボ車の馭者？　でもあいつ前、乗り物か機械の整

備士になりたかったって云ってたよ。整備のマチェットじいさんが、あいつはものになるって云ってた」

「それもいい。あの子には向いているものがいろいろとある……兵士を除けば、実にたくさん。なぜよりによつて一番向いていないものに向かつてきたのだろう。神はなにをお考えなんだ」

「あんたのことでも考えてたんじゃない？」

ザックスは云い、けたけた笑うと、たのしい雪道、なる童謡を歌いはじめた。南国生まれの彼は、小さいときこの童謡を覚えたものの、いつたいなんのことだかよくわからなかった。けれどもいまこうして雪に覆われた大地の上を走っていると、きらきら輝く雪の美しさや、枝の上に雪を乗せた木々の梢のなんともいえない様子に、無性に楽しくなってくる。ザックスは生まれてはじめて、雪道がすごく楽しいってことを知ったのだ。彼は鼻歌ですつとその歌を繰り返した。保養地までは、あと二十分足らずで着くはずだった。

チョコボ車はゆつくりと、保養地に到着した。したと云

っても、ここには名前なんかないし、門があるでも、柵が巡らされているでもなく、ただ看板がかかっている、小さなコテージがひとつと、小屋みたいなものがいくつかあるだけ。その後ろには森が広がっているだけで、施設らしきものはなんにも見えない。このコテージには管理人一家が住んでいて、保養地でしばし羽を休めるひとたちは、最初に管理人さんのところへ寄って、あれこれの説明と、鍵を受け取るようになっていた。

ゲインシュタルトさんは三人を無事届けると、クラウドの頭をぐりぐりなでた。

「おまえはなかなか見こみがあるよ、坊主。もし仕事に困ったら、トルギポリの馭者のゲインシュタルトさんのところへ来な。そう云やあ、みんなわかる。まあ別に仕事に困ったでなくても、いつでも遊びに来るといいや。チョコボがわんさかいるからよ」

クラウドは二頭のチョコボにお別れのあいさつをした。パンゴは首をくるくる回して残念そうに鳴き、ケルバは相棒ほど感情をあらわにできなかったけれど、自分の身体をくちばしでこそこそやって、長くてきれいな羽を一枚くわえ

ると、クラウドに差し出した。クラウドは礼を云って、両手でしっかりと受け取った。それから、ポケットにしつかりしまった。ザックスがそれを見てにやにやしながら云った。「君たち君たち。行きがあるってことは、帰りつてもんがあるってことを知ってるかね？」

彼はゲインシュタルトさんに、いつになるかわからないが、帰りもぜひお願いしたいと云った。ゲインシュタルトさんは大きな声で笑って、帰り道のことばはぜんぜん考えていなかったと云った。クラウドとチョコボたちは、ちよつと恥ずかしそうにいつせいに首をすくめた。クラウドは写真を撮らせてくれと云うつもりだったが、それは帰りにとっておくことにした。

チョコボ車を見送ったあと、三人はめいめいトランクを抱えて、えつちらおつちら管理人が住むコテージに向かった。

「いやいやいやいや、これは気がつかなくて申し訳ありません。わざわざここまで荷物と一緒に歩いてきてくださるなんて。気がついていたらそりを引いていききましたよ。それに乗せたら楽ですからね。わたしが子どものころは、よ

く丸太を乗せて運んだもんです。大きな犬を飼ってしまし  
てね、そいつらに引かせたりなんかしたもんでね。ああい  
や、すいませんな、うっかりすると昔話になっちゃって  
六十を越えると昔が懐かしくていけませんね。もちろん、  
まだ年寄りなんてほど年寄りとは思いませんが」

というのが保養地管理人ピエントさんの、やや長つたら  
しい第一声だった。ベルの音で玄関に出てきた彼は、てっ  
ぺんが薄くなってきた褐色の髪を丁寧になでつけ、鼻の下  
に小さなひげをはやし、赤いチョッキを着た、ちよつとし  
やれた人物だった。小太りで、髪とおんなじ色の目は小さ  
いながらくりくりしてよく動き、下膨れの形をした赤みが  
かった鼻と、いまにも口笛を吹きそうなひょうきんそうな  
口元をそなえており、この人物が、まだまだ茶目つ気をた  
つぷり残した愉快な人物だということを告げている。ご一  
行は、この管理人さんにかわるがわるあいさつした。

「さあさあ、中へどうぞ。お待ちしておりましたよ。どう  
かお茶を一杯飲んでみてください。そちらの子なんて、  
ほつぺたが真っ赤だ。よっぽど寒かったでしょう。もちろ  
ん、りんご病か赤ら顔なら話は別ですが。どっちでもない

でしょう？ ええ？」

もちろん、クラウドはどっちでもなかった。りんご病は  
子どものときにやってしまったし、赤ら顔なんてぞつとす  
る。彼は、自分のほつぺにそつと触つてみた。氷みたいに  
冷たかった。もちろん彼だつて北国の子だから、ちよつと  
やそつと寒くたつて平気だ。でも、保養地に来たその日に  
風邪を引くなんていやだった。それで彼は、急いでピエン  
トさんの家の中に入った。

家の中はすごく暖かかった。暖炉の火が赤々と燃えてい  
て、そのほかに薪ストーブもあつて、そのそばに白い毛玉  
みたいな中型の犬が一匹寝そべつていて、ご一行が入つて  
いくとちよつと顔を上げ、鼻をひくひく動かした。三人は  
リビングのソファに案内された。ピエントさんの奥さんら  
しきひとが、お茶とお菓子を運んできた。すごく太つてい  
て、赤ら顔で、歩くたびに身体が左右に揺れるようなひと  
だ。髪型ときたら博物館級で、流行に百年くらい遅れてい  
て（もしかすると先を行っているのかもしれないけれど）、  
広い額には細い毛の束がちょうど「の」の字を横にしたよ  
うなうずまき型で五つ並んでおり、残りの毛を頭のとっぺ

んに高く積みあげて、ベルみたいな形にしていた。こんな頭、三人は古い映画の中で見えたことがなかった。クラウドは笑いをこらえるのにすごく苦労したし、ザックスは口を閉じるのをしばらく忘れていた。セフィロスは大人だったので、奥さんに丁寧な礼を云って、お茶をいただくことにした……それで、ご夫人は真つ赤になった。なにしろ、若いいい男に丁寧な口を利かれるなんて、何十年ぶりかのことだったのだ。

ピエント夫人は、頭はちよつと大変だったが、料理の腕は最高だった。彼女の運んできたお茶はとびきりおいしかった。一緒についてきた焼き菓子は、舌がどうかかなりそうなほどおいしかったが、身体がどうかしそうなほどこつてりして、カロリーも高そうだった。もちろん、クラウドはなんでもよく食べるので、全部食べた。それでピエントさんの奥さんは気をよくし、若い子はすぐお腹が空くに違いない、うちの息子も昔はひとりで四人前は食べたものだと言つて、巻きパンと、ハムやチーズを挟んだサンドイッチをどっさり持ってきた。クラウドは猛烈に食べた。ほんとのとこ、彼はお腹がすごく空いていた。だいたいいつも空

いているけれど、なにしろそろそろ夕食の時間だったのだ。「まあまあ、そんなに腹べこだったの。これは夕食をうちで食べていつてもらわなくっちゃ。気が利かなくってごめんなさいね」

それで三人は急遽食堂に移動し、食事をしながらいろいろ話を聞くことになった。

「ここら一帯には、全部で十のコテージがあります。それが、百二十ヘクタールの広大な森と平地と湖の中に、点状にしているわけです。おかしい保養地でしょ。もともと、この持ち主の方は、商売する気なんてないんですよ。変な方ですね。昔このあたりはサナトリウムが建っていたんですが……ああ、そう、わたしはそこで働いていて、そのままここの管理人になったんですが……家内は、看護師ですね。それが閉鎖されたあと、このあたり一帯に、大型レジャー施設を作るとか何とかいう話が出たんです。開発ですな。で、さる資産家の方が、それを憂慮なさった。ここら一帯の美しい自然を勝手に開発されないために、金をつぎこんで土地を自分のものにしてしまったんです。そういうわけで、一応名目は保養地になってますが、実際はまじ

りつけなしの大自然ですよ。まあ、ぜんぜん繁盛しませんね。いまは誰もいません。お客さんがただけ。わたしはいいですけどね。あちこちでゴルフの練習したり、動物を見たり、好きにできるから。それでいて、給料はもらえる。いい仕事ですよ、はつきり云つて」

セフィロスが、そういう奇特な精神の持ち主がいる限り、まだまだ世の中も捨てたものではないと云つた。

「ほんとですよ。ほんと。だって、このあたりがレジャー施設になんかなつてごらんさい。このへんの美しい景色は台無しだし、動物たちの居場所はなくなるし。このへんには、実にいろんな生き物がいますよ。極寒の地にだって、ちゃんと生きてるものがあるつてのはたいしたことですよ。ほんとに」

それから、ピエントさんはこの保養地でのルールみたいなものを一応説明してくれた。

「好きになさつて結構ですよ。狩猟と、火事を出すこと以外ならね。鍵は念のためお渡ししますが、まああつてもなくても似たようなもんです。ええと、コテージはふたつご用意でよろしいんですか？　ひとつじゃなしに？　そうで

すか。まあ、おんなじことです。値段以外は。あなたたちが支払うわけじゃないですしね。長いこと家を空にするときは、念のためわたしにひと声かけてください。食料の調達とか、なにか足りないものが出たりしたら、御用聞きが三日にいったん近くの村からやつて来るので、そのひとに頼んでください。洗濯物は、わたしに云つてくださればクリーニング屋を行かせます。もちろん、ご自分で村まで行かれてもいいです。必要とあらば、チョコボ車を手配しますからね。薪がなくなつたとか、家のどこかが壊れたなんてことがあつたら、これもおつしやつていただければ調達しますよ。あとは……なんでしたか。まあ、なにかあつたらわたしに電話をください。どうせ暇ですから。それから、送つていただいたあなたがたのお荷物は、もうコテージにいつてるはずですから」

クラウドはほとんど話を聞かないで、猛烈に食べていた。ピエントさんの奥さんは、それをとろけそうな目で見た。

「たくさん食べるのよ」

ピエント夫人は、乙女みたいにうつとりした顔になっていた。

「遠慮しないで。わたし、誰かが自分の料理を食べてくれるのがとってもうれしいの。息子があんなくらいおきには、あんなみたくにもりもり食べたわ。ほら、これも食べなさいな。ほんとにかわいい子なこと」

クラウドは、年配の女のひとが自分をかわいいと云って猫可愛がりするのは慣れていた。みんな、なんで知らないけど、そうするからだ。クラウドは男だから、そういうのはかなりきまりが悪いけれど、でもだからつてむつしたり、抗議したりするのはよくないことくらい知っていた。母さんがこう云っていた。「あのね、そういうの、母性本能っていうの。歳のいった女はさ、みんながみんなつてわけじゃないけど、あんなみたくにかわいくていい子見ると、欲しくなっちゃうのよ。あつちの意味じゃないわよ。息子につてこと。まあ、あつちのほうのやつもいるけど、それは個人の好みだからしょうがない。黙つててやんなさいよ、キモいババアとか思わないでさ。思つてもいいけど、云つちやだめよ。黙つてかわいからせとけば、お金くれるか、なんかいいことしてくれるから」

母さんの云うことは、いつもだいたい正しい。クラウド

はこの日、ピエント夫人にたらふくご飯を食べさせてもらった上に、巻きパンをひと袋どつかりと、チョコレート三枚と、リングをひと箱、お小遣い百ギル、それにすぐく暖かいギンガムチェックのひざかけをもらった。ザックスはそれを見ながら、友だちが夜の街でホストなんかやつてなくてほんとはよかつたと思つた。もしそうなら、世の女性たちにとつて、大変危険なことになっていたに違いない。

食事のあとで、ピエントさんはチョコボ車の用意をした。ピエントさんが自分で飼っているやつだ。目がくりくりした、かわいらしいチョコボで、後ろには屋根のない車がくりつけてあつた。ピエントさんが馭者台に乗つた。車が動き出した。

「よい休暇を！」

ピエントさんの奥さんが見送つて、そう叫んだ。さあこれで、ようやく休暇に乗り出せる。セフィロスはやれやれとため息をついた。



## 第二章 休暇は来たりて……そして去りゆく

### 自然の中

クラウドは朝のうつろな眠りから目覚めて、大きなあくびをし、自分がちゃんと格子縞のパジャマを着ていること、それから彼の毛布がすぐくふかふかして暖かいやつであることを確かめた。いつもの水玉のパジャマと、チョコボ柄毛布じゃない。それで、彼は自分がいま休暇中なんだってこと、少なくとも、ミッドガルのあの部屋にはいないんだってことがわかって、うれしくなった。

「おれ、休暇中なんだ」

彼は思った。

「あとで、スキーしなくちゃ。湖でスケートもできるってピエントさんが云ってたっけ。スケート靴作らないと。作れるかなあ。やつぱり専門家に任せるべきなのかな。でも、専門家ってどこにいるんだろ。セフィロスが知ってるかも」クラウドは、もちろんセフィロスが知っているわけがな

いことを知っていた。でも、知らなかったとしても、クラウドのために知るようになることを知っていたから、結局おんなじことだった。彼は布団の中で手足を伸ばし、まだしばらく自分の新しいパジャマと、新しい毛布になじむようにもぞもぞした。シーツの感触もいつもと違ったし、ベッドの反発具合だってぜんぜん違った。昨日の夜はじめて世話になったばかりだから、彼はそういうもののひとつひとつにまだなじみがなくて、いわば他人みたいな状態だった。それだからいいのだ。他人だということは、これから知り合いになるということで、そういう過程はわくわくする。クラウドは新しいことが好きだった。なにかいつも変化がある方が、彼は退屈しなかったし、生き生きしていられるような気がした。毎日同じことをして、同じものを食べて、同じ時間に寝るのが好きなひとがいるけれど、クラウドとしては、そんなのはごめんだった。

彼は、自分の環境が変わったことをとっくりと感じて、それから満足して起きあがった。うんと背伸びをすると、頭がすぐすっきりした。それで、彼はまずサイドボードの引き出しに入れておいたガス・ピストルを手にとつて眺

め、それを構えて撃つまねをした。彼の空想の中では、ガス・ピストルより発射された弾は、なんとも見事に壁のど真ん中に命中し、向こう側がのぞけるくらいの穴をこしらえた。クラウドは生意気に鼻を鳴らすと、いつものかわいイブタの室内履きを履いて、パジャマの上から厚手のニットの上着を着、母さんお手製の毛糸のレッグウォーマーを履くと、寝室を出ていった。

コテージは、コテージと名前がついているけれど、要するに別荘だ。つまり、山小屋みたいなものなんかじゃなくて、ちゃんとした家だということ。ドアはみんな重たい木の扉で、玄関のドアには大きな角を生やしたオス山羊の頭のノッカーがついている。セフィロスは昨日の夜それをはじめて見たとき、ここは魔女の家なのかと云った。クラウドはどうしてか訊いた。

「バフォメットだ」

とセフィロスは面白そうに云った。

「黒い山羊の頭をした両性具有の悪魔。魔女たちはみんなこの悪魔を崇拜して、その絵を部屋に飾ったり、山羊の頭を置いたりする」

それでクラウドは、この家がすぐ気に入った。ほんと云うと、オスの山羊は意地悪でくさいのであんまり好きじゃない。でも、魔女はなんだか神秘的だし、それに魔女というのはみんな美人で、危険な匂いがする。危険な美女。これはとても重要なことだった。

「ここ、お化け屋敷なの？」

クラウドは云った。セフィロスは楽しそうにドアの前に立って、指先でドアになにやら書きつけると、神妙に目をつぶり、ぶつぶつ云いはじめた。

「なにしてんの？」

「魔除けのまじない」

「なんで知ってんの？」

「昔勉強した。興味本位で。おれを怒らせると怖いぞ。ひとを呪い殺す魔術や、悪魔を呼び出すまじないを知っている」

クラウドは恐怖に駆り立てられた女のひとみたいに高い声で悲鳴を上げ、ドアを開けて家の中に突入した。セフィロスは大笑いした。クラウドも大笑いした。あとで別のコテージに泊まっているザックスに訊いたら、彼のところの

ドアノッカーは、バイソンの頭だということだった。クラウドは暇だったので、管理人のピエントさんに電話でこのことを訊いてみた。ピエントさんも暇だったので、すぐに答えが返ってきた。要するに、ここに散らばる全部で十のコテージは、それぞれバイソンとか、牡牛とか、山羊とか呼ばれることになっているのだ。ここら一帯の持ち主である資産家の方の、趣味だということだった。

山羊の家は、壁はきれいなクリーム色で、広いキッチンとバスルーム、リビング、客室に書斎、寝室から成り立っている。寝室は当然二階だ。分厚い木板がはめこまれた階段を下りていくと、コの字に灰色のソファが置かれたリビングに通じていて、なんと暖炉があるのだ。暖炉の上には、山羊の頭の剥製がかかっている。もちろん、偽物だ。クラウドは昨日の夜、この暖炉で火遊びして、セフィロスに怒られたばかりだった。でもクラウドは、これはセフィロスがおかしいと思った。誰だって火が燃えているのを見たら、灯油をかけたり、タオルを燃やしたくなったりするはずなのだ。すました顔して、そういうことなんか考えてもいまいせんというような顔をしている連中がいるけど、クラウド

はそうじゃない。やりたいと思ったことをする。まあセフィロスの場合は、立场上叱らなくちゃいけないというのもわからなくはない。一応大人だからだ。もしも魔除けのまじないを唱えてひとをからかったりするようなひとが、大人だと云えるなら。

セフィロスはもう起きていて、ソファですごく楽しそうな顔をして朝刊を読んでいた。暖炉の火は勢いよく燃えていて、部屋はとても暖かかった。クラウドはそれを横目で見ながら通り過ぎ、顔を洗って戻ってきた。まだ朝の七時だ。都会に暮らしているときは朝七時なんて驚異的な時間だけれど、田舎ではこればぜんぜん普通か、ちよつと遅いくらいだ。ニブルヘイムも朝はすごく早くて、隣の家の山羊を飼っているションじいさんは、朝の四時に起きていたし、パン屋の一家は、毎朝三時半にはもうパンを焼く準備に入っていた。クラウドの母さんだって、毎日十時までには必ず寝て、六時前に起き出してくる。もっともこれは、全面的に美容のためだ。十時から二時までが睡眠の黄金時間だからで、その時間に寝ることで肌やホルモンバランスがよい状態に保たれるのだということを、クラウド

の母さんは信じているのだ。そして実際、母さんはいまでも二十代半ばくらいに見えるから、たぶんほんとなのだらう。

クラウドはセフィロスと新聞のあいだにしゃにむに割りこんでいて、つまりセフィロスの膝の上にお尻を乗けると、彼が楽しそうに見ている新聞をのぞきこんだ。「アイシック・リポート」という名前で、セフィロスは楕円形にくりぬかれた男のひとの写真がついた記事を熱心に眺めているところだった。クラウドは、見出しを読んだ……「ミッドガル大学名誉教授ホープニッツェル氏、北の古代種遺跡調査のため現地入り」。

クラウドはもう一度男のひとの写真を見た。頭は禿げちゃびんで、禿げたひとつでいたいそうだが、頭髮のことを考えると首を傾げざるを得ないほど立派な口ひげをたくわえていた。

「このひとが教授？」

クラウドはテーブルの上にあったポットから、紅茶をカップに注いでぐいぐい飲んだ。もちろん、カップはひとつきりしかなかったから、クラウドはそれを遠慮なく使った。

「そうだ。この顔には、おまえも見覚えがあるんじゃないか？」

「教授の知り合いなんじゃないよ」

クラウドはそう云いながら、もう一度その教授の写真を見た。そう云われたら、確かにどこかで見たことがあるような気がした。でも、どこだかは思い出せなかった。クラウドは男のひとを穴があくくらい見つめた。どこかで見たのは間違いないのだ。どこかで……クラウドはふいにひらめいた！

「わかった！ このひと、おれ汽車の中で見たよ。食事るとき、ひとりでテーブルに座ってた」

セフィロスは微笑し、よくできました、と云った。

「そして、同じ駅で降りた。おれも汽車の中からずっと、このひとはどこかで見たことがあると思っていたのだが。この新聞記事のおかげでようやく思い出した。彼の本を何冊か読んだことがある。最初の方のページに、白黒写真でこの顔が載っていたんだ」

「なんか、教授っていうか、優しそうなおじさんって感じがしない？」

「ああ。書いたものを読んでいても、そういう雰囲氣がにじみ出ていた」

クラウドはもう一度記事を見た。ミッドガル大学名誉教授であるホープニツツェル教授は、このたび、北の古代種遺跡の内部調査のため、七名の研究チームを率いて、現地入りした。教授は世界的に有名な、古代種文明研究の第一人者であり、十日の準備期間を経て、調査に出かける。今回の調査によつて、必ずやこの古の民たちに関する、新たな興味深い事実が判明するであろう……。記事の横に、調査団メンバーの紹介として、楕円形の写真と、略歴が記載されていた。若い男も女も、中年もいた。ウータイ系の男もひとりいたが、際立つて陰気な顔つきをしていた。

「それにしても！」

セフィロスはふいに額に手を当て、天を仰いだ。

「おれの記憶力は、このところめつきり怪しくなってきた。自分が読んだ本の著者の顔写真も思い出せないとは！少しぼけてきたんだと思わないか？」

クラウドは首をひねつてセフィロスを見上げた。

「ちよつと頭出してみて」

セフィロスは上半身をかがめて、クラウドの目の高さに頭を持つてきた。クラウドは学者みたいに丁寧に、銀髪に覆われた頭を調べた。

「見たとこ、異常なさそうだけど。二七八九たす六〇九六は？」

「八八八五」

「この星の、アリの総量と、ゾウの総量、重いのはどっち？」  
「アリ」

「ミッドガルの、いまの三代前の市長の名前は？」

「フリードリッヒ・フォン・克蘭テルン」

「クラウド・ストライフ君はいまなにを考えていますか？」

「もう質問のネタが尽きた」

クラウドはセフィロスに頭突きを食らわせた。

「そういうとき、もうちよつとロマンティックな答え云おうよ」

セフィロスは眉をつり上げた。

「例えばどんな？」

「わかんないよ。それより、この北の遺跡ってなに？」

クラウドは新聞の記事を指でとんとんやりながら云った。

「ここから、そうだな、西の方に、古代種が残したずっと昔の神殿がある。彼らは世界各地に似たような神殿を造っている。旅をする民だったからな。この北の大地は、彼らにとつてなにか特別な意味があったらしい。非常に立派な大きな神殿、もしくはそのあとがいくつも見つかっているのだが、その内部の調査はなかなか進んでいない。さまざまなかげがほどこされていて、下手に手を出すと、命を落とすこともある。実際、これまでにくさんの研究者たちが、遺跡調査へ出かけたまま、二度と戻ってこなかった」クラウドは「ぶるる！」と云った。

「おまえは、そういうところへ冒険に行きたいんじゃないか？　なにかの映画か、冒険小説みたいに」

「おれ、その古代種遺跡を舞台にした冒険もの、何冊か読んだことあるよ。主人公が、最後には必ず古代種が残したお宝を手に入れるんだ。金とか……宝石とかさ。それをねらう悪いやつと戦うんだよ」

「で、その悪いやつらは、それを元手に世界征服を企むわけなのか？」

クラウドは肩をすくめた。

「たぶんね」

セフィロスは微笑して、新聞を閉じた。それから、膝の上の猫をなでるみたいにして、クラウドの金髪をなでた。

「おれ、ザックスのこと電話して叩き起こしてもいい？」

「なぜだ？　あいつはたぶん、ほんの数分前に寝たところだと思うが。いつもの生活なら」

「朝食だよ、朝食。わかる？　あいつが給食当番申し出たんだから、朝も昼も夜も働かなきゃ」

この保養地は自由なのが売りであって、大自然の中で各自勝手に過ごす、ということは、当然誰も食事の用意なんかしてくれないということだ。借りているあいだじゅう、家の掃除だって誰もしてくれないここでは、生活に関する雑事全般を、借り手がやらなくてはならない。ザックスは昨夜、食料の袋をすべてこのコテージに置き去りにして、喜んで給食当番を引き受けると云った。

「料理はおれの仕事よ。誰もやっちゃだめ。厨房はおれの聖域です。女人禁制男子禁制、子ども年寄りみんなだめ。オッケー？　そのかわり、閣下はおれと遊ぶ。セフィロスは、なにもすんな。お願いだからなにもしないで。あんた

のこと働かせたら承知しないって、プレジデントに「云われてんの。あんたの休暇だから」

とは云え、セフィロスがなにもしないというのは、クラウドがいる限り無理なことだ。クラウドはすぐ散らかすし、こぼすし、熱が三十八度あったってじつとなんかしていない。もしもセフィロスに休暇を与えるとしたら、クラウドからもぎはなさないとならないが、そんなことはたぶん不可能なことだ。

「昨日の夜、ザックスが冷蔵庫になにかしこんでいたが。たぶん、朝の食料じゃないか？」

クラウドは走っていった、冷蔵庫の中を覗いた。すごくおいしそうなサンドイッチが冷蔵庫の一番上の棚全部を占めていた。張り紙がしてある。「閣下へ セフィロスにもちよびつとはわけてあげること。昼飯までには世界一のシェフが起きる予定。麗しのピエント夫人からもらったリングの箱なら台所にあるけど、一度に三個までよ。臨時雇われシェフ兼栄養士ザックスちゃんより（高給取り）」

クラウドはにこにこしながらサンドイッチを持ってセフィロスの膝に戻った。

「いつもながら気の利くシェフだ。この高給取りシェフの時給は誰が払うんだろう」

「あんただよ」

クラウドはきつぱり云って、さっそくサンドイッチの包みを空けようとしたが、セフィロスに阻止された。

「なにすんだよ」

「食事の前に、散歩だ。田舎での休暇の過ごし方は、伝統的にそうなっている」

「それ、誰が決めたの？」

クラウドがうらめしそうな顔で云った。

「さあ。正装と同じだ。いつの間にかそういうことに決まったんだ。歴史の中で。誰が決めたか、なぜそうなったかは、学者が考える。そうでない人間は、それに従うか、あくまで反発するか、それともぜんぜん気にしないか選べる。この場合、どれを選ぶ？」

クラウドはサンドイッチを見て、それからセフィロスを見た。

「わかったよ、もう！ おれ、着替えてくる」

セフィロスは声を立てて笑った。彼は、とても機嫌がよ

かった。それで、サンドイッチをまた丁寧に入れて、冷蔵庫へ戻した。

夜のあいだに、すこし雪が降ったみたいだった。外は一面、真っ白に輝く、一度も踏まれたことのない処女雪に覆われていた。太陽はまだ低い位置にあって、分厚い空気の層の中で、にぶく光っていた。空気がすごく冷たくて、澄み切っており、ふたりはそれをくくんく嗅いで、深呼吸し、森へ向かって歩き出した。コテージのすぐ裏に広大な森が広がっていて、しばらく行くと、スケートができるという湖に出られるのだ。たぶん三キロくらい距離があるだろう。ふたりはそこまで歩く予定だった。ザックスが寝泊まりしているコテージは、ふたりのところよりも森から離れていて、一キロばかり手前にある。ちょうど、ピエントさん夫妻が住んでいる家と、ふたりのコテージの中間くらいだ。ほかの八つのコテージは、もっとばらばらにあちこちに点在している。森の中とか、外とかに。この土地の所有者が、ここぞと思ったところに好きに建てたので、お隣さんまでの距離が、あるところではほんの数メートルだったたり、

またあるところでは何キロもあつたりする。管理人のピエントさんは一応そのすべての位置を把握していたが、それらがみんな埋まってしまおうというのはあり得ないことだったので、あんまり意味がなかった。

森の中はひんやりして、木々のあいだからわずかに漏れてくる光を受けて、枝に積もった雪がきらきらしている。寒かったけれど、クラウドはずれやすい耳あてや手袋でしっかりと武装していたし、セフィロスはクラウドの母さんが編んでくれたマフラーでしっかりと首元を覆っていたから、少しくらい寒くたって平気だった。ふたりが雪を踏んで歩くくざくざという音は、どこかへ漏れだす前に、しんとした森に吸収されてなくなってしまうみたいだった。ふいに鳥が高い声で鳴いているのがあたりにこだまして、セフィロスは耳をそばだてた。

「いま鳴いたのはノスリだよ」

クラウドは北国の、田舎の子らしいところを見せた。

「こんくらの大きさで（と云ってクラウドは両手を五センチくらい感覚を空けて開いた）、身体がごろっとしててかわいいよ。タカの仲間なんだ。そうだ、うちのそばに餌



台置かない？ 鳥とか、運がよかつたらリスが見れるよ。  
おれ作ってもいいよ」

セフィロスは野鳥やリスが見たかったので、ぜひそうしてくれと云った。クラウドは歩きながらくんくんあたりのにおいを嗅いで、首を動かしたことでずれてしまった耳あてをなおしてから、うちの方の森とは匂いが違う、と云った。

「うちのはもつと、なんていうか、コケくさいんだ。コケくさいにおいつてわかる？」

「ああ、わかる」

「動物の足跡があるかも」

クラウドはぐるりとあたりを見回して、木のあいだを好きな方向に歩いて行つた。セフィロスはあとを追いかけた。前に行くクラウドの靴の跡を見て、セフィロスはふいに、足がずいぶん大きくなっていることに気がついた。これじゃあ、去年のブーツは入らないわけだ。セフィロスは微笑した。しばらくクラウドのあとをついて行くと、雪の上に小さな足跡が点々としているのを見つけた。

「野ウサギだ。小さいのが前足で、長いのは後ろ足なんだ」

セフィロスはしゃがみこんで、足跡を詳しく観察した。逆八の字の長い足跡の後ろに、小さなかわいらしい前足のあとがふたつある。足跡はくつきりしていて、ほんの数分前に、ウサギがあわててここを走っていったところを想像し、セフィロスは小さく笑みを漏らした。クラウドは、持ってきたポラロイドで足跡をぱちりと写真に撮つた。

「もつとサイズが小さくて、似たようなのがあつたらリスのだよ。他にもないかなあ」

クラウドはまた好き勝手な方向に歩きはじめた。セフィロスは立ち上がって、あとを追つた。しばらくして、クラウドはまた別のを見つけた。ふたつ並んだ丸いあとが、点々と続いている。

「これはなんの動物でしょうか、博士」

セフィロスは云った。クラウドはふうむ、と鼻を鳴らし、大仰に眉をしかめて、もつたいぶつた。

「テンか、イタチですね。オコジョって可能性もあるけど、すごく似てるから、見分けるのが難しいんだ。こんなふうな、走るときは両足をきっかりそろえて走るんだよ。きつと几帳面なんだ」

博士はなんでも知っているふうだった。クラウドは田舎の子だ。間違いない。田舎の、それも自然が好きな子。田舎にいながら、そういうことにちっとも興味を持たない子もいる。それはそれで、別のことに興味を持つ。でもそうではない子は、小さいうちに、自然からいろいろなことを学び取ることができる。その美しさ。精悍さと落ちつき、厳しさと優しさ。そういう目に見えないものを。クラウドは、自然とのつきあい方を知っているし、生き物と仲良くなる方法もちゃんと知っている。人間と仲良くなるのは苦手だけれど、でもそれは単に得手不得手の問題だ。クラウドは、勇敢だけれどとても繊細で、その心は、ちょうど枝に乗った雪のきらめきみたいに、純粹で美しい。セフィロスは後ろから、クラウドの、冷たくなった頬にキスした。したくなったのだ。クラウドは意地の悪い顔で笑って、パンチを繰り出してきた。セフィロスはひょいっとよけた。お次は足が飛んできたけれど、これもよけた。で、もう一発。パンチがきたので、今度はつかまえた。

「なかなかいいコンボだった」

「ばかにしてるだろう？」

コンボのフィニッシュを飾る胸部への頭突きは、受け止めておいた。クラウドがぐいぐい押してきたので、しばらくやりあったあと、セフィロスは地面に転がった。クラウドも転がった。クラウドの耳あては、とつくに地面に落ちていた。ふたりは葉っぱみたいに折り重なって、げらげら笑った。その声にびっくりして、どこかで鳥が飛び去った。「いつかぜつたいあんたのこのしてやるんだ。のしいかみたいにさ」

クラウドは地面に転がったセフィロスを見下ろして云った……水面に映る自分に見とれるナルキッソスみたいに、セフィロスの胸の上に両肘をついて、ちよつと夢見がちな目で。彼の金髪は、木漏れ日を受けて鮮やかに見えた。セフィロスはそれを、とても美しいと思った。よく手入れされ、つやめいたブロンドはほんとうに美しい。同じ色の眉毛とまつ毛、ときに物憂く、ときに情熱的な、あるいはまったく無邪気な、青い瞳の輝き。ナルキッソスは、もしかするとこんな顔だったかもしれない。抜群に整っていて、どこか夢見がち。甘ったるさの残る、未完成な少年。セフィロスは知らぬ間に大きくなったクラウドの足のことを

考えた。それから、たぶんまだ伸びるだろう身長のことと、それにとまって変わっていくだろうクラウドの見た目のこと。彼の顔から、少年らしい、甘ったるい感じは徐々に抜けてゆくだろうか？ 否。クラウドはたぶん、いくつになってもどこか子どもっぽい、無邪気な印象を残したままでいるだろう。ちょこんとした鼻と、甘えたように結ばれる珊瑚色の唇と。

セフィロスは静かに上半身を起こし、クラウドの白い額にくちづけた。少年でいられる時間は、長くない。それはすなわち、いまのこの身体、この顔のクラウドを見ていられる時間は非常に短いということを意味する。彼は日々、変化する。セフィロスはいまのこの時間、十六歳という年齢の彼を、全身で感じ、そうして記憶しておくつもりだった。少年らしいあやうさ。少年らしい物憂さ。人生のいつときの輝き。そういうゆらぎが消えたとき、クラウドはどんなふうになることだろう。

ふたりは静かに起き上がった。セフィロスは、クラウドのとれてしまった耳あてをつけてやった。クラウドはセフィロスの、変な巻き方になってしまった黒いマフラーを巻

き直した。もちろん、セフィロスはとても背が高いので、クラウドはちょっと腕を伸ばさないとならなかった。ふたりはこっそり誰かに意地悪したときみたいにくつくつ笑って、また歩き出した。クラウドがセフィロスのコートの袖をつかんだ。で、セフィロスは彼の手をとった。なんてったって、ここは誰もいない保養地で、したがって誰も見ていないのだから。見ているとしたら、遠くで懸命に木をかんかんやっているクマゲラか、雪の下にもぐっている野ネズミくらいのもので、こういう生き物は、人間みたいに秘密をべらべらしゃべったりしない。ふたりが手をつなぐことが、クラウドがだっこをせがもうが、そんなことは知ったことじゃないのだ。

午前中に、御用聞きが近所の村からやってきて、あれこれ用事を聞いて行つた。ザックスは食料を山ほど頼んだ。クラウドは、引越しかと思われるほどの荷物を送っていたので、それを分解し、整理するのに精を出した。彼はなんでもかんでも持ってきた。ミッドガルの家からのみならず、ニブルヘイムの実家からもものをかき集めて、母さんに送

ってもらって持つてきていた。彼はいま鉄道模型にはまっているので、それを一式運びこんでいたし、お気に入りのぬいぐるみやタオルなんかと一瞬だって離れて暮らすのはごめんだった。ニブルヘイムも北国なので、冬の生活に役立つものは、母さんがみんな送ってくれた。あかぎれを防止するクリーム、鼻風邪をひいたときによく効く苦い薬、湯たんぽ、長靴とかんじき、などなど。ほんとうはこの中に赤のかわいいそりも入るはずだったが、こればかりは送料がすごくかさむというのと、なんとなればじニール袋かお盆あたりで代用できるというのとで、あきらめたのだ。でも母さんはそのかわり、実家から譲り受けたという、古くさくて使えたもんじゃない銀のお盆（すごくすべる）と、ミニスキーを送ってくれた。これは、クラウドがまだ都会に出てくる前、大きなもみの木が嵐で倒れたとき、その一部をちよつと拝借して、自分で作ったのだ。で、わざわざ遠くの街まで出かけていって、その鍛冶屋のおやじにブレードをとりつけてもらった。クラウドはそのおやじに、完璧なスキー板だとほめられてすごうれしかった。なぜってそのやすりがけといたらそれこそ命がけだった

わけで、母さんは感心して云つたものだ……「あんたさ、大工の家の子に生まれたらよかったのに!」。彼はすかさずこう云つたものだ。「大工は世襲制（彼はそのころ歴史の授業でこのことを覚えたばかりだったので、使える機会を待っていたのだ）じゃないんだよ、母さん。その気になったら、おれ大工だって船乗りだってなるよ、船酔いしなきゃね」

クラウドは度はずれの道楽者なので、遊ぶとなつたら容赦しない。スキーをするための、ちゃんとロウのかたまりも持つてきた。滑る前の日に、これを板つきの裏に丁寧に塗るのだ。そうしたらスキー板はそれこそ禿げたおやじの頭みたいにつるつるになつて、雪の上を魔法でもかけられたみたいに滑るのだ……。

三人してお昼に熱々のラザニア（シェフザックスの今日のおすすめ）を食べてしまうと、あとはほんとにすることのない、自由な時間がやつてきた。

ほんとうになにもすることがない時間というものをたっぷり与えられると、ひとはそのひとらしさを存分に発揮するらしい。あまりものごとを深く見たり考えたりしないひ

とは、まず途方に暮れる。そして時間をとにかく潰さなくてはならないと考えて、なにか楽しいことを探す。時間を忘れて打ちこめるものを持つているひとは、ここぞとばかりにそれに取り組む。中には、それこそが仕事であるという幸せなひともいる。そして数はごくごく少ないが、なにもしないでもまったく平気なひと、内面の精神的活動で心底満足できるひとは、ほんとになにもしない。セフィロスはこのタイプだったので、ザックスとあたりの探検に行くというクラウドを見送ると、玄關脇のウッドデッキに古びた寝椅子をひとつ持ちだして、そこへ横になった。毛布を丁寧に身体に巻きつけ、ほかにクラウドの母さんが編んでくれた暖かいマフラーと、ピエント夫人からもらったひざかけなどで完全武装して、何時間でもそこに横になってあたりを眺めていられる体制を整えた。彼はまるで横臥療法中の患者のようになった。以前このあたりがサナトリウムだったころ、ちょうど患者たちはこのようにして座椅子に寝そべり、横臥療法に精を出していたに違いない。

太陽は真昼でも、遠くの空に、やっぱりぼんやりかすんでいた。空気はすこぶる冷たくて清らか、ときおり鳥が鳴

いて通り過ぎる。クラウドなら、きっと全部の声を聞き分けて、どれがどの鳥、と云うことができるだろう。彼は、正確に云えばこのとき大地に根を下ろしていた。どつしりと座りこんで、五感を解放し、自然の中に自分の肉体と、精神を放り出していた。叫びだしたいほどの自由と幸福。彼は、こういうときにそれを深く、ほんとうに深く感じることができる。彼の鋭敏な耳は、いろいろな物音をとらえている。森の中で、小さな生き物たちがうごめいている音、枝に乗った雪が落ちる音、太陽の光さえ、鈍く淡い音をたててあたりにそそいでいるような気がする。彼は目を閉じた。そうして少しのあいだ、意識を手放した。おかげで彼の高い鼻の先は、氷みたいに冷たくなった。それでセフィロスは、ザックスと遊びに行つて戻ってきたクラウドに、鼻先を温めたいと云つて、彼の肩口に鼻っ面をうずめた。セフィロスは鼻先が冷たかったが、クラウドは指先が冷たかった。そこで、セフィロスはクラウドの手を自分の手で温めてあげた。それから、今日一日のできごとをお互いに報告しあつた。

クラウドとザックスはまずピエントさんのところに行つ

て、餌台を取りつける相談と、スケート靴の相談をした。餌台に関しては、明日みんなで森に木を切りに行くことに決まった。木材を入手するためだ。スケート靴のことは、村の鍛冶屋にでも訊かないとわからないということだったので、また後日行くことにして、お茶をこちそうになった。ピエントさん夫妻が、実はタンゴの名人であるということが判明した。ふたりはすごく情熱的に、音楽に合わせてくねくね、あるいはくるくる、踊ってみせた。ふたりは喝采を浴びせ、ピエントさんの家をあとにした。そうしてなんとなくその静けさに惹かれて森に入ってしまった。都会人ザックスは暇そうにしていたが、クラウドはそんな子じゃないので、たくさん動物のフンや足跡、木の実などを見つけてきた。写真も撮っていたので、セフィロスは見せてもらった。ザックスは、ゴンガガの森の話をした。当然、こんな北の森とは全然違っていて、もっと植物がみっちり生えており、蒸し暑くて、虫がいやになるほどいて、血を吸うヒルとか、病気を撒き散らす蚊とか、そういうあなおそろしの生き物がたくさんいるということだった。クラウドは、今度せつたいに南のジャングルを冒険すると云った。

北の森のことは、だいたい想像がつく。でも、南のジャングルのことは、ぜんぜん想像がつかない。世界には、まだまだ知らないものがたくさんあるのだ……。

クラウドの目は夢を見ているようだった。それを見ていると、セフィロスも夢を見ているような気持ちになってくる。北の森の中での休暇はじまったばかりなのに、彼はもう南の国を夢見ているのだ！ 若いということは！

セフィロスはいつか、クラウドを連れてコスモエリアの赤土の上を、一緒に歩いてみようと思った。彼を連れてなら、世界中どこへ行たったって楽しめるだろう。ほんとうにそうしようか。クラウドが、十八か、二十歳くらいになったら。そうしたら、彼とふたりでめくるめく冒険の旅に、出てみようか……。

セフィロスはその晩、そんな夢を見た。クラウドはその横で、古代種の遺跡や、森を冒険する夢を見ていた。

あやしい雲行き

二日が経った。クラウドはピエントさんと協力して、コテージのすぐとなりで鳥用の餌台を設置したし、近くの村でスケート靴を作ってもらうために、型をとった。彼はほかにも、木板をくりぬいて的をこしらえ、それでガス・ピストルを撃つ練習をした。パチンコを作つてそれで枝の雪を落としたりもししたし、鉄道模型を部屋中に広げて、がたと走らせたりもした。

ザックスは退屈で死にそうだと云いながら、毎日昼寝と料理に精を出した……もつとも、ザックスには頻繁に電話がかかつてきた。ミッドガルに取り残された同僚や部下たちが、しきりに相談を持ちかけたり、指示を仰いだりするからだ。彼にかければ、ついでにセフィロスあたりにも話がいくだらうと踏んでのことだった。あんまり相談ごとが多いので、ザックスは同僚のひとりに訊いた……「なんでこう、おれが休みのときに限つていろいろ起きるんさ？」

同僚は笑つて、おまえは運が悪いんだ、と云つた。あまりのことに、ザックスはプレジデントに帰りたいと直談判

したが、却下された。プレジデントにとつては、ザックスの仕事や、ソルジャー全員の仕事より、セフィロスのほうが大事だったからだ。そのセフィロスはというと、本を読むことときおりあたりの風景をキャンバスに描いてみるほかは、散歩ばかりしてまるでなんにもしなかった。でも彼は、この生活を心から満喫していた。彼は、自然の中にいることを愛していた……。

そして今日も今日とて三人はセフィロスとクラウドのコテージに集まつて、シェフザックスの今日のおすすめランチを食べ（この日はメカジキのソテーをメインディッシュとした、野菜たつぷりヘルシーサラダプレートだった）、クラウドはデザートにピエント夫人からもらったリングも食べて、気だるい食後のひとときを過ごしていた。この日はここへ来てはじめての横殴りのひどい雪で、とても外へは出られたものじゃなかった。こんな日には、暖炉のある暖かい部屋でおとなしくしているに限る。ザックスは、もう今日は自分のコテージに帰るのはやめて、ここへ泊まるつもりだった。

「そういや、スケート靴があさつて出来るんじゃないかった

つけ？」

ソファに寝転がり、ヘッドホンを耳にあてがってなにやら聞いていたザックスが、ふいに云った。

「そうだ！」

クラウドは飛び上がった。彼はとうとう本格的に鉄道模型にはまって、部屋いっぱいに広げてしまっていた。いま彼は、アイシクルエリアを走る鉄道のジオラマを作っていて、さっきまでぞっとするような音をたてて発泡スチロールの緩衝材を削っていたが、いまはおとなく紙粘土で小さい羊をこしらえていた。

「取りに行かなくちゃ。おれ、スケートなんて久しぶりだ。子どものとき以来だよ」

「おれはぜんぜん、やったことないね。まったくもって氷の塊なんて、見たこともなかったよ。おれの麗しの故郷じゃあ……」

ザックスの話は、残念ながらそこで中断させられてしまった。山羊の頭のドアノッカーが、コンコン鳴らされたからだ。

「ピエントさんかな？ はいはい、いま開けますよ」

ザックスが陽気にドアを開けると、雪だるまが三体あった……いやいや、正確にはたたきつけられる雪のせいですっかり雪だるまになりかけているピエントさんと、ふたりの男だった。

「どうも突然すみませんな」

ピエントさんが申し訳なさそうに云った。

「こんな天気の中よく来ましたねえ」

ザックスが感心したように云って、三人を中へ入れるために一歩退いた。

「こんな天気？ なあに、まだまだ。こんなの吹雪のうちにも入らないくらいですよ」

ピエントさんは明るく云った。ザックスは窓からびゅうびゅう吹きつけている雪を眺め、思わず身を震わせた。

「それ、本気で云ってます？」

「本気ですとも」

ピエントさんは請け負った。

「ほら、だから云っただよ」

クラウドが不満げに口を出した。

「ほんとの雪っていうのは、どこから降ってきてるんだか



わけわかんないだって。こんなちよつと斜めなくらいで騒ぐなんておかしいよ。何回云つても聞かないんだから」

「さよう、さよう」

ピエントさんは云つて、コートや帽子をばたばたはいた。ふたりの男もおなじようにした。

「彼の云うとおりですよ。ほんとの雪つてものは、降るなんてもんじゃないんだから。めちゃくちゃにぶつとんでくるんですよ。ほんとに。もつとも、北国の人間でなきゃ、わからないことでしょうけど」

「ほんとかなあ」

気のいいザックスは云いながら、温かいお茶を煎れるために台所へ入つていった。

三人がすっかり雪をはたいてきれいになると、ようやくそれぞれがどんな格好をしているのかわかるようになった。ピエントさんは見慣れたチョッキとズボンで、おしやれにきまつていた。そして一緒に来た男ふたりは、スーツ姿で、見間違いでなければ、警察のバッヂを身につけていた。ひとりはおそらくベテランで、黒くて濃い眉とひげの、でも優しそうな顔をした男だった。もうひとりは小麦色の襟足

の長い髪、ひよる長くて一見して都会派、おそらく三十を少し過ぎたくらいだろう。ベテランの方がコランダー捜査官で、ひよろつとした男がライオネル捜査官と名乗った。

そしてふたりは警察ではなくて、国立捜査局の人間だと説明した。特殊な犯罪や事件を扱うために設立された機関で、警察からは独立している、ということだった。ふたりは緊張しているらしかった。たぶんセフィロスのせいだろう。

本人にはそんなつもりがまるでないのに、セフィロスを前にすると、彼がいったい誰か知っているひとは、だいたい緊張してしまう。英雄なんて肩書きがついているものだから、みんな彼のことをなにか近寄りがたくて、威圧的なひとだと思ってしまう。ひとによつてはもつと直接的に考える……どうせひと殺しが専門なんだ、と。クラウドはそういうのにいらいらしてしまう。それで、不機嫌になるのだ。

「みなさん、お茶ですよ」

お茶を運んできたザックスが、母さんみたいに陽気に云った。彼は身体があたたまるようにと、即席のジンジャーオレンジアップルその他「ごたまぜフルーツティー」なるものを作ってきて、みんなにふるまつた。クラウドももらつて

飲んだが、すごくおいしかった。ザックスって、きつと舌が天才なのだ。

「腹減ってます？」

ザックスはひとがよさそうな笑みを浮かべ、外からやってきた三人に訊いた。でもだれも減っていないかったので、彼は仕事から解放され、ソファに座った。

「お休みのところ申し訳ありませんな。こちらの捜査官さんたちが、みなさんにお話があるということなので」

ピエントさんがのんびり云った。年輩のコランダー捜査官が小さくうなずいて、話を引き取った。

「貴重な休暇の時間を割いていただいて申し訳ありませんが……」

「まさか。それほど貴重でもありません。休暇という意味なら」

セフィロスが微笑して云った。捜査官には意味がわからなかったので、同僚と目を見合わせ、曖昧に微笑み返した。

「では、さっそくですが。お話というのはほかでもない、先日、みなさんはコンチネンタルにお乗りになりましたね」

「そこで殺人があったとか？」

ザックスが楽しそうに云った。

「殺されたのは金持ちの未亡人……」

クラウドがそれに続いた。

「犯人は愛人。未亡人が、結婚を拒んだんだ。愛人は財産が自分のものにならないってわかって、腹立ちまぎれにバーン！」

「犯人はおそらく、サイレンサーを使ったんでしょう」

ピエントさんが楽しそうに云った。

「だから、車内のひとは気がつかなかったんですな」

「で、駅でなにくわぬ顔して降りて、行方をくらましたんだ。すごいなあ！」

クラウドが目を輝かせた。

「お見事」

コランダー捜査官が拍手をした。

「いまの間に事件がひとつ片づいた。シャーロックばりですね。今度ぜひ捜査に協力していただけますか、ええ？」

「喜んで」

クラウドとザックスが声をそろえた。若いライオネル捜査官はくそまじめで、こういったおふざけは苦手だったの

で、決まり悪そうにみんなを見回していた。

「で、実際はなにが問題なんですか」

セフィロスが微笑を浮かべて云った。

「盗難があつたんですよ」

コランダー捜査官はまだにやついていたが、うそではなさそうだった。ザックスが口笛を吹いた。くそまじめなライオネル捜査官はちよつと眉をしかめた。クラウドはそれを見て、このひとをからかったらおもしろそうだなと思つた。

「誰のなにが盗まれたんです？」

ザックスが陽気に訊ねた。

「当ててみませんか、名探偵？」

コランダー捜査官はまだふざけていた。ザックスはひとがよさそうに両手を振った。

「考えたくないですね」

セフィロスが顔をしかめた。

「おや、ということは、もう答えがわかつてますね？」

捜査官はおどけた。セフィロスはうなずいた。

「ほんとですか？」

ピエントさんがまたまた楽しそうに云った。あんまり楽しそうなので、ちよつと薄気味悪いくらいだった。

「んじゃ、ボス、またの名シャーロック、どうぞ」

ザックスがにやにや笑いながら云った。シャーロックはパイプをくゆらせ……はしなかつたが、相変わらず物憂い表情でザックスお手製のこたませティーをひと口すすり、口を開いた。

「たぶん、マティルダ嬢でしょう」

「……当たり前だ」

コランダー捜査官は微笑んだ。

「ほんとですか？ 当たった？ すごい！」

ピエントさんは飛び上がって跳ねた。彼は身体が重かつたので、隣に座っていた身体の軽そうなライオネル捜査官の身体も浮き上がり、ソファは苦しうにいやな音を立てた。もつとも、壊れたところで問題なかった……修理に出すのもピエントさんだからだ。

「でも、どうしてわかつたんです？」

ピエントさんが飛び跳ねるのをやめて云った。

「予知能力で」

セフィロスはまじめな顔で云った。

「ソルジャーになると、問答無用で未来を予知する能力が身につきます。誰かと握手をしただけで、そのひとの三ヶ月先まで見ることができる。わかっていました、彼女が盗難に遭うことは。注意しようと思ったが……」

「それ、ほんとですか？ すごい」

くそまじめが目玉をひんむいて云った。コランダー捜査官は大笑いした。

「アホ、冗談だ。おまえは少しシャレを勉強した方がいいぞ。そういうセミナーなんかがあるだろ。そんなことじゃあ、この先が思いやられる」

「捜査能力とは関係ないでしょう」

くそまじめはむっとした顔をした。

「そういうところがだめだってんだ。人間関係をぎくしゃくさせるだけだよ。いやしかし、ほっとしましたよ。あなたが思いのほか気安いひとでよかった、サー……」

「それをつけて呼ぶのはやめていただきたい」

セフィロスがぞっとした顔をした。

「震えが出ます」

コランダー捜査官はまた大笑いした。彼は、俗に云うゲラらしい。ライオネル捜査官はますます居心地が悪そうな顔になった。

「しかしですね、どうしてわかったんです？ セフィロスさん」

ピエントさんがしつこく訊ねた。

「だいたい予想がつくでしょう」

「ところがですね、わたし、その方面の能力はさっぱり持ち合わせないもので、ぜんぜんわからないんですよ」

「単純なことなんです……ああ、そういう顔をなさらないでください。いいことを思いついたときの子どもみたいだ。母親をいやな予感でいっぱいにする。わかりました、白状しましょう。ほんとうに簡単なことです。話を聞いたとき、真っ先に彼女のことが思い浮かんだ。ひらめいたんですよ、それはなぜか考えた。かなりの確率で、直感は正しい。この直感をどう説明するか？

われわれ神羅の、おまけに軍関係者に捜査官が話を聞きにくるというのはよほどのことだ。われわれがやった疑いが濃厚か、あるいは被害者……または加害者と懇意である

ことが判明しているか、もしくはなにか重要な手がかりが得られると確信しているか。ただ同じ汽車に乗っていたというだけなら、わざわざこんなところへ来ないでしょう。

もちろん、われわれはやっていない。では、なにか重要な手がかりを握っているのか？　だとしたら、われわれが親しくしていた人間か、おなじ駅で降りた人間かでしょう。

降りたあとのことは関知していませんからね。さてここに、その条件をふたつとも満たしているひとたちがいる。そのひとたちは少なくとも金持ちですし、女性の方ときたら、善人ゆえにやや用心に欠けるところが見受けられる。いづかなにか起きると思っていた。いまだとは思いませんでしたが……やれやれ、理屈をつけると陳腐ですね」

「マル！」

コランダー捜査官が叫び、両腕を上には挙げてマルをこしらえた。

「おいライオネル、そういうことだよ。おれがいつも云つてるのは、ひらめき。それから理屈だ。理屈はあと。おまえに欠けてるのはひらめきだよ」

「どうせ僕は発想に個性がなくて貧弱ですよ」

ライオネル捜査官はいじけた。

「まあ、おまえ保守的だからなあ。でもそりゃあおまえのせいじゃないよ」

上司は部下を励ました。

「素晴らしいですな、ほんとに」

ピエントさんがにこにこしながら云った。

「わたしみたいな生活をしてますと、そういう能力を磨く場面も、發揮できる場面もまったくないもんでね。いやはや」

彼はほんとにうれしそうに両手をこすりあわせた。コランダー捜査官が咳払いをした。

「さて、冗談はここまでにして、いい加減話を戻してと。盗まれたのは、彼女の鏡なんです。その……」

「ばあちゃんからの形見の？」

ザックスが割りこんだ。

「そうです。その意味ではマティルダ嬢にとっては非常に大切な品ですが、残念ながら、ほかの誰かに盗みたいと思わせるほどの価値はさほどないらしいですね。似たような鏡は世界中で五万と見つかるそう……」

コランダー捜査官は頭を掻いた。

「そういや、ボス汽車の中でそんなようなこと云ってたね」

ザックスが云い、セフィロスは苦笑した。

「あなたは、そういった方面に明るいのです？」

コランダー捜査官が眉をつり上げた。

「うちのボスは博學なんですよ。本の虫。ほっとくと、朝から晩まで本にかじりついて暮らしてる」

ザックスがにやにやしながら云った。セフィロスは首を振ってたいしたことはないと否定した。

「そうですね。そりゃ結構なことですよ。うちの息子も少しは書いたものに興味持つてくれると助かるんだが……話を戻しましょう。まあ、そういう、たいして価値があるわけではない鏡ですから、これが盗難に遭うというのはちょっと不可解といえませんが、世の中つてのは、骨董品つてだけで価値があるものと思つて盗んでしまうようなものもないわけではないし、古くて神秘的なものつてのは、なんとなく価値がありそうに見えますしね。神秘的つてなら、うちのかみさんの家に代々伝わってるカメオブローチだつて神秘的ですけどね。単に古いっただけなのに。

で、その鏡ですが、持ち主の話によると、汽車を降りる直前には、確かにあつたそうです。手持ちのバッグの中に入れてたそうなんですね。それで身繕いをしてから、汽車を降りたそうなんです。で、なくなったのに気がついたのは、汽車を降りて、婚約者であるマグリムさんの商売仲間の、ええーと……」

「ベアトリスさん」

クラウドが云つた。彼は目を真夜中の猫みたいに輝かせ、耳をダンボにして、ひとことも聞きもらさないよう細心の注意をはらつていた。

「ああ、そう、そのひと、そのひとの家に向かう途中のチヨコボ車の中でした。バッグを開けたら、なかつたんだそうですよ。当然、お嬢さんは動揺してバッグの中をひつき回す。婚約者の青年は、どうしたんだと大声を出す。お嬢さんはますますパニックになる。チヨコボ車は停車する。で、ふたりしてよくよく考えてみたところ、そういえば駅舎の中で、変な男とぶつかったことを思い出した。その瞬間にやられたんだ、と合点がいったお嬢さんは、すぐに地元の警察署に駆けこんだ。そのときにあなたたちをつかま

えられればよかったのかもしれませんが、マグリムさんがあなたたちのことを思い出したのは、警察に事情聴取されてしばらくしてからだったそうですよ。まあ、致し方ないことでしょね。気が動転しておられたんでしょう」

セフィロスが同情もあらわに首を振った。

「惜しいことしたなあ」

ザックスもため息をついた。

「おれたち、鏡が盗まれたとき、すぐそばのホームにいたのにさ！あのふたりと一緒に駅を出るんだったなあ！そしたら、あやしい動きを見せる男を見つけるや猛犬のごとく飛びかかり、はっしと取り押さえられたね。惜しいことしたなあ！おれ責任感じちゃうよ」

ザックスは悲劇の登場人物みたいに、大げさに腕を顔に当て、胸をかきむしって嘆く真似をした。

「まあ、そんなことを考えてもはじまりませんよ」

コランダー捜査官が優しい顔つきで云った。

「地元警察は、盗難事件ということで捜査を開始しかけたんです。しかし、マグリム青年の御尊父が神羅軍の関係者であること、そして、あなたがたの名前が出てきたところ

で、署長が両手を挙げ、われわれに話を持ってきました。おわかりかと思いますが、警察というものは……まあ、あなたたちとは、関わりあいになるのを避けたいんですよ。おわかりでしょ？われわれは、警察よりももう少し政治的な匂いの強い事件や、利権やら利害関係やらがややこしい事件を扱います。で、わたしたちふたりが今日こうして、遠路はるばるやってきたわけで」

ザックスは肩をすくめた。セフィロスは妙な気を遣わせてしまつて申し訳ないと云い、クラウドはなんだかよくわかつたようなわからないような話なので、目をこすつた。ピエントさんはザックスの作ったお茶をおいしそうに飲んだ。ライオネル捜査官は、表向き無表情でじつと座つていた。

「で、なにか参考になるようなことをご存じないでしょうかねえ。マグリムさんとその婚約者から、なにか参考になるようなことを聞かなかつたでしょうか」

セフィロスとザックスは考えこむような顔をした。クラウドは考えても無駄だとわかつていたから、考えるふりもしなかつた。

「特になんもねえなあ……ボス、なんかある?」

「関係あるかどうか不明だが」

ライオネル捜査官がメモ帳を片手に身を乗り出した。

「われわれの乗った汽車の中に、ミッドガル大学名誉教授のホープニッツエル氏がいたことはもうご存じですか?」

ライオネル捜査官は上司を見た。上司はうなずいた。

「捜査の出だしの段階では、その人物がもつともあやしく見えたんですがなあ。なにしろ彼は、古代種文明研究では右に出るものなしというくらいの世界的な権威らしいですから」

ピエントさんが「ほーうー」と眉をつり上げて云った。

「そりゃあ、偶然にしてはすごい偶然ですね」

「でしょう? だから、真つ先に疑ったんですよ。彼が誰かひとを雇って盗んだんじゃないかとね。みなさんと同じ駅で下車しているし。でも警察が街のフラットにチェックインしていた教授を慎重に訪問し、事情聴取したところが、手荷物検査に快く応じたうえに、問題の鏡についてひとくさりやつてくれたそうですよ。実は、その鏡に盗むほどの価値はないってお墨つきをくれたのは教授なんです。マ

ティルダ嬢に鏡が写っている写真がないかどうか思い出してもらって、そいつをわざわざ実家から送ってもらい、あちこちの専門家にもファックスを送って確認してみましたかねえ、だいたい似たような答えでしたよ。学術的、芸術的価値中の下、と。おまけにこの教授ときたら、子どものころに中耳炎にかかったもので、片方の耳がほとんど聞こえない、いつもは補聴器をしてるが食堂車のようなところは雑音がうるさくて頭痛がしてくるので外していた、だからよその連中の会話なんぞ聞き取れなかったところきたもんだ。さすがにこれだけのことで聴力検査を依頼するわけにもいかんでしょう?」

「確かにそうですね」

セフィロスが考えこむような顔で云った。

「証拠もないし、これ以上著名な教授をつつき回してもいいことはないんで、泣く泣くこの線はひとまず放置することになりましたよ。まあ、これで教授が犯人だったら、ちょっと単純過ぎて面白みがないといえませんが」

「じゃあ、第二の線つてのはなにかあるんですか?」  
ザックスが訊ねた。



「第二の線というか、いまはその駅でマティルダ嬢と衝突した男について聞きこみをしています。駅周辺で別の男とふたりで歩いているところを見た、という情報、が複数件あるので、ふたり組で行動していたことはまず間違いないでしょう」

ふたり組の泥棒かあ！ 組織犯罪の匂いにするなあ、とクラウドは思った。彼が読んでいる冒険マンガとか、探偵マンガなんかでは、ふたり組ときたら必ずその背後には悪の組織があつて、めつぼう悪い親玉がいるのだ。もちろん、クラウドは分別のある子だったので、プロの捜査官の前で自分の意見を口にすることは謹んだ。

「しかしトルギポリのような広い街で、たつたふたりの男を探すとすると、大変でしょう」

セフィロスが静かに云った。

「それがそうでもないかもしれないんです。どうやらそのふたり組、揃いも揃って容姿に著しい特徴がありましてね」  
ピエントさんがふたたび「ほほうー！」と云った。

「マティルダさんとぶつかったのは、背の低い男だったそうですが、これがびつくりするほど特徴的な鼻をしていて、

まるで太い棒がついてるみたいに丸っこく飛び出して、赤鼻だったそうです。もうひとりの男の方は、のっぽで、こいつがどうもまれに見る面長だったらしいんですね。端的に云えば馬面ね」

「変な泥棒」

クラウドは思わず口に出して云った。

「まったくね」

とコランダー捜査官が相槌を打った。

「とにかく、いまはこの二名の行方を追つてるところです。手がかりがほかにないんですね。それはそうと、ちょっとはつきりさせたいんですが、マティルダさんの話によると、あなたがたは食堂車で、盗まれた鏡を見せてもらったんですな。その……昼食の後に」

「丸くて、きれいなやつね。昼飯のあとでしたよ。つい話しこんじゃって」

ザックスはそう云って、台所へ引っこんでいった。もうおやつどきだったので、なにか作って出すつもりなのだ。

「そのとき、食堂車にはほかにどんな人物がおりましたか？ なにしろ食後には乗務員連中は散り散りになってま

したし、肝心な被害者ふたりの記憶はどうもはつきりしませんでしたねえ。ほかの乗客ひとりひとりに当たろうにも、みんなあつちこつちに散らばってしまつてゐるもんで」

セフィロスは首をかしげた。

「乗客の、半数近くは残つていたと思います」

クラウドが立ち上がった。なにも云わずに出ていって、スケッチブックと空色の鉛筆を持つて戻つてきた。そして、それを開いてなにやら描きはじめた。

「君、なにを描いてるんだい？」

ピエントさんが相変わらず楽しそうに訊いた。

「図面を引いてます」

クラウドが丁寧に答えた。

「おれ、こういうの得意なんです。機関車とか、建物とか……機械の図面なんか引くの。見たら覚えちゃうんです。ちよつと待つててください。これができたら、セフィロスに誰がどこにいたか答えさせます」

最年少の少年が上官をこき使うようなことを云うので、その場にいたひとたちはちよつとびっくりした。ことにくそまじめは礼儀正しい男でもあつたので、自分の上司に対

してそんなふうになんか云うことはないんじゃないかと思った。

クラウドはしばらく黙々と空色の鉛筆を動かした。大人たちは、この少年の仕事を待った。

「できました」

彼はそう云つて、テーブルの上にスケッチブックを広げた。食堂車の俯瞰図で、長方形の外枠の中に、テーブルや窓の位置が、実に正確に描かれていた。セフィロスはクラウドから空色の鉛筆を受け取つて、テーブルひとつひとつに人間の代わりに円を描きはじめた。

「われわれはここに座っていました。マグリム青年とマテイルダ嬢は、確かこのテーブルにいて、われわれの横のテーブルに移動してきた。ホープニツツエル教授はこのテーブルにいて、食後しばらくはテーブルに残っていました。が、いつの間にかいなくなつていた……」

セフィロスが、名前がわかる乗客には名前を、そうでないひとには、その特徴を書きこんだ。捜査官とピエントさんは、乗客名簿を取り出し、それと照らし合わせながら感心したように眺めていた。

ザックスがうきうきした様子でお盆を運んできた。焼き

たてのブラウニーと、トフィーが乗ったやつだ。ザックスは、たとえばウィリアムソンさんのように本物の給仕みたいにうやうやしくお盆からお菓子をテーブルに移し、それぞれのカップに新しいお茶をたつぷり注いで回った。そうしていると、ザックスはもともとシェフか、レストランで働いているひとみたいに見える。少なくとも、飲食産業に従事しているひと。ザックスは、そういう仕事に就くべきだったのではないだろうか？

「でも、おれはやつぱりその教授の存在が気に喰わないなあ」

シェフザックスは動き回りながら云った。

「だいたい、偶然って、そうそう頻繁に起こらないですもんね。ドラマとか、映画の中みたいには……たまたま盗難に遭ったブツの専門家が、同じ汽車に偶然乗りあわせてたなんて、変な感じだなあ。なにか、おれらで役に立つことってありますか？ 割と使えますよ。ボスは一度見たものなんでも覚えてるし、おれは特殊部隊並みに隠密行動が得意だし、閣下は銃撃と、ありとあらゆるほめられたものじゃない悪戯と、ほかいろいろできるし」

「そりゃ心強い。もしかすると、お手伝いをお願いするところもあるかもしれませんよ。捜査状況は随時お知らせすることにします。規則じゃだめなんです、あなたがたならいいでしょう。はなつから、法つてものを超越してるからね」

「賭けてもいいけど」

捜査官二名とピエントさんが帰ったあと、ザックスはにやつきながら云った。

「おれたち、巻きこまれるよ。ぜーったい」

「なぜそう云いきれる」

セフィロスは眉をしかめて云った。

「あの捜査官たちはきつと有能だ。さつさと盗難事件を解決するだろう」

「そりゃあさ、あのひとたち、きつとやり手っしょ。でも、そういう問題じゃねえなあ、おれが云いたいのは。だつてさあ、ボス、君、失意のマテイルダ嬢と、シヨックを受けてる婚約者を抱えた青年に、慰めの手紙のひとつも書かずにいられますか？ 第一章、ボス、手紙を書く。第二章、失意の会見。ぜったいそうなる。手紙を読んだふたりは、

感謝の電話か、手紙よこすよ。そしたら、会うことになるね。間違いない」

結局、ザックスの云うことは、ことごとく当たっていた。マグリム青年とマティルダ嬢はまだトルギポリにいて、親切にも部屋を提供してくれていた商売相手のベアトリスさんのところから、ホテルへ引越していた。もしかしたら、奪われたものが戻るかもしれないという儚い望みを抱いて、もうしばらくねばっているつもりなのだ。セフィロスはどうしたって手紙を書かずにはいらなかったし、心のこもった手紙を受け取って、それに返事をしない人間がいたらそれはひとでなしというものだ。セフィロスは、どうあってもこの地を離れ、ひとこと見舞いを云わねばならぬ、と重苦しい口調で云った。ザックスは「そりや当然ね」と云い、クラウドはガス・ピストルを構えて「バン！」と云った。

## 小休止その1

### 泥棒たちの会話

ふたりの男が、路地裏を歩いていった。のつぼとちびすけの、ちぐはぐなコンビだった。どこの町にも、開発から取り残された部分というものがあるものだが、それはこの比較的豊かで文明の進んだトルギポリも例外ではなく、街の一角にはところどころ、貧しいひとたちの住む、うらぶれた、汚らしい地区があった。こういうところで繁盛するのは安くさい酒場で、ふたりの男は、そういうものが立ち並ぶあたりを進んでいた。ガス灯が細々とともっていたが、それよりも酒場から漏れる明かりのほうが照明としては優秀だった。酔っぱらいがどこかで歌を歌っていた。野太い声の男たちが何人か、どっと笑ったりもした。みんな、寒いのにアルコールの熱で暖まっているせいで、気が大きくなっていた……。

「で、この鏡だけぞ」

顔の長い、背の高い方の男が、一緒に歩いているいちじるしく顔面から飛び出した鼻を持つ、背が低い男に云った。男の声は奇妙に間延びしていて、低いのにどこか子どもみたいな印象だった。

「ほんとにあの教授だかなんだかに、素直に渡しちゃっていいのかねえ？　だって、依頼主がああ教授だつてのはほんとだけど、おれたちが受けた話じゃ……」

「いいんだよ、心配性なやつだな、おめえは。だからいつも胃薬飲むことになるんだ。おまけにガキみてえに、シロップに溶かさなきゃ飲めねえなんてよ、犯罪者の名が泣くつてなもんだ」

「おいらの心配性とこれとは関係ないだろう？」

「いんや、あるね。おめえといると、ときたまいらいらしてくらあ。そうしろって指示なんだから、それでいいんだよ。あとはおれたちの責任じゃねえんだ。だけどあのひとのよさそうな教授、ばかだなあ！」

赤鼻は意味深なことを云って、口をもごもごさせた。

「でも、おれらにとっちゃあ、あまり感じのいい人間とは云えなかったけどな。あのお嬢ちゃんと同じ汽車に乗って

来るなんて、ばかにしてらあ！ おれたちの仕事ぶりが心配だったんだ。けっ！」

ちびの男は地面を蹴飛ばした。

「受け渡しは、明日でいいんだったつけ？」

のっぽが不安そうに云った。赤鼻は「ああ、もう！」と爆発したように云った。

「明日ったら明日だ！ 何回確認すりゃあ気が済むんだよ、このトンチンカン！ おめえ、やっぱりこの仕事向いてねえよ」

「そんなあ」

のっぽは悲しそうな顔をした。

「だって、この仕事やめたら、いまさはどうしろってんだよう。母ちゃんにも顔向けできないし、結婚だつてできないし、普通の会社じゃおいらみたいな、働けないよ」

赤鼻は一瞬、動揺したような顔になった。

「……わかったよ、悪かったよ」

赤鼻はそう云って、それきり黙った。

### 第三章 巻きこまれ型人間たちのあやしい跳躍

#### 大人ぶった訪問

急な依頼にも関わらず、ゲインシュタルトさんはちゃんとケルバとポンゴをともなつて保養地に来てくれた。三人はふたたびチョコボ車に乗りこみ、トルギボリへ運ばれていった。ピエントさんが見送りの係を引き受けた。別にいなくたつていいのだが、いた方が雰囲気は出る。もちろん、クラウドは御者台に乗っていった。彼はコートの胸のところに、このあいだケルバにもらった黄色いチョコボの羽をつけていた。おかげで、まるでなにかの慈善事業に募金したひとみたいに見えた。

「しかし、こんなに早くまたあなたたちを乗せることになるたあね。なんかあつたのかい？」

ゲインシュタルトさんはパイプをふかしながら、鷹揚な調子で云った。

「重大事件なんです」

クラウドは厳しい顔で答えた。それで、ゲインシュタルトさんはクラウドが軍人だったということを思い出した。

「ま、人生つてのは楽じゃねえや」

ゲインシュタルトさんは煙をたくさん吐き出した。

見慣れたとんがり屋根の並ぶ街を走り、大きなホテルの前で、チョコボ車は止まった。マグリム青年とマティルダ嬢は、街で一番豪華なグランドホテルに泊まっているのだ。クラウドは馭者台から飛び降りると、またチョコボたちとお別れをやった。最低もう二回は会えると云っているのに、ケルバはすぐく心配そうな顔で、何度もクラウドの顔に頬のあたりをこすりつけ、クウクウ鳴いた。パンゴは先輩のすることを不安げに見つめていた。

「おいおいどうしたつてんだよ」

ゲインシュタルトさんが見かねて云った。

「坊主が明日に死ぬわけでもあるまいし」

ケルバはいらいらしたように鋭い声で「クエー」とやった。ゲインシュタルトさんは首をすくめた。

セフィロスが胸のポケットから浅黄色の封筒を取り出して、ホテルの部屋番号を確認した。三人はゲインシュタル

トさんに礼を云ってホテルに入っていった。ゲインシユタルトさんは、例の古ぼけたケーバ帽子を振り回して見送った。

フロントには金髪の、たいへん美しい女性がいて、熱心に仕事をしていた。ザックスがにじりよっていくと、にこやかな笑みを浮かべ、用件を聞いてきた。ザックスは万国共通強力免罪符である自身の独特の瞳をさりげなく差しだしながら、

「八〇二号室のマグリムさんとラスカ嬢を訪ねて来たんだけどさ。おれたちの友だちで。勝手にあがつてつていいの？」

ブロンド美女はこてんと首を傾けた。

「まあ、今日はこちらのお部屋がずいぶん繁盛するんですね」

「つてーと？」

「さっきも、男性の方がひとりそのお部屋を訪ねていらしたんですよ。いましがたお帰りになったけど」

「どんなひと？」

ブロンド美女は口元に手を当てて、かわいらしい仕草で首を反対に傾けた。

「ええと、そうですね。小柄な、立派な口ひげを生やした、おしゃれな、おもしろそうな方でした。高そうな杖をついてました。握り口のところがアヒルになってるんです」

「……同じものをつい先日見たな」

麗しきブロンドに礼を云ってエレベーターに乗りこんでから、セフィロスは云った。

「マジで？」

ザックスは壁によりかかり、楽しそうな顔で云った。

「小柄な、立派な口ひげを生やした、おしゃれな、おもしろそうな方が持っていたな。記憶違いでなければ、ホープニツエル教授だ」

「ボスが記憶違いってのは、おれの記憶違いでなきゃこれまで一度もないっての」

ザックスがにやにやしながら云った。

「面白いことになってきた。な、閣下」

「なんかあつたら、おれのガス・ピストルが活躍できるしね」

クラウドはポケットの中のガス・ピストルをなでた。エレベーターが八階についた。三人は廊下をぞろぞろ歩



いていつて、八〇二号室の前で一度顔を見合わせ、セフィロスがドアをノックした……ドアは開かれた。マグリム青年が目を丸くして立っていた。

「これはこれは！ わざわざいらしていただいたんですか？ どうも、これは……ねえ、君！ うれしいお客様だよ。さあ、どうぞ、こちらへ。ソファへおかけになつてください」

三人が部屋に入っていくと、ソファに座っていたマティルダ嬢がさつと立ち上がった。握手やお礼やお茶の用意や同情のことばやいろいろが取り交わされるのが面白いので、クラウドはじつと見ていた。大の大人たちがそろいもそろって握手だの挨拶だのをせわしなくやっていると、ころは、コメディ映画みたいに見える。

「大人になるってことは」

彼は考えた。

「要するに、礼儀とか作法とか気配りとか、そういうのにとつぷり漬かつちやうつてことなんだ。母さんが瓶にいっぱい漬けてるピクルスみたいに。おれもあと二、三年したら、ひとに会つたらにつこり笑つて、握手なんかして、や

あどうもこんにちは、なんてやらないといけないのかなあ。それつて変だな。だつて、おれはそういうことしたくないのに。十八になつたとかいう理由ではじめるのつてどうかと思うな。年齢でおれが変わるわけじゃないし。今度セフィロスに訊いてみよう」

「盗まれたものが鏡でよかつたと考えなきゃいけないですよ」

マグリム青年が笑いながら云つた。

「彼女の大事な形見の品がなくなつて、はらわたが煮えくり返りそうですけど、こういうときこそ前向きにいかなくちゃ。財布ごと盗られたとかいうよりはましです。カードなんか盗まれて、不正使用された日には目も当てられないですよ。そう考えた方がいいよつて僕は云つてるんです」

「ほかのものはなんにも盗られなかつたんですか？」

ザックスが訊いた。彼はソファの背もたれに両腕を預けて、相変わらずにこやかな顔をしていた。マグリム青年の悲しいときこそ前向き説を、支持しているみたいだ。

「なんにも。わたし、同じバッグにお財布を入れていたし、アクセサリー類もいくつか入れていたのに、そちらはまっ

たく被害がなかったんですよ。まさか、あの鏡をそういうものとは間違えないと思うんですけど」

美しいマティルダ嬢が答えた。

「変な泥棒ね。美術品や鏡のマニアなのかしら？ 鏡のマニアなんています？ わたし聞いたことがないわ」

「鏡はいるでしょうね。なにしろ神秘的だ」

セフィロスは考え深い顔で云った。

「そういうあ、さつきここに別のお客さんが来たんですって？」

ザックスが相変わらずのんびりした調子で云った。彼は自分が死にそうだという報告の電話でもこんな調子で話したので、セフィロスは以前よく混乱させられたものだ。

「そうそう、ミッドガルの大学教授というひとでした。ホープニツツエル教授とかいう……僕らが奪われたようなものの権威なんだそうですね。同じ汽車に乗り合わせていながらお役に立てず申し訳ない、とずいぶん謝っていかれましたよ。自分に多少なりと関係のあるものが出てきたんで、気が咎めたんでしょうね。でも、おかげであの鏡のことがいろいろわかりました」

マグリム青年はちよつと悲しそうな顔で笑った。

「ずいぶん優しいひとだなあ」

ザックスは思案するように唇をつきだした。

「そんな優しい大学教授っている？ だって、大学教授ってさあ、みんな社会的地位のあるオタクだろう？」

ザックスは世のすべての研究者たちに殴り殺されかねないことをさらりと云った。

「正直云って、僕はあやしいと思いますよ」

青年が云った。

「なんといつても出来すぎですよ。われわれと同じ汽車に乗って、同じ駅で降りて、近くのフラットに滞在しているなんて。まあでも、こんなことをしてたんじゃないかと疑われることは確実でしょうから、もし彼が関与してるなら、よっぽど肝の据わったやつだということになるけど」

「まさか！ 考えすぎよ。あんないい方じゃないの。わたしにほんとに気を遣ってくださいって、大きなケーキを買ってきてくださったんですよ……そうだ、召し上がりませんか？」

目を輝かせて訊ねる美しいマティルダ嬢の気遣いを踏み

にじるような真似は、誰もしなかった。彼女は立ち上がって、お茶の準備をはじめた。

「そういうところも、なんとなく大げさで、僕は引つかかっているんですけどねえ。だいたい、彼女はひとがよすぎるんですよ。大事な祖母の形見の品が盗まれたっていうのに、まだひとを疑うってことを学ばないんだから!」

セフィロスはザックスは微笑んだ。

「それが彼女のよさでもあると思いますが」

セフィロスが穏やかに云った。

「まあそれは、否定しません」

青年は苦々しげに云った。

「教授がやってきたことは捜査局には伝えましたか?」

「まだです。いましがた帰ったばかりなんです、ほんとに。伝えるべきなんじゃないかね?」

セフィロスは小さくうなずいた。

「実際のところ、彼が関与しているとお考えですか?」

「わかりません。十分に怪しいことは認めますが、もし彼が犯行に関わっているなら、なぜそんな考古学的には大した価値のない鏡を欲しがったのかわからないし、反対に、

専門家である彼にしかわからないような価値があるのだとも考えられる。下手な憶測は慎むべきですが……」

マティルダ嬢がケーキとお茶が乗ったお盆を持って入ってきた。ケーキは、極上のスポンジの上に、クリームとフルーツがこれでもかとはかりに乗った、ものすごく値の張りそうなやつだった。

「おいしそうですね? こんなプレゼントをしてくださる方が、悪い方だとは思えないわ」

男たちは男どうしの話をびたりとやめ、マティルダ嬢のお給仕するケーキに舌鼓を打った。セフィロスはクラウドを見た。彼は勇ましく敵陣営につっこむ将校さながらに、ケーキに猛然と襲いかかっていた。腹が減っていたのに違いない。食事をして一時間もすると、もうなにか食べたがる年ごろだ。セフィロスは自分のケーキを半分クラウドにあげたいと思ったが、ザックスならともかく、ほかのひとがいる前でそういうことをするのははばかられた。彼はちよつとした罪悪感とともに、自分のケーキを食べた。

「僕たちは、今週いっぱいここにいたいと思っています」  
帰り際に、マグリム青年が云った。

「父のところへ行くのは、先延ばしですよ。まあ、仕方ありません。もしかするとひょっこり鏡が出てくるかもしれないし、なにかあったときにはるか彼方のミディールにいたのでは、捜査局のみなさんもやりにくいでしょうし。父が、あなたたちにくれぐれもよろしくと云っていました。

今度ぜひ遊びに来て欲しいとも。母は僕たちのところへ飛んで来ようとしたんですが、父がその必要はないと云ったんです。父はやっぱ、たいした人物ですよね」

来たときと同じようにさかんに握手をして、たっぷりのことばの応酬と礼儀正しいふるまいをひとくさりやってから、三人はその場をあとにした。

「気に食わないねえ」

ザックスはエレベーターの中で云った。

「その教授、なんか変だって。ちぐはぐな感じだなあ。なんとなく」

「たぶんな」

セフィロスはだるそうにうなずいた。

「なんでもいいけどさ」

クラウドが唇をつきだした。

「おれ、腹減ったよ。あのケーキがだめだったんだ。食べると、よけいに腹が減るんだもん」

「だな。飯にしないか、諸君。そしたら、頭がすっきりするかも。ゆーっくり飯食ったら、ちよつと捜査局のぞいてみるってのどう？ おれ、気になるのよね、そういうところがどうなってるのか。なんかさ、そこ行ってみたら、おれらの方が会社にぼろ雑巾扱いされてることがわかって、がくーってなる予感がする」

「行つてどうする」

セフィロスが顔をしかめた。

「いやがられるだけだ」

「そうかなあ？ ザックスちゃんそうは思わないわ。だって、被害者の婚約者は元神羅軍の大佐だよ？ しかもさ、ホープニツツエル教授なんか、神羅から金もらつて遺跡調査に来てるんだしね。警察とか国家つて、神羅が絡んでるひとたちに関わりたくないんだよね。いやがるのよね。あの捜査官たちにとつては、おれたち行つてあげた方が親切だと思うよ？ 少なくとも、おれたちが向こう側の立場になつて関わりましたつて事実があれば、あのひとたちの胃

がちよつとは楽でしょ。それにわれら、なにかと役に立つじゃん。前から思ってたんだ。警察と軍隊は連携するべきだよ。その方が話が早い。ボスだってわかってるくせにさ。普段さんざん迷惑かけてんだから、こういうときくらい協力してさあ、ご恩に報いようじゃん。しかもほら、おれたち休暇中だからこれ非公式。ね？　どうよ？」

ザックスの提案に、セフィロスは考えこむ顔をした。それは、ちよつと、否かなり、お節介なのではないかと思っていたからだ。

「じゃ、閣下に決めてもらおう。閣下、どう思う？　このままピエントさんとこに戻って、平穏な休暇を満喫しますか？　それともこれを機に、国家警察つてもんがどういふふうに組織され、動いているか見学し、今後のいい教訓にすることを望みますか？」

「はい、議長、まだまだ未熟な身としては、当然後者であります」

クラウド・ストライフは挙手して答えた。

「決まり。本案は賛成多数で可決されました。つてわけで、こないだ行つたあのパブにもつかい行かね？　近しい」

「ライラちゃんのいるところだろ？」

クラウドはにやにやして云った。

「ピンポン。あその飯うまかつたろが」

「はいはい、飯ね。うまかつたうまかつた」

「あ、閣下、君、なにかいやな云いかただなあ。いやな感じだなあそれ。ボクなんか引つかかつちゃうなあ」

ふたりはふざけながら歩きだした。セフィロスはため息をついて、それから首を振った。雪がはらはらと、彼の長いまつげの上に落ちた。結局、こうなってしまった。これで平和な休暇はおしまい。冒険精神あふれるクラウドが、警察捜査なんぞに首を突っこんだ暁には、いったいなにをしでかしてくれるやら、いまから頭痛がしそうになる……元はといえば、お見舞いを考え出した自分が悪いのだが。

ザックス・フェア社、設立される

たっぷりの食事を楽しんだあと……ほんとうに量もたっぷりだったが、時間もたっぷりだった。二時間はかけて食べたのだ。例の麗しのライラ嬢はこのあいだと同じようにご一行のテーブルを担当してくれ、ザックスはチップをたくさんあげた。でもクラウドは、ふたりのあいだに自分の知らないなにかがあつたことをちゃんと嗅ぎつけていた。

視線や雰囲気からするに、ふたりの親密度は、前回から飛躍的に向上していたからだ。クラウドは、そういうのを見極めるのがすごく得意なのだ。彼は母親のようにザックスの動向に目を光らせて、なにかあればエアリス嬢に報告しようとして待ちかまえている。あるいはお目付役かなにかみたいに。ザックスがもしそれを知っていたら、自分の周囲に張り巡らされた包囲網に恐れおののいて、たちまち世界中の女性と口を利くことをやめてしまうだろう……。

「なんぼなんでも、そろそろ捜査官に話がいつてるよな。あのふたりから」

ザックスは捜査本部方面へ行く乗台チョコボ車を待ちな

がら、腹をさすりさすり、見ている方までうれしくなってくるような満ち足りた顔で云った。見慣れたとんがり屋根がかかった狭い木造の待合小屋には、誰も並んでいなかった。小さな石炭ストーブがひとつ置かれていて、そいつは誰にもほめてもらえないだろうに、ちろちろと火を焚いて律儀に仕事をしていた。クラウドは自分の故郷の、小さな小さな駅の（鉄道チョコボ車の駅だ）待合室を思い出した。そこで仕事をしていたふとつちよの薪ストーブもすごい年寄りで、それでもちゃんと仕事をしてきていた。ときどき駅員がやってきて、灰になった薪をかき出し、きれいな薪を入れる。待合室はその熱気でむっとしていて、窓ガラスがくもっており、クラウドは冬場そこにいるといつも暑苦しくて、息がつまる思いがした……。

「たぶんな」

セフィロスはため息をついて云った。

「行っていないかったら、ちょっとした事件だ」

「おれはその展開の方が好きよ。だって、面白いじゃん？あのひとのいい大佐の息子疑うのはちょっとやだけどさ」

「いつも思うんだが、おまえはあらゆることを楽しみすぎ

るきらいがあるな。悪いことじゃないが」

「まあね。自分でもいけない子って思うけど、無理。どうしようもない。変更不可。なんつったって、これがおれだもんね」

「まあ、それはその通りだ」

小屋の外では相変わらず雪が降っていた。道行くひとたちはもこもこのコートやマフラーや帽子で、しつかり身を守っている。白い景色の中を縫って、二頭立てのチョコボ車がやってきた。よたよたと待合小屋の前で止まり、ドアを開け放つ。誰も降りてくるひとはいなかった。三人は乗りこんだ。チョコボ車はがらがらだった。

クラウドは結露した窓に鼻先を押しつけて、小さくため息をついた。彼はさっきの小屋から、まだ感傷的な気持ちを引きずっていた。田舎での、いろいろなことが頭をよぎった。母さんと、雪道をバスに乗って買い物に出かけたときのこと、バス停までの道のりを転がりながら歩いたこと、クラウドのまだ小さかった手を自分の手であつたためてくれた母さんの、あつたかい手のこと。

セフィロスは、そういうクラウドの変化に気がついてい

た。彼がなにを思ひだし、どんな気持ちにおそわれているのか、痛いくらいわかった。なんといっても、クラウドはこのあいだまでたつたの十五歳だったのだ。彼は、クラウドを抱きしめてやりたかった。でも、公共の場でそれをやることは叶わなかった。だから、チョコボ車を降りしなに、そつと彼の尻をぼんぼんたたいてやるだけで満足した。クラウドは彼を見上げてきた。無邪気な、これといって表情という表情のない顔で。セフィロスはおつ立つたブロンドを撫でて、目の前の雪道の中へその背中を優しく押し出してやった。

雪道というのは、正確には、アイシクル特別捜査局本部に通じる幅広の、真ん中らへんで蛇みたにくねつと曲がつた道のことだ。総距離無慮六十メートルで、チョコボ車が走る大通りから枝分かれするところに、大きな標識が立っている……黒字に、白い立派な書体ででかでかと「アイシクル国立特別捜査局」と書かれている。でもなにが特別なのかについての説明は書かれていないので、ここがどういうふうに特別かを知りたければ、この道を通って捜査局の中へ足を踏み入れなければならない。道の両側には広葉

樹と街灯が等間隔で並んでいて、木のそこそこに監視カメラの赤いランプがそっと光っている。木はいまは葉を落としているので、監視カメラはむき出しでちよつと滑稽だった。一行はそれらに確実に撮影されながら、レンガ造りの、例に漏れずとんがり屋根の捜査局本部へ歩いていった。

受付には、非常に残念なことにきれいな女性はいなくて、かなり威圧的な、大柄の黒人男性が青い制服を着て立っていた。ザックスが独特の深みのある青い目でその男の顔をのぞきこむと……これは実際、身分証を振り回すとか、総理大臣からの推薦状を見せるとかいうことよりも強力で、速効性があった……男は態度を軟化させ、先日知り合いになったふたりの捜査官の部屋を教えてくれた。クラウドは建物を外から撮影してもいいか念のためその男のひとに訊いた。男のひとは意外に気安い笑みを浮かべて、中はいけないが外からならいくらでも記念撮影してくれて構わないと云った。三人は礼を云って、ロビー中央にあるエレベーターのところへ歩いていった。そこにも警備員がふたり立っていて、出入りする人間たちをするどい目で見つめている。ロビーは開放的だったけれど、そういうところはもの

ものしくて、ここが一般市民にとって秘密たつぷりの場所であることがわかる。

「もしここでおれがガス・ピストルをポケットから出したら」

クラウドは考えた。

「あの警備員が飛んできて、おれのこと取り押さえるんだろうな。で、おれきつと事情聴取つてのをされちゃうんだ。それで、警察のデータベースに要注意人物とか書かれて登録されるんだ。いいなあ！」

クラウドはそう考えただけでもう身体が興奮してきて、コートのポケットにあるガス・ピストルを握りしめた。

捜査局本部のエレベーターは二重ドアになっていて、ごく普通のドアの内側に鉄格子のドアがあつて、それが順序よく開いたり閉じたりする。鉄格子だけの状態だと、ほとんど牢獄みたいだ。クラウドは囚人になったらこんな感じなのかな、と考へて、またまた興奮してきた。クラウドはちよつと危険な子なので、反社会的行動や、その結果としての囚人生活なんかになつとした憧れがある。つまり、ワルが好きなのだ。セフィロスはこの点、とてもクラウド



の理想に適っている。英雄というのは戦場下非常下においてのみ社会的合理的なのであって、平常下においてはただの犯罪者。野蛮な力を駆使する文明の夾雑物にすぎない。文明において悪とされるのは、結局のところ、暴力だ。肉体的な力。セフィロスはそれを持っている。おまけにセフィロスは未成年者と性的関係まで持つており、こちらの点でもどうあっても罰せられる存在だ。もしもセフィロスが逮捕されたら、クラウドも一緒に刑務所に入つて、一緒に裁きを受けるつもりだ。「セックスは合意の上でした。初回からです。当然です。どっちかかっていったら、おれが誘ったんです。もしこのひとが罪に問われるんだったら、おれも問われるべきだと思います……」

エレベーターが四階に着いた。扉が二重の手間ひまをかけて開き、三人を廊下へ吐き出した。廊下は明るくて、だいたいの部屋はただバーションで区画されているだけで、開放的に開け放たれていた。中にはそうではなくて、箱みだいに囲まれた部屋もあったが、これはおそらく噂の事情聴取なんかをするようなところに違いない。ファイルを抱えて足早に歩いて行くひとや、コーヒーマップを片手

にぼんやり考えこんでいるひと、立ち止まって話しこんでいるひとたちなど、いろんなひとがあちこちにいた。そういうのを眺めながら廊下を歩いて行くと、右側の部屋で顔見知りのコランダー捜査官が、知らない中年男と話しこんでいるのが見えた。たぶんライオネル捜査官みたいに、彼の部下のひとりだろう。陽気な気安いザックスがバーションのドアをこんこんやると、ふたりはなにごとかと振り返つた。そうして、コランダー捜査官が顔をほころばせた。

「やあやあ！ こりやどうも！ まさかあの保養地からわざわざここへ来るために出てらしたんじゃないでしょうな？ ああ、あのおふたりのお見舞いね！ そりやあどうしたつて必要でしょうよ。で、ついでにここへ？ 例の教授の話は聞きましたか？ われわれはつきさつき電話をもらつて、それについて相談してたとこです……」

三人は部屋を出て、となりにある応接室のようなところへ移された。髪の毛がきれいな灰色になりかけている初老の女性ににこにこしながらお茶を運んできて、「長話してふざけすぎるのはだめよ、コランダーさん」と云いながら出

ていった。コランダーさんは、「わかったよ、マーサおばさん！」と叫んで、からから笑った。

「ありやこのフロアのママでしてね」

コランダー捜査官はお茶をおいしそうにすすった。

「職場にああいうひとがいるってのはいい。潤いを与えてくれる。若い女じゃないのがいいんですよ。若いのは目にいいが、それだけだ。深みってもんがなくて、毎日楽しみたいとは思わない。さて、で、このご訪問の意図はなんですか？ 不法侵入したんでなきや、一階からエレベーターで来たわけでしょ？ 受付にあなたがたの目玉を差し出しました？ それがありや、どこへだつて入れるでしょうかから」

ザックスは「降参！」と云つて両手を挙げた。

「わかりましたよ、もう。だから当てこすりはやめてくださいよ、悲しくなっちゃう。おれたち、手伝いに来たんです」

コランダー捜査官は眉をつり上げた。ザックスは自分の考えを全部説明した。

「つてわけで、おれらがお手伝いしたほうが、そつちとしてはいいんじゃないかと思つて。それにほら、ほかのふた

りがどうかは知らないけど、おれ、もう休暇つてのが退屈で退屈で。身体が頭かどつちか動かしたくてたまなくて。できたら身体の方。万が一張りこみの必要があったらおれにやらせてもらえませんか？ 後をつけたりするのも得意ですよ。猫みたいに音もなく忍び寄つてみせるし」

コランダー捜査官は得意の大笑いをはじめた。

「なあるほど。いいでしょう。直接的な協力をしていただいた方がわれわれも助かるし。で、なんでしたかな。ああ、そうそう、ホープニツツェル教授があつたを訪問した話は聞きましたか？」

三人はうなずいた。

「あの教授、ばかなんだかすこぶる頭がいいんだか、わからなくなつてきましたな」

捜査官はあごをさすりさすり云つた。

「もし彼が今度の窃盗の首謀者だとすると、行動があまりにも変でですよ。もっとも、自分から疑いをそらすためには効果的な行動とも云えるでしょうがねえ」

このときどこかへ出かけていたらしい相棒のライオネル捜査官が帰つてきて、応接室の三人組にびつくり仰天した。

「なににいらしたんです?」

彼は目ん玉をまん丸にしていた。

「手伝い? あなたたちがですか? ひゃあ! そりゃあ

……そりゃあどうも!」

「噂の教授の行動について、この方たちと話し合ってたんだよ。例のふたり組の男についてはなにかわかったかい」

くそまじめな捜査官はちよつと顔をしかめた。

「ようやくミッドガルから回答が来ましたよ。あそこの警察、ちよつとたるんでるんじゃないですか? 遅いですよ。

電話で二回も催促して、ようやく情報をもらいました」

ライオネル捜査官はテーブルの上に数枚の紙をほとんど投げ出すようにして置いた。

「ふたりとも過去に軽い窃盗でぶちこまれてます。鼻の赤いのがクルスってやつで、馬面の方がベツポ。スラムの犯罪組織の一員だったようですね」

「どの組だろ?」

ザックスが興味津々の顔でつぶやいた。

「ミッドガルゼロトゥープレイボーイズ。なんですか? このネーミングセンス」

「ゼロトゥーは、武番街で誕生した犯罪組織のひとつ。一番古いグループのひとつで、規模もやることもでかい。その幹部にうちのOBが収まっている。よって、うちの会社とは腐れ縁ってやつ。そこが売りでね。安心、安全、合法的な非合法商売ができるってやつで。こいつはおれの出番じゃないかな?」

ザックスはうれしそうに手をこすりあわせながら、自分のボスを見た。

「おれがちよつと電話すりゃあ、ふたり組のことについてもうちよつとよくわかるんじゃない?」

セフィロスは微笑を返したただだった。

「話が見えないんですが」

ライオネル捜査官が云った。

「見えない方がよろしいかと思いますが」

セフィロスが苦笑して云った。

「神羅カンパニーと、スラムの犯罪組織とのめくるめく蜜月について講義するには、大学カリキュラムと同程度の時間と忍耐を要します」

「わたしやあそんなのはごめんです」

コランダー捜査官が云った。

「専門外のことは専門家にお任せしますよ。われわれの管轄地区でもないし、こちとらわかればそれでいいんです」

「じゃ、おれそのふたり組の素性について引き受けましたよ。責任もって対処します。迅速かつ誠実な対応をお約束。あなたの心のザックス・フェア社でございます。ご用命の際は下記電話番号までよろしくどうぞ。んじゃ、さっそくおれちよつと行つてきます。ね、役に立つて云ったでしょ！　なんかあつたら連絡するわ、ボス。閣下の携帯にするから。閣下はおれがいなくてガス・ピストル使うんじゃないぞ。おれが使つてるとこ見たいからだけど」

ザックス・フェア社代表のザックス・フェア氏は、しゃべりながら出ていった。ライオネル捜査官は茫然と見送り、その相棒はにやにやし、セフィロスは苦笑し、クラウドは小声で「ちえ、いいなあ」と云った。友だちばかり捜査に協力できるのは、ちよつといただけなかつた。コランダー捜査官はそれを聞いて、優しい顔で笑つた。この年ごろの、ちよつとばかり血気盛んな男の子のことならよく知つていた。

出ていったはずのザックスがひよこつと戻ってきた。

「あ、そうそう、結果は明日までにお知らせしますからね！　なにかほかにも聞きたいことがあつたら、おれの携帯によろしくどうぞ」

ザックスは敬礼して、ふたたび出ていった。

ザックス・フェア社、股賑を極める

突如設立されたおそらくは調査会社ザックス・フェア社代表ザックス・フェア氏は、捜査局の建物を出ると、まずちよつと伸びをした。それから大通りへ抜け、道路を渡り、ちよつとやってきたバスに乗りこんでトルギポリのステーション前で降りた。バスの中で、彼はメールを一本打ったのだが、なにか調査行動らしい行動といえればそれきりで、駅前の花屋をのぞきこんで、少し時間をかけて花を見て回り、しまいにはレジの女性に声をかけて、大きな花束をひとつこしらえてもらった。ザックス・フェア氏が会計を済ませて店を出ると、携帯電話がぶるぶる云いだした。

「はいはい、こちらザックス・フェアちゃん……おおい、おお、そいつはどうも！ 悪いね、まじで。うん、例の北の大地からさ。ボス？ 元氣だよ。伸び伸びしてんじやん？ いやんなるくらい大自然の中に放りこまれてっからさあ、大喜びよ。ボスはいいけど、おれはもうやあよ。大都会に帰るよ。うん、じゃよろしく。マチエツトじいさんが？ じやあびザでも買うわ。りょーかい、どうもどうも」

ザックス・フェア氏は花束を抱えて歩き出した。駅前の商店街でピザ屋を見つけ、テイクアウトでピザを三枚注文した。花束とピザの箱を抱えて、ザックス・フェア氏はチヨコボ車を拾った。

「神羅カンパニーのアイシクル基地まで」

彼はそう云つて、運転手に目玉を見せ、にこにこしながら座席にもたれかかった。

すっかり日が暮れたころ、戦闘機が一機、密かにミッドガルの軍事基地内にすべりこんできた。機体が完全に停止すると、わらわらと数名の男たちが駆け寄った。相変わらず花束とピザの箱を抱えたザックスが降りてきて、にこにこしながらみんなに挨拶した。

「このクソガキが！ おれの日曜日をなんだと思つてやがんだ！ ちくしょうめ！ おりゃあ便利屋じゃねえし年中無休で会社にご奉仕するような会社員でもねえんだ！ エンジンニアだよ、誇り高き技師！ ポロ雑巾みてえにこき使えろと思つたら大間違いだ、わかつたかこのクソガキ！」

立派な長い口ひげを生やした、小柄なご老人がザックス

の横でわめきたてはじめた。頭にはてつぺんにぼつちのついた緑色のベレー帽をかぶり、油じみたつなぎの作業服を着ている。ザックスは彼にうやうやしく礼をすると、ピザの箱を差し出した。

「悪かったよ、じいさん。ほんとだよ。心から。わたくし、心からお詫び申し上げます」

「なにが心からだよ、爪の垢ほども思っただけでねえくせに。でもまあ、このピザはよかった。パイナップルがのつてる。これでちったあビタミンとか、食物繊維がとれんだろ。ほら、さつさとそこどきな」

ザックスはにやにや笑って、戦闘機の中に入っていく。じいさんを見やった。

「あの金髪坊主は元氣かあ？」

機体の中からくぐもった声が聞こえた。

「閣下のこと？ 元氣だよ。うかうかしてらんねえよ、じいさん。あいつ、今度はチョコボ車の馭者になんないかって誘われてた」

じいさんは鼻で笑った。

「あの坊主がそんなちんたらした商売やってられるもんか。

あいつは技術者向きだよ。骨の髄までエンジニアだ。おめえおれに恩を感じてんだったら、もちつとしつかり勧誘してくれにやあ」

「そんなのはじいさんがやることだよ。後継者育成は大事な仕事だろ？」

ご老人はまた鼻で笑った。

彼は整備士のマチェットさんといって、あらゆる空の乗り物の整備をすることができると便利なひとだ。口は悪いが腕はウルトラ級で、昔気質の粹な人物なので、みんなにじいさんと呼ばれて親しまれていた。正確な歳は誰も知らないし、知りたいとも思わない。じいさんは口も手も達者で、放つておいてもあと三十年くらいはもちそうだからだ。じいさんは本人の弁によれば身寄りがなく、給料といえればみんな酒と煙草に消えてしまうのでほとんど一文無しだということだった。もつとも、じいさんは生活費がほとんどかからなかった。一日中基地の中にいて、昼食は誰かが食べさせてくれるし、住居はというと兵舎の地下にあるいまは使われていない宿直室に住んでいるので、夕食は食堂で食べさせてもらえた。年中同じ服を着て、あれやこれやの整

備に追われているマチエットじいさんは、約一年前にクラウドと知り合いになったのだが、彼の器用な指先を「ギリスト様もおったまげる」ものだと称し、それ以来ぜひ自分のあとを継ぐようにしつこくせまっていた。

ザックスはしばらくじいさんと雑談してから、花束を抱えてその場をあとにした。本社ビルに立ち寄り、同僚たちに顔見せをして、散々文句を云われながら退室した。

「さてと。じゃあ、おれの麗しの君に会いに行くかな」

ザックスは軽い調子で云つて、口笛を吹きながらビルを出て、電車に乗った。

「だから、ここへは来ないでつて云つてるでしょう？ あんな、頭おかしいんじゃないの？」

ザックスは、ロココ調の調度品に囲まれた豪奢な部屋で、ソファに座つて女と向かい合つていた。脱色した金髪に、濃い化粧、そして官能的なボディラインを持った美しい女だった。ウータイ風の美しい着物をバスローブ代わりに羽織つた彼女は、燃えるような目でザックスを睨みつけていた。

「それは認めます」

ザックスはうなずいて、お茶、ありませんか、と云つた。美女は無視した。

「帰つてよ。帰りなさいよ。じゃないと、撃ち殺すわよ」

「撃ち殺すはひどいなあ。お願いだから、おれの話も聞いてくださいよ。実は、ちょっと知りたいことがあつて……」

「あなたの知りたいことなんか知つたこつちやないわ」

女はぷりぷりして、シガーケースから細長い煙草を取り出し、口にくわえた。ザックスはすかさずシガーケースの横に置いてあつたライターを手に取り、煙草に近づけた。

「余計なことしないでよ」

女の手がザックスの手を振り払つた。ライターは床に転げ落ちた。ザックスは氣にした様子もなく、かがみこんでそれを拾つた。二度目にライターを差し向けたときには、女は拒まなかった。女の煙草の煙があたりに漂つた。

無言の時間が過ぎた。女は明らかにじりじりして、いらついていた。落ちつかぬように身体をもぞもぞ動かし、やたらと速いペースで煙草を吸つた。ザックスは悠然と構えていた。

「だからね」

彼はなおしばらく時間をやり過こしてから、口を開いた。「おれは、個人的なお願いをしにここへ来てるわけですよ。いつつもそう。別に、断ったっていいんです。そしたら、ほかを当てるだけだから」

「……ほかの当てなんてないくせに」

女は煙草を灰皿へ押しつけた。ザックスは肩をすくめた。「まさか。おれこれで結構顔が広いんすよ。だから、別にあなたのお手を煩わせなくてもいいわけ。でも、おれはここへ来てる。いつつもね」

ザックスは美女を見つめ、微笑した。ほんのわずかに。

女は、あわてて顔を逸らした。

彼女は、ペネロペという名前で通っている。肩書きは犯罪組織のボスの女だ。この地位にのぼりつめるための門戸は、非常に狭い。対応する職種は限られている。だからセフィロスは彼女の名前を聞いたとき、大笑いした……それは、貞節を象徴する名前だと云つて。もちろん、そんなことは彼女には関係がない。彼女の本名がペネロペかどうかは、誰にとつてもどうでもいいことなのだ。美しい金髪美

女。それが、彼女の誇りであり全てだ。

ザックスは、そうなる前の彼女のことを、少し知っている。たれ目で、鼻が不恰好に尖つていて、出っ歯で暗い顔つきの、ありきたりな茶色の髪をした女。過去を完全に隠蔽することは難しい。どこから、情報は漏れてしまうものだ。彼女の場合は、写真で。ザックスは、これを好きにすることが出来る。そこに一種の、否応なしの力関係が成立する。けれども、彼は……これは非常に大事なことだが……本人の目の前で、その写真の少女を美しいと云つた。これで、ふたりの関係はすっかり複雑なものになつてしまった。主に、ペネロペ嬢にとつて。屈辱的な屈辱から、もう一段階先の、愛憎半ばするものへと変わってしまったのだ。そして生来の情熱的な気質のために、彼女はその感情を、容易に手放すことができない。

ペネロペ嬢は、ザックスに向けて手を差し出した。ザックスはそこへ、三枚の写真を押しつけた。

「このふたりがおたくらの一味ね。こいつらが、いまどんな仕事を受けてるのか知りたい。それから、それにこの男が関わってるかどうかも」



ペネロペ嬢は、写真を一瞥した。ザックスはソファから立ち上がった。女の目が、心なしかすがるような調子で、彼を追いかけた。

「電話ください」

ザックスは云つて、ドアに手をかけて開いた。

「……あたし」

ザックスがもう半分部屋の外へ出たところで、ふいにペネロペ嬢がつぶやいた。ザックスは振り返った。彼女は、なにか思いつめたような目で、こちらを見つめていた。

「いつか、ほんとにあんたのこと殺すわ」

ザックスは微笑を浮かべた……ほんとうに、なんとも云いようのない笑みだった。

「覚悟してます」

ザックスは云い、ドアを閉めた。

いまやミッドガルもクリスマス一色だ。街頭のあちこちに電球をいくつもぶら下げたクリスマスツリーが出現し、流れてくる音楽もこの時期特有の、弾むようなリズムのもので、どここの店も自分の商品をクリスマスプレゼントにと、

こぞつて宣伝している。この時期には心なしか、街なかに恋人たちの姿が増えるように感じられる……手をつなぎ合ったり、肩を組んだり、いろいろにふざけあう恋人たち。ザックスは白い息を吐きながら、相変わらず花束を左手に持つて、あたりの景色を眺めながら足早に歩いた……八番街の繁華街の片隅に、彼は目的のひとを見つけた。

「ハロー、彼女、ぼくにお花売ってくれない？」

ザックスが背後から陽気に云うと、そのひとは驚いたように振り向いた。茶色の髪に結んでいるリボンが揺れ、長い巻き毛もいっしょになつて揺れた。独特の深みのある緑の目が見開かれる。そうして桜色の、かわいらしい唇が小さくこう云つた。

「ザックス！」

それから彼女はすぐになにか思いついたように笑つて、こう云いなおした。

「お花ですね、ありがとうございます。一本、一ギル」

彼女は腕にぶら下げていた籠から、白い花を一本取り出した。

「おありがとうございます、おありがとうございます」

ザックスはわざとらしく受け取った。そうしてそれを、背後に隠し持っていた花束の中にこっそりつけくわえた。

「てなわけで、あら不思議、一本のお花が、こーんな花束になっちゃった」

「まあ、あなた、手品師？」

かわいらしいエアリス嬢は、乗るとなったらとことん乗る性格をしていた。

「さようでございます。わたくし、稀代の天才奇術師、その名もザックス・フェアと申します。以後お見知りおきを」

ザックスはふざけて深々と頭を下げた。

「お近づきのおしるしに、花束は差し上げます。マドモアゼル」

「わあ、うれしい、ありがとう……このあたりのお花じゃ、なさそうね。例の寒い国のお花？　でも、どうしてあなた、ここにいるの？」

「それがさあ」

ザックスはもういつものザックスに戻って、鼻の下をこすった。

「ヤボ用ができちゃって。やあね、サラリーマンって。で

もよかったよ。おれ田舎に送られて退屈でさ」

「だけどあなたのボスは、退屈じゃないんじゃない？」

エアリス嬢はくすくす笑った。ふたりは歩き出した。ザックス・フェア氏は紳士だったため、エアリス嬢が腕に下げていた籠を持つ係を引き受けた。

「まあね。ボスは、喜んでる。たぶん閣下も。それはそうとさ、おれたち、すげえ事件に巻きこまれたんだ。ちよつと変な事件。今日、時間ある？　エアリスんちの母ちゃん、遅くなるのうるさい？」

「ゼーんぜん」

エアリス嬢は首をふった。

「そういうの、割と自由なの」

「いいね、話のわかる母ちゃん、おれ好きだなあ。じゃあさあ、おれの腹ペコどうにかすんのにつきあつてよ。食いながら話すから。あと、ちゃんと家まで送るからさ」

「お母さんがね、その点、ザックスはえらいって」

エアリス嬢はなにかをこらえるような笑みを浮かべた。

「わたしが、おとなしく送られてくるだけで、たいしたもんだ、っていうの。でもこれ、ほんとよ」

ザックスは眉をつり上げ、それからエアリス嬢に向かって、自分の曲げた肘をぴよこんとつきだした。エアリス嬢は、それに腕をかけた。クリスマスの街並みに、いまが盛りの恋人どうしがまたひと組増えたのだ。

セフィロスが都会でも場合によつてはまともに暮らせることに気がつく

生クリームのたっぷり入ったホットココアと大きなパンケーキが目の前にあつて、クラウドはそれに必死になつてかぶりついているのに、むくれた顔だけは崩さない。セフィロスは向かいの席で苦笑していた。

ザックス・フェア社の調査がすむまで目下のところ暇になつたので、ふたりはこれからどうするかについて話し合ふため、コランダー捜査官に教えてもらった、捜査局の近所にある雰囲気の良いカフェに來た。焦げ茶色の木板がはめこまれた床に、ゆつたりと並べられたごつごつした木のテーブル、たくさんの観葉植物、マスターの背後に並ぶおびただしいカップの数々。カウンターの横にある本棚には、珈琲や紅茶に関する本と、なぜか歴史書が並んでいる。小さな音量でピアノ曲が流れていて、数人の客が気だるい午後を満喫していた。話し声はほとんど響かなくて、静かだった。通りに面した窓の外では、相変わらず雪が降つて、道行くひとたちは寒そうに身体を縮こませて歩いている。

店内の暖かさとは対照的だった。

「機嫌を直せ」

セフィロスは優しく云つた。クラウドは鼻を鳴らした。すごく生意気な感じで。でもそれは八割くらいは甘えているだけで、ほんとうのクラウドの気分を表してはいないことを、セフィロスはとくにわかつていた。

「ケーキも食べるか？」

クラウドはこくとやつて、メニュー表を指さした。

「このホイップクリームがわんさか乗つてるやつ」

セフィロスは店員を呼んで、それを注文した。クラウドはまた鼻を鳴らした。

「何度も云うが、ザックスは特別なんだ。あいつなら、どこへ行つてもその道の一流になれただろう。もしかすると三つ星レストランなんぞ経営していたかもしれない」

「そんなことどうだっていいよ」

クラウドはパンケーキの最後のひと切れを口につつこんで、もぐもぐやつた。

「あいつがおれくらい歳のときにはだよ、もうソルジャーとしてのキャリアをスタートさせてたんだって考えると、

なんか複雑な気持ちになるってだけ……なあ、あいつがさ、十六のときってどんなだったの?」

セフィロスは目を細めて、昔のことを懐かしむときの顔になった。

「いと変わらない。よくしゃべって、よく笑って、よく怒られてもいた。だがおまえの質問は、こういう答えを期待してのものじゃないな。ザックスだって、最初から頭が切れて使える人間だったわけじゃない。技能や人脈というようなものは、ソルジャーになつたからといって身につくわけではない。おまえが見ているいまのザックスは、おまえの知らない血も涙も枯れ果てるような下積みの方に、ようやくつかんだものだ。確かに、もともと能力値が高かったことは否定しないが……納得したか? 人間はほかの動物に比べてだいたいぶ各自の個性の強い生きものだが、やることはといえば驚くほど似ているものだ。誰も、ひと足飛びになんかができるようになったり、目が覚めたら幸福になったりはしない。そこへ至るまでの重苦しい道のりというものが必要である。そんなところはひと目につかないから、ないものと思われてしまいがちだが」

「それでやつかんんだり、うらやんだりするんだろ? わかつてるよ、知ってる。でも、知ってるってことと、納得することってぜんぜん違うんだ。おれにいつ、そういう経験が来るんだろうって歯がゆくなるんだよ」

「そうだな。おまえの歳でそれだけわかれば大したものだ。一生わからずに終わるのも大勢いる。ある種の傾向を持ち合わせた人間は、若いうちは、経験を渴望する。いわば時間を渴望しているわけだが、これは悪いことじゃない。辛抱強くなることだ。時間の問題は、時間が解決する」

ホイップクリームがたつぷり塗りたくられたケーキがやってきた。それで、この話はおしまいになった。クラウドの不機嫌、あるいはその演技は、セフィロスがしつかりかまってるやつたので、落ちついた。大概のことは、そうすればちゃんと落ちつく。でも時期を逃したり、対応が不十分だったりすると、びっくりするくらい尾を引くこともあるのだ。

「ケーキ食べる?」

クラウドが訊いた。セフィロスは首を振った。

「すごく甘いよ」

クラウドは満足げに云った。

「砂糖がうんざりするくらい入って、身体に毒って感じがする」

「なぜ毒だとわかっていて食べるんだ」

「破壊願望だよ」

セフィロスは「ああー」と云った。

ふたりは楽しい話をして、クラウドなんかあんまり楽しいので、周りのひんしゅくを買うくらい笑って、セフィロスに例の一本指と蛇が威嚇するときみたいな音でたしなめられた。でも、これは仕方がないことだった。ミッドガルでは、こうはいかない。もちろん、今日みたいに変装していればセフィロスがセフィロスであることはいくらかばれにくいかもしれないが、セフィロスはあの都会ではあまり出歩きたがらないし、どこで知っているひとに会うかわからず、どこで軍の連中が警備にあたっているかわからなかった。そういうことを思うと、クラウドは息がつまるような気がしていたのだ。でも、ここは違う。ここでは、文明的な生活の中においても、セフィロスはうんと自由なのだ！ だからクラウドが得意の百面相を披露したり、セフ

イロスが自身の「バブリックイメーじ」なるものを一瞬にして崩壊させるような冗談を云つても、誰も気にしない上に話題にもならないわけだった。クラウドは、そういうことにとつくりと満足していた。

ふたりは店を出て、本日の宿を探すことにした。行き当たりばつたりに。彼らは、グランドホテルのような金のかかった建物には目もくれなかった。もっとごくごく普通の、一般のひとが一般的に利用するようなホテルを探した……：そうしない理由がどこにあるだろう？ もしもあらゆる選択が金の有無で決まってしまうとしたら、世の中はあまりにも単純で、味気なさすぎる。

通りをぶらぶら歩いて、ホテルを探す。クラウドはおおよそ十歩歩くごとに耳当てを直さなくてはならなかったし、それに街の風景も写真に収めたかったので、とにかく忙しかった。セフィロスは耳当てをとつたらどうだと云ったが、クラウドはきかなかつた。目に留まったホテルに飛びこみしてみる。クラウドはホテルのフロント係を納得させるようなすこぶるつきのしつけのいい子になってみせると云って、セフィロスを従えてフロントに立っていた男とかけ

あいをはじめた。彼はほんとうにすこぶるつきのいい子になっていて、口調は丁寧、態度は懇懇、中流階級の、きちんとしつけをされた男の子のように振る舞った。「ふたりです、おとなと子ども……禁煙がいいです、片方は未成年なので……」セフィロスは笑いをこらえるのに必死だった。

無事部屋を確保すると、ふたりは街をぶらつきに出た。

クラウドがぴょんぴょん飛ぶようにして歩いて、耳当てを落としたりになったりひとにぶつかりそうになるので、セフィロスははらはらし、過度のはらはらは胃と心臓に悪いという結論に達して、クラウドの腕をつかまえて自分の腕で抑えつけておくことにした。クラウドはまだぴょんぴょん跳ねて耳当てを一回ごとに落つことしそうになっていたが、ひとにぶつかることはなくなった。クラウドは怒るに決まっているが、彼が子どもであるゆえに、ふたりが腕を組んで歩いていたとしても誰も驚かない。クラウドは童顔の気があるので、聞きわけのない子どもが大人に連れていかれているように見える……もつとも、これは事実だし、それ以外の見方をされても別にかまわなかった。ここはミッドガルではないのだから。クラウドもしまいにはウサギ

みたいに跳ね回るのをやめて、おとなしくなった。そして相変わらず十歩ごとに耳当てをなおしていたが、ふいにそれをはずして、首にかけた。片手ではとても直しきれなかったからだ……それはつまり、セフィロスに捕獲された片腕の方を、耳当てよりも優先したということだった！

ふたりはぶらぶら歩き回って、あちこちの店のショーウィンドウを冷やかし半分でのぞきこんだ。クリスマススのプレゼントはお決まりですか？ というポスターはふたりに、まだ決まっていないいくつかのクリスマスプレゼントのことを思い起こさせた。クラウドはこのあいだから、セフィロスのプレゼントについてはもう作成にかかっていた……鉄道模型を作るふりをして。今回の旅先で見た風景を、幸いなことにポラロイド写真におさめているから、それを参考にして旅の思い出立体風景なるものを作るつもりだった。大きさは五十センチ四方、展示用の透明なプラスチックケースの中に作られる予定で、主な材料は紙粘土と絵の具、彼はいま、森の風景を作るのに懸命になっている。昨日ようやく豆粒ほどのクマゲラとノスリを枝の上に乗せたのだが、これはまったくたいへんな作業だった。でも、彼は自

分の仕事に満足だった。

ぶらぶらしているうちに夕食どきになったので、ふたりはなおぶらぶらして店を探し、腹を満たしてホテルへ戻った。ベッドとテーブルにソファがあるきりの、いたってシンプルな部屋だ。でも部屋がどうかなんてことは、ふたりでいる場合、ぜんぜん問題ではなかった。

翌日の午前中、クラウドの携帯に、ザックスから電話がかかってきた。

「ハロー！ ふたりともおれがなくてさびしい？ まあすぐ戻るよ。いやまじでさ。まあ、何日か以内には。いまミッドガルにいる。移動手段？ おれを誰だと思ってるのよ。空を飛んだの！ ちょーつと費用がかかったけどな。マチェットじいさんに怒られたよ。あ、そうそう、じいさんが、閣下によりしくって。いつでも弟子入りを待ってるってさ。そりやそうと、事件に関係することだけど、いろいろわかった。ちょっとボスに代わってくんね？」

クラウドは云われたとおりにした。セフィロスは電話を受け取り、クラウドにも聞こえるようにスピーカーボタン

を押してから、なにからなにまできれいな字でメモするために、小さなメモ帳を取り出した。

「んーと、報告は、簡潔かつ的確に。そう習ったけど、おれにやあ無理。だいたいこれ、仕事じゃねえし。てなわけで、最初っから云うとすね、例のふたり組のすてきな泥棒は、スラム生まれの幼馴染どうして、十代の前半からメンバーになってたって話。組織のヒエラルキー？ あってる？ の中では下に属し、このわんさかいる下っ端の連中は、金を貰えればなんでもやる……とか云うと自主性があるように聞こえつけど、実際にはもう少し上の階級の連中が受けた仕事にのつとつて、馬車馬式に働かされるんだ。鞭がピシッ！ ってね。ボスはよくわかってることだけど、閣下は覚えとけ。そのうち役に立つから。」

「んで、ゼロツーはちょうど二週間くらい前に、ある依頼を受けたんだ。スラム育ちでない、つまり金持ちのお嬢さんから、あるものを盗み出してくれ、って内容で、金払いのいい客だったんで、もちろん取引は成立した。泥棒役に選ばれたのが例のふたりで、理由はその手のことに慣れていたから。ふたりとも、父親が他人の財布をかすめ取るのが



仕事ってひとで、だもんだから文字覚えるより先に、その仕事を覚えたいかという話。それで、依頼主のことだけで、身なりのいい紳士で、テスターとか名乗ったらしいけど、あいつらは別にそんなのどうだっていいし、本名じゃないことは保証するって云われた。さてさて不思議なことに、その人物がホープニッツェル教授の顔に酷似した人物であることが判明。ここで、スポットライトが主人公に当たり、BGMはジャジャジャジャーン！と流れるのであった」

セフィロスは微笑しながら、相づちを打ったりメモを取ったりした。クラウドはものすごい音がしたときみたいに耳を澄まして、ザックスの話に聞き入った。

「まあ、ここまでほだいたい首尾よくいつてる話。予定通りね。んでもさあ、続きがあんのよ。その身なりのいい紳士が帰った直後に、もうひとり別の男があらわれて、さっきの男が盗み出したものを、再度盗み出してくれたら倍の金を払うって取引を持ちかけてきた。その男つてのがウータイふうの顔立ちで、あんま身なりにかまわない、むさくらしいやつ……たぶん変なお人なんだ……だったんだってさ。もちろん、またまた取引は成立、泥棒ふたりはま

だミッドガルに帰還しておらず、予定どおりにいけば、第二の犯行と取引は、教授が調査に出発する前に行われることになっているとのこと。詳しい取引方法なんかは本人たち以外知りようがねえって。まあたぶんそうだろうから、おれも詳しくつつこまなかった。どうする？ ボス。おれそのウータイさんが誰だか調べた方がいい？」

「……いや」

ボスは云った。

「誰だかわかる気がする」

「マジで？」

「誰？」

ザックスとクラウドの声が同時に重なって響いた。セフィロスはクラウドに向かってにやりと笑いかけてみせた。

「ちょうど二週間前、十二月三日のアイシック・リポート紙朝刊を図書館かどこかで拾って、話をしてくれたおまえの友だちに見せてやってくれ。七ページ上段の、比較的大きな囲み記事だ。そこに例の教授と、それからおそらく噂のウータイさんとおぼしき人物の写真が並んでいるはずだ」

電話の向こうから、ザックスが大慌てで書き留めている

気配がした。ザックスはすぐにやってみると云って、電話を切った。クラウドは、すぐにぴんときた。

「そのひとが親玉？」

捜査局に行くためにいそいで着替えをしながら、クラウドは訊いた。

「さあ、どうだろうな。そこまではわからない。だが、その鏡とやらがいったいどんな物騒な代物なのか、実に興味深い。あとで調べてみなくては」

「あーあ」

クラウドは云った。冒険はいいけれど、調べものは嫌いだったからだ……勉強みたいで。

一時間後、ザックスから「ビ・ン・ゴ」というメールが来た。

「というわけで、教授首謀による犯行と思われるラスカ嬢の鏡盗難事件ですが、そのあとに、彼の研究助手である、ウータイ出身のジェラル・シノザキ氏がさらなる盗難を依頼していたことが判明しました。彼のひととなりについて、そしてこの事実がなにを意味するかについては、まだ詳しくはわかっておりません。以上で、同僚からの報告を終わります」

というセフィロスのひとことで、応接室は静まりかえった。捜査局の応接室には、コランダーおよびライオネル両捜査官のほかに、数名の男たちが、ドアや窓のところに立ったり、コーヒークップを持ってセフィロスを見つめたりしていた。

「……もうしよつびきましょー」

きまじめなくそまじめが沈黙を破った。

「それだけ証言があれば、少なくとも拘束しておくことくらいできますよ。第二の犯行ってやつも防げるし」

「しかしなあ」

コランダー捜査官は考え深い顔で顎をさすった。

「その犯罪組織の連中の証言が事実だとしたって……たぶん事実だろうが……のちのちどうなるかなんて、わかったもんじゃない。法廷で、ミッドガルからやってきたうなるほどの金で雇われた弁護士なんかと勝負してみろ、ひどいもんだ。おれは昔こつびどくやられたことがあるんだが……それとも、彼らとあなたがたとの関係は、血の通ったもので、容易には裏切れないたぐいのものですか？」

セフィロスは微笑し、場合によります、と云った。

「大玉が直接ねじこんできたとかで、われわれよりもう一段階上のレベルで話し合いが持たれる場合もありますし……そうなれば、われわれはその決定に従うよりほかありません。しよせん組織の中の人間ですから」

ひとのいい捜査官は、肩をすくめることで控えめに気持ちを表した。

「ほらな。でもまあ、できることはやらなくちゃならんよ。仕事だからな。やるからには、とことん、ぐうの音も出ないくらい完璧な証拠をつきつけてみせなくちゃ。必要なのはこれだ、誰の目にも……耳でもいいが……明らかな証拠。」

非の打ち所のない確たるものだよ。いまその教授やら助手やらをしょつぷくのは簡単だが、そうしたらおそらくふたり組の男たちは取り逃がすだろうし、聞けることも聞けずに終わる可能性が高い。鏡は戻ってくるか知れないが……だいたい、その鏡はいったいなぜそんなに重要なんだ？教授はなにを隠してる？ その鏡になにかものすごい秘密があるに違いない。事件つてのは、ただ犯人を捕まえるだけじゃだめなんだ。動機や、背景を理解しないと」

コランダー捜査官は立ち上がって、部屋の中をぐるぐる歩き回った。相棒のライオネル捜査官はソファの上で居心地悪そうに身じろいだ。自分には結果を出そうとせっかちになる傾向があることは、自覚があつたのだ。

「あなたがたなら、どうします？」

捜査官は立ち止まって、にやつきながらセフィロスに訊ねた。セフィロスは首を傾けて、楽しそうに笑った。

「われわれなら、泳がせます。ほぼ間違ひなく捕獲できる自信があるので……相手が透明人間だの瞬間移動ができるだのややこしくない、ごく普通の人間で、逃走手段に軍用戦闘機でも持ち出さない限りは」

「そりゃ、そんなことはめつたにないでしょう」

コランダー捜査官は笑って、相棒をちらつと見、それから相変わらず大人の話に割りこむようなことはしないが耳をダンボにしている金髪の少年を見た。

「……あなたの部下が使用した、アイシック・リポート紙の記事を書いたのは、わたしの友人でしてね」

コランダー捜査官はあごをさすりさすり考え深い顔でつぶやいた。

「この事件があつたあとすぐに、本人に確認をとつたんだが……確かフラットへ出向いて、教授に直接インタビューをしたと云つてましたな……」

コランダー捜査官は、部屋にいるほかの部下たちを眺め回した。

「確認事項を整理しよう。まず、そもそも、祖母の遺品という害のないはずの鏡はなぜそんなにつけ狙われるのか。実行犯の男たちは、いまだどこにいるのか。教授とその助手の行動を監視する必要があるな。実行犯のふたりを探すのは、フリッツとカーニングに任せる。バロツサは、図書館頭のクレストじいさんのところへ行つて、鏡に関する資料

がないかあたってみてくれ。あっちこちの大学に協力を依頼してもいい」

「それについては」

セフィロスが口を挟んだ。

「神羅カンパニー資料室が、役に立つかも知れません。うちの科学部門は、古代種に関する資料を集めていますから同僚にちよつと潜りこんでみてくれるように頼みます」

コランダー捜査官はうなずいた。

「よし、バロツサはザックス・フェア君と協力して調べてくれ。あとで彼の電話番号を教えてもらえますか？」

「ソルジャーさんといっしょに捜査だなんて、こりゃあわくわくしますね」

髭面で、浅黒い肌をしたバロツサ捜査官はにやついて、手をこすりあわせた。

「できれば誰か教授の調査のことがわかる人間を、われわれの側に引っ張りこんだ方がいいのでは？」

ライオネル捜査官が云った。彼のボスは「そりゃ確かにそうだ」と云った。

「鏡の件についてあちこちの大学に問い合わせたとき、ミ

ッドガル大学ではカドバン准教授というひとが対応してくれたんですが、そのひと、ホープニツツエル教授の研究グループのひとりなんです。ためにそのひとにあたってみてはどうでしょう？」

バロツサ捜査官が云った。コランダー捜査官はその案を採択した。

「さて、ここからはわたしの個人的な考えなんですがね」

コランダー捜査官は顎をさすりさすり云った。

「教授は二日後に、街の北西にある古代種の遺跡を調査しに出かける。この間教授たちの行動を把握・監視するには、ちよつとした工夫が必要だ。そこでだ」

捜査官はにやりと笑った。

「取材を申しこんでみるというのはどうだろうか。もしかすると、いや、たぶん、断られるに違いないだろうが、そうだとしても、仕事熱心な記者が無謀を承知で現場へ乗りこんでくのは、よくあることさ……われわれもそれで相当苦しい思いをしてるからね。そしてこれはさらに個人的な思いつきなんだが……」

捜査官はクラウドの目の前にやってきて、ウィンクした。

「君、新聞記者に興味ないかい？」  
クラウドの顔が、太陽のように輝いた。

ベテラン新聞記者、捜査に導入される

「やあそのすてきな奥さん、くそつたれのカールはどこか知ってます？ カール・コランダーですよ！ 一応捜査官。自分はそいつの客なんです。客っていうか、正確には呼び出しをくらったんだ！ この忙しいのに！ 明日の朝刊に出す記事が間に合わなかったら、もうクビだよ！ 何度こんな目に遭わされてることか！ こいつはまったく横暴ですよ！ 国家権力によるパワーハラスメントだ。一般市民への弾圧！ 今度記事を書いてやる。ああ、その部屋ですね、どうも。コーヒー？ 失敬、お気遣いはありがたいんですが、ぼくはカフェインを禁止されてるんです。中毒なんです、あなた、煙草やめてから……ええ、ええ、ハーブティーなら大歓迎です。刺激はちよつと足りませんが、その件について文句は云えませんか。飲めるだけましと思わなきゃあ。おい、カール大公、なんの用だ？ たまにはそつちから来るって気遣いを示せないもんかねえ？ くだらないことだったら今度こそくびり殺してやるから！ で、来年の同窓会に死体を持ってって、みんなの前でぶち

まける。こりやいいニュースになるよ！」

カール大公、もといコランダー捜査官は、ひとのいい笑みを浮かべて、のべつ幕なしに早口でしゃべりながら部屋にやってきた男の肩を叩いた。男はひよろ長い身体をあたかそうなセーターとストライプのズボンで包み、髪の毛は赤みがかったブロンド、眼光鋭く、高い鷹鼻と相まって、常に獲物を狙っている猛禽類みたいに見える。頭には、チエックのハンチング帽をかぶっていた。

「まあそう怒りなさんな、エヴァン皇帝」

捜査官は彼の肩を押すようにしてソファにうずめた。

「こいつがさつき云ったわたしの知り合い、小学校からの同級生エヴァン・ピルヒエ記者です。アイシック・リポーター紙の専属です。わたしら、いわばシーソーみたいなものでしてな、こっちが特ダネを提供したり、彼が取材という名の潜入捜査してくれたり。で、うまくぎつこんばつたんやって釣り合いを取ってるわけです。で、こちらさんが」とコランダー捜査官はセフィロスとクラウドを顎で指した。

「電話で話したミッドガルから休養に来てるおふたりだ」

「はじめまして」

ピルヒエさんは、につこり笑ってふたりに握手を求めた。不思議なことだが、彼が笑うと猛禽類みたいな雰囲気はたちどころにどこかへ行つてしまい、ひとのよさそうな、気さくな感じが全面に現れた。

「いやあ、セフィロスさん、あなた、今度うちのインタビューにに応じてくださいませんか？ このところちよつとばかりこう、刺激的な記事に乏しいもんでね。あなた、有名なくせにめつたにメディアに出てこないでしょう。うちでインタビューがとれたら、最高だなあ。久々にがつんと売れるでしょうよ」

クラウドは話の途中から、この記者をにらみつけていた。セフィロスはちよつと寒気がした。これから相棒になるかもしれないというのに、これはまずい展開だ！ で、彼はあわててその話を断り、頼むからもう話題にしないでくれと云った。記者はからから笑って、まあ、そんなところだろうと思つてました、こつちだつて、本気で記事を書けるとは思つてませんよ、と云った。クラウドはにらみをやめ、セフィロスの寒気は解消された。コランダー捜査官が計画

のあらましを友人に語つて聞かせた。

「つてなわけで、われわれは教授を監視する必要に迫られてるんだ。でも、遺跡調査なんかに警察が簡単に同行できないだろ。だから、カモフラージュが必要なんだ。おまえはひとつ、その大学教授に突撃してきてくれんかねえ。激突したつて構うもんか、そこらへんは任せるよ。この新米記者ストライフ君と一緒に教授に会いに行くんだ。で、よかつたら同行取材させてくれんか頼んでみてくれよ。まあ十中八九断られるだろうが、別に断られたつていいんだ。大事なのは、この新米記者君の顔を教授の頭にインプットすることだね。実際の、許可されていない同行取材は彼ら神羅軍の面々と、われわれが担当する。もちろん、カメラ持ったり、ペンと紙を持ったりしてさ。少なくともその中にひとり見知った顔がいれば、万が一教授に見つかったときに、あのときの記者め！ つてなるだろ。おまえに危険が及びやしないさ。あとあと、われわれ警察の捜査の一環だったときちゃんと説明する。新聞社のイメージが損なわれることはないよ。悪くないと思うね」

「悪くはないね」



ビルヒエさんは云った。

「同行取材が許可されたら最高だろうな。こんなのだうだ？ 教授の学術調査の進み具合を、週一で掲載する……教授本人の解説やらコメントつきで。成果がなくても構うことない。そういうときは、考古学における検証手法とかなんとかについて書いてもらうんだ。古代種のことに興味持つてゐるひとはたくさんいるし、それにこちら一帯は昔から古代種とのつながりが深いから、うけるかもな。自分たちがその末裔だなんて主張してる団体もあるしな。DNAが別だとか、選ばれた人種だとかなんだとかさ。くだらない連中だけど、客にはなる。のちのち、ちょちよつと改訂して、本にして出版するんだ」

「おまえは商売つ氣がありすぎるよ、昔から。まあだから、成功するんだろうけど」

「おまえはなさすぎなんだ。公僕なんて、やってられるか。それにおれだって、別に金を稼ぎたいわけじゃないさ。だいたい、新聞が売れたからっておれの給料が跳ね上がるわけじゃないんだ。でもそこに属してる限り、利益になるように振る舞つてたほうが安全だろ。おれの好奇心が潰えぬ

限り、そしておれの指先が文章をひねり出す限りにおいて、おれはおれの天職をまっとうするつてだけだよ。民衆に知識と情報を伝え、つてやつさ。啓蒙つてことは嫌いだがね。説教臭いから。で、その上楽しませる必要もある。楽じゃないよ。楽な仕事じゃない。なんだつてそうだけだな」

ビルヒエさんはすぐ早口だった。ことばや発想があとからあとから出てきて、口の動きがぜんぜん追いつかないという感じだった。そうしてビルヒエさんは、自分の仕事に関することを話しているときは、例の猛禽類みたいな雰囲気、たちどころに戻つてしまう。クラウドはただびくりにして、ぽかんとビルヒエさんを見ていた。

「だけど、妙だな」

ビルヒエさんはふいにふつと黙りこんでから、云った。

「インタビューした限りじゃ、あの教授、そんな物騒なことに依頼するような男には見えなかったのにな。温厚で、ちよつと氣が弱くて、いつも周りの連中の顔色うかがつてるようなところがあつた。責任感が強くて……」

「人間はわからないもんですよ」

ライオネル捜査官が云った。

「いや、そうなんだが、おれも仕事柄ちよつとはひとを見る目があるつもりでいたんだ。事件を起こすようなやつはなんとなくわかるんだよ。ネタになりそうだから。ここまですごく間違うとはねえ」

「おまえの間違いか、なにかのつびきならない事情があるのかもしれないよ。鏡のことが詳しくわかったら、たぶんわかるさ」

「単純に、専門分野には見境がなくなるとか、金のためとかいうことだってありえますよ」

ライオネル捜査官は懲りずに云った。ピルヒエさんは肩をすくめた。

「まあいいさ。やってやるよ。これを機に、教授と少し仲良くなつて、連載記事をお願いできないか頼んでみよう。

もし彼が逮捕されたとなったら、それだけで特集記事が組める。本紙独占！ 名誉教授の栄光と闇……とかなんとかな。で、いつ行けばいいんだい？」

「できれば明日の朝一番」

コランダー捜査官は云った。

「今日と明日のうちに、できるかぎりのことを調べたりつ

きとめたりせにやならん。いますぐじゃあいろいろ準備があるんで、無理だが。おまえは明日の朝刊の記事でも書けよ。いつもぎりぎりなんだろ？ あのひとついい印刷所のじいさんが、毎度頭を痛めてるつて云つてたよ」

「おれはいいものを、時間をかけて推敲して書くタイプなんだよ。それを云うなら、毎朝必ず出さなきゃならないつていう現行の新聞システムに文句を云つてくれ」

ピルヒエさんは苦々しそうな顔になって、二、三の確認をしてから、立ち上がった。

「作戦の前に、相棒と仲良くならなきゃな。君、いま時間あるかい？ 三十分くらいでいいさ。一応、こつつものの伝授しておかなきゃ。ブンヤに見える方法だよ。まあ、メモ帳とペン持って構えてりゃ、誰でもそれなりに見えるけどな」

「ポラロイドカメラつて、使いますか？」

ピルヒエさんと一緒に近所のカフェバーについてから、クラウドは云った。セフィロスは捜査官たちと話し合うために、捜査局に置いてきていた。ピルヒエさんは昼飯を食い損ねたといつて、大きなサンドイッチを頼んでかぶりつ

いた。クラウドも小腹がすいたので、別の種類のサンドイッチを注文し、同じようにかぶりついた。

「ボラロイドは使わないね」

ピルヒエさんは口をもごもごさせながら云った。

「フィルムが残らないだろ。フィルムが残ってるほうが、あとあと便利なんだ。もう一度写真を使いたいときなんかにな」

クラウドはそうですか、と云って、首からぶら下げている、グロリア未亡人から譲り受けたボラロイドカメラを見やった。

「いいカメラだな。初期のボラロイドだろ。おれも似たやつを持ってた。ガキに壊されちゃったけどな」

ピルヒエさんがビールを飲んで云った。

「子どもがいるんですか？」

「ああ、いるよ。ふたりだ。上が女で、下が男。上のやつはもう結婚して、今度子どもが生まれる。下のは大学生だ。演劇をやってる。脚本家になりたいんだとき。坊主は、いつごろ軍隊に入ろうと思ったんだ？」

クラウドは首を傾けて、ちよつと考えた。

「十歳かそれくらいです」

「そりゃ早いな」

ピルヒエさんは続きを促すように顎をしゃくった。

「で、十四のときに、志願して行っただんです」

「ふうん……うちの二番目は、十四のときなんか、毎日学校行つて、帰りは友だちとふざけてたよ。映画や舞台にはよく行きたがったけど。やつぱりあれかい？ 原因はあの英雄さん？」

クラウドはうなずいた。胸の中に、ちよつと熱いものがこみ上げてきた。英雄であるところのセフィロスのことを考えると、いつもそうなる。

「いろんな人生があるんだな。まあだから、世の中面白いんだけど。学校の勉強なんて、必要なやつと、そうじゃないやつがいるしな。必要じゃないやつは、無理に行くことなんかないんだ」

ピルヒエさんは云って、ビールを飲み干した。

「あの」

クラウドは意を決したような声で云った。

「セフィロスに取材なんか、しないでもらえませんか？」

あのひと、今回のことがあって、おれがピルヒエさんに世話になったことで、取材くらい引き受けちゃう気がするんです。あなたが、ごり押しすれば」

ピルヒエさんは、目を見開き、それから……ゆっくり微笑んだ。

「心配するなよ」

ピルヒエさんはクラウドの頭をがしがし撫でた。

「おれは、そこまでひとでなしの記者じゃないよ。そういうのもいるけど」

クラウドはそれで、ほんとうにほっとした。ピルヒエさんとは、仲良くやれそうだった。

「今日の代金、おごらせてもらえませんか？」

ピルヒエさんは大笑いした。

「君、なかなかおもしろい子だな。でもだめだ。十代の子に金を払わせる大人なんて、貧血ものだ。勘定はおれが払うんだよ。だけど、そうだな、そのかわり、今度コーヒーでもおごってくれよ。おれがミッドガルに出張に行つて、手持ちが足りなそうなきなかに」

クラウドは帰り際、ピルヒエさんとしつかり握手した。

「明日はよろしくな」とピルヒエさんは云つて、慣れた様子でチョコボ車をつかまえると、「アイシック・リポート社まで頼むよ!」と叫んで、いなくなつた。クラウドは、ちよつとばかり誇らしい気持ちだつた。

陽気なザックスに神羅ビル資料室での調査の依頼が飛んだ。彼はミッドガルにまだ残れるのがうれしくて、ふたつ返事で引き受けた。セフィロスは、ザックスのことだから明日中にはなにかしらのことをつきとめるだろうと云つた。クラウドは、そのとおりでなと思つた。ザックスはできる男だ。友だちとしては、ちよつとくやしいけれど。

ふたりは明日に備えて英気を養うという名目のもと、ホテルのそばのカフェで盛りだくさんの夕食を食べることにしたが、クラウドが食事中突然、「そうだ!」と云つて椅子から飛び上がった。セフィロスはびっくりしたように彼を見た。

「大事なことを忘れてた! おれ、新聞記者のふりするときの服、買わなくちゃ」

「……別に、そのへんの服でいいのではないか?」

セフィロスは眉をしかめた。

「だめだよ。ぜったいだめだ。新聞記者には、それなりの服ってもんがあるんだよ。なりきらなきゃ、おかしいよ」

クラウドはいそいで食料を胃につめこむと、セフィロスの腕をぐいぐい引つ張つて、デパートへ連れこんだ。そうして男性用洋服売場の服という服に手をかけ、これでもかとはかりに荒らし回った。まるで攻撃的なアナグマかなにかがいて、猛烈にあたりをひつかきまわしているみたいだった。セフィロスはただあきれて……あるいは感心して……クラウドのすることを見ていた。彼はいくつかの服と帽子を選んで、満足して帰ってきた。

「買った物は終わったのか」

「あらかたね」

クラウドは鼻を鳴らした。

「財布貸してよ。おれ、持っていないんだ」

セフィロスはそうかと云った。

「これでもうばつちりだよ。あとは、明日を待つばかりつてやつだ。楽しみだなあ」

クラウドがのんきに云うので、セフィロスはちよつとた

め息をついた。

「そういえばさ、あんた明日どうするの」

ホテルに戻り、ひと足先にベッドに入つてガス・ピストルをいじつていたクラウドは、風呂から上がつてきたセフィロスに訊いた。

「おれがビルヒエさんと取材ごっこしてるあいだ」

セフィロスは首を傾けた。

「それなんだが、ちよつとひとりでその古代種の遺跡とやらに行つてみようかと思つている。道の確認だ」

クラウドは跳ね起きた。

「おれも行きたい！」

「だめだ」

セフィロスはにやつきながら云った。

「おまえはビルヒエさんと取材の仕事だ。ザックスは鏡の調査をしているし、手が空いているおれが実地調査を引き受けるのは当然だろう」

「ずるいよ」

クラウドはベッドの上でじたばたやつた。

「おれも見たい」

「だめだ」

クラウドは子どもみたいな泣き真似をはじめた。

「泣いても無駄だ。おまえは連れて行かない」

クラウドはベッドの上でばたやりだした。

「行きたい行きたい！」

「だめ」

セフィロスがベッドに腰を下ろすと、クラウドが飛びかかってきた。ふたりはベッドの上に倒れた。

「おれのこと連れてかないと、ひどいことしちゃうぞ」

クラウドはセフィロスを下敷きにして、精一杯怖い顔を作って云った。

「どんなことだ」

「あんたを襲っちゃう」

「それは怖いな」

「ほんとだよ」

クラウドはむきになったような声で云った。

「いつつもやられてるぶん、やり返してやる」

「いいから寝ろ」

セフィロスは本気にしなかった。クラウドはもう怒って、

セフィロスにキスした。結局すぐにやり返されて、ふにやふにやになってしまったけれど。

新米記者ストライフ君、華麗に登場する

クラウドの買った服は、最高にぴしっと決まっていた。少なくとも、クラウドにはそう見えた。バスルームの鏡の前で自分をためつすがめつ眺めてから、クラウドは満足したように笑って、そこから出た。

「じゃーん」

クラウドは胸を張って云った。ソファに座っていたセフィロスは、クラウドを見て微笑した。

「ニッカボッカだな。古きゆかしき形式だ」

「おれのこと、タンタンって呼んでいいよ」

「あのマンガの少年記者だな」

クラウドはうなずいた。

タンタン少年は、十歳くらいまで、クラウドの憧れだった。相棒の犬のスノーウィと一緒に、素晴らしい勇氣と機転で数々の難局を切り抜け、世界を股にかけて冒険するタンタン少年。ああいうのは、男の子のロマンなのだ。タンタン少年は新聞記者で、ニッカボッカスタイルでかつこよく決めている。だから、新聞記者になりますますクラウドが

その真似をしちゃいけないということがあるだろうか？

クラウドは、濃い灰色のニッカボッカズボンに、母さんが作ってくれた厚手の毛糸の靴下、それに、同じく母さんお手製の、空色セーターを着ていた。その下には、白のYシャツ。空色セーターの胸のところには、ケルバにもらった黄色い羽を、安全ピンでとめてある。

一方セフィロスはというと、別段普段と変わったところはなかった。いつものように服を着て、いつものように、出かける直前には黒いコートを着るつもりでいるらしい。

クラウドの母さんが編んだ黒の襟巻きも、一緒に巻いていくつもりらしく、ソファの肘置きにかけられていた。

「あんたはさ、あれ着ないの？ あ、変な戦闘服」

セフィロスは眉をしかめた。

「好きじゃない」

「うん、知ってる」

クラウドは生意気な調子で云うと、てっぺんにぼつちのついた、前面がクロワッサンみたいにくれた形のキヤスケット帽を、ちょっとはすにして頭にのせた。ずれやすい例の耳あては、今度ばかりは置いていかなくはならなか

った。それに、ニッカポッカに耳あてなんて、なんだかダサい。クラウドにだって、それくらいの分別はある。胸ポケットに手を入れて、擬装用のペンとメモ帳が入っていることを確かめ、ニッカポッカズボンの裾と靴下のバランスを整えて、帽子をもう一度ちよつといじくり、ズボンのベルトにガス・ピストルを引っかけた。これで完璧だと思ったので、セフィロスにポラロイドカメラを渡して、写真を撮つてくれと云つた。

「あとで、母さんに見せるんだ。母さん、きつとおれがかわいすぎて興奮しちゃうよ」

セフィロスはカメラをかまえて、両手でピースサインをしているクラウドをぱちりとやった。二回ほど。なぜかというと、クラウドが母さんに写真を送ってしまったら、手持ちがなくなつて、彼は見る事ができないからだ。

「いいか、絶対に失礼のないようにするんだぞ。おれにそんなうざんな口の利き方をするんじゃない。いい子にしてるんだ。教授なんて社会的地位の高い連中は、大概失礼な扱い方をされるのに慣れてないからな。いまから教授の心象を悪くすることはない。あのビルヒエさんという

記者に任せて、おまえはおとなしくメモするふりをしていろ。余計なことをしないようにな。くれぐれも、余計なこととはするな。いいな？」

セフィロスは母さんみたいに、部屋を出る直前にあれこれ云いだした。クラウドはちよつとむくれた顔をした。

「だけどさ、おれ、なんにも知らないただのガキじゃないんだよ？ それくらい心得てるよ」

「だといいんだが」

セフィロスは云い、ため息をついた。

「あんたこそ、気をつけろよ。夜までには、帰らないとだめだよ。遅れたら、夕ごはん抜きだ」

クラウドが唇を尖らせた。セフィロスは微笑して、わかつたと云つた。それから、クラウドの身体をちよつと抱きしめた。

「あんたさ、遠出するのに、なんか武器持たなくていいの？」

「必要ない。おれは不戦主義者だ」

セフィロスは云い、クラウドの額にちよん、とキスした。「なにかまずいものに出会ったら、全速力で逃げる。逃亡する生き物の姿はうるわしいぞ。生命の躍動感にあふれて



いる」

「それってきつと、あんたの場合百ノットくらいのスピードが出るんだろうな。それもまあ、作戦ではあるね」

ふたりは部屋を出た。

ふたりが捜査局の前まで行くと、白いクラシックカーが走ってきて、ぶーっとクラクションを鳴らした。

「よう、坊主。なかなかクラシカルでしゃれた格好してるな」

窓が開いて、ピルヒエさんがひいっと顔をのぞかせた。クラウドはかわいらしい車にすっかり心を奪われて、大急ぎで近づいた。

「すごいなあ！ 一九八一年製のボードですか？ほんとに動いてるとこ、はじめて見ました」

「おっ、よく知ってるな。君、さてはメカ好き少年だな？今日は雪が降らないから、こいつで移動だからな」

ピルヒエさんはまるで自分の記事がほめられたときみたいにうれしそうな顔をして、クラウドに車に乗るように勧めた。クラウドはもちろん、大急ぎで助手席に乗りこんだ。

そこへちょうどコランダー捜査官がやってきた。

「こりやみなさんおそろいで。わたしが一番遅刻ですか。じゃあ、今日はひとつよろしく頼みます。エヴァン皇帝録音機は持ったかい？」

「持った持った。特ダネをいっちょ掴んでくるよ」

ピルヒエさんはにと笑って、ギアに手をかけた。

「この子を頼みます」

セフィロスがまた母さんみたいなことを云ったので、クラウドは助手席でむくれた。おれが一人前の男だつてこと、セフィロスときたら忘れてるよ……！ クラウドはすっかり怒ったので、帽子を深くかぶりなおした。ピルヒエさんは面白がる顔をして、わかってますよ、と云いながらギアを入れた。

## 資料室での攻防

「はいはいどうも、あんがとさん。鍵はあとで返すね。君今度お茶しない？ え？ やだなあ、社交辞令じゃなくつてよ。だめ？ 彼氏がいる？ あっそう。んじゃあまあしようなない。あとで鍵返しに行くよ。ここの電話ってまだ使えるんだっけ？ ゼロ発信？ ああ、なるほどね。どうもどうも。それから、たぶんあと一時間くらいで客が来るはずなんだ。おれんとこに。そしたら、ここに通してつて受付の子に伝えてくれない？ ああ、ありがとね、よろしく」

総務部の女性社員は、ザックスのおしゃべりに苦笑しながら出ていった。ザックスは資料室でひとつ伸びをして、首を回すと、耳にイヤホンを差しこみ、音楽をかけながらノリノリで資料探しにとりかかった。ときどき、彼はちょっとしたステップを踏んだり、手を動かしたりした。仕事は、楽しみながらやるのが一番だ。資料室にはめつたにひとが来なかったし、来たところで、ザックスは別に気にしなかつたろう。またあの風変わりなソルジャーが、ひとり

でござそそなにかやっていた、と云われるのがおちだ。そしてそんなことになら、彼は慣れていた。ザックスは臆病者とか恩知らずとか云われることは大変不名誉に感じたが、変だとかいかれているとかいうことについては、いくら云われても毛の先ほど気にならない。

資料を探しはじめて二十分ほどで、彼は机の上に書類の山を築き上げた。それから、そいつをひとつひとつ手にとつて、調べはじめた。こういう果てしない、ちまちました作業が大嫌いだというひとがいる。一方で、そういうものにこそ云いしれぬやりがいを感じるというひともある。ザックスは、どちらかというと後者だ。誰にも信じてもらえないが、ザックスはほんとうは、ひとりでこつこつやる仕事のほうが好きだ。誰かと共同作業も捨てがたいけれど、ひとりで、自分のペースで、自分の回転速度でする仕事は、よそでは味わえない満足感がある。

彼がひとりきりの仕事を満喫していると、資料室のドアが開いた。ザックスが目を見ると、栗毛を短く刈りこんだ、若い男が片手を上げて近づいてきた。

「ボンジュール、ムッシュパトリス」

「ボンジュール、ムツシューザックス」

ふたりはけたけた笑いあつた。入ってきたのは、顔なじみの2ndソルジャーだった。同期生で、寮ではとなりの部屋に住んでいた。ザックスも明るかったが、彼の明るさも底なしで、ふたりはよくばかなことをして、みんなの頭を痛めたものだ。

「おまえが資料室にいるって聞いてさ」

パトリス君はザックスの向かいの椅子を引いて座り、ばかでかい紙コップと、二ダース入りドーナツの化け物級の箱を机においた。

「おいおい、ここ飲食禁止よ？」

ザックスはにやにやしながら云つた。

「残念、おれは文盲なんだ。ガキのころ、家がまずしくて学校に行けなかつたんだよ」

「ははあ。だったら、おれはこないだから突発性視力障害で、目が見えないわ」

ザックスはドーナツにかじりついた。

「強制休暇の調子はどうよ？　つか、なんで戻って来んの？」

パトリス君もドーナツにかじりついて云つた。

「それがさあ。休暇を滞りなく楽しんでただけど、ちょっとね、ちょっとした事件に巻きこまれあそばしてね」  
ザックスはかいつまんで話した。

「ふうん。なんだかよくわかんないけど、大変だな。おれも手伝うよ。どうせ午後まで暇なんだ。ときどき思わないか？　おれって、なんのために生きてんだらうって」

「思う思う」

ザックスは紙コップのコーラを飲みながらうなずいた。

「でさ、こうやってコーラ飲んで、ドーナツ食うだろ。そうすつと、ああ、今日も食い物がうまいなあ、なんて。そんで、どうでもよくなんだよ」

「だよなあ。そこが問題なんだ。つまりさ、おれって、なんにつけても、悩みが十分と続かないんだよ。ばかにされるのも無理ない。でもさあ、悩んでたつてしょうがないんだもんね」

パトリス君は云つて、三つ目のドーナツにかじりついた。

「おまえ、また誰かの悩み聞いたな？」

ザックスはにやにやした。パトリス君は、絶対に解決で

きないにもかかわらず、生来のひとのよさで、悩んでいる  
ひとを見ると、寄っていつてしまうのだった。

「そうなんだ。そいつさあ、なにで悩んでると思う？ 冷蔵庫の音がうるさくて、眠れないんだってさ！」

ザックスは笑い転げた。

「おれだって、笑いたかったよ！ だけど、そいつはマジなんだ。だから、おれ考えちゃったよ。おれって、もしかして、ちょっとばっか、無神経でおめでたすぎるのかなあ……ってさ。でも、いまおまえと話してて、ドーナツ食ったらどうでもよくなったけど。そんなもんだ、おれって」

「けっこうけっこう」

ザックスは笑った。

「みんながみんな、深刻な顔してどんよりしてさ、デカルト、ニーチェ、ナントカ！ とか云ってたら、おれは息がつまるね。そんなのはやりたいやつにやらしとけばいいんだよ。人生、大事なのは明るく楽しくやることよ。そうできないうつ、かわいそうっておれ心から思うもん」

「だよな」

パトリス君は微笑んだ。

「おれはおれだよ。それが大事なんだ。で？ おまえを手伝うにはどうすればいい？」

「いまちよつとさあ、鏡に関しての資料を探してて」

ザックスは説明した。

「古代種と、鏡。キーワードはこれね。これから、大学の教授が資料検討しに来てくれることになってるけど、その前にこっちでできるだけの資料を見ておきたいわけ。おまえ速読って習った？」

「できるようになっちゃったよ、いつの間にか。鏡に関する資料、集めればいいんだな。了解。ところで、ボス元気にしてる？」

「うん、してるよ……」

ふたりはどうでもいいことを話しながら、資料の山を漁った。

「このへんがくさいなあ」

三十分ばかりたったころ、パトリス君が云った。

「古代種とその映像技術について……だってさ。どう思う？」

ザックスは差し出された資料をめくった。

「くさいなあ」

「くさいだろ」

「こっちもくさいと思うんだ。古代種と彼らの終末予言について……なんか、いわくありげなことが書かれてる」

「どれどれ……」

ふたりは資料を交換しあつて、読みあつた。ふたりが夢中になつてるところへ、資料室のドアがノックされた。ふたりは顔を上げた。

「きつとおれのお客さんだよ。どうぞ！」

ザックスが陽気に云つた。総務部の女性社員につきそわれ、小柄なやせつぼちの、ロイド眼鏡をかけた中年男性がひとり入つてきた。

「やあやあ、どうも遅くなつてすみませんな。わたし、ご連絡いただきましたミッドガル大学准教授のカドバンと申します」

ザックスは両手を広げて歓迎の意を表し、カドバン准教授の手を親しげに握つた。

「どうも、わざわざこんなところに呼びつけてすみません。」

おれ、お電話したザックスです。ザックス・フェア。肩書きは一応ソルジャー。こいつは同僚のパトリス・ルグノー。

ちよつと手伝つてもらつてました。こっちの机にどうぞ。

ドーナツ食べます？ あ、ごめん、君さあ、コーヒーひとつ持つてきてくれない？ 飲食禁止？ 堅いこと云わない云わない。なんか云われたら、おれたち集団感染性認知症なんだつて云うよ。ソルジャーになると、それに必ず一度は感染すんの。君が責任問われることないのよ」

カドバン准教授は机につくと、遠慮なくいただきますといつて、総務部のひとがあわてて持つてきたコーヒーといつしよに、ドーナツをたちまちふたつ食べてしまった。

「それで……緊急事態とのことですが、ソルジャーの方がわたしにどんなご用です？」

カドバン氏は、ひとのよさそうな微笑を浮かべて、ふたりを交互に見やつた。

「ええつと、ホープニツツエル教授に関することなんです……実は、北にいる同僚が、教授と知り合いになつたんです。あなた、彼の研究室のメンバーなんですよね？」

「まあ、わたし、彼のゼミの卒業生ですからね。もう二十

年も前の話。そのまま研究室に居ついてしまったんですけれど。で、ずるずる大学にいて、准教授なんかやってるんですよ」

「どうして今回の遺跡調査には行かなかったんですか？」

「それはねえ、誰かが教授の代理をしなければならぬからですよ。生徒たちの面倒を見たり、レポートを添削したり、授業のことを考えたり。事務的な問い合わせも多く来ますから、そういうものにも対応しなければいけません。」

ホープニツエル教授は、そういうところも万事ぬかりなくきちんとやらないと気が済まないひとでしてね。決して、研究業だけに没頭するようなひとではないわけです。だから人望があるんですよ、あの方は。そりゃあもちろん、わたしだって遺跡の調査に同行したかったですよ。でも、教授の気質を考えると、大学の雑務をきちんと肩代わりできる人間がいなくては、安心して調査に専念できないんです。だから、いつもわたしがそういうことを引き受けているんです。不満はありません。わたしは、教授の役に立てるのがうれしんですよ」

ソルジャーふたりは顔を見合わせた。

「教授は、ボスとしていいひとなんですね」

ザックスがしみじみ云った。ちよつと、自分のボスを思い出したのだ。

「そうですね。そういうひとはめったにいません。いまでは研究室も大所帯になってしまいましたが、わたしが大学を出たころは、教授はようやく注目されはじめたいわば若手で、研究設備もそりゃあおそまつなものでした。でも、わたしたちはそれなりによくやりました。あのころはよかった。研究チームは全部で六人。うち半分はボランティア。わたしたちみんな、すこやかでしたよ」

「じゃあ、いまはすこやかじゃないんですか？」

パトリス君が訊ねた。准教授は微笑した。

「名声ですよ。結局、ひとの運命を変えてしまうもの。こういうものに、どんなものがぶら下がってくつついてくるか、おわかりでしょ？ 研究成果を盗まれないように注意はしないとならない、ちよつとミスすれば叩かれる、マスコミは追い払わなきゃならない、すり寄ってくるご婦人たちは撃退しないとならないで……教授は独身なもんでね……たいへんなもんです。少数の仲間たちだけで、好きに

研究していられたところが懐かしいですよ。ところで、教授になにかあったんでしょうか？」

ザックスは頭を掻いた。

「ええと……教授の助手に、シノザキさんってひとがいますよね？」

「彼がなにかしたんですか？」

カドバン准教授の顔に、たちまち疑惑の表情があらわれた。

「なにかするように思えますか？」

ザックスは慎重に訊ねた。

「もちろん！ なにかするとしたら彼です！ いつもこそして……わたしは、教授に彼は危険だと何度も云ったんです。でも教授は、彼は確かに人間性に問題があるが、着眼点は独創的ですからいいからと云って、取り合いませんでした。いつかなにかやると思っていました！ で、なにをやったんです？」

「その前に、シノザキさんってどういうひとなんですか？」  
ザックスはもうひとつドーナツをすすめた。カドバン准教授はありがたくいただきますと云って、もぐもぐやりだ

した。パトリス君は、こりゃドーナツが足りなくなりそうだと踏んで、買い足しに出ていった。

「素性についてですか？ それとも人間性について？」

「両方です」

カドバンさんはふうん、とうなって、椅子に座り直した。

「彼は、ウータイ系の移民です。両親が、息子にいい教育を受けさせるために、教育が進んでいたアイシクルへ移住したんですよ。シノザキ君は非常に頭のいい人間で、大学に入ったのは十五歳のときだったそうです。そこで古代種に関する研究をしていたんですが、ぜひともうちの教授の研究を手伝いたいということで、うちのチームに入ったんです。確かに、彼はすばらしく頭の切れる男ですよ。なんとも独特のひらめきがあるし、論理的にものを考えるのが得意です。教授もその点は非常に評価していますし、われわれだってそれを認めないわけではありません。」

ただ、彼はまあ、ちょっと考えものな人間なんです。彼の書いた論文を見ればわかりますが、攻撃的で、独善的で、他人の研究を必要以上にけなします。プライドが高くて、他人を寄せつけず、コミュニケーションをとることが苦手

……というより、あまり必要性を感じないんでしょう。黙々と、自分の考えるようにやりたいことをやっているタイプです。教授は、こうも云ってましたね……彼のような人間は、誰かが守ってやらないと、才能をだめにしてしまうものだと。それは、一理あるのかもしれませんが。一般社会じゃ、まあ生きていけないタイプですよ。だから、いまだにただの助手なんです。大学だってひとつの組織、社会ですから、誰にも発見できなかったことを発見したとかいうケース以外は、当然世慣れた人間がうまく渡っていくわけ……。ところが彼は、それがわかっていないんです。彼が認められないのは自分の態度のせいなのに、自分がウータイ系の移民だから、差別されているんだと思ってるんですよ。教授やみんなが、自分の出世を妨害しているんだとも思っているんです。元のプライドが高いだけに、自分のいまの立ち位置に我慢ならないでしょう」

「なるほど」

ザックスは云った。

「で、彼がなにをしたんです？」

カドバン教授は氣遣わしげな顔で云った。ザックスはち

よつと考え、カドバン准教授を見た。彼の目は、不安に泳いでいるが、その奥の方にたしかな光があつて、少年の輝きを失っていない。口元はしっかりと結ばれ、なにかひとつの意志のようなものを感じさせる。ザックスは、事情がある程度話してみることにした。

「実は、鏡なんです」

ザックスは捜査局から借りてきた鏡の写真を准教授の目の前に差し出した。

「鏡？ これは……あの問い合わせの件ですか？」

カドバン准教授は目を丸くした。ザックスはうなずいた。「先にアイシクル国立捜査局があなたに問い合わせた鏡は、ある女性が、自分の祖母から遺品としてもらったものなんです。盗まれたんです。別に、大したものじゃないと盗まれた本人も、それにあなたも、思ってた。でも、それがどうやらないしたものだったみたいなんです。この鏡を、おたくのシノザキさんが是が非でも欲しがってたみたいで……」

カドバン准教授は腕組みをして、鏡の写真を覗きこんだ。それから、すぐに「おや？」という声を出した。



「どうしました？」

ザックスも鏡の写真に身を乗り出した。

「わたしのところへ送られてきたのはファックスの、白黒写真だったものでね……いま気がついたんですが、ここの……この、鏡のふちどりのように並べられてはめこまれているのは、赤いマテリアですよね？」

「たぶんね。色からして、なんかの召喚ものだと思うんですけど、でも、どれもかけらですよね？」

「ええ、そうです、そうなんですが……しかし……」

カドバン准教授は、ふうむ、とうなりながら、ロイド眼鏡に手をかけて、写真を左右に傾けたり、ひっくり返したりしながら、舐めるように見回した。

「カドバンさん！」

ザックスは叫んだ。

「なんですか！ はやく云ってください！ おれ、じりじりしちゃう」

「ちょっとお待ちを！ いま考えてるんです！ ……ふむ……しかし、いや……やはり……」

ほんの一分ほどだったが、ザックスにしては拷問のよう

な時間が過ぎた。カドバン准教授は真剣な顔で写真から顔を上げ、ザックスを見据えた。

「ザックス・フェアさん」

「はい」

ザックス・フェア氏はおそろおそろ返事をした。

「わたしは、捜査局の皆さんに、謝らねばなりません」

「……と、申しますと」

カドバン准教授の額から、汗がにじみ出た。

「よろしいですか。この、鏡の周囲にはめこまれたマテリアのかけらですが、これは召喚用マテリアのかけらですね？」

「はい、そうです。ということは、どういうことなんですか？」

准教授はロイド眼鏡を指先で上に押し上げた。

「もしこのマテリアがほかの色なら、この鏡は、よく作られていた装飾品のひとつで、別段目新しいものでも、貴重なものでもありませんでした。古いことは古いですし、観賞用に集めているひともいますから、それなりの値がつくことは事実ですが、どちらかというと日用品で、研究者が

どうしても欲しがるようなものではありません。通常、この手の鏡には、いくつかの種類のマテリアのかけらがはめこまれています。たとえば、回復効果のあるものと、ちょっと運がよくなるマテリアとか。自分に足りない力、あるいは自分が必要とする力、そういうものを、一種のお守りのようにして、持っていたんですな。かけらですから、ほとんど効果はありませんし、そもそも、マテリアを使って魔法効果を生成しようなんて考えたのはもつとずつとあとの人間たちでして、古代種たちは、そんなものがなくてももつと自然な形で星の力を利用できたと考えられています。ところがですね。この鏡には、召喚用のマテリアがはめこまれていまして、そんな鏡は、そんなに多くない……というか、ほとんどありません」

ザックスはぐくりとつばを飲みこんだ。

「これには非常に複雑な説明が必要ですが、現行ときおり目にする召喚というのはかなり強引な方法でして、古代種たちはそういう方法は取らなかつたのです。ゆえに召喚マテリアなんてものは使いませんでしたし、異世界とやたらに交流することは、星全体、あるいは宇宙全体の秩序を乱

すと考えていました。彼らがもし召喚のマテリアを持つていたとしたら、その意味はひとつきりなのです」

「……そりゃ、なんですか、カドバンさん」

カドバンさんもつばを飲みこんだ。

「ちよつと待ってください。話が前後してしまいましたが、古代種の遺跡、神殿というのは、それ自体がなにかを封印したものだつたり、なにかの力の象徴であつたり、力そのものであつたりする場合も多いのです。古代種たちにとつて、神殿というのは単に儀式的な意味や宗教的な意味を越えた、もつと現実的な、ひとつの装置だつたのです」

カドバン准教授は額の汗を拭つた。

「ここだけの話ですが……今回の遺跡調査に対して、教授は最初とても意気こんでいました。なんとか資金を調達できて、調査の見通しがたつたときには、踊りださんばかりに喜んでいました。でも、いつからだつたか、わたしは、教授があまり乗り気でないように見えてきました。わたしは、その神殿になにかあるのではないかと考えて、非常に心配しておりました。ご存じのように、古代種たちは謎に満ちた存在です。現代の科学技術を持ってしても、とても

説明のつかないような不思議な力を持っていました。わたしも、それに教授も同じ考えなのですが、彼らのことは、敬意を払って慎重に扱うべきなのです。手に負えないと思ったら、潔く引き下がるべきなのです。そうしないと、ひどい目に遭います。これまでも、無鉄砲で無遠慮な連中が、ずいぶん命を落としてきました。われわれのように、研究チームが大きくなり、いくつもの企業や団体から援助を取りつけられるようになることは、確かに大きなメリットがあります。しかし、なにか不都合があつた場合に、そのひとたちを説き伏せ、研究を中断することは困難になります。教授は、ただでさえ周囲のひとたちの気持ちを重んじる方です。ああ……」

カドバン准教授はため息をついて、額を押さえたが、すぐに気を取り直した。

「その鏡の大きさはどのくらいありましたか？」

ザックスは見たときの印象を話した。

「お嬢さんの手のひらより、ちよつと大きいくらいでした。これくらい」

ザックスは両手を丸めて、穴をこしらえた。

「この写真ではわかりませんが、鏡の裏側に、なにか模様がありませんでしたか？」

「ありました、ありました。すごく複雑な、でこぼこのある、蕨みみたいな模様が彫つてありました」

准教授は苦しそうに目を閉じた。

「間違いない。ちよつとこれをご覧ください」

准教授は黒いカバンの中から、小型のノートパソコンを取り出した。

「われわれは、五年前に一度、あの神殿の事前調査を行いました。そのとき、ざつと情報収集をして、五年かけてそれを分析したわけです。そして今回のが本調査、実際に神殿の中に入り、さらなる情報を収集します」

准教授はパソコンを操作して、パスワードをいくつか入力し、ひとつのファイルを開いた。

「前回の予備調査では、われわれはまず神殿の入り口にほどこされた、複雑なしかけを解くことからはじめました。古代種は、おそらくパズル好きだったんでしょう。妙なしかけや装置を考えるのが好きだったようなんですよ。これには時間がかかりまして、日程のほとんどを費やしてしま

ったくらいです。そしてようやく入り口が開いたので、われわれはロボットカメラで中の映像を撮影しました。それで、だいたいの構造を把握したわけです。例の神殿はかなり複雑な立体迷路になっていることが判明しました。そういった情報は、大学に帰ったのちデータベース化されて、研究員全員が共有します。映像を元に地図を作製するとか、崩落の可能性の有無をチェックするとか、そういう細かい作業を、めいめい受け持つわけです。

さて、これは神殿内部の映像です。その最奥部分の映像です。これは扉の一部なのですが、なぜかカメラの映像が突然乱れてしまっていて、見づらいのですが……ここに丸いくぼみがあるのがわかりますか?」

ザックスは目を細めてパソコンの画面を見た。画像の一部を拡大したものらしかった。画面全体が黒みがかって、非常に見にくかったが、金色のプレートらしきものの上に丸いくぼみがあるのが確かに見えた。

「見えます、見えます……なんか、でこぼこしてますね。模様ですか? ん? これどつかで見たような……」

「そのくぼみの大きさは、さきほどあなたが手で示してく

れた鏡の大きさとだいたい同じですよ」

ザックスは飛び上がった!

「そっか! このくぼみ、鏡の裏の模様にそっくりなんだ」  
准教授はうなずいた。

「その鏡は、今回教授が調査することになっている神殿を、目覚めさせるキーになるものです。いいですか、ザックス・フェアさん。古代種たちは、この星にとって害をなすものを封じこめるといふ役目を持っていました。封印し、二度と悪さをしないようにするのです。召喚マテリアがはめこまれた鏡は、特別な意味を持っています。悪しきものを封じこめているという、警告の証なのです」

ザックスは目を見開いた。

「この扉には、映像によると、非常に特殊なものが彫られています」

カドバン准教授は、白っぽい石の扉全体が移っている画像に切り替えた。

「これも非常に不鮮明なのですが……見えますか? これが頭で、胴体で、これが腕のように見え……」

准教授のことばに従って見ると、ミミズみたいなナメク

ジミたいな、得体の知れない化け物が浮かび上がってきた。  
ザックスは口を開け、両手で頬を挟みこんだ。

「なんですか、これ！」

ザックスは叫んだ。

「……わかりません。神話の中に、さまざまな怪物が登場しますよね？ それを退治する英雄の話は、神話によく見られるのですが……そういうものは、単なる伝承ではなくて、実際にいたのだという説を採っている学者は、大勢います。ときおり出現するモンスターなんかごらん下さい。あんなものの、特別凶暴なやつが生まれないとは、云いきれないと思いませんか？」

ザックスはことばを失った。

「ああ……わたしたちは、この映像をあまり重要視しなかったのです。よく見えないということもあつて。でも、教授はしっかり見て、考えたのに違いない。なんてことだ！」

准教授が叫んだ。

「へイ、ニューなドーナツいらない？」

パトリス君が、陽気な声でドアから入ってきた。

## 新米記者ストライフ君の奮闘

塔がある広場の真ん前のフラットで、車が止まった。ピルヒエさんと新米記者ストライフ君は、エレベーターで六階に上がった。

「最終予行練習だ。君は新米の、今年の春学校を出たばかりの記者見習いだ。先輩のおれについて、取材の仕方を学んでる最中。だから、黙っていろんなことに目を光らせて、メモを取る仕事をするんだ。若いやつはみんなそうする。それで、だいぶ記者らしく見えるさ」

クラウドはうなずいて、胸ポケットを上から触って、ちゃんとメモ帳があることを確かめた。

「そうだ、おれのところに、途中でザックスから電話が入るかもしれないんです」

クラウドは万が一のことを考えて云った。ピルヒエさんは顎をさすって、フン、と云った。

「そのときや、会社からの仕事の電話と思わせるんだな。敬語で話して……すぐに部屋を出るんだ」

「わかりました」

ふたりはホープニツエル教授が宿泊している部屋の前に着いた。一度顔を見合わせて、ピルヒエさんがドアをノックする。少しして、禿げちゃびんの教授が自ら出てきた。

「おや、あなたは」

ピルヒエさんは帽子を取り上げ、挨拶をした。

「教授の調査が、明日からはじまるでしょう。たまたま取材でここを通りかかったもので、もし教授がいらしたら、ひとことご挨拶しとこうと思ひましてね」

教授はこの突然の訪問に感動したらしかった。

「それはそれは。わざわざありがとうございます。散らかってますが、いかがです？ 中でお茶でも」

云いながら、教授はもうお茶を出すつもりで部屋に引っこんでいた。ピルヒエさんは礼を云って、クラウドを促してあとに続いた。

フラットは広くて、数名の男女が好きなところに座ったり立ったりして、パソコンをいじったり、資料に目を通していた。ソファに、中年のウータイ系の男が座っていて、熱心にパソコン画面に見入っていた。たぶん彼がシノザキ助手だ。ふたりがすぐそばに来て、彼は気づかないふう

で、パソコンを見たままだ。中途半端な長さの髪を手入れもせずに跳ね散らかして、服ときたらどこか時代遅れで、汚らしかった。

「横、いいですか？」

ピルヒエさんがちよつと嫌味な感じに訊くと、男はじろつとふたりを一瞥し、なにも云わずに立ち上がって、どこかへ行ってしまった。クラウドはやなやつ、と思ったので、後ろ姿に向けて小さくあつかんべをした。

「教授、お茶くらい云ってくださればわたしが淹れましたのに……」

教授がキッチンからカップの乗ったお盆を持って出てくると、ひとりの女性が驚いたような声で云った。教授は手を振れない代わりに盛んに首を振って、そういう気遣いは必要のないことを示した。

「わたしは、自分のことは自分でする主義でしてね」

教授はソファに腰を下ろすと、ふたりの前にカップを置いた。

「ありがとうございます」

ふたりは丁寧にお礼を云った。お茶は、紅茶だったけれ

ど、クラウドが嗅いだことのない、南国の日向を思わせるようなエキゾティックな香りがした。

「これは新入りでしてね。ストライフと云います。連れ歩いてるんですよ。仕事を覚えさせるためにね」

教授が手を差し出してきたので、クラウドは握り返した。すごく気さくな感じで、につこり笑った笑顔はちよつと神経質そうな、心根の優しい感じがにじみ出ていた。クラウドは、これはピルヒエさんの観察眼が正しいんじゃないかな、と思った。こんないいひとそうなのが、実は極悪人の犯罪者だったりなんかしたら、世の中、ひとを信じることなんて到底できないような気がしてくる。

「調査はどうです？ 明日からいよいよ現地へご出発するかと思います」

「準備はほぼ整いました。いまは最終的な詰め段階で……実地調査の場合はいつもそうですよ。前日が一番ばたきたするんです」

「じゃ、ぼくらは一番お忙しいときにお邪魔したってことです。そりゃ失敬しました」

「いやあ、いいんですいいんです。忙しいといっても、わ

たしは最終的な確認だけで、ほかのことはみんなほかのメンバーがやってくれます。昔は、わたしもひとりで支度して、ひとりで遺跡調査に向かったもんですが……大学教授になる前のことです。あのころは、GPSだのレーダーだのなんてたいそうなものはありませんでしたから、現地でボディガードやガイドを調達してね。商売上手なのがいって、ぼつたくられたりしましたっけ」

教授は懐かしむような笑顔になった。

「……あなたは、いまの境遇にはあまり満足しておられないようですね」

ピルヒエさんが瞑想に沈んでいるような静かな顔で云った。教授は、視線を彷徨わせた。

「そうかもしれません。たぶん……そうでしょうな。わたしは、自分のことは自分でしたいのです。申し訳ないような気持ちになるので、誰かに世話を焼いてもらうのは、落ちつかないんですよ……」

「わかりますよ」

ピルヒエさんは云った。

「あなたも、わたしと同じような孤独好きなタイプでしょ

う。わたしは単独行動が許される規模の仕事しかないもので、自分のことは自分でしますが。あなたのように、社会的地位もあれば指揮する組織もある程度の規模のものになると……どんな気持ちがあるか、なんとなく想像がつくような気がします」

教授はそつと微笑んだ。

「ところで、今日お話したことは記事になったりしますかな？」

教授は自分のカップを口元へ持つてきて、鼻をひくひくさせて香りを楽しみ、実においしそうに飲んだ。

「まさか。これは個人的な訪問なので、お話したことを記事にはしませんよ。いまは、別件の取材の途中で、たまたま立ち寄っただけですから。ただ……」

ピルヒエさんはちよつと云いにくそうな顔をした。

「なんです？」

教授は眉をつり上げた。

「あのですねえ……教授、もしも……同行取材なんてことを許可していただけたら……」

クラウドの携帯が鳴り響いた。ザックスだ！ タイミン



グの悪いやつ！ クラウドはちょっと舌打ちして、すいません、とふたりに頭を下げると、大慌てで部屋を出た。いところだったのに！

「もしもし？」

クラウドは電話に出ながら、廊下を歩いて、こそこそ話をするのに具合のよさそうところを探した。なんでコートを持ってきたんだろう？ 反射神経だ。廊下のつきあたりが非常階段になっていて、その向かいに、洗濯機と乾燥機が三台並んだ洗濯スペース、そして清掃用具を入れておく小さな物置があった。クラウドは洗濯機に肘をついて、はすみで持ってきたコート洗濯機の上に置き、ザックスの声を聞いた。

「ハーロー！ さっきボスにも電話したんだけど、ボス電話出なくてさあ。そういや、今日は現地調査とか云つてたなあとか思っ、んで、おまえに電話したところ。すんげえことがわかったからさ。おまえ、まだ例の教授んところにいるの？」

「そうだよ。いま、いいところだったんだ」

クラウドは精一杯ドスの利いた声を出した。

「あら？ もしかして、ザックスちゃん邪魔しちゃった系？」

「もしかしないよ」

クラウドはもつとドスの利いた声を出した。ザックスは「あらあ」と云った。

「そりゃごめん。だってさ、超すっげえことだったんだ。まじ、ほんと一大事なんだよ」

「それ、捜査官に云つた方がいいんじゃないの？」

「まあ、それもそうなんだけど。でもほら、なんとなく第一は身内に報告したいっていうか。ちよつとき、あんまりすこいもんでおれ……」

クラウドは途中から、ザックスの話がまったく聞こえなくなつた。隣の物置からひとりの男が出てきて……その男は確かに清掃員のかっこうをしていた。でも、そいつの鼻はまれに見る大きなもので、いちじるしく赤かつた！

「ザックス、悪いけど切る！」

クラウドはそう云うが早いか電話を切って、ポケットにしまい、コートをしっかり着て、だんご鼻の清掃員のあとをつけていった。クラウドが追いついたときには、清掃員

はエレベーターに乗りこむところだった。クラウドはエレベーターが下へ降りていくのを確認すると、非常階段へ出て、これ以上はぜったいに早く降りられないという全速力で階段を駆け下りた。一階まで降りると、彼は大きく息を切らしてエレベーターを確認しに行った。ギリギリセーフだ！ 特徴的な鼻の清掃員がエレベーターを降りて、用具室へ立ち寄るふりをしながら、非常口からフラットの外へ出ていくところだった。クラウドは見つからないように注意しながら、少しあとから外へ出た。

清掃員の格好をしたクルスは、フラットを出るともうそんなに周りを気にしなくなつて、足早に通りを歩いていった。クラウドはしばらく後をつけて、彼がもうそんなにあたりどきに注意を払っていないことを確かめると、念のため、ビルヒエさんに電話を入れた。

「おう、どうしたんだ？ なにやってんだ？」

「すみません、ビルヒエさん。おれ、特ダネがつかめそうなんです。もし欠員が出たら、記者に雇ってくれませんか？ 実は清掃員の後を追いかけて……あ、まずい、あ、いえ、心配しないでください。またあとで」

清掃員は、なんと映画館へ入っていったのだ。映画館に電話しながら入っていったら、すぐ目立ってしまう。クラウドは携帯をポケットにしまつて、大きく息を切らして映画館へ入った。もう上映がとくに終わってしまった古い映画を、二本立てですつと流しているところだった。「ご入場は、上映開始十分前、上映終了十分前から可能です」と書かれた立て札が、チケット売り場の前に置いてある。クラウドはチケット売り場に座っていた若いお姉さんから、丁寧な態度でチケットを買った。お姉さんはしまいは、クラウドにばちんとウィンクまでしてくれた。クラウドはちよつと、舞い上がりそうになった。

スクリーンは映画のほんとうに終盤を映し出していた。ヒロインらしい女のひとが、すごくハンサムな男と抱き合つて、涙を流している。こんなに真つ暗じゃ、どこに例の男がいるのかわかりやしない。クラウドはむつとして、近くの空いている席に座つて、あたりを注意深く見回した。ヒロインとハンサムな男は、無事結ばれたみたいだ。「The End」の文字がスクリーンに大きく表示される。エンドロールが流れはじめ、席を立てて出ていくひとがちらほら出て

きた。クラウドは、そのひとりひとりにくまなく注意をはらっていたが、クルスではなさそうだった。やがて、場内が明るくなった。ざっと見回した限りで、三十人かそこらのひとがいた。そのうちの半分くらいのひとがいつせいに立ち上がって、ドアへ向かってきた。クラウドはあわてて帽子を深くかぶり、そのひとりひとりをしつかり観察した……いたいた！ 小柄な男と、のつぽの顔が長い男が出ていくひとの列に加わって、のろのろ歩いていく。クルスは、もう清掃員の格好をしていなくて、よれよれの分厚いコートを着ている。クラウドは、迷わずふたりの男のあとをつけていくことにした。コートのを立てて、そつと立ち上がった。チケット売り場のお姉さんは、新しく入ってくるお客さんへチケットを売るのが忙しくて、クラウドのことには気がつかないようだった。クラウドはよしよし、と思つて、外へ出た。おれつて、きつと探偵の素質があるぞ……

男たちは、なにやらこそ話しながら大通りを歩いて行く。ああもう！ ソルジャーだったらなあ！ そうしたら、小声だってなんだって聞き取れるのだけれど。クラウ

ドは、思い切つてすこしふたりに接近してみることにした。ちようどふたりの男の後ろに、ぼつてり太ったおばさんが歩いてた。クラウドはおばさんを隠れ蓑にしながら、じりじり男たちに近づいて、会話を耳をそばだてた。

「だからよ……これでもし鏡がなくなったのがわかったとしてもだよ、結局あの教授は泣き寝入りさ。だつてあの禿げたおっさんが鏡を持ってるなんてこと、誰も知らねえことになつてははずだろ。おれたち以外は。それに、たぶんわかりつこねえよ。金庫の鍵はかけ直したし」

「そうかなあ。おいらだったら、何回も見ると思ふけどなあ。別に、なにがどうつてわけじゃなくて、ただなんとなく見るためにさ。あーあー、心配だなあ」

「けつ、勝手に心配して、おつ死んじまえ。とにかく、あとはこれを明日の朝、ご一行様出発時に例のウータイ野郎に引き渡すんだ。おめえ、ちゃんと手順と場所わかつてんだらうな？」

「わかつてるよ！ でも、念のためあとでもう一度確認するよ……」

心配症だなんて、変な泥棒だなあ、とクラウドは思った。

でも、たいへんだ！ 鏡は、もう盗まれてしまったのだ！  
いま目の前にいるすごい鼻の男が、それを持っているのだ  
……クラウドは武者震いした。ぜったい捕まえてやる、と  
思ったからだ。捕まえて、鏡をあのかいなマテイルダさ  
んに返してあげるのだ。クラウドはベルトに取りつけたガ  
ス・ピストルをにぎりしめた……。

それから、ほんとにたいへんだった。

それぞれのたいへんな一日

「閣下が消えた!？」

ザックスは携帯電話を耳に当てながらもすごい声を出した。向かいの席に座つて、かわいらしい様子でシフォンケーキを食べていたエアリス嬢はびくつとして、思わずフオークを落つことしそうになった。カフェの周囲のテーブルのひとつたちも、なにごとかというようにザックスをちらちら見た。

「おお、そうなんだ。君の友だちはいなくなっちゃったんだよ! 君から電話がかかつてきて部屋を出ていつて、それつきりだ。一度おれに電話があっただけだな、慌てた様子で、すぐに切ったんだ。心配いらない、とか云つて。おれはてつきり、君の指示だろうと思つたんで、君に確認のために電話してみたんだが、その様子じゃ違うんだな? なあ、大丈夫だと思うかい? これで、いなくなったのが君ならおれはこんなに心配しないさ。君に会つたことはないけど、ソルジャーが特別製で頑丈だつてことくらいは知つてる。でもあの坊主は、なんだつて普通の人間だろ……」

ザックスはちよつと考えこんだ。見ず知らずのビルヒエさんからいきなり電話がかかってきたので、なにごとかと思つたら、なんてことだ!

「じゃあ閣下が消えたのは、三千分くらい前つてことですよね? おれが電話したのがそれくらい前だから」

「そうなるな。おれはとりあえず、いまから捜査局に顔を出すよ。同行取材の話は、見事に断られちまつたし。その前に、ちよつとカール大公に事情を話して、あたりを探してみようと思つてるんだが……」

ザックスは迷惑をかけたことと、その心遣いに感謝を表して、電話を切つた。

「どうしたの?」

エアリス嬢が気遣わしげな声を出した。ザックスは自分が彼女を呼び出してお茶につきあわせていることを思い出して、ため息をついた。先ほど話をしたカドバン准教授は、当然のことながら、自分もできれば現地に乗りこみたいと云いだしたので、ザックスは承知して、二時間後にふたび会うことを約束したのだった。准教授には、荷物の準備やらなにやら、いろいろある。でもザックスにはそういう

必要がないので、彼は重苦しい気分を吹っ切るために、エアリス嬢の顔を拝むことにしたのだった。

「ちよつとね。閣下がどうかいなくなつちやつたらしい」

エアリス嬢は「あら！」と云った。

「あいつはすぐこれなんだ。団体行動に向いてないんだよ。ほんとにさあ。まあそれが役に立ってることが多いんだけど、でもさあ！ 今度こそ、きつつく叱らなきゃ。ボスじやだめだ、ぜんぜん」

ザックスはいらしたように頭を掻いた。エアリス嬢は、心配ね、と云った。

「心配たつてどうしようもねえよ。ボスは電波の届かないところにおわして、夜まで帰つてこないし……ピルヒエさんとか捜査局のひとが、きつと探しに出てくれると思うけど……もう！ 閣下があんとき、なに見つけて電話切ったのかわかりやなあ！」

エアリス嬢は、かつかするザックスを心配そうに見やつた。

「ねえ、ザックス、あなた、いますぐに戻ったほうがいいんじゃない？ ミッドガルでできることは、終わつたんで

しょ？」

ザックスははつとした顔をした。

「いや、でもさ、おれはカドバン准教授をお連れするつて約束があるわけで……」

「そんなの、お尻叩いて、急かせばいいじゃない」

エアリス嬢はかわいらしく唇をとがらせて云った。

「おじさんの旅行なんか、髭剃りと、Yシャツと靴下と下着何枚があれば足りるでしょ？ そんなの、一時間もかからないわ。いますぐ行つて、おじさん急かすの！ 友だちの命がかかつてるつて」

エアリス嬢は強い調子で云った。ザックスは頭を掻いた。「でもさあ、おじさんだつて、ひとによるだろ？ それにせつかくエアリスちゃんのこと呼び出しといてさあ」

エアリス嬢は怒つたように首をふった。

「わたしは、ここでひとりで、ゆっくりケーキ食べて、おいしいお茶飲んで、それから、ぶらぶらして帰るから。どうせ、今日はそんな感じのこと、するつもりだったんだもの。ね？ ザックス、いらいらすると、またヘルペス出ちゃうよ？」

「ああ、あれな……父ちゃんからの負の遺産。口唇ヘルペスなんて、ダッサいよなあ！ ソルジャーになったら消えると思ってたのに……じゃ、ごめん！ おれちよつと行くわ。今度必ず埋め合わせするから！ これ、置いてくからなんか好きなもん買ってよ」

ザックスは札を数枚テーブルに置いた。

「いらない」

エアリス嬢はむっとした顔をした。

「お金置いてったら、わたし、あなたのこと、ねじり切っちゃうから！」

「でもさあ！」

「い・ら・な・い！」

「わかったよ」

ザックスは札を引っこました。

「でも、ここのお代だけは、おれに払わしてよ！」

そうして、一枚だけ札を置いて、エアリス嬢のほっぺをペン、と指先で軽く叩くと、大急ぎで出ていった。

「きつと、いまは恋人どうしだから、なんだわ」

エアリス嬢はひとり考えた。

「これで、もし結婚して、一緒に暮らすようになったら、きつと旦那なんて、家にいないほうがいい、って思うようになるんだわ。あーあ、やだやだ！ 結婚って、怖いなあ！」

けなげなエアリス嬢はそう考えて一抹の寂しさをまぎらわせ、ふわふわのシフォンケーキを食べることに専念した。

「じいさん！ 戦闘機いっちゃー！」

ザックスは飛空艇を整備していたマチャエットじいさんに、ダイヤモンドも砕けんばかりの大声で話しかけた。あたりにはエンジン音が響きわたって、引きつけを起こすくらいうるさかったのだ。ザックスのあとをおそろおそろついてきたカドバン准教授は、かわいそうなくらいおどおどしていた。

「ああん！？」

じいさんはすさまじい顔で振り返った。

「またてめえか！ このクソガキ！ わがまま云々のもいとかげんにしろよ！」

「緊急事態なんだよ！ じいさんの大好きな閣下が行方不明なんだ」

「なにい？ あの坊主がか。ちよつと待つてろ」

じいさんは、そばで一緒に作業していた男になにやらかさん指示を出して、大急ぎで持ち場を離れた。

「いま乗っていいのどれ」

ザックスは急いでいたので、じいさんとカドバン准教授を抱えて広い飛行訓練所を走った。

「どれも準備万端だあ！ このバカタレ！ おれを誰だと思つてんだ」

「マチエツトじいさんだよ」

ザックスは笑つて云つた。カドバン准教授はぎゅつと目をつぶつていて、しきりに首をふつた。

「神さま、どうかご加護を……わたくしめをお守りください……」

「ストライフ君が消えた！？」

コランダー捜査官は、悪友からの電話で飛び上がった。

「おおよ、そうなんだ。消えちゃったよ！ 一度電話がかかってきたんだが、そんなときには確か、清掃員をおっかけて、とか云つてたな」

「清掃員？ なんでもた……」

ライオネル捜査官が、彼の横で心配そうに見守っていた。「おれは思うんだが」

電話の向こうで、ピルヒエさんがゆっくり云つた。

「たぶん、あの坊主は電話の最中に、第二の犯行現場か、あるいはそれに類するものを見たんだ、きつと。で、それをつきとめようとして……」

「わかつた、フラットの清掃員について確認する。知らないやつが潜りこんでいなかったかどうか」

「おれは、一応念のためこのあたりをちよつと走り回つてみるよ。もしかしたら、見つかるかもしれないから」

「ああ、じゃ、頼むよ。こつちも急ぐ」

捜査官は受話器を下ろすが早い、早口で指示をとばした。

「シュミット！ いますぐ教授たちのいるフラットに行つて、スタッフに、今日あやしい、もしくは見慣れない清掃員を見なかったかどうか、確認してくれ。もしかすると、鼻か馬面のどつちかかもしれない。写真を持つてけ！ ただし、教授たちには気づかれないようにな。捜査官らしい



そぶりするなよ！」

大柄で、牧歌的な顔を持つシュミット捜査官は食い損ねた昼食のハムサンドをもぐもぐやっていたが、あわててそれを飲みこむと、コーヒーで流しこんで、大急ぎで出ていった。

「残りのやつは、フラットのまわりで聞きこみだ。かたまって行動するな。くれぐれも、教授たちになにも感づかれないように！ ライオネル！」

資料を作成していたライオネル捜査官は、立ち上がった。「君もストライフ君の足取りをつかめないか、やってみしてくれ！ 大急ぎで！」

ライオネル捜査官は、唇を引き締め、あわてて出ていった。部屋がからっぽになった。コランダー捜査官は、胃が縮まる思いがした。十五歳になる自分の息子のことを考えると……ストライフ少年も誰かの息子なのだ……いたたまれなかった。彼は、軽い気持ちで少年を捜査に引っぱりこんだ自分を恥じていた。いくら兵士だからって、彼はまだ少年なのだ。たったの十八年しか生きていない。捜査官は、ため息をついた。

シュミット捜査官から、まもなく連絡がきた。

「今日フラットに入った清掃員は、クルスでした。誰が証言したと思います？ あのへんをねぐらにしている浮浪者です。そいつは、毎朝ゴミ収集車が来る前に、ひと通り使えるものがないかチェックするんだそうですが、そのとき、裏口から中に入ってくクルスを見かけたそうです。見たことのないやつだと思って、注意して見てたと云ってます。僕は信憑性があると思いますね。あの鼻は間違えようがない、って云ってましたから。同感でしょう？」

もちろん、コランダー捜査官も同感だった。ストライフ少年は、おそらくそいつを見かけて、追いかけていったのに違いない。彼はシュミットに、いったん戻ってきてくれるように伝えたと、電話を切った。いったい、少年はどこへ行ってしまったんだろう？

ひとり捜査局をあとにしたセフィロスは、まずチョコボを一回調達するため、ゲインシユタルトさんのところへ出向いた。ゲインシユタルトさんはチョコボ舎にいて、わんさというチョコボの世話をしていたが、セフィロスを見る

とにかくと笑ってパイプの煙を吐き出し、さっそく一頭の  
チョコボのところへ連れて行ってくれた。

「ケルバを貸すよ。うちの稼ぎ頭だけど、今日はほかのやつを連れてくから、まあいいさ。こいつなら、どこへでもちゃんと行ってくれるからな」

セフィロスはケルバに親しみをこめて挨拶した。ケルバは首をちょこんとかしげて、挨拶を返した。それから、誰かを探すようにあたりを見回した。ゲインシュタルトさんは大声で笑った。

「こいつ、あの坊主がいなくなってるんだ。元気にしてるだろうな？　あの坊主は」

セフィロスは、おかげさまで嫌になるくらい元気だと云った。ゲインシュタルトさんは、また大声で笑った。

「夕方までには戻ります」

セフィロスは云い、ゲインシュタルトさんと握手をして、ケルバを走らせはじめた。今日の調査は、遺跡までの道のりの下見という大事な役割を兼ねている。教授たちは最新のGPSや、詳細な地図やなんかやで武装しているだろうが、それを追う捜査局の面々は、遺跡調査などしたこと

もないド素人、それがどこにあるかすら正確に知らないのだから、下手をすると迷子になってしまふ。かといって、教授たちに気づかれるほど近づいて移動するのもまずい。作戦を立てるのは簡単だが、実行するのはなかなかやっかないのだ。クラウドが読むような冒険もののマンガなどでは、こうしたやっかいなところはぜんぜん書かれない。だから、だいたい少年たちは、いざそれと似たようなことが現実起こったとき、そのあまりのやっかいさにびっくりしてしまうことになる。

街を出てしばらくすると、黒々とした針葉樹林が鬱蒼と生い茂る森に入る。セフィロスは方位磁石と自分の勘と地図を頼りに、ケルバを走らせた。ケルバはほんとうに頭のいいチョコボだった。セフィロスの指示通りに動くが、ちゃんと自分の頭でも考えていて、走るのにふさわしくないようなところはしっかりよけて走る。たとえば、沼地のそばのぬかるんでいるようなところとか、クマが冬眠している穴ぐらのそばなんかは、事前に察知して、絶対に近寄らない。セフィロスは彼のことを信頼して、ただ方角だけ伝えて、あとはまかせることにした。チョコボの背に乗って

の逍遥……セフィロスにはそう思えた……は非常に心地良いものだった。森の冷たく澄んだ空気が彼の鼻腔を刺激し、雪のにおいや、木のおいを運んでくる。流れてゆく景色はどこまでも静かな森の木々を中心として、ときおりその中に枝のあいだを走るリスや、小さな鳥の羽ばたき加わる。途中に、ごつごつした岩のあいだから滲み出た小さな泉があった。セフィロスはケルバと一緒にひと休みした。ケルバは水を飲むと、ゲインシュタルトさんからあずかってきた特製の飼料葉をもりもり食べた。セフィロスは微笑し、泉の湧き出る小さな音に耳を傾けた。岩に貼りついたピロードのような苔があんまり美しいので、セフィロスはついそれに見とれてしまった。苔は、自然の芸術品である。こんなに美しい色を、いったい誰にも教わらずに、苔はどうしてひとりで身につけることが出来るのだろうか？

ケルバが十分に休んだと見ると、セフィロスは再び出発した。森を抜けてはまた別の森に足を踏み入れ、しばらく走ると、突如として目の前に大きな石造りのピラミッド型の神殿が現れた。ケルバはびっくりして短く「クエッ！」と鳴いた。セフィロスは彼の首を撫でて、落ちつかせた。

古代種たちは、世界各地に似たようなピラミッド型の神殿をいくつも作っているのだが、壮大なピラミッド型の中へ入って行くと、広い円形の部屋がひとつあるきりだ。古代種たちの神殿は、地下に向けて広がっている。だがそのほんとうの姿を見るためには、まず入口を見つけるための摩訶不思議なしかけを解かなければならない。遺跡の謎に挑戦して、その段階でもう諦めてしまった連中も、たくさんいる。

古代種たちは、偉大なる叡智の持ち主だった。彼らは現代の文明でも理屈を説明できない、さまざまな技術を用いることができた。映像は、古代種文明を研究する際のキーだ。彼らは、なにかものを映す道具、ものが映るものを非常に神聖視した。鏡や水面なんかがそうで、彼らはそういったものに、なんらかの方法で、記憶を映像化して宿しておくことができた。あるいは、思考を、思念を、直接焼きつけるようにして保存しておくことができた。そういう技術があったために文字を持たなかったのか、それとも文字を持たなかったゆえにそういった技術を開発したのか、そのところはわからない。だいたい、文字を発明する文明の

ほうが特殊なのだ。古代種は、一種のテレパシーを操るサイキック集団だった、という専門家もいる。真偽のほどはわからないけれど、現代人が活用できないにか別のエネルギーを、活用していたことは事実だ。

セフィロスはケルバから降りて、神殿の前に立ち、非常に敬虔な気持ちで、胸に手をやって一礼した。こういうものを見ると、借り物の力で繁栄する現代の人間生活など、しよせんはまがいもののように思われてくる。ほんとうの力とは、エネルギーとは、なにか人間の意志を超えたもの、人間が、自らの我を捨てた先に、導かれるところにあるのではないだろうか？ セフィロスは、確かに一種の力を持っている。けれどもそれは、所詮人間が自分の頭だけを頼みにして、狭い範囲で考えた理屈から導き出されたものにすぎない。そして、人智を超えた力は、こちらが手を伸ばせば、すぐにその手を取ってくれるような、そういうところにあるのではないだろうか？ 人間は、もっと人間以外の力を、受け入れるべきではないだろうか……自分たちが一番えらいなんて、うぬぼれていないで。

セフィロスはケルバを連れて、神殿の中へ入っていった。

勇敢なケルバは、真っ暗な建物の中へ入っていくのでも、物怖じしなかった。チョコボは困るだろうが、セフィロスは真っ暗でも別に問題はないので、少し首を傾げて目があったりに慣れるのを待っていると、ふいに明かりがともった。壁にとりつけられた松明が、ひとりでに赤々と燃え出したのだ。セフィロスは眉をつり上げて驚きを表したが、そこまで驚いたわけでもなかった。この神秘的な神殿では、ありうることだ。ケルバは驚いたようで、さかんにあたりを見回していたが、パニックは起こさなかった。優秀なチョコボだ。

炎のゆらめきとともに、大きな円形の広間が浮かび上がった。中央に、石碑のようなものが置かれている。文字は書かれていなくて、なにやら暗号のような不思議な記号が書かれているだけ。セフィロスはそれに近づいて、まじまじと眺めた。それこそ、石碑の方で恥じ入ってどこかへ逃げ出してしまうくらいまじまじと、時間をかけて眺めた……彼はいつも、新しいものを見るときはそうするのだ。不思議なのは、石碑よりもその台座部分だった。淡く光る三つの丸い石がはめこまれている。セフィロスはそのぼんや

りとした輝きに惹かれて、触れようとしてためらい、腕を引っこました。触れてしまったら、なにかが動き出しそうな気配を感じた。セフィロスは唇に指を当ててしばし考えこむと、部屋の中を一周して、そうして外へ出た。

「見て回りたいのはやまやまなのだが」

セフィロスは出がけに、石碑に向かって申し訳なさそうに云った。

「一度、戻って報告しなくてはならない」

彼はかわりに、神殿のぐるりを回って、あたりの景色を頭に焼きつけておいた。ひとが隠れられそうなところを探したり、物騒な装置がないか調べるだけでひとまず満足し、来たときと同じようにケルバに乗って……否今度はもう少し早足で、帰った。

せっかく訪問者が来たので松明まで燃やしたのに放っておかれた神殿は、怒って「ん、もう！」くらい云ったかもしれないなかった。

街が近くなってきたとき、携帯がぶるぶる震えだした。ザックスからだった。

「ボス、ボス！　ようやく通じた！　おれ、もう心臓が

ちぎれ飛ぶかと思ったよお！」

わめきたてるザックスを落ちつかせ、聞き出した内容にセフィロスは愕然とした。

「……鏡のことも問題だが……クラウドが消えた？」

そう云うのが精一杯だった。

「そうなんだ！　あのばかたれあんぼんちん！　おれ、実はいま、もう捜査局に戻ってきてるんだ。あのカドバン准教授も一緒。だから、ボスもすぐにこっち来てくれない？　クラウドのことはいま、捜査局のひとたちが探してくれてる。まだみつかってないけど……」

「すぐ行く」

セフィロスは電話を切り、ゲインシタルトさんのところへチョコボを返しに行った。

「明日もよろしくお願いします」

セフィロスはケルバの背中を叩きながら、ゲインシタルトさんに小さく頭を下げた。捜査局で、神殿へ向かうのに、ゲインシタルトさんのチョコボ車を使うことにしていたのだ。

「おうよ、なんてこたあないさ。仕事だからな。七時半に、

捜査局の前でいいんだな？ ケルバはしつかり休ませとくよ」

そのケルバは、なんとなく不安そうな顔でセフィロスの胸に頭のとをかをぐりぐり押しつけてきた。

「おいおい、どうしたんだ？ こないだから、しょうがねえやつめ。別れるのがつらくなる癖でもついたのかな」

セフィロスはまた首をなでてケルバを安心させると、大急ぎで捜査局へ向かった。

クラウドは相変わらずニツカボッカ姿のまま、大通りを歩いていった。格好が古風なくせに妙にかわいらしく見えるその姿に、何人かの奥様が振り返って、微笑みを寄せた。でもクラウドはそれどころじゃなかった。しかめっ面をして、ポケットに手をつっこみ、太った奥さんの前を行くふたり組に細心の注意を払っていたのだ。

ふたり組は、しばらくひと通りの多い大通りをぶらぶらと歩いていたが、やがて、ひよいと細い路地を左へ入っていった。クラウドは、少し遅れてついていった。それから、ふたり組はしばらく細い路地を右へ左へ歩き続け、貧

民窟とまではいかないが、ずいぶんさびれた、貧しい感じのする地区へ入っていった。

「まいったなあ」

クラウドは思った。

「こんなところじゃ、おれのおろしたての服が目立つちゃうよ。しょうがないなあ。あとでちよつと転げ回るか」

ふたりは、まもなく小さなアパートに入ってしまった。みすばらしい、二階立ての建物で、まわりを生垣に囲まれている。一階の半分に管理人夫婦が住んでいて、部屋を週決めで貸し出しているようなところだ。クラウドはここがふたりのねぐらに違いないと思った。きつと、一週間か二週間で部屋を借りておいたのだ。でも念のため、ちよつとあたりをぶらつくふりをして、そのアパートを観察した。

石造りの古くさい建物で、屋根はくすんだ小豆色をしていた。玄関ドアの横に小さな表札が出ていて、「エドモンド」と書いてある。部屋は、おそらく一階にふたつと、二階に四つ。表札の下に、ポストが並んでいるのが見える。せめて、あれを覗いたらなあ、とクラウドは思った。でも、そうするには建物に近づきすぎるし、そんなことをしたらあ

やしいと思われてしまう。例のふたり組が見張っているかもわからないのだ。クラウドはうなった。これからどうしよう？　いったん、捜査官たちに連絡して、ここへ誰かを派遣してもらう方がよさそうだ。きつとビルヒエさんも心配しているに違いない。セフィロスに夕方まで帰ってこいと云った手前、自分が帰らないのはなんともかつこわるいことだ……。

クラウドはふいにびくつとして、あわてて通りの角にくれた。アパートから、例のふたり組が出てきたのだ！　こちへ歩いてくる。彼らは、クラウドの鼻の先を通り過ぎた。こんな会話を交わしながら。

「兄貴、あの鏡、置いてきちやって平気なの？」

「うるせえなあ、ほんとに。胃に穴空けて死んじまえよ。」

一杯ひっかけるくらいの時間、どってことねえよ」

「ほんとかなあ。心配だなあ」

これって、チャンスなんじゃないだろうか？　クラウドは頭をフル回転させた。いま、鏡はあのふたりの部屋にある。そんなに部屋数が多くない建物だ。どこから忍びこんで、探すことはできないだろうか？　彼の頭はすぐに「や

ってみる」の方向に傾いた。一杯ひっかけるってことは、そんなにたくさんさんの時間があるわけじゃない。捜査局に連絡して、どうのこうのしていたら、ふたりが帰ってきてしまうかもしれない。

彼は建物を一周してみることにした。でもその前に、一応あたりを「転げ回」って、せっかくのおろしたての服をちよつとばかり汚しておいた。クラウドがどんなふうに服を汚したかは、小さい男の子を少しでも観察したことのあるひとならすぐにわかるだろう。それから、彼は建物に近づいていった。側面に、小さな木のドアが見えた。裏口に違いない。鍵はかかっているだろうか？　うまい具合に、あたりには誰もいない。ちよつと行ってみよう。

クラウドは用心しいしい、生け垣の下をくぐって敷地内に進入した。帽子が落っこちたので、あわてて腕を伸ばして拾った。頭に葉っぱがくっついてしまったから、指先でつまみとった。耳当てをしてこなくてほんとうによかった。きつと、どこかで落っこちたとして永遠に行方不明になっていたに違いない。

一度あたりを見回してから、裏口のドアノブへ手をかけ

て、そつと回してみた。開いた！ クラウドは心の中で万歳をした。でもまだ油断は禁物だ。家の中のひとに見つかって、どなた？ なんて云われたらおしまいだ。クラウド・ストライフです、なんて云ったって、通じるわけがない。

クラウドはそつとドアから中をのぞきこんだ。細い廊下をはさんで、左側が大家さんの部屋らしい。右側には階段と、部屋がふたつ。ひとつの部屋には、かわいらしいふちどりがついた木製の表札がかけてあった。男性名と女性名が並んでいるから、たぶん夫婦か、恋人が住んでいるのだ。

もうひとつの部屋には、そういうものはかかっていなかった。クラウドは二階へ回ってみることにした。これで、階段がみしつ、とか、ぎしつ、なんて云おうものならおしまいだなあ、と思いながら、クラウドは足がしびれてくるくらいものすごい注意を払って、抜き足差し足階段を上った。

二階は、左右にふた部屋ずつ、合計四つの部屋があった。左側の奥の部屋と、右側の手前の部屋に表札がかかっている。あとのふたつはなし。クラウドは、左側の表札のない部屋の前に、映画で見たウータイのニンジャみたいな忍び足でにじり寄って、ドアに耳をくっつけた。なにやら、ぼ

そぼそと話し声が聞こえる。「そうは云ったって、このころ仕事がねえんだ、わかんだろう……」『でも、よそのお宅じゃなんとかして働いてるもんよ……』『てめえみてえな世間知らずにや、わからねえんだよ……世間つてのは厳しいんだ……』

もしこれが夫婦喧嘩だとしたら、ずいぶん覇気のない喧嘩だった。ふたりの声は、疲れていた……クラウドは、そつとその場を離れた。おとなになるって、いやだなあと思ひながら。

続いてクラウドは、もうひとつの表札のない部屋のドアに耳をくっつけてみた。中はしんと静まり返っている。クラウドは、鍵穴から中を覗けないかやってみた。小指の先指先くらい小さな穴から、なんとか見えた。部屋の中には、男ものの衣類やスーツケースが雑然と置かれていた。長く住んでいるひとではなさそうだ。それにしても、ものが少なすぎる。ところかまわず脱ぎ捨てられた服の中に、見たことのある清掃員用のつなぎ服を見つけて、クラウドの心臓は跳ね上がった。ここが、あのふたり組のアジトなのだ！ クラウドはドアから身体をはなして、そうして一度あたり



の様子をうかがった。ほかの部屋からは、誰も出てこなかった。誰かが入ってくる気配もなかった。クラウドはドアノブに手をかけてみた。ドアが開いた！ 無用心すぎやしないか？ 一瞬そんな疑問が浮かんだ。だって、自分たちが盗んだものを置いておく部屋に、鍵をかけ忘れるなんてこと、あるだろうか？

突然、みしつという床がきしむ音がして、クラウドははつとして振り返った。背後の光景を認識する前に、頭にものすごい衝撃を感じて、彼はその場に伸びてしまった。

上司から大変責任重大な任務を任されたライオネル捜査官は、きわめて緊張した顔をしながら、すぐさま車で教授が滞在するフラット付近へ駆けつけた。そうして、まずはフラットの前から、大通りをよく観察した。通りはホテルや店が立ち並んでいて、ひとがひっきりなしに右からも左からも、どうかすると斜めからもやってきた。いちじるしい道路交通法違反に、捜査官はしかし、いきり立つひまがなかった。それ以外のことで頭がいっぱいだったからだ。決意したら一直線の生真面目なひとによくあることだが、

捜査官もひとつのことに集中すると、周りのことが見えなくなってしまう傾向にあった。それで、普段なら頭からけぶを出して怒るような交通ルール違反にも気がつかなかった。

だがそのやや偏りのある傾向の埋め合わせに、彼はたいへんねばりづよい性質を持ち合わせていた。フラットの斜め向かいにあるカフェバーに狙いを定め、カウンターへ行つてホットココアを注文し(彼はアルコールを飲まないし、コーヒーも飲まない……胃が痛くなるからだ)、ついでに自分の身分証をさりげなくボーイに見せて、金髪のニツカボツカ姿の少年か、もしくはおそろしく特徴的な鼻をした小柄な男を見なかったか、と訊ねた。

「さあ」

まだ若いボーイは、風邪をひいているのか鼻をぐずぐずさせながら、考えこむような顔をした。

「でも、イーダさんなら知ってるかな……レジ叩く以外は一日中外ばっかり見てるから……それに記憶力がすごくてイーダさん！」

レジの前の椅子に座りこんでぼんやりしていた中年の女

が顔を上げた。ボーイが手招きすると、彼女はいますぐに会計に来そうな客がいらないことを確かめて、小太りの身体をひよこひよこさせてカウンターへ歩いてきた。捜査官は身分証を見せ、丁寧挨拶した。

「ああ！ 見たと思うわよ。あのかわいらしい子のことじゃない？ 十一時すこし前のことでしょ？ ちよつと時代遅れみたいな服だったけど、結構すてきに決まっていた。通りを、左の方へ行ったわよ。ああいう息子なら、ほしいわねえ。うちのは図体ばかり大きくなくて、頭はからつきだし、ぶきつちよで運動オンチで……」

イーダさんはいいひとなのだが、口を開くとひとり息子の不平不満ばかりこぼすので、ボーイたちはちよつと決まりの悪い思いをしていた。それに、イーダさんがほんとは息子のことを自慢したいのか、こきおろしたいのか、彼らはしよつちゅうわからなくなった。もしも誰かが、イーダさんの息子の文句に対して、「そりゃあんまりですね、ちよつとひどいですよ」などと云おうものなら、イーダさんはむつとして、レジを壊しそうな勢いで叩くし、会計は間違うしで、散々なことになるのだ。でもそれ以外に関して

は、イーダさんはだいたいのところ、陽気ないいひとだった。

捜査官はイーダさんとその息子についてあんまり深入りしないうちに、あわてて勘定を払って店を出た。そうして、イーダさんの記憶を頼りに左へ進んでいった。それからしばらく、実りのない聞きこみが続いた。飾り窓があつて、店内から外がよく見えそうな店を見つけると必ず立ち寄つて、聞きこみをするのだが、そこまで注意して窓の外を見ていたひとはいなかった。しかし彼はめげなかった。通りの左右を店をくまなくチェックしながら、辛抱強く話を聞いて回った。そしてついに、彼は次の手がかりを得た。ブティックの若い女店員からだ。

「あたし、そのときちよつと窓をお掃除しながら外を見て。さぼつてたつてわけじゃないですよ。ちよつと、あれだっただけ。あのかわいい男の子でしょ？ あたし、今日ラッキーだったなつて思いました。ほら、きれいな男のひとを見ると、ちよつと気持ちいが、あれになるつていうか。この仕事、あんまり好きじゃないから。ほら、こういう仕事つて、立ち仕事だし、ちよつとあれで。その金髪の子なら、

あその角を左に曲がつていきましたよ。あの、糸みたいに細い路地。向こう側の町に抜けるのに便利なの、あの通り。あたしもたまに、お使いで使つて。かなり狭くて、あれだけど」

彼女が多用する「あれ」の正確な意味は、わからなくてもライオネル捜査官にはいっとう差しつかえなかった。彼は女店員の云う路地へ入つていった。確かに糸のように細くて、ひとがすれ違ふのに、お互い建物に背中をこすりつけなくてはならなかった。さてここで、捜査官は参つてしまった。路地はつきあたりへ行くと左右にわかれていて、そこからさらにもつと細かい路地にわかれている。そうして、住宅街を抜けて、となりの地区へつながっているのだが、なにしろ住宅街に入つてしまうので、窓の外をぼんやり眺めているような店員は期待できず、聞きこむにしても相当な手間がかかりそうだった。彼は、素直に上司に現状を報告し、動員数を増やしてもらつた。シュミットが、ふたたび呼び戻された。そのほか二名の捜査官も加わつた。彼らはねばり強く働いた。が、結局決定的な手がかりは得られなかった。薄暗くなるころ、ライオネル捜査官はひと

まず、がっかりして引き上げた。

ひとつの決断と、みんなの眠れぬ一夜

「悪い、おれの責任だ」

セフィロスが入ってきたとたん、ピルヒエさんがすまなそうに云った。

「なに云ってんですか」

ザックスが吐き捨てるように云った。

「あいつが勝手に単独行動に走るのはいまにはじまったことじゃないんです。いわば、有史以前からの風習ってやつで……なあ、ボス？」

ボスは額に手を当てて、ソファに力なく沈みこんだ。部屋の中にはカーニング、フリッツ、バロツサの三名の捜査官がいて、セフィロスに心配そうな顔を向けた。

「なぜあの子は、こうばかなことばかりするんだ。じっとしていられないにもほどがある。余計なことするなとあれほど云ったのに！」

コランダー捜査官とピルヒエさんは、このセフィロスのせりふに顔を見合わせてそっと笑った。まるで母親みたいな小言を、このきわめて立派な体軀をした、まだ若い、端

正な男が発したことが面白かったのだ。

「その話、あとにしようよ。考え出したら、あいつのこと助けようって気持ちがなくなっちゃう」

ザックスがげんなりした顔でため息をついた。

「せっかく捜査官のみなさんが何人も、この寒い中、午後じゅう走り回ってくれたつてのにさ」

「どうも申し訳ありません」

セフィロスが立ち上がって頭を下げようとするので、コランダー捜査官はあわてて手を振り、彼の肩を押してソファに戻した。

「いいんです、いいんです。もとはといえば、わたしが悪かったんだから。あの子を新聞記者に仕立てあげたのはわたしなんだから。でも、こんなこといつまでも云ってないで、わかったことをお話ししましょう」

コランダー捜査官は、ライオネル捜査官に目ませをした。くそまじめな捜査官はくそまじめな顔で立ち上がって、ホーブニツエル教授との会談の最中に、ストライフ君がいかにして消え失せたか、またいかなる方法でもって、清掃員に扮したクルスをつきとめたと思われるか、そしてまた、

ストライフ君の捜査がいかなる結果に終わったかをかいつまんで話した。話を聞きながら、セフィロスの眉間に徐々にしわが増えていった。ザックスはそれを見て、心のなかで大きなため息をついた。それから、友だちの閣下に向けて、相変わらず心の中で、あらんかぎりの悪態をついた。

「いまも捜査官数名が聞きこみにあたってますが」

ライオネル捜査官は苦しい顔で云った。

「どうだかわかりません」

部屋の中は、重苦しい空気に包まれていた。外はもう真つ暗で、それがみんなの気持ちを一っそう暗くさせた。ザックスが頭をかき、「ああもう！」と云った。

「閣下のこと見つけたら、頭ぶん殴って、じゃがいもの袋につめて押入れにつめてやる」

「それはどちらかというと悪人向けの仕置きじゃないか？」  
セフィロスが相変わらず眉間にしわを寄せたまま云った。  
「悪人だろ、あいつ。あんた、よくあんなのと一緒にいられるよ……まあ、おれもだけど」

「落ちつけ。クラウドがそのクルスに尾行を気づかれ、捕まったのだとして……おそらくそうだろうが……それでも、

最優先事項は助手のなにやら腹黒いたくらみを阻止することだ。クラウドの捜索に必要な以上に時間をかけるいわはない」

「ボス！」

ザックスは悲鳴のような声を出した。セフィロスはいつもとなんらかわりない、落ちついた顔で、ザックスの悲鳴を制した。この発言にはさすがに捜査官たちもピルヒエさんもびつくりして、セフィロスの顔をまじまじと見つめてしまった。

「そうだろう？」

ザックスはなにか云いたそうな顔をしたが、あきらめて、歯をガチガチ云わせ、黙りこんだ。これは、セフィロスとザックスにとっては正式な仕事ではなかった。が、捜査局にとつてはれっきとした仕事であり、それを邪魔してしまったのはこちらの責任だった。人間的な感情を抜きにしたら、セフィロスの云うとおりだった。

「はい、そうです、ボス。つてわけで、コランダーさん、あいつの捜索はもういいです。余力があつたらひとを回してくれたらうれしいけど、でもそれより、明日のことに集

中してください。明日の話しましょう。っていうか、そもそも！ やばいことがわかったんだ、ボスにはまだ云ってなかったけど」

ザックスは、鏡に関する重大な発見を大急ぎでセフィロスに伝えた。例の神殿の意味も。

「今回の調査自体を中止にするべきです」

カドバン准教授が真剣な顔で云った。

「いまならまだ間に合う。わたしが教授に話をつけます。

その鏡がシノザキ君の手にわたってしまうことを考えると、この調査は、あまりにも危険です」

「わたしもそう思います」

ライオネル捜査官が云った。

「先回りしたり、あとをつけたり、そんなことをやってる場合じゃありません。これはあきらかに、われわれの手に負えないレベルのものです。それがもし、悪さをしたら……」

「……そうだな」

コランダー捜査官は云った。

「計画は変更だ。シノザキ助手は逮捕しよう。そうすれば、

少なくとも、彼が妙な行動に出るのは防ぐことができる」  
捜査官たちがため息をついた。カドバン准教授が、懷から携帯電話を取り出した。

「……いや、ちょっと待って下さい」

セフィロスがふいに云った。みんなが彼を見た。

「今回の場合に限っては、それでことなきを得るでしょう。でも、後世の人間が、性懲りもなくあの神殿の調査をして、そして、たとえ鏡が失われていたにしろ、なんらかの方法を使って、その封印を解いてしまう可能性は、百パーセントないのでしょいか？」

みんなカドバン准教授を見た。

「……ない、とは云えません」

准教授は苦しい顔つきで絞りだすように云った。

「神殿の、その根本的な原理や仕組みについては、われわれは驚くほどなにも知らないのです。ですから、なんらかのきっかけで作動することは、ないとは申せません」

セフィロスは眉を上げた。

「では、ここから先はわれわれが受け持ちます。なにが云いたいかというと、シノザキ助手をこのまま泳がせ、そし

て神殿のしかけを解除させます」

捜査官たちがどよめいた。

「もちろん、みなさんを巻きこむつもりはありません。ですから、引き受けますと云ったのであって……わたしと、それに同僚のザックスが、現地へ向かいます。助手に予定通りの行動を取らせ……もちろん、ひとを殺しそうになった場合は止めますが……化け物が出てきたら、それをどうにかする。そうすれば、少なくとも脅威はなくなるわけだから」

セフィロスは静かに云った。部屋中が、打たれたように静まり返った。沈黙を破ったのは、ライオネル捜査官だった。

「しかし、もしその怪物が手に負えないものだったら、どうするんです？」

セフィロスは苦笑した。

「どうでしょうね。しかし、自分を過信するものではありませんが、そういうことにはならないと思います。あなた方は実態をご存じないが、この星におけるあらゆるものの中で、われわれソルジャーという存在が、もっとも化け物じ

みている」

「……おれもそう思うよ、ボス」

ザックスがつぶやいた。

「云つてみりや、化け物どうしてことよね。仲良くなれるかも？ タッグ組んでさ、踊っちゃったりなんかしてね」

ザックスがふざけて笑った。でもみんな笑わなかった。ザックスはひとがよさそうに肩をすくめた。

「ま、そんなわけで、明日はおれとボスがちよつと出張してくるつてので、どうでしょうねみなさん。もちろん、迷惑かけません」

みんな押し黙つて、重苦しい、考えこむような顔をした。ライオネル捜査官なんか、苦虫を噛み潰した、ということばがあるけれど、苦虫というより、ぶちゅつと潰れるなにかの幼虫でも噛んだみたいな顔だった。

「……あんたらがいいなら、おれはついて行きたいんだけどな」

ピルヒエさんが云った。

「おい！」

コランダー捜査官が叫んだ。ピルヒエさんは涼しい顔で肩をすくめた。

「おれは明日の朝、腹痛起こして二、三日有給休暇消費するのさ。どうせ毎年ほとんど取らないんだ。それくらい、大目に見てくれるだろ。それにだねえ、新聞記者つてのは、好奇心が強くてどうしようもない人間なんだよ。途中まで参加してたのに、しまいまで見届けずに引き下がるつてのができない人間でね。まあ、病気だな。人間が歪んでるんだよ。実に魂を害される仕事で……」

「しかし……」

コランダー捜査官は肩をしかめて、口を挟んだ。

「あーあー、待った待った、おまえの意見なんかどうだっていいんだ。おれはこのふたりに訊いてるんだよ。それともおまえ、いますぐ教授のフラットに乗りこんで、なにもかも事前に食い止めるかい？ それならそれで、おれは記者として同行するよ。んで、あすの朝刊のトップはその記事だ。徹夜仕事で記事を書く。どっちだ？」

今度はみんな、コランダー捜査官の顔を伺った。捜査官は、あんまり肩をしかめたので、左右の肩がつながったみ

たいに見えた。

「おれは胃が痛いよ！」

捜査官は重たい気持ちで晴らすように陽気に云つてのけたので、思わず一人称が素の「おれ」になった。

「ここは民主主義国家なんだから、多数決を採択しないか？ 挙手して投票するんだ。こんな問題を、ひとりじゃ決められない。最初に、われわれはいますぐ助手を逮捕すべきだというひとは挙手してくれ」

カドバン准教授が手を挙げた。ライオネル捜査官も。

「じゃ、危険を承知でこのふたりに化け物退治を依頼するつてやつは？」

それ以外のひとがみんな手を挙げた。

「……決定だ」

コランダー捜査官は肩をすくめた。

「ただし、ひとつ条件があるんですがね」

バロッサ捜査官が手を挙げた。

「おれたちも行きます」

セフィロスとザックスは顔を見合わせた。

「途中放棄ができない性分は、なにも記者の連中の専売じ



やないんで」

捜査官たちはやにやした。

「だけど、わかってます？ あぶないですよ？ しかも、

おれ情け容赦なくすつこんでろ！ とか云うし」

ザックスが頭を掻きながら云った。

「もちろん、そっちの指示に従うよ」

フリッツ捜査官が手を振り回した。

「だけど、たとえば調査団のメンバーみんなを、誰が安全に避難させるかっていったら、そういう要員が必要だと思

うんだ」

「で、君たちは化け物退治に集中してもらう。悪かないよな？」

カーニング捜査官がまとめた。

「……確かに」

セフィロスが認めた。

「あとは、あなたがたのボスの判断次第ですが」

コランダー捜査官の顔に、ふたたび視線が集中した……

今度は、若干の期待をこめて。

「……ああ、わかったわかった！」

捜査官のボスはみんなをなだめるように両手を振った。

「好きにきなさい！」

三人の捜査官はハイタッチをし合った。カドバン准教授はため息をつき、ライオネル捜査官は顔をしかめて頭を掻いた。ピルヒエさんは「いよっ！」と友だちをはやしたてた。そしてセフィロスとザックスはというと、苦笑しながら顔を見合わせた。

「でもおれたち、明日教授たちが出発する前に先回りしようとしてるから、朝早いですよ。教授は八時半に出発なんですよ？ ピルヒエさん」

ザックスが云った。ピルヒエさんはうなずいた。

「ここ七時半には出ますけど」

「ま、そりゃいいんだ。そういうのは、慣れてるから」

バロッサ捜査官が云った。ザックスは肩をすくめた。

「それから、まだ大事なことがある」

コランダー捜査官は云った。

「ストライフ君の搜索は、続けるよ、なんとしても！」

ときに、記者見習いのストライフ君は、後頭部を殴打さ

れての昏睡から目覚めると、すぐに身構えてあたりを見回した。薄暗かったので、最初ははつきりとは見えなかった。

目が暗がりになってくると、どうやら浴室に閉じこめられているらしいことがはつきりした。クラウドは浴槽の中に転がされていたのだ！ 両手と両足は太い縄でがんじがらめにしばられており、口には布きれをかませられていた。

なんたる屈辱！ クラウドはくやしくて、歯ががちがちいいはじめた……もちろん、布きれのおかげで音をたてることはできなかつたけれど、もしそうでなかつたら、獰猛な狼並みに歯を鳴らしていただろう。

クラウドはさすがすぎる頭と、まだどこなくぼんやりする視界を抱え、腰を浮かせたり脚をちよつとばたつかせたりして、自分の身体の状態を確認してみた。とりあえず、派手な怪我はしていないみたいだった。クラウドはあわてて腰のベルトにつけたガス・ピストルを確認した。そのままそこにあつた！ やれやれ！

ふいに話し声が聞こえてきて、クラウドはあわててまた浴槽の中に転がって、目を閉じた。

「兄貴、やっぱりあの子ども死んじやつたんじゃない？」

ちよつと強く殴りすぎたんだよ……心配だなあ」

「うるつせえなあもう。おりやあもうほんとにおめえと組むのがいやんなつちやつたよ！ ガキが死んだらどうだつてんだよ、ええ？ 明日の朝、街から出たらどつかそのへんの森の中へ転がしときやいいだろ！ 狼の餌になるか、そんなもんさ！ たとえ春になつて死体がめつかつたつて、それまでだよ。そのころおれらはもうここにあいいねえんだから。だいたい、ひとのあとつけてくるようなガキは、信用ならねえよ。ろくなことにならねえや。いったいどこの誰が差し向けたんだろうな……ま、どうせそろそろ目覚ますよ」

「そろそろつて、いつき」

「知らねえよ！ もう三十分か、そこらだろ」

「もし死んでたら？ 大人を殺すのと、子ども殺すのとじゃわけが違うよ」

「だから、そんなこたあおめえが気にすることじゃねえつての！」

ふたりのやりとりは滑稽だったが、クラウドは自分の尾行が気づかれていたんだと知つて、ものすごく悔しくてそ

れどころじゃなかった。気づかれて、逆におびき寄せられて、捕まるなんて最低だ！

浴室のドアが開いて、男たちが入ってきた。クラウドは目を閉じる代わりに耳をダンボにして、様子をうかがった。「けっ、まだ寝てやがらあ！ だけど、ガキは寝るもんだよー」

「毛布かけてあげようよ。あと、ミルクとパンも置いといてあげなきゃあ。アレルギーがなきゃいいけど……」

「あーあー、いやな世の中だねえ。なにかもが昔とは違うんだから。アレルギーに、偏平足に、神羅とくらあ」

「偏平足ってなにさ」

「おれの足のことだよ！ じいさんの遺産さ。べたーっと地面にくっついて、かつこ悪いったらありやしねえ。すぐ痛くなるしよ」

ふたりは出ていった。クラウドは起き上がった。自分が、軍の関係者だなんて思われるのはとりあえずまずい。セフイロスやザックスとの関係を突き止められるなんてことよりは、ひとりで死んだほうがましだ。ここは、だんまりを貫こう。拷問されたって、なんにも吐くもんか。クラウド

は決めた。で、起き上がって、腹にぐつと力を入れた。そのときちょうど、ものすごい馬面のベツポの方が、毛布と食べ物の乗ったお盆を持って入ってきた。彼は浴槽のドアを開けて、クラウドが起きているのでびっくりして、一瞬固まった。それから、あわてて毛布とお盆を床に置くと、「兄貴、兄貴！」と云いながら走っていった。

「あの子、目を覚ましたよ！」

その声は、どこから聞いてもあからさまにほつとしていた。

「だから云っただろう、このまぬけ！」

ふたりの男の足音がどたどた響いた。そうして、浴室の明かりがついた。クラウドは、男たちを睨みつけた。ふたりの男たちも、浴室のドアの前で立ち止まって、動くのをやめた。三人は、奇妙な沈黙の支配する、膠着した時間を何秒か過ごした。

「なあ、おい、坊主」

クルスが浴室に入ってきて、浴槽の前にしゃがみこんだ。そうして、クラウドの口にあてがっていた布切れをとった。「おめえ、なんでおれたちのあとついてきた？」

クラウドは黙っていた。

「黙ってたんじゃないかねえだろ」

クラウドは強情に黙っていた。クルスは「けつ」と云った。

「んじゃあ、一生黙ってるよ。どうせおめえは明日のうちに死んじゃうんだしな」

ベツポが「兄貴！」と叫んだ。

「相手は子どもなんだよ！」

「子どももへちまもあるかよ。いいか、おれたちはあとをつけられて、逆にはめ返してやったけど、これはまずいことなんだ。このガキは、人畜無害なただのガキじゃねえとおれは思うね！ 十中八九、どっかの探偵社とか、なんかの回しもんだ。ガキを使うなんて、おちよくられたもんだよ！」

「そんなあ、兄貴、かわいそうだよ……」

「うるせえ！ おめえは黙ってるよ！ そうやって同情すると、結局あとで自分にいやーな形で返ってくるんだ。そういうもんだよ、世の中！」

クルスは大腿で浴室を出ていった。ベツポは実にあわれ

な顔をして、出ていってしまった自分の兄貴と、とらわれの少年を交互に見やった。

「ごめんよ」

ベツポはそう云って、いったん部屋から出て行くと、毛布と、ミルクとパンとチーズが乗ったお盆を持ってきた。

「今夜は冷えるからさ。これにくるまってなよ。それからこれ、ご飯」

ベツポはまた世にもあわれな顔をした。

「おいらだつてさ、なんとかしてあげたいよ。でも、兄貴の手前、それもできなくてさ。兄貴、あれで面倒見がよくて、おいら、すぐく世話になってるし。君のことはかわいそうだけど、兄貴に逆らうわけにいかないんだ。悪く思わないでよ、ね？」

義理と良心の板挟みだ。この世の中に、よくあるやつだ。

クラウドは、この馬面のへんな男のことを、そんなに嫌いじゃなくなっていた。

「別にいいよ」

クラウドは云った。

「あんたのせいじゃないよ」

ベツポは真心のこもった顔でクラウドを見ると、そそくさと浴室から出ていった。

「まいったなあ」

クラウドは毛布にくるまって考えた。

「あいつら、おれのことどうするんだろう。おれ、生きて帰れるかなあ……」

セフィロスはひとりきりで、庶民的なホテルの部屋に戻った。ザックスもついてきて、別の部屋をとった。セフィロスはぜんぜん眠れなかった。クラウドは、いまごろどこにいるだろう？ 暖かいベッドの中とは、いきそうになかった。夕食はなにか食べることができただろうか？ お腹を空かせると、あの子はともいらいしやすくなるから心配だ！ ああ、そもそも、彼は無事なのだろうか？

セフィロスはたまたまベッドから起き上がった。部屋の中をうろろし、窓から外を見、椅子に座りこんで、ため息をついた。そうして、ついにコートを羽織り、クラウドの母さんが作ってくれたマフラーを巻いて、部屋を出た。

フロントには誰もいなかった。セフィロスはそつと肩を

すくめ、表玄関から外へ出た……

「ボース、セフィロスさん」

突然、後ろから声がかかって、セフィロスは振り返った。

ザックスが、後ろに立っていて、にやにやしながらこちらを見ていた。

「こんな夜中にどこ行くの？」

「ついてきたのか」

セフィロスは苦笑した。

「やな云い方しないでくれる？ 月がとっても青いからさあ、遠回りして帰りたくなっただけ」

セフィロスは、こらえきれずに吹き出した。確かに、とてもいい月が出ていた。ぜんぜん気がつかなかった。

「どこ行くのさ」

ザックスは相変わらずにやにやしながら、セフィロスと並んで歩きだした。

「あの子がいなくなったというあたりまで、行ってみようと思うて」

「でも、捜査官のみなさんが、がんばってくれてるんですよ？ 地元警察にも依頼してさ。あーあー、いい恥さらし

になっちゃうよ。軍の人間が、民間人に生け捕りにされたかも、なんてさ」

セフィロスはまた微笑した。

「そうかもしれないな。だが、おれ個人の問題としては、なにかしてないと、胃がでんぐり返りそうだ」

ザックスは声をたてて笑った。

「まあね。そうよね。わかるよ。動きがあるまで動けないつてのも、じりじりしちゃうよね」

ふたりは、麗しき十二月の月夜の中を歩きながら、しばしだまりこんだ。月明かりが地面に薄くつもった雪に反射して、青白い、幻想的なきらめきを見せていた。空気は切るような鋭い冷たさで、通りに並ぶガス灯をぼんやりと覆い、ふたりの男を取り巻いた。

「でもまあ、じりじりしてたってしょうがねえし。こういうときは身体動かすと、なんとなく気分が変わるっってもんよね。運動の効果って、すごいよねあ」

セフィロスはうなずいた。ザックスがこうやって隣にいて、のんびりした会話をともにしてくれていることが、せめてもの慰めだった。ふたりとも、同じ焦燥感を感じてい

た。同じ不安にさいなまれていた。けれども、どちらもまるでそういう競争でもしているみたいに、決してそれを見せなかった……ふたりは、いつもそうなのだ。不安は口にせず、悪い予感ばい飛はし、淡々と、ただ人生がいい方向に流れると信じて、その時間を生きるのだ。広大で変幻自在な人生の前に、少しでも頭の働く人間は、そうすることしかできないのだといずれ悟るものだ。人間は神ではない。すなわち、神は人間ではない。よって神は、人間が思うほど意地悪でも、無慈悲でも、節操なしでもない……。

セフィロスは祈りに近い気持ちで、クラウドの無事を願っていた。あのやかましい子が消えてしまったら、自分はこの先、いったいどうやって笑って生きていくというのだろうか？ そんなことは、とうてい考えられなかった。だから、まだ、彼がいなくなるには早すぎる。だから彼は、いなくならない。

「エアリスちゃんが十八になったらさあ」

ザックスがふいに月を見上げて云った。

「ザックスちゃん、プロポーズなんてしようと思ってるのよね」

セフィロスは首を小さく傾けて、続きを促した。

「これ、来年の話。あの子、二月生まれなの。あとちよつとだわ」

ザックスは鼻を鳴らした。セフィロスは「そうだな」と云った。

「閣下ちゃんが十八になったら、セフィロスちゃん、そういうことする？」

セフィロスは、ザックスと同じように月を見上げて、微笑した。

「かもしれない」

そうして、ひとつ息を吐いた。

「だがあの子の場合、向こうからしてきそうだな。たぶん、自分こそが大黒柱だ、と云うだろうな。意地でもおれを養いにかかるに違いない。稼がざる者は黙っている、と云われそうだ。あれは、なかなか責任感のある亭主閑白な亭主になるような気がする。ただし、肝心なところだからつきしなんだが。そんな気がしないか？」

ザックスは気味が悪くなるほど笑った。

「だいたいあいつ、仕事に不自由なさそうでもないな。い

くつの職業に勧誘されたっけ？ 整備士だろ、スパイだろ、

チヨコボの御者だろ、世界中に仕事のあてがあるよ。どれやっても、食っていきそうだし。仕事嫌いなやつに、仕事好きなやつがくつつく。ずばらに潔癖性がくつつくのおんなじだよな。世の中って、反対どうしでうまくやっつてんだ、きつとさ」

「ああ、そうだろうな……」

ふたりはとりとめもない会話をしながら、ソルジャー基準の早足で、クラウドが行方知れずになったというひどくうらぶれた地区まで来た。

「ずいぶん遠いところまで来たのね、閣下」

ザックスが小声で云った。セフィロスはうなずいた。

「こりゃあ、探すのに手間取るわけだわ」

ザックスはぐるりを見回して、ため息をついた。安普請のアパートやホテルが立ち並んでいて、おそらく相当数の人間が、法に則らないかたちで住んでいるに違いなかった。こういう地区のホテルのオーナーやアパートの大家は、金さえまともに払って、かつもめごとを起こさずにおいてくれれば、借り手がどこの人間だろうが、どんな経歴の持ち

主だろうが、あまり頓着しないものなのだ。たとえ貸し与えている部屋のひとつである日突然出産が執り行われようが、そんなことはぜんぜん気にしないし、その結果生まれだ赤ん坊のことについては、苦情が出なければなおのこと気にかけない……。このあたり一帯に、正確にどれくらいの人間が住んでいるのか、警察だって把握できていないに違いない。

ふたりはしばらくあたりをうろついた。途中で、捜査官に会った。重たいコートを着て、寒そうに肩をすくめている。

「ちくしょう、冷えるなあ！」

ザックスがつぶやいた。セフィロスは「そうだな」と云って、ため息をついた。しばらくあたりをうろついたが、結局、なんの手がかりも得られなかった。クラウドが凍えなければいいのだけれど。セフィロスは考え……。首を振った。



## 小休止その2

### 教授とその助手の会話

「シノザキ君。GPSは必要な台数ちゃんとおったね？」  
ホープニツツエル教授は助手に訊ねた。ホテルの一室のソファの上で、教授は書類をめくりめくり、頭を掻いていた。今回の実地調査に、カンパニーからの資金援助をとりつけられたのはほんとうによかったが、それは同時に神羅に対して大きな貸しを作ってしまうということでもある。見返りを求められることは必須だ。教授は無意識のうちに、胸にせり上がってくる不安を、目の前の調査準備に対する不安に転嫁してしまおうとしていた。

「大丈夫です」

助手は、パソコンを操作する手を休めることなく云った。

「わたしが納品まで見届けました。軍で支給されているのと同じ最新式です」

「そうか」

教授はため息をついた。

「それなら安心だ」

シノザキ助手は、熱心にキーボードをかたかたやりだした。必要なこと意外しゃべらないこの助手を、教授はときどき気味悪く思うことがあったが、才能があることだけは確かだった。彼には、瞬間的なひらめきと着想、そしてそれを実証するだけの思考力と検証力がある。その点、学者としては申し分ないけれど、でもこの助手には、どこか危険なところがあった。教授はそれを見抜いていた。シノザキ助手の意見や論文は、調子がどこか攻撃的であり、急進的な、是が非でも成果を出そうとするところがあった。それは研究対象に対する愛着というよりも支配意識を感じさせ、教授は彼を自分が抑えておかななくてはいけないと強く感じていた。

教授は鏡のことを考えた。あの鏡の意味を、誰にも知られてはならない。どうかして、気づかれないように処分しなくては。それにしても、あのラスカ社長のお嬢さんには悪いことをした！ お見舞いに行ってはみたが、気持ちちはちつとも軽くならなかった……。

「教授、探索ルートについてですが……」

助手のひとことで、教授ははっとして顔を上げた。助手はいつの間にかデスクを離れて、目の前に立っていた。教授は、理由もなく背筋がぞっとした。それから気を取り直し、曖昧なことばをつぶやいて、彼の話に耳を傾けた……。

## 第四章 普通じゃない遺跡調査

### みんな出発

翌朝は、殴りつけたくなるくらい晴れそうな空模様だった。まだ早朝六時前で、あたりは薄暗かったが、空には雲ひとつなく、澄みきっていた。セフィロスは結局一睡もしなかったが、ベッドから起き上がり、ふとクラウドが履いているブタの室内履きに目をやって、それを取り上げ、丸っこいブタの顔を撫でた。それから勢いよく立ち上がった、着替えをすると、ザックスの部屋のドアを叩いた。

「おっはようボス！」

ザックスは元気だった。背中には、例のどうしようもない大きさの剣をしょっている。

「いい天気ね！ 行動するにはもってこいだよ。さてと。とりあえず、捜査局へ出向。の前に、どうかで朝食食っていい？ そんなにしっかりじゃなくていいのよ。パンと、ジュースくらいで。大食い仲間の閣下がいないと胃の調子

が出なくてさ……」

十分後、近所のカフェで、彼はバタパン四切れとベーコンの塊とソーセージ三本と炒り卵とボウルに山盛りのサラダと、りんごとヨーグルトという比較的小規模な食事をすませ、チョコボ車を拾うついでにオープンしたてのドーナツ屋でドーナツを三ダース買い、コーヒーショップで熱々のコーヒーも買って、捜査局に突撃した。

まだ朝の七時だった。建物の中にはほとんどひと影がなかった。ふたりは音も立てずにエレベーターで四階へ上がり、すっかり会議室と化してしまった例の応接室へ入っていった。捜査官たちがそろっていた。一緒に現地に向かうことになっている三名の捜査官は、いつものスーツ姿ではなく、登山にでも行くような格好をしている。カドバン准教授もソファの隅っこに座って、朝食のクロワッサンをもぐもぐやっていた。コランダー捜査官はふたりを見とめると、にこやかに微笑み、あほんだららのピルヒエ記者がまだ来ないのだと云った。

「昔から、時間にはちよつとだらしないやつで。べらぼうに早いかと思うと、三十分も遅刻したり。まったく！」

「まあまあ、かつかないで。教授たちの方はどうなつてます？」

「まだ動きはないようです」

くそまじめのライオネル捜査官がまじめな顔つきで答えた。

「出発予定は八時半時だそうですしね。動きがあれば、連絡が来ますよ」

「で、われわれは七時半と。そろそろ、裏庭にチヨコボ車が来るころだと思ふんだが……」

コランダー捜査官があごをさすりながら云い、フリッツ捜査官が裏庭を覗くため、部屋を出ていった。

「裏庭に、二台来てますよ」

彼は戻ってきて云った。

それから三十分は、荷物を運んだり持ち物を確認したりして、あつという間に過ぎた。特殊部隊がやってくると、あたりはいっぺんにものしい雰囲気になった。ゲインシュタルトさんは、荷物を運んだり、GPSや無線の使用方法を習ったり、まめまめしく動きまわった。彼ほどの経験のある駆者でも、捜査局の捜査に協力するのはじめて

だった。

「歴史的一瞬つてやつだね」

ゲインシュタルトさんは相変わらずパイプからもくもく煙を吐き出しながら、軽やかに云った。

「ゲインシュタルト家はじまって以来さ。捜査に協力するなんて。まったくこりゃあ、名誉なことつてのか、なんてのかね！」

チヨコボ車は二台で、ケルバがリーダーを務める。彼はいつもより引き締まった顔をして、少し緊張しているようだった。セフィロスは彼に微笑みかけ、身体を叩いた。ケルバは小さく「クエ」と云つて、すっかりなじみになった男にちよつとばかり甘えるように身体をすりつけた。

ピルヒエさんは出発十五分前になつて、ようやく裏庭に姿を見せた。

「よう、遅くなつて悪いな。娘の具合が悪くなつちまつて、かみさんがゆうべからいないんだ。臨月でな、娘は。おかげで時間通りに起きて、飯食つて着替えるだけで大仕事だったよ。男つて、まったくなあ！」

その場にいた既婚者の男たちは皆、同情をこめて笑った。

ビルヒエさんが、出発準備の最後の仕上げみたいなのだったので、コランダー捜査官は一同を見回し、なにか忘れたものがないかざっと確認した。今回神殿へ行くのは全部で七人。セフィロスとザックス、三人の捜査官、ビルヒエさん、それにカドバン准教授だ。

「出発前に、皆さんに云つときたいことがあります」

いよいよ出発という段になって、ザックスが真剣な表情で手を挙げた。

「やばいのが出てきたら、皆さんはぜったい手出ししないでください。自殺願望がなきや」

「おれらをなんだと思ってるんだよ」

バロツサ捜査官がにやついた。

「それでも、危険な場面にはちよつとばつかし慣れてるんだよ！ あんただけが危険な任務こなして、死の淵から何度も生還してるわけじゃないんだ」

ほかの捜査官が、拍手したり口笛を鳴らした。

「そこなくっちゃ」

ザックスも同じようににやついた。

みんな、チヨコボ車に乗りこんだ。その様子を見守って

いたライオネル捜査官が、ついにたまりかねた様子で口を開いた。

「あの、ぼくも連れてってもらえませんか？」

みんなはいっせいに彼に注目した。

「ほら、チヨコボ車は四人まで乗れるから、あと一名、空きがあるでしょ？ その、考えたんです、ぼくは……」

「とつとと乗れよ」

フリッツ捜査官が云った。

「おまえがおとなしくこのまま黙ってたなら、それこそ、見損なうとこだったもんな」

みんな笑った。

セフィロスとザックスは顔を見合わせ、唇を持ち上げて笑った。そうして、おもむろに手を挙げ、ぱちんと音をたててタッチした。ミッシェン前の、彼らの儀式だった。

ゲインシュタルトさんが、ケルバとパンゴに出発の合図をした。二匹は身体を震わせ、力強く一步を踏み出した。総指揮を取るコランダー捜査官は、走り去るチヨコボ車を見ながら、深いため息をついた。

クラウドは寒さで震えて目が覚めた。最悪の目覚めだった。風呂場の浴槽の中で、両手両足を縛られた状態で毛布なんかかけられていたって、なんの役にも立たない！クラウドは鼻をすすり上げ、あたりがまだ薄暗いので、これは朝早いな、と思った。ゆっくり起き上がって、両手両足を伸ばせたらいいのになあと思いながら、精一杯身体を動かした。

「あーあ！」

クラウドは心の中でため息をついた。

「セフィロス、おれがどうしちゃったんだろうって思ってるよな。向こうには晩ごはんまでに帰って来いって云つていて、おれはこのありさまだなんてさ、ダッサいなあ！」

そう思うと、クラウドはちよつとだけ泣きそうになった。ふたりで眠るときベッドの中の暖かさを思い出し、それから母さんのことを思い出して、クラウドは急にとてつもなく心細くなった。子どもみたいに、母さん！と大声で泣きながら叫びたいような気持ち。でも、彼はすぐに気を取り直して、頭を振り、縁起の悪いことや、自分を弱らせるだけのことは、金輪際考えないことにしようと思った。

浴室のドアが開いて、ベツポがお茶とビスケットを持ってきた。でも両手を縛られたままだったので、まことにやりにくい状態で、食事にはずいぶん時間がかかった。「兄貴がさ、君を、これから別の場所へ連れてくんだって。おいらたちも行くんだ」

「どこへ？」

クラウドはダメ元で訊いた。ベツポは肩をすくめて、「行けばわかるよ……」と云った。彼はまだ良心と戦っていたので、長いことクラウドを見ていられないように、皿やカップを持って、そそくさと出ていってしまった。

それからしばらくしてクルスとベツポが入ってきて、クラウドは足の縄を解かれ、背中にピストルをつきつけられながら、浴室の外へ連れ出された。クラウドは背中に当たる硬い感触のことをつとめて意識しないようにして、「おれだってガス・ピストルなら持つてるのになあ！」と心の中で毒づいた。こういうときは、是が非でもちよつと意地悪くらしいものの考え方をしないといけない。

部屋の中は綺麗に片づけられ、ふたりがもうここへ戻ってくる気がないことは明らかだった。クルスもベツポも、

大きな旅行カバンを持っていた。

クラウドが昨日そこから入ってきた裏口を抜けて外へ出ると、生垣の先に、チョコボ車が停めてあった。馭者はいない。どっかが自分で運転するつもりなのだろう。クラウドはいささか乱暴に車の中に押しこまれ、クルスが横に座った。ベツポは車を走らせる係らしい。車が動き出した。クルスは車の覗き窓を、カーテンを引いて覆ってしまった。狭いチョコボ車の中で、ピストルを向けられながら、泥棒とふたりに移動するのは、正直云ってあまり愉快な経験ではなかった。クラウドはしだいに気分が悪くなってきた。自慢の乗り物酔いだ！ こんな密閉された空間にいたら、出てくるに決まっている！

クラウドの我慢が限界に達する寸前で、つまり二十分ほど走って、車が止まった。あたりはなにやらがやがやしている。荷物をこっちへよこせとか、コンパスはあるかとか、そんなことばが飛び交っている。クラウドはびんときた！ いま、教授のフラットの前にいるに違いない。彼は猫みたくに耳をすまして、音からあたりの様子を探ろうとした。ひとの声は、すこし遠くから聞こえてくる。その反対側か

らは、ときおり車輪が通る音がする。道路脇に車を停めているのだ。クラウドは大急ぎで、昨日見たフラット周辺の光景を頭の中に思い浮かべた。いまここで、叫びだすとか、なにかできればいいのに！ このチョコボ車の目と鼻の先では、みんななんにも知らずに、動き回っている……。

ふいにドアが開いて、ウータイ人が入ってきた。シノザキ助手だ！ クラウドは反射的に身体を固くして、身構えた。助手はクラウドをいやな目つきで一瞥した。それから、向かいの席に腰を下ろした。

「これが電話で云っていた少年だな」

「へいへい、そうなんだ。ま、うまいこと始末できるでしょう。都会で殺すより、森の中ってね」

助手はうなずいた。

「鏡は持ってきたか？」

「へいへい、ここに」

クルスはポケットから紙でくるんだ包みを取り出して、助手に渡した。助手は乱暴に紙をやぶいて、中身を確認した。彼の小鼻がびくびく動いた。間違いなくマテイルダ嬢に見せてもらった、あの鏡だった。助手は一瞬、満足そう

な、でも嫌な感じのする笑みを漏らした。それから鏡を、持ってきた自分のリュックサックの奥に押しこんだ。

「あとは神殿までついてって、教授たちを脅しあげて財宝を奪っちゃえばいいと」

クルスは云い、にやにや笑った。

「半分は、おれたちがもらうので間違いないですね」

助手は小鼻を神経質にびくびくさせ、口を開いた。

「もちろんだ。古代種美術品のコレクターには悪いのが多いから、売ればかなりの値段になるだろう。教授たちは全員、大変残念なことだが、調査中に不慮の事故で命を落とすことになるんだ」

クルスはぐふぐふと気味の悪い笑い方をした。

「わけのわからねえしかげがほどこされた神殿なんて、死体を隠すのにもってこいだ。そこにこの坊主がひとりまざれこんだって、わかりっこねえでしょうなあ」

クルスが持っていたピストルを、クラウドにぎゅっと押し当ててきた。クラウドは、奥歯を噛み締めた。いやな汗が流れてきた。

チヨコボ車のドアがこんこん叩かれた。

「シノザキさん、準備はよろしいですか？ 教授が出発するそうです」

外から、女性の声が聞こえてきた。助手は手短に「ああ」とだけ答えた。少しして、チヨコボ車は走りだした。

午前八時二十分、捜査局の電話が鳴り響いた。

「もしもし！ シュミットです！ ボス、聞こえますか？ 教授のフラットの前に、あやしいチヨコボ車が来しました。カーテンをびったり閉めきつています……シノザキ助手が、それにひとりで乗りこみました。馭者は帽子を深くかぶつて、コートのえりを立てて、明らかに顔を隠そうとしているように見えます……」

おそらく、それがクルスたちの乗ったチヨコボ車だろうということが、コランダー捜査官にはぴんときた。

「よし、ポルガーに電話して、そのチヨコボ車のことを伝えてくれ。少しでも、中の様子がわからないかい？」

シュミットはそれは無理だと答えた。

「わかった。ならいい。電話を頼む。教授たちが出発したら、君はこっちに帰ってきてくれ」



また電話が鳴る。

「こちらジョイス！ 教授たちが出発の準備をはじめました。チョコボ車に荷物を積みこんだりなんなり、てんやわんやです。チョコボ車は計三台、大所帯ですよ……」

「シュミットです。例のチョコボ車に、シノザキ助手が乗りこみました……」

電話がひっきりなしに鳴って、まったくてんやわんやだった！ でも、これはいつものことだった。コランダー捜査官は冷静に、それぞれの部下に指示を飛ばした。でもその慌ただしさは、時間にして約十分かそのらのものだった。八時半には、教授たちがフラットを出発した。依然気は抜けないが、ひとまずこれで、ひと息くらいはつける。コランダー捜査官はため息をついて、ザックスが置いていったドーナツに手を伸ばした。

いにしえの神殿で、じりじりする待機

チョコボ車は順調に進んだ。ケルバはセフィロスと通った道をちゃんと覚えていて、みんなをリードした。相変わらず険しい顔つきで、ときおりうしろを振り返って、後方の仲間がちゃんとついてきているか、確認したりもした。

途中で一度休憩した。みんな外へ出てきて、手を振り回したり、首を回したりしはじめた。ザックスは得意のスクワットで、縮こまった身体をほぐした。セフィロスも車から降りた。昨日休憩をとった泉のそばだった。そして昨日と同じように、チョコボたちは湧き水を飲み、特製の飼料葉をもりもり食べていた。ザックスはそれを見て、腹が減ったと云った。そこで、人間たちも食料を補給することにした。ザックスは朝のうちに買っていたドーナツを半分持ってきていた。彼はみんなにふるまい、みんなそれをばくついた。セフィロスは食べなかった。食べられるときに食べるといふのはサバイバルの観点から見ると正しいが、彼はそれよりも、任務の最中に食事によって胃に血液を奪われ、神経が弛緩することを嫌っていた。ザックスは、ボス

は本気モードに入っているんだなあと考えた。当然だろう。クラウドのことがある。ザックスはクラウドのためにドーナツをふたつ残した。そうすれば、クラウドがこれを食べに戻ってくるとでも思っているみたいに。

短い休憩のち、一同はふたたび出発した。約二時間後、彼らは古代種の神殿前に到着した。一同はいにしえの種族が残した壮大な建築物の前に、ため息をついたりただあつけにとられたりしていた。ザックスは驚いたときにいつも云う「ほあー」を云った。カドバン准教授はそそくさと車を降りて、夢を見ているようにうつとりした表情を浮かべていた。

「こりゃあすごい」

准教授は云った。

「まさしく、本物だ。ビデオ映像で見るとは迫力が違う！この計算され尽くしたピラミッドの形状をこんなに美しい！実に美しいですよ。彼らはほんとうに、偉大な種族だったのですなあ……」

セフィロスが相槌を打った。突然聞こえてきた「クエエ」という声で彼は振り向いた。ケルバが心配そうな顔で彼に

鼻先を近づけていた。

「おまえもクラウドのことを心配してくれるのか？」

ケルバはもちろんだという顔で鳴いた。セフィロスは礼を云って、彼の首を撫でた。捜査官たちがきびきびと行動を開始した。チョコボ車を神殿の裏に隠し、ビルヒエさんとカドバン准教授をその中へ押しこんだ。そしてゲインシユタルトさんに、指示があるまでぜったいに、なにがあってもここを動かないように念を押して、具合のいい隠れ場所を探した。セフィロスとザックスはすることがないので、捜査官たちがどんな仕事をするものか見学していた。もしかしたら、自分たちに役に立つこともあるかもしれないと思っただのだ。それにふたりは、自分たちの隠れる場所ならもう相談して決めていた。ザックスは神殿の上のブロックのあいだに身を隠す。セフィロスは木の上。

すっかり準備が整って、みんな耳に小型の無線をつつこんで、マイクを服にくっつけ、持ち場についた。そうしてしばらく陽気におしゃべりした。これまでいかに危険な目に遭ってきたかの自慢話だ。捜査局の連中は、軍隊の仕事について詳しく聞きたがった。ザックスは神殿の上から、

持ち前のよく転がり回る舌で、いろんなことをべらべらしゃべった。みんな笑った。セフィロスも、似たような話を何度も聞いていたにもかかわらず、思わず笑ってしまった。かすかな車輪の音を聞きつけて、セフィロスは首を伸ばして森の中を見やった。捜査官たちにはなんにも聞こえなかったが、ザックスもその音をとらえた。

「あと三分つてとこかな？」

ザックスが云った。彼は神殿の上から、双眼鏡と持ち前の視力で遠方を確認した。

「ご一行まもなくご到着！ チョコボ車三台のおなーりー」  
みんなくすくす笑った。セフィロスは相変わらずのザックスに微笑した。

教授たちの乗ったチョコボ車が、がらがらと音を立てて神殿の前に停まった。彼らは長々と時間をかけて、荷物を広げたり地図を確認したり、いろんな器具や機械の調子を整えた。シノザキ助手が、チョコボ車からなに食わぬ顔で降りてきて、カメラや、なにかの計測機のようなものを次々に引き出しはじめた。ザックスはそれをいちいち報告した。やがて、教授たちはチョコボ車を待たせて、神殿の中へ

入っていった。少しして、中からたいまつ<sup>たいまつ</sup>の明かりがぼんやり漏れてきた。そして、タイミ<sup>タイミ</sup>ングを見計らっていたみたいに、シノザキ助手の乗ってきたチョコボ車から、小柄な男が降りてきた。彼は捕らえられた罪人をひつたてるみたいに、ひとりの少年に自分の前を歩かせていた。

「閣下！」

ザックスが思わず小さな声を出した。セフィロ<sup>セフィロ</sup>スがそれを聞きつけて、クラウドがいるのか、と無線で聞いてきた。

「みなさん、やばいぞ。チョコボ車からクルスが降りてきた。クラウドを人質<sup>人質</sup>にしている。あいつに銃<sup>銃</sup>なんか、向けてるよ。神殿の方に歩いてく……ベツポ<sup>ベツポ</sup>もだ。あとからついてる。いま、ふたりとも神殿の入り口の横に陣取った。中を覗<sup>のぞ</sup>いてる。ありゃあ、なんかやりそうな雰囲気だ……」

みんな息をつめて動かなかった。ザックスからふたたびのんきな通信が入った。

「あいつら、入り口のところで中を見張<sup>みはり</sup>ってる。あいつらが入っていったら、おれも続けて降りてこうか？ そんでいい？ ボス？」

「それでいい」

ボスが答えた。

「アイアイ」

じりじりする時間が過ぎた。あたりは静まり返って、物音ひとつしない。

「動いた」

というザックスの短い声が、沈黙を破った。ザックスは神殿のつぺんから躊躇<sup>ちゅうちう</sup>せず飛び降りて、地面に音もなく着地した。そうして、神殿の入口へ回りこみ、中を覗いた。建物の裏手に待機していた捜査官<sup>さうさくわん</sup>たちが、じりじりと這い出してきた。

「イマーゼンシーイマーゼンシー、シノザキ助手が、石碑の前に立って、みんなにピストルを向けてる。その横に、閣下<sup>かくげ</sup>を人質<sup>人質</sup>にしているクルスと、これまたピストル構えたベツポがいる。どうしようか、ボス？」

「ふいうちの突撃だ。やつらを神殿の中へ行かせる」

「アイアイよ！ でもおれだけじゃかつこつかないから、みんなも来て！」

捜査官<sup>さうさくわん</sup>たちがいっせいに駆け出した。

発砲騒ぎ

ホープニツツエル教授とその研究チームの精鋭の面々……全部で七人いた。古代種たちにとって、七という数字は非常に神聖なもので、彼らもまたそれを重んじたのだ……は、皆興奮でひとりでに大きくなりがちな鼻穴と、緩みそうになる頬と、それをこらえるためにけわしくなりがちな表情筋とを抱えて、神殿の中に入っていた。ひとりでに松明が燃えはじめる。この仕組を、チームのひとりが五年もかけて研究しているのだが、いまだにほとんど成果が上がつていない。松明そのものになにか特殊な物質が含まれていると仮定して、あらゆる角度から科学的な分析を試みたのだが、結局なにも見つからなかったのだ。その研究員は今度は、この神殿の空気を採取して、その中になにか変わった特徴がないか調べることにしていた。

教授も含め何人かのメンバーにとって、この神殿に来るのは二度目だった。一度目はいまから五年前、本格的にこの神殿の調査にとりかかったときで、そのときは壁一面の壁画を写真と映像に撮ること、それからこの広間の石碑の

しかけを解くこと、それに、神殿内部に小型のカメラつきロボットを入れて、中の様子を撮影することで、予定していた期間がほとんど終了してしまった。古代種の遺跡調査は、ほかの考古学調査とはわけが違う。古代種遺跡の調査をする人間は、現代の人間が持っている常識、文化、科学技術、いわばその発展方向とはまったく違った、まったく別の方向へ展開していった文明を相手にしなくてはならない。人間がその発展において自らのうちの自然を封じこめて、世界の他の構成員からの働きかけを拒絶し、自らの頭脳で世界を相手取って進化していったとすれば、古代種たちはいわば、そういうものと調和し、そういうものの中に自らを見出し、そこから想像もつかないような力を受け取っていた。人間は、この力を感得する方法を知らない。まったく異種の力、別世界の、異形の力ともとれる。それを科学技術でもって調査することに、果たして意味があるのか……これは、ホープニツツエル教授が昔から研究のたびに思いつけてきたことでもある。彼は、良心的な研究者だった。だから、できればそれを道理のわからぬ人間の側から汚すようなことはしたくなかった。それに、それは大変

危険なことでもある。彼が例の鏡を、あんな非常識な手段に出てまで自分の手元に置こうとしたのは、そういう意図があつてのことだ。

彼があゝの鏡の存在を知つたのは偶然だつた。学術書を主に出している出版社主催の大規模なパーティーに出席したとき、その出版社の社長の娘だというマティルダ・ラスカ嬢がいた。美しい娘だつたが、彼女がなにげなく夜会バッグの中から取りだした鏡が、彼の注意を惹いた。それは彼の専門分野の品だつたからだ。彼はラスカ嬢からは離れたテーブルにいて、たまたま視線をそちらにやつていたにすぎないのだが、その鏡が、本来あり得ない赤い輝きをまとっているのを目にしたときには驚いた。そうして、どうしても確かめずにはいられなかつたので、彼女の父親にさりげなく頼んで、ラスカ嬢が席を立っているすきに、見せてもらったのだつた。そして、裏側のあの模様を見つけた。教授の中で、それは即座にあの神殿の、扉のくぼみとつながつた。つらい決断だつた。祖母の形見だという品を奪うのは心苦しかった。だが、もしも自分以外の誰かがこれに気がついて、悪用する方に考えたらどうなるだろう？ 彼

は責任を持つて、自分ひとりで処分しようと考えた。彼は調査に向かう前に、あの鏡を粉々にしてしまうつもりだつた。粉々にして、ゴミへ出してしまふ予定だつた。そうすれば、この神殿の、そのほんとうの全貌を世間に明らかにすることはできないが、古代種たちの意思を尊重することにはなるはずだつた。

その鏡が、忽然と消えてしまつた……教授は、昨夜遅く、鏡を破壊するためにそれを保管していた金庫を開けて、そのことに気がついた。彼は当然、うろたえた。それから、誰がこんなことをしたのか考えた。鏡の件は、誰にも話していない。勘のいい、自分の片腕であるカドバン准教授なら、集めていた資料を漁りでもすれば気がつくかもしれないが、彼はいまはミッドガルの大学にいて、そんなことをする意味がない。シノザキ助手……彼はこそそこそしている。彼が自分の研究資料を盗み見ているのではないかということとは、かなり前から疑っていた。だが彼が……否……もしかしたら……とにかく、断言できる自信はなかつた。

警察に届け出るわけにも行かなかつた。そんなことをしたら、この調査自体がおしやかになつてしまふし、それは

今回の調査をなによりも楽しみにしていたチームのメンバーのこと、それに、資金援助をとりつけた神羅カンパニーの性質を考えたら、できないことだった。あの会社は、当然自分たちがしゃしゃり出てくるに違いない。そうして、この美しい神殿を、その精神を、めっちゃめっちゃにしてしまおう。古代種たちの偉大な精神に、いわば土足で入りこみ、ひっかきまわして、汚してしまう。彼は眠れない一夜を過ごし、しかし表面上はなにもないように装って、調査に乗り出したのだった……計り知れない不安を抱えながら。

ひとしきりの感慨をやりすごしたみんなが、教授に早くしかけを解くようにせまった。教授はしゃがみこみ、石碑の土台部分にある三つ並んだ石玉の、真ん中の石にひとさし指で実に優しく触れた。すると、真ん中の石がちよっと浮かび上がった。教授は次に、左側の石に触れ、最後に右の石に触れて、三つの石を順番に触ってあっちへ動かし、こっちへ動かしした。石碑が音をたててスライドしはじめた。壁に取りつけられた松明が不安げに揺れ、やがて止まった。石碑は完全に左側にどけていて、床に真四角の穴が

空いていた。奥深く続く階段が見える。教授はため息をついた。立ち上がると、みんななにかを期待するように教授を見ていた。彼は小さく神経質に笑って、その気持ちに因應するため、短い演説をはじめた。

「さて、みんな、いよいよ中へ入るときが来た。人間がここの中へ入るのは、おそらく有史以来はじめてのことだろうと思う。そのひとりになったことを、わたしは誇りに思うし、そのために尽力してくれたみんなのことも、誇りに思うよ。ひとりひとりの熱意がなければ、わたしはここまで辿りつけなかっただろう。さて、現実的な話だ。科学技術のおかげで、われわれはまだ入ったこともないのに、この中の構造についてはあらかじめ知っている。けれども、決して油断しないように。どんな目に見えないしかけが待っているのか、わからないからね。鉄則を守って行動して欲しい。では、中へ入ってみることにしよう」

そのとき、シノザキ助手が手を挙げ、前へ進み出た。  
「大事なことを言い忘れていませんか、教授」

チームのみんなが眉をしかめた。教授は一瞬、どきりとした。嫌な予感が胸の中に広がる。心臓がふいに、激しく

脈打ちはじめる。

「……なんのことだね？」

シノザキ助手は、見るものを嫌な気持ちにさせる、歪んだ笑を浮かべた。

「鏡の件です」

教授は、瞬時にかつとなった。

「君……君が……！」

そうして彼に掴みかかろうとしたが、踏みとどまらざるを得なかった。助手がピストルを向けてきたからだ。あちこちから悲鳴が上がった。助手はにやにや笑いながら、教授の頭にピストルをつきつけ、彼と同じ方向を向いて、みんなに視線を注いだ。皆、恐怖に凍りついた顔、ひきつった顔をしている。教授はなすすべもなく、ただ無様に両手を胸のあたりに挙げ、唇を噛み締めた。

助手が、入り口の方に向かってなにやら合図をした。すると、ふたりの男が入ってきた。教授はその男たちに見覚えがあった。名前や素性までは知らなかったが、教授はこの瞬間に、自分が罠に落ちたことを悟った。自業自得だ。自分が依頼した連中が、自分の依頼を受けたように、よそ

の人間の依頼もたやすく受けるだろうということを、考慮していなかった。小柄な方の男は、まだ若い少年に、助手のようにピストルをつきつけながら、ひたつたるようにして歩いてくる。教授は、その少年にも見覚えがあった！ 彼は、取材の途中で、なにか見てはいけないものでも見てしまったのだろうか？ ふたりの男は、助手と教授をはさんで立った。のつぼの男が、メンバー全員に向かってピストルを向けた。

助手がにやりと笑って、口を開いた。

「教授は、みなさんに重大な秘密を隠していました」

彼は空いた手でポケットをまさぐり、例の鏡を取り出した……昨日までは教授の金庫に入っていた鏡だ。

「この鏡は、この神殿の意味を解き明かす上で、非常に大事なものです」

みんな、恐怖に固まった顔をしながらも、助手の掲げる鏡に釘づけになっていた。

「これがなくては、この神殿は本来の姿を我々の前にさらけ出すことはないのです。知っているでしょう、古代種が神殿をこしらえるとき、そこにはなにか封印されたものが、



隠された意味があるのです。そのキーになっているのがこの鏡です。教授は、これをこともあろうに善良な一般市民から、犯罪組織を利用して盗み出させました」

聴衆は、ただおびえたような、困惑したような顔をして押し黙っていたが、その中からひとりの男が「うそだ!」と叫んだ。教授を父親のように尊敬している、まだ若い研究員だった。

「それがほんとうなんです。この両脇にいるふたりが証人です。教授はこの鏡をどうされるつもりだったかわかりませんが、わたしは、研究者のひとりとして、みなさんに、そして世界中のひとたちに、この神殿の真の意味を伝える義務があると思ったのです」

助手は微笑した。

「教授はだいたい、昔からあまりフェアな方ではなかった。大事な情報は自分だけが握って、他人には見せてくれなかった。わたしの研究のことだって、あまり評価していなかったようだ……」

「それはあんたが信用出来ないからだ」

先ほどの研究員がきびしい口調で云った。助手は肩をすくめた。

くめた。

「だから、君たち白人は嫌いなんだ。君たちはわれわウータイ人のことを、自分たちより劣る民族だと考えて、信用しない。わたしはそのイメージを払拭したいんです。わたしは、教授なんかよりずっとうまくやれる。現に、あなたを出しぬいたでしょう、ええ?」

助手は、教授の頭にピストルを強く押しつけた。

そのとき、男の叫び声が聞こえた。

「国立捜査局だ!」

馬面の男が、入り口に向けて発砲した。教授は床に突き飛ばされ、小柄な男と少年、それに助手は床に空いた穴の中へ消えた。長身の男はもう何度か発砲してから、そのあとを追って中に入っていた。調査局の頭文字が入ったダウンジャケットを着ている男たちがわらわらとなだれこんできた。

「ああ、もう!」

黒髪を逆立てた、いまどきふうの若い男が叫んだ。ただ、いまふうでないのは、彼がばかどかい剣を背中にしよっているということだった。

「閣下まで中に入っちゃった!」

「教授、教授!」

ミッドガルにいるはずのカドバン准教授が、心配にはちされそうな顔で駆け寄ってきた。

「カドバン君!」

教授は驚いて目を見張った。

「君、なぜここに?」

准教授は首を振って、「あとで詳しくお話します」とあきらめたように云った。

「ボス、この場合、どうする?」

黒髪の男がそう云って振り向いた先に視線を向けて、研究チームの面々は肝をつぶした。長身で、腰のあたりまである銀髪をゆらゆらなびかせて、音もなく歩いてくる。その端正な顔立ちと、長い銀髪にはみんな見覚えがあった……彼の顔は、世界中に知られていた。

「中へ入るのは、ふたりだけでいい。ほかのみなさんは、申し訳ないが神殿を出て待機しててください。それから教授」

教授はセフィロスに話しかけられた。

「あの鏡がいつたいどんな危険な代物なのか、われわれはカドバン准教授から伺いました。あなたの助手を、勝手に連れてきて申し訳ありません。われわれを、中へ案内してくれませんか? あなたの生命はわれわれが必ずお守りします。われわれは、シノザキ助手にこの神殿の封印を解除してもらう予定です。そして、ここに封印されているらしい怪物を、二度と起き上がれないようにするつもりです」

教授は、はじめ目を白黒させたが、やがて静かに首を振って、それに同意した。大急ぎであとを追わねばならなかった。大きな剣を背負った、ソルジャーの目をした男は、このあとのことに備えてか、しきりにひとりですクワットをしていた。

## 絶体絶命

神殿の中は、実に複雑な、とんでもない広さの立体迷路になっていた。道や階段が上下左右に交錯し、あるときは屋根がついた建物の中へ潜りこみ、またあるときはその外壁らしきところを歩かされ、小さな部屋に入って出たと思ったら、期待していたのとはぜんぜん別の方向へ出たりした。東西南北も、自分がいったいどれくらい深いところにいるのかも、まったく検討がつかない。

シノザキ助手は、複雑な道を全部把握しているらしかった。ときおりプリントされた用紙を見、右へ左へ指示を出した。あるときは、四人はいまのいま通ってきた橋のすぐ下を通り、建物の中へ入って、廊下を進み、四つある出入り口のひとつを選んで先へ進む。

クラウドはひたひたでられるままに迷路の入り組んだ道を、ぐるぐる歩いていった。自分が死ぬとか生きるとか、そういうことはあまり問題ではなくなっていた。自分はたぶん死ぬに違いないと悟ったとき、ひとがそれに対しあくまでも醜く抵抗を試みるかどうかは、そのひととの場合

による。今回のケースでは、クラウドは自分が助かる方の道をあまり当てにしていなかった。例のシノザキ助手は、ふたり組の男たちに財宝を分けてやるのかなんとか云って一緒に連れてきているが、たぶんそんなものはない、すきを見てふたりとも処分してしまうつもりだろう。自分だつたらそうする。それに、たぶん、人質の少年も、殺してしまうだろう。だけど、いったい彼はなにがしたいんだろう？ この神殿の奥に、なにがあるんだろう？

ここまでザックスと、たぶんセフィロスが来てくれたことはありがたいが、でも、セフィロスはきつと、クラウドのためだけに、みんなをせき立てて行動させるようなことはしないだろう。ザックスは、すぐく抜群のタイミングで入ってきた。たぶん、しばらく待っていたのに違いない。そして、助手や泥棒たちを捕まえることが目的なら、あの場でできたはずだった。でもそうしなかったってことは、この先に起きるなにかを、待っているということじゃないだろうか？

それならクラウドも、それを待たなくてはいけない。焦って逃げたり、なにかよけいなことをしようとしなくて。

捜査局のひとたちや、セフィロスやザックスが来てくれることをあてにしていけない。クラウドはこれからなにが起きるのか知らないのだから、よく観察し、考えて、慎重に行動しなくてはいけない。彼はぐっと気を引き締め、いつかチャンスがくるか、こないか、どっちかだ、と考えて、鼻から大きく息を吐いた。それですこし落ちついた。

『ずいぶん歩いたような気がするなあ』

ベツボがふいに不安そうにつぶやいた。

「けっ、心配なのか？ どうしようもねえな！ じゃあてめえだけ帰れよ。迷わずに帰れるんならな。そして、お宝はおれがひとり占めだよ。それで、おれは組織を抜けるよ……」

かわいそうなふたり！ 彼らは、たぶん騙されているのに、気がついていないのだ。クラウドはできたら、あなたたち、騙されてますよ！ と叫びたかった。でも、さるぐつわが邪魔をしていた。前を歩くシノザキ助手がにやっと笑ったような気がした。こいつはまったくの悪党というものだ。でもしも、さつき助手が云ったような挫折や屈辱がひとを悪者にするのなら、セフィロスやザックスなんか

とつくに悪の大王になつていなければおかしい話だった。

クラウドだって、小玉くらいにはなつていなきゃ変だ。それじゃあ、その違いってなんだろう？ シノザキ助手は、いやな悪いやつで、そしてそれだけだった。セフィロスやザックスには、なにか底抜けに明るい強さがある。どっちが好きか、と訊かれたら、断然後者の方だ。結局、助手は弱い男なのではないだろうか。みじめさとか、打ちひしがれたような気持ちに負けて、そこから抜け出せないということとは、結局、その程度の人間でしかないということじゃないだろうか？ クラウドは、そうはなりたくなかった。たとえどんなに頭がよくたって、それと引き替えにそんな情けないやつにはなりたくなかった。

「なんだか息苦しくなってきたやつだ」

クルスがふいにいらいらしたように云った。

「もう地上からだいぶ下の方へ降りてきている。そのせいだろう」

シノザキ助手が興味がなさそうに答えた。

一同はようやく天井まで届く大きな扉の前にやってきた。観音開き式の、すごく分厚くて重たそうなやつで、表面に

はなにやら不思議な装飾が施されていた。扉の中央に金色に光る円形の、直径五十センチほどのプレートがはめこまれていて、真ん中にちょうど例の鏡をはめこむことができそうな、丸いくぼみがあった。そして扉全体には、頭が丸くて首の長い、ミミズに腕が生えたような怪物の姿が彫られている。凶悪そうな三角の形をした怪物の目のところに、赤いマテリアのかけらがはめこまれていた。正面に向かって口を大きく開いていて、その中には円形にぎつしり細かい牙が生えていた。クラウドはいやなもの胸の奥からこみ上げてくるような気がした。ふたりの泥棒も、さすがに気味が悪くなったらしかった。顔がひきつっていた。

「なあ、先生、古代種ってのは、悪魔崇拜でもやってたのかねえ？」

クルスが精一杯皮肉げに云った。

「いや、これは崇拜ではなく魔除けだ。おそろしいものを刻むことで、より恐ろしいものを防ぐ……」

クラウドはうそだと思った。すごいいやな予感がする。この扉を、開けてはダメだ。この先にあるのは、宝なんかじゃない。ものすごいいやな、見てはいけけないものだ。頭

がズキズキする。背筋を冷たいものが流れていく。たぶん……あの扉に彫られていた化け物。そいつが、この奥に眠っているに違いない。

「おいら、なんだかおつかないなあ。ほんとにこの中に宝物があるの？」

ベツボが疑わしげな顔で遠慮がちに意見を述べた。

「そんなに疑うなら、中を見ればいい」

助手はにやりと笑って……背筋が凍りつきそうな気味の悪い笑いだった……ポケットからマティルダ嬢の鏡を取り出した。

「さて、諸君は世紀の一瞬に立ちあうのだ。われわれは、かつて誰も成し得なかったことを、あの教授ですら成し得なかったことを成し遂げようとしている。つまり、古代種たちの秘密の核心に触れようとしているのだ。この扉の奥に」

助手はつばを飲みこみ、引きつったような顔で笑った。

「われわれの常識を根底から覆すような、世界中の連中を縮み上がらせるような、そういう力が眠っているのだ。これであの教授も、ちよつとは考えを改めるに違いない」

助手は鏡を両の手の中に閉じこめるようにして持ち、ひとつ息を吐いてから、それをすばやくプレート中央のくぼみにはめこんだ。扉に彫られている化け物の目が赤く輝いた。それに呼応するように、鏡にはめこまれたマテリアも強い光を帯びた。目もくらむような赤い光が一瞬、あたりを満たした。クラウドはぎゅっと目をつぶった。そして突然、地響きのような揺れとともに、目の前の扉がゆっくりと開きはじめた。助手は鼻息を荒くして「やった！ やったぞ！」と興奮した調子で……目玉が飛び出し、口は奇妙に歪み、その顔はほとんど常軌を逸していた……開いたどあのすきまから、我先に中に入っていた。

突然の光と揺れのせいでも、ずっとクラウドに向けられていたクルスのピストルが外れた。クラウドはその一瞬の隙について、クルスの脚を蹴飛ばした！ 彼はその場にすっ転んだ。それに驚いたベツポに身構える隙を与えず、素早く身体を捻って、そのみぞおちにザックス式一撃必殺の蹴り（すごく痛い！）をくらわした。ベツポはその場に伸びた。動揺し、身体を起こしてピストルをかまえようとしたクルスの手をまたまた蹴飛ばして、ピストルを遠くへ転が

した。そして、まだ膝をついた状態のクルスの顔を蹴り飛ばし、もう一度転がして、素早く喉仏に靴底を押しつけた。どんなもんだ！ セフィロス相手に脚を鍛えた成果だ。「ひい！ 待った、タンマ、タンマだ！ やめてくれ、喉が……」

クルスは押しつぶされたようなしわがれた声で必死にうめいた。クラウドは自分のさるぐつわを取るように見振りで指示した。クルスは云うとおりにした。

「あー、口の中がからからだよ！ おっさんたちのこと別に好きじゃないけど、でも、死にたくないんだつたら逃げなきゃ！ あの助手、あんたたちに宝を渡すつもりなんかないし、第一この部屋の先に宝なんかないに決まってるよ！」

クルスは眉をぴくりと動かした。

「わかんないの？ この先にいるのは、たぶんあの扉に描いてある化け物だよ！ ぜったいそうだ！ 早く相棒起こして逃げなきゃ！」

クルスは一瞬、思案するような顔になった。が、すぐにそれを改めて、うなずいた。

「わかった。おれも、さつきこの扉の前に来たときから、どうもいやな感じがしてたんだ。こういうのは当たるんでね。おれは、無理をしない主義なんだ。靴をどけてくれよ！ ベツポのやつを起こさにや！」

クラウドは靴をどけた。クルスは急いで起き上がり、相棒の頬を叩いた。

「おい、相棒、あんなガキの蹴りくらったぐれえで転がってんじゃねえよ！ 逃げるぞ！ おいつたら！」

クルスが耳元で叫ぶと、ベツポは飛び起きた。

「兄貴！ いま何時？」

「うるせえよタコ」

続いてクルスはクラウドの手を拘束していた縄をほどいた。

「ま、これでおあいこだ。元来た道に戻るかどうか知らねえが……ああ、ちくしょう！ ついてねえなあ！ 途中で警察の連中に出会えることを祈らなきゃならねえなんですよ！」

絶え間なく続いていた振動が止み、扉が完全に開いたことを告げた。三人はおそろおそろそちらを覗きこんだ。中

は、おそらく闘技場ほどの広さのある、円形の間になっていた。松明が壁のあちこちで燃えている。部屋奥に、祭壇のような、石の四角い台が設置されていた。助手はその前に立つて、なにやらぶつぶつぶやきながら、なにかを待っているらしい。クラウドたちのことは、もはや忘れ去ってしまったように見える。

「ちつくしょう、あの野郎、やつはお宝なんかねえじゃねえか！ ぶつ殺してやる！」

クルスが助手の背中に向けてピストルを構えたそのとき、地の底からなにかでつきあげられたような振動が来た。

「……まずいよまずいよまずいよ」

クラウドは両手で頬を挟んだ。

縦揺れの大地震のような、立つていられないくらいの揺れがはじまった。ベツポが「神さま！」と叫んで、気を失った。クルスはうなり声を上げて歯ぎしりした。クラウドは、これからなにが起きるのか、部屋の中の様子を見守った。

「さあ！ 来るぞ来るぞ！ さあ来い、おれが蘇らせたんだ。教授じゃない、おれがやつたんだ！ どうだ！」

シノザキ助手は揺れに足を取られて尻餅をついたが、そのまま、異常に甲高い、興奮した声でわめきたてた。突き上げるような揺れが来るたびに石の祭壇祭壇に亀裂が入って、それがしだいに増えてゆき、ついに祭壇はばらばらとくずれた。そうして、地の底からおそろしく気味の悪い咆哮が聞こえてきた。金属をこすりあわせたようないやな響きに似た、甲高い、そのくせどこかつぶれたようなその声は、小指の爪から前頭葉の先まで凍りそうな、耳を塞ぎたくなるような声だった。シノザキ助手はすっかり興奮して、起き上がった飛び跳ね、高笑いをはじめた。そうして、祭壇のあったところから、一息になにかが突き出てきた。

とてつもなく太くて長いミミズのような形状をした、どす黒い、身体の表面がナメクジみたいな粘液で覆われた化物だった。三叉にわかれた指のある腕が規則正しく身体の両側面に何本も並んでいて、指の先には鋭い爪がついている。胴回りが十メートルはあるだろうか？ 丸い胴体の先端が真つ二つに裂けて口になっていて、そこが開くとぎざぎざの、細かい牙がびっしり並んでいるのが見えた。人間ひとりなら軽々と飲みこめそうだった。そしてその口の

少し上に、赤く光る目玉がふたつついていて、そいつは、広間の天井に頭が届いてもいるのに、まだ胴体の終わりがぜんぜん見えなかった。

「シノザキさん！」

クラウドは叫んだ。

「こっちに来て！ 早く！」

だがシノザキ助手は、ぜんぜん聞こえないふうだった。相変わらず笑い、息を切らして痙攣したような呼吸を繰り返し、化物に向かって「すごい、これはすごい！」と叫んでいた。そしてその化物は、どこからが胴体でどこからが首なのかわからないが、ともかく首を動かして、自分のそばでびよんぴよん跳ねているシノザキ助手を見つけた。化物は大きく口を開いて咆哮し、ばねのおもちやのスリンキーみたいに、身体を折り曲げ、助手めがけて一気につつこんでいった。助手は声を上げるひまもなかったし、クラウドも、ぜんぜん動くことすらできなかった。

「うげえっ」

クルスが少々下品な声を漏らした。クラウドはなにが起きたのか、とっさにはわからなかった。そして、叫んだ：



…「逃げなきゃ！」

クルスがベツポを叩き起こしにかかったが、彼は目覚めなかった。クルスは彼の両手をつかみ、ずるずる引きずりながら走りはじめた。クラウドはふたりをかばうように化け物の方を向いて、唇をかみしめ、できるだけ素早く後退しはじめた。ああ、でも、だめだった！ 化け物がこっちに気がついた！ 真つ赤な目がこちらへ向けられる。そのおそろしいことといったら、普通の人間なら尻の穴まで凍りつきそうなものだった。大きな口をこちらへ向けて、そうして咆哮し、奇妙に身体をくねらせはじめた。口の中に、紫色のガスのようなものがたまっていくのが見える。

「……まずいよまずいよ」

「どうした、坊主」

クルスが叫んだ。

「あれ、ドラゴンがブレス吐くときにそっくりだ」

「なにい？」

クルスはびっくりして、足を止め、振り向いた。化け物の口のまわりに、高濃度の紫のガスのかたまりができていた。クラウドはクルスからピストルをひったくって、化け

物めがけて引き金を引いた。弾は見事に化け物に命中したが、そいつはぜんぜんひるんでいなかった。

「来るな、こっち来るな！」

クルスが必死に叫んだ。クラウドはクルスの前でできるだけ腕を広げ、両足を踏ん張って、つばを飲みこんだ。冷や汗が流れた。ガスのかたまりは、どんどん大きくなっていく。そうしてついに、ごお、という呼気の音が、辺りに響き渡った。ああ、もうだめだ……クラウドはぎゅっと目をつぶった。

## ソルジャー二名の活躍

もうだめだ……！ クラウドはぎゅっと目を閉じ、ぐしや、か、べちや、か、あるいはじゅわあ、かもしれないが、各種の衝撃を想定して身構えた。母さんのことが頭に浮かんだ。おれが死んじやったら、母さん……そしてセフィロス！ もう一度くらい、悪態をついておくんだった！ そう考えた直後にドン、というものすごい衝撃が腹の底から響き渡ったが、それは直接攻撃を食らった衝撃ではなく、痛くも痒くもなかった。クラウドはおそろおそろ目を開けた。目の前に、きらきらと揺れる銀色が見えた。かすかに風に揺れるように風いで、とてもきれいだった。それから、同じように銀色に鈍く光る長い長い刀。クラウドは、とたんに全身の力が抜けてしまった。

「……セフィロス」

彼はどうかこうにかそうつぶやいた。利き手と逆の右手を、防御するように自分の顔の前に掲げていたセフィロスは、ゆっくり振り返った。こんな状況なのに、悪戯っぽい微笑を浮かべて。

「おまえのような大馬鹿はこの攻撃を食らうのが道理だと思いつながら、かろうじて踏みとどまったおれの理性は称賛に値すると思わないか？」

クラウドは泣きそうになった。目がうるんで、視界がすすんだ。彼はあわてて一度ぎゅっと目をつぶり、泣かないように最大限の努力をした。

「思うよ」

彼は短く答えた。セフィロスは今度はもつと優しく微笑して、すぐに厳しい顔つきで前方に向き直った。彼の横を、風が通り過ぎた……ように思えた。あんまり素早く通り過ぎたので。でも、すぐにそれがザックスだったことがわかった。ザックスは愛用の大剣を下段に構えてしゃがみこみ、地面を蹴って、天井に届くほど跳躍した。その勢いを殺さずに、激しく首を振る化け物の頭のとっぺんへ、愛用の剣を突き立てた。化け物はものすごい声を出して、首をますます激しく振った。

「あの化け物がザックスにかまっているあいだに云っておくが」

セフィロスがふたたびクラウドに向き直り、疲れきって

いるが適度な緊張を保っている様子の自分の金髪坊やと、すっかり怯えきった男と、気を失った男を見た。それからクラウドに視線を戻すと、

「ここにはバリアを張っておく。念のため。やたらな攻撃でも破けないようにするつもりだ。ここを動くな。今度こそいい子にしてろ。おとなしくな。質問は？」

クラウドは緊張した顔のまま、一拍置いて云った。

「あんた、どこから正宗引っぱり出してきたの？」

セフィロスはあやうく吹き出すところだった。

「四次元ポケットだ。今度見せてやる」

セフィロスはクラウドの頬に手を伸ばし、軽く二、三度叩いて、どこか優雅に刀を構えたまま、化け物の方へ歩いていった。

ザックスは怪物の脳みそから剣を引きぬいて、大急ぎで怪物の頭から飛び降りた。化け物はもんどり打って一度地面に倒れた。ぜいぜい云いながら、口からだらだらと泥色の液体をこぼし（おおー）、誰の目にも一瞬おとなしくなつたように見えた。が、次の瞬間には粘着質の体液なんかよりももつといやなことが起きた。ザックスがつけた頭の傷

がぐじゅぐじゅ音を立てながら、徐々にふさがりはじめたのだ。

「うっそーん」

ザックスはそれでもおどけてそんなことを云い、両手を頬にあてがった。そして、自分の斜め後ろに音もなくやってきたセフィロスに向かってわめきたてた。

「ボス、ボス、やな感じ！ 見た？」

「ああ、見た」

ボスは平然と云った。

「おれ、脳みそにぶちこんだのに！」

「ほんとうにあそこがこいつの脳みそなのか？」

「確かだって！ 頭蓋骨ぶち破つたもん。頭蓋骨の先にあるのは脳みそだろ？」

「可能性としては、その確率が高いが」

時間にしてほんの数分だったが、怪物はすっかり持ち直して、長い首を持ち上げ、ぞつとするような声で吠えた。金属的で耳障りで、めいめいの鼓膜がぶるぶる震えた。そうして化け物は、真っ赤なルビーのような目を燃え上らせて目の前にいるふたりの人間を見つめ、口から、極度に

気分が悪くなったひとの顔色のような、いやな紫色のブレスを吐き出した。セフィロスとザックスは左右に飛び退いた。床が焼け焦けて真つ黒に炭化した。クラウドは冷や汗を流し、その後ろで小さくなっているクルスはますます縮み上がった。こんなときは動き回っている方が気が楽なのに、セフィロスのわからず屋、とクラウドは心の中で悪態をついた。そうすることで、彼は自分の恐怖と戦っていた。ものすごく、情けない恐怖心と。

ふたりの男が散り散りになったので、化け物は一瞬どうするか迷ったらしかった。首を左右に振り、左前方に立っているセフィロスを見とめると、大きく口を開き、そこめがけてつつこんでいった。セフィロスはなにも見えていないかのように刀を左手にだらんと持ったままつつ立っていたが、化け物の口がいまにも彼を飲みこんでしまう寸前、なにかが起きた。なにが起きたのか、クラウドにはぜんぜん見えなかった。彼に見えたのは、銀色のきらめきと、その一拍あと、化け物の首がどうん、という鈍い音を立てて床に転がり落ちたところだった。首はクラウドに半分断面を向けて転がったので、丸太ほどもある薄黄色い背骨のよ

うなものや血管、筋肉組織などが丸見えだった。首についている目は、光を失いかけている。そしてセフィロスはというと、相変わらず刀を左手に持って、なにごとみなかつたかのように落ちた首から少し離れたところに立っていた。クルスはこみ上げてくるものをこらえるかのように「うぐつ」と喉の奥で音を立てた。

「今度はいけたかな？」

痙攣を起こしたようにぶるぶる震えながら両手を振り上げている本体を注意深く見守りつつ、ザックスが飛び跳ねながらセフィロスの横へ着地した。

「さあ、どうだか。おれの予想では」

セフィロスが云い終わらないうちに、奇妙に長い化け物の身体が脈打ちはじめ、ぐちゃぐちゃと湿った音をたてながら、切られた首の部分から、なにかが少しずつ盛り上がってきた。同時に、切り落とされた首の方は、ぶしゅぶしゅいやな音をたてて、溶解しはじめていた。

「やめて、お願い、見たくない」

ザックスがげんなりしたように云った。その哀願は聞き届けられなかった。べちゃべちゃした液体をまき散らしな

がら、ゆつくりと首が生えてきた。最初は頭部、続いて、首。切り落とされたのと寸分違わぬ首が出てくるまでに、ものの数分だった。そのあいだに、本体から切り離された首は、ひとかたまりの泥沼のようになって、床の上に広がった。怪物は、また奇妙に高い叫び声をあげた。

「……こうなる、と云おうとした。手間、が省けたな」

「そうね」

ザックスは軽い調子でうなずいた。ふたたびいやな紫色のブレスが飛んできたので、ふたりは跳躍し、ザックスがまたも本体の頭の上に躍り上がった。

「ボス！ どうしよっか！ このままだと埒明かない感じじゃない？ こいつ全身高速トカゲのしっぽってことっしょ？」

彼は動きまわる頭の上でうまくバランスを取りながら叫んだ。セフィロスは、叫び声を上げながら嘔み殺さんと追ってくる化け物の攻撃をよけながら、少し時間を置いて、口を開いた。

「頭を落として、手を落としてりしても再生する場合、考えられる有効な対処法は？」

「原子レベルのこつばみじん」

ザックスが叫んだ。叫ばないと、断続的に響き渡る化け物の声に阻まれて聞こえそうになかった。

「それを実現するいい方法がある……悪いが少し黙ってくれ」

セフィロスは牙をむき出しにして迫ってきた化け物の口の中へ長い刀をつっこみ、左へ切り裂いた。首が大きく傾き、ザックスは「おうっ！」と云いながらあわてて床へ飛び降りた。

「おまえは、全員ここから連れ出して、できるだけ遠くまで避難させて欲しい」

ザックスは首を傾けた。

「で、あんたは？」

「この建物ごと原子レベルに分解するだけの破壊活動をやつてのける」

セフィロスは唇を持ち上げて、微笑した。

「……マテリア持つてる？」

「運よく使えそうなのがある」

「……アイアイ、ボス」

ザックスは敬礼した。

「時間はどれくらい必要だ？」

「十五分は待って。あの連隊引つたててチョコボ車に乗せて移動するってなったら、ちよつとした遠足」

セフィロスは満足げにうなずいた。

「頼んだ」

耳をつんざく奇声がふたたび響き渡った。首の再生が完了したのだ。セフィロスは化け物に向き直り、ザックスは大急ぎでクラウドのところへ走った。

「ここ出るぞ、閣下」

クラウドはびつくりしたように目を丸くした。

「なんで！」

「なんでも！ ボスはあとから合流するから。説明あとあと。いいから来い。おふたりさん、まあ片方は寝てるみたいだけど、ちよつとおとなしくしててね」

ザックスが小さく口を動かすと、ふたり組の泥棒は目を閉じて、眠ってしまった。ザックスはふたりを両肩に担ぎあげた。

「やだ、おれここにいろ」

「だめ。早く、時間制限かかってんの！」

「いやだ」

「来いって」

「だって、セフィロスは？」

クラウドの顔がなんとも云えない形に歪んだ。怒ったようにひきつっているようでもあり、不安に凍りついているようでもあり、哀れんでいるようでもあった。それを見て、ザックスは一瞬喉がつかえてしまった。

「おれ、ここにいたいよ」

クラウドが静かに云った。そうしてセフィロスの方を見た。

「もし、とんでもなくお荷物じゃなかったらさ」

「……ああ、もう！」

ザックスは頭をかきむしった。

「ボス！ セフィロス！ 閣下だけ置いてく！ あんたな

んとかして！ おれ無理！」

彼は叫んだ。本日三度目の斬首をやらかそうとしていたセフィロスが、右手を挙げてひらひらと振った。

「お許しが出たよ。この強情っ張り！ じゃ、あとでな」

ザックスは友だちに手のひらを差し出した。クラウドはそれを遠慮がちにぱちん、と自分の手のひらで弾いた。ザックスは太息で出ていった。が、すぐに「いけねえいけねえ」と云いながら戻ってきて、入り口の扉から、マティルダ嬢の鏡を取り外した。そうして今度こそほんとうに、いなくなった。クラウドはぎゅつと唇をかみしめた。

斬首に続いて本体を真ん中でふたつにしたセフィロスが、太股でやってきた。

「クラウド」

彼は無表情だった。クラウドは顔をこわばらせた。

「……バカ」

彼は笑った。クラウドは胸の奥がぎゅつとなつて、涙が出そうになった。

「おいで」

右手が伸ばされた。クラウドは手と腕を通り越して、セフィロスの胸に体当りするみたいに飛びこんだ。セフィロスが頭をちよつと撫でた。彼のコートは焼け焦げたような匂いが染みついていた。

「さて、聞いたかどうか、これからザックスたちが避難す

るまで二十分ばかり時間かせぎをしないとならない」

クラウドは顔を上げた。セフィロスは微笑していた。

「ザックスは十五分と云ったが、もう少し必要だろう。そこでだ。おまえに云っておくことがある。きつい云い方をするが悪く思うなよ。その間、自分のことは自分でなんとかしろ。おれはおまえに構わない。いいな？」

クラウドは一瞬間がひきつったが、すぐにそれをひっこめて引き締まった表情を作り、こくんとうなずいた。

「いい子だ」

セフィロスはクラウドの頬を撫でると、もう彼がそこにはいないかのように、ばかでない化け物に顔を向けた。クラウドは、それがうれしかった。

逃亡と、こつばみじん

ザックスはふたりの男をかついで、迷路のようになって  
いる地下一階を、驚異的な跳躍力を見せながらあつちへ飛  
び移り、こつちへ飛び移りした。途中で、その場に待機を  
命令していたホープニツツエル教授を拾い、迷路を抜けて、  
一階の円形広間まで引き返した。捜査官や調査チームの  
面々が、石碑の周りに固まっていて、突然男ふたりを担い  
だまま上がつてきたザックスを驚いたように見つめた。ピ  
ルヒエさんもその場に合流していて、調査団の面々から、  
しきりになにか聞き取って書き留めていた。

「みなさん！」

ザックスは叫んだ。

「ここ出ますよ！ いますぐ！ 急いで！ ひとり残らず  
車に乗って、チョコボもみんな出発！」

ザックスは叫びながら神殿の外へ躍り出た。

「ゲインシユタルトさん！」

ザックスは神殿の裏から入口の前にチョコボ車を移動さ  
せていたゲインシユタルトさんに声を張り上げた。ゲイン

シユタルトさんは、チョコボ車から顔を出した。

「おお！ 無事だったか！」

「おかげさまで。で、みんなでいつせいに避難したいんで  
す。可及的速やかに！ だから、全部のチョコボ車、うま  
いこと誘導してもらえませんか？」

ゲインシユタルトさんはやつと笑って、帽子を振り回  
しながら車から降りてきた。

「お安いご用さ」

そうして素早く自分のチョコボ車のドアを開け放ち、大  
急ぎで教授たちのチョコボ車のところへ走っていつて、チ  
ョコボたちに向かって手をたたき、「さあ、おまえさんたち  
ちよつとおれの云うことをきいてくれよ！」と叫んで、駆  
者たちに指示を出し、あつという間に一列に並べてしまっ  
た。

「さあ、みんな早く乗った乗った」

ゲインシユタルトさんは急かした。みんな大急ぎで車に  
乗りこんだ。そのさまはちよつと滑稽だったが、誰も笑い  
出すひとはいなかった。みんな車に乗りこむと、ゲインシ  
ユタルトさんもケルバの後ろの馭者台に飛び乗り、状況を



把握するためにまだ地面に踏ん張っていたザックスに、

「あの坊主と御大はどうしたね？」

と訊ねた。

「心配いりません」

ザックスは安心させるようににつこり笑った。

「まだ中にいるんです。でも、大丈夫です。おれが保証する」

「そうかい？」

ゲインシュタルトさんは不安そうだったが、ザックスが車に乗りこみながら「さあ、急いで急いで！」と急かしたので、ケルバの手綱を引っ張り、車を出した。ケルバは大きな、緊張した声で「クエ！ クエクエ！」と短く鳴いた。チヨコボたちがいつせいに緊張して、同じように「クエ！ クエクエ！」の大合唱を返してきた。ゲインシュタルトさんと馭者の面々以外にはわからなかったが、これはチヨコボ語で「行くよ行くよちよつと急ぐよ」という意味だった。

ケルバとバンゴがぐいぐい加速して、風のように駆け出した。ほかのチヨコボ車が同じように続いた。ザックスは車から身を乗り出してそれを眺めながら、「すっげえ！」

と声を上げた。

「ゲインシュタルトさん、すごいっすね！」

彼は興奮して云った。

「どんなもんだい」

ゲインシュタルトさんは得意げに云った。

「人間もチヨコボも、本気出したらなんだってやれるさ」  
神殿は、ぐいぐい遠ざかっていく。

ザックスと別れてから、約二十分が過ぎた。セフィロスは相変わらず全身トカゲのしっぽな化け物を相手に、孤軍奮闘していた。といっても、なにをしたって死なないのはわかっていたので、化け物の注意がクラウドに向かないように、そして彼に例の気味の悪い色のプレスを浴びせることだけはないように、注意して行動するにとどめていた。

クラウドは、云いつけをよく守っていた。柱の陰に隠れ、セフィロスと、それに怪物の動きを注意深く見守っている。その右手は、唯一の武器であるガス・ピストルをぎゅっと握りしめていた。それでなにができるなんてことは、この際問題ではなかった。そうしてクラウドは無意識に息を殺

して、戦闘のさなかなのにどこか優雅に動きまわるセフィロスをじっと見ていた。セフィロスの動きは、よく訓練された舞手のように洗練されていた。敵の噛みつきを躲す動作は、舞台の上の踊り子がひらりと身体をひるがえしてステップを踏むのによく似ていた。彼がブレスをよけて飛び上がるときには、晴れて重力を超越したダンサーの、めいっぱいの軽やかな跳躍を見ているみたいだった。

セフィロスは、相手がばかでかい、気味の悪い、不死身の怪物であるにもかかわらず、どこか微笑ましい余裕を保っていた。壁際で相手の首の下をすり抜けるときには、いまにも「おっと、失礼」と云い出しそうだった。たまたま大通りなんかでよそ見をしていて正面衝突しそうになった紳士が、あわてて横へ飛び退くような、そして相手に向かってユーモアたっぷり肩をすくめてみせるような、あのしぐさを思わせた。それは彼の生来の茶目っ気であって、ザックスとはまた違った角度から、どんなときにも楽しむ要素と微笑ましい感情を忘れない、人間の真の強さだった。セフィロスは、セフィロスだった……こんなときでも。

セフィロスが、本日何度目になるかわからない斬首をや

つてのけた。それから、振り返ってクラウドを呼んだ。彼は柱の陰から飛び出して、セフィロスのところへ走っていた。

「クラウド、いいか。これから、こいつを原子レベルに分解する」

クラウドはよくわからなかったが、こくんとうなずいた。「これを使う」

セフィロスはコートのポケットから、セフィロスの目に似た緑色に輝くマテリアを取り出した。

「術の名前はまだ云わないでおく。発動してしまうからな。それで、これはおまえもぴんときただろうが、ちよつと威力の強いやつだ。おれは平気だが、おまえには相当な衝撃だと思われる。屈辱的だろうが、おれにしがみついていることを推奨する」

化け物の身体が、びくびく痙攣しはじめた。地面に転がり落ちた首は、もう溶けはじめている。セフィロスは左手に刀を持ち、右腕でクラウドを自分の懷に固定し、手のひらにマテリアを乗せたまま、後退った。クラウドは心臓がどきどきはじめた。どきどきして、セフィロスにほんと

うにぎゅつとしがみついて、顔を覆ってしまおうかと思った。でも、それは彼のプライドに反することだったし、男の沽券に関わることだった。クラウドはぎゅつとセフィロスのコートを握りしめたが、化け物から目をそらさずにいた。ぶじゅぶじゅ音を立てながら、化け物の首が生えはじめている。

セフィロスの手の中のマテリアが光り出した。その光がしだいに濃くなって、丸いマテリアの周りでうずを巻いた。クラウドは高周波の音を聞かされているときのような、いやな耳鳴りと頭痛を感じて顔をしかめた。磁場にいるときみたいに、身体の皮が身体に貼りつくような感覚を覚える。クラウドは唇を噛み締めてその気持ち悪さに耐えた。セフィロスがふいにふつと微笑した。

「難儀な体質だな」

それはとても優しい声だった。セフィロスの右手のひらは、もう光の束でほとんど見えなかった。そこからのすごい熱を感じる。周囲のものが、みんな吸い寄せられてしまいそうな強力な磁場が、そこにできつつあった。化け物の頭はもうほとんど再生していて、首を大きくもたげ、叫

び声をあげた。そうして、セフィロスめがけて一気に頭を振り下ろしてきた。

「アルテマ」

それとセフィロスの声とは、ほとんど同時だった。一瞬で、目を開けていられないほどの閃光があたりに広がった。クラウドは反射的にぎゅつと目をつぶった。セフィロスの手のひらにあった磁場の塊が、そこを離れて、怪物の方へ動いていったのを感じた。クラウドの身体も、そっちに持つていかれそうだった。セフィロスの腕が強く支えていてくれなかったら、クラウドはぶつ飛ばされて、巻きこまれていただろう。耳をもうでしまいたくなるくらいにキンという音が響いた。そうして、床から突き上げてくるようなものすごい衝撃がきた。

ザックスはチョコボ車のドアを開けて、後方へ目を向け、いまや手のひらほどの大きさに見えている神殿を注意深く見守っていた。

「ストップ！ ゲインシユタルトさん、ストップだ！」

ゲインシユタルトさんは大慌てでチョコボたちに手綱で

止まれの指示を出した。ケルバとバンゴは突然のことに驚いて、少しよろめきながら、それでもしつかりと踏ん張って止まった。あやうく玉突き事故になるところだった。後ろを走っているチヨコボたちも驚いたように「クエ！」という高い声を上げて、大慌てで先頭の車にならった。

「なにごとだい？」

馭者台からザックスの方を振り向いたゲインシュタルトさんは、帽子が顔にずり落ちていた。他の車に乗っていたみんなも、次々に顔をのぞかせた。

「急停止はチヨコボに……」

ゲインシュタルトさんの抗議はでも、そこまでだった。突然、地響きがして、あたりが真っ白になり、みんな悲鳴を上げて目をつぶった。次に目を開けたときには、信じられない光景が広がっていた。神殿と、そのあたりの木々が、みんななくなっていた。

しばらく、誰ひとり口を利かなかった。みんな凍りついた表情で、あるいは呆然と、いまのいままで神殿が確かにあったはずのあたりを見つめていた。

「……どういこうった」

ようやくビルヒエさんが口を開いた。

「消えちゃったよ」

あまりにも素朴なつぶやきだったが、誰も笑わなかった。みんな、おそろおそろというふうに着くを見て、無言で説明を求めてきた。ザックスは頭を掻いた。

「んーと、手短に云うと、うちのボスが魔法を発動したんです」

ザックスはチヨコボ車から飛び降りて、神殿の方向へ数歩歩き、みんなの中央に出ていった。

「あの神殿に封印されてた化け物は、トカゲのしっぽみたいに、斬っても斬っても、再生しちゃったんです。だから、うちのボスがこっぴどみじん作戦を思いつきました。それしか有効な手立てがなかったんです。で、実行しました。以上です」

みんなはまたおそろおそろというふうに関心を見合わせた。チヨコボたちまで神妙な顔つきで、お互いのパートナーを見やっていた。

「……そりゃなんてえか、すさまじいこったね」

ゲインシュタルトさんが帽子をかぶりなおし、パイプか

ら煙を吐き出した。

「すみません。大事な研究対象を粉々にしちゃって。でも、ほんと、それしかなかったんです。それから、シノザキ助手は、化け物にいの一番に攻撃されて、死んじやいました。たぶんね」

ホープニツツエル教授が額に手を当て、ため息をついた。カドバン准教授はロイド眼鏡を外して、ポケットから磨き布を取り出し、磨きはじめた。研究員たちは首を振ったり、呆然と神殿の方を見やったりした。ピルヒエさんはしかめっ面をした。そして捜査官たちは、なんとも云えない顔をしていた。こんな解決の仕方は、彼らも経験したことがなかった……もちろん、こんな奇つ怪な事件そのものも、取り扱ったことがなかったが。

そしてザックスはというと、このどう反応していいかわからないでいるひとたちの反応が、自然な反応だと思った。こんなやり方は、そしてそれが可能である人間なんて、普通ではない。それは人知を超えた力だし、そういうものを見せつけられることに、人間は慣れていない。そういうものが存在することすら、昨今は忘れ去られかけていたとい

うのに。ザックスはもう一度頭を搔いて、努めて陽気に口を開いた。

「ま、そんな感じなんで。あとで捜査局に報告しに伺います。大学のみなさんにも、ちゃんとお詫びします。とりあえずいまは、危険なんで全員街まで戻ってください。おれ、うちのボスと友だちを待つてから帰るんで。そうだ、ライオネルさん、泥棒ふたりに、いまのうち手錠かけておいたほうがいいですよ。そろそろ目覚めますんで」

ザックスはそう云って、ゲインシユタルトさんに出発の指示を出してくれるように云った。

「いんや」

ゲインシユタルトさんは怒ったような顔になった。

「ほかのチョコボ車はみんな帰ってくれて構わんが、おれはここに残るよ。おれにだつて、プライドってもんがある。おれはおたくらに雇われてんだよ！ 途中でほつぽり出して帰ったら、おれの立場ねえってもんだよ！ おまけにかあに怒鳴られちまう」

ホープニツツエル教授が拍手をした。ほかのみんなも拍手をしたり、口笛を吹いたり、微笑んだりした。ゲインシ

ユタルトさんはちよつと恥ずかしそうな顔をして、馭者台にしっかり座り直した。ザックスは、不覚にもちよつと感激してしまった。でもすぐに気を取り直して、ほかのチョコボ車の馭者たちにはどうか帰つてくれるよう頼んだ。みんな同意し、一台ずつその場を離れていった。森の中には、ゲインシユタルトさんとケルバとバンゴ、それにザックスが残された。

「乗りなよ、兄ちゃん」

ゲインシユタルトさんが云った。

「ちよつとあの遺跡のあとに近づこうや。お迎えに行こうじゃねえか」

ザックスは微笑んで、チョコボ車に乗った。ケルバは大喜びで高く鳴き、軽快に走りだした。

あたりが恐ろしいほど静かになった。クラウドはおそるおそる目を開けてみた。セフィロスの腕の感触はまだ肩のあたりにあって、最初に目に入つたのはセフィロスの黒いコートだった。それから、こちらをのぞきこむセフィロスの顔。彼の銀髪。

「大丈夫か」

セフィロスが優しく云った。クラウドはこくんとうなずき、わざとセフィロスの胸を押して、すこし離れた。

クラウドは地中深く、大きくえぐれたクレーターの中にいた。巨大なクレーターだ。周囲は土がむき出しになっていて、木の根っ子が覗いているところもある。かろうじて足元の地面に、神殿のあとらしい、つやつやしたタイルがところどころ残っていた。あたりには、いろんなものがばらばら落下してきていた。神殿の壁の破片とか、土くれとかいったものが、高く高く舞い上げられて、落ちてきているのだった。

「消えちゃった」

クラウドはぼかんとして、つぶやいた。セフィロスが後ろから「そうだな」と云った。

「あのぐじょびじょの化け物も消えたの?」

クラウドはセフィロスを振り返った。

「たぶんな」

「原子に分解された?」

「そうだいいが」

クラウドは口を開け、「すっごいなあ!」と云った。セフィロスは微笑した。

「あれがアルテマっていうやつなの? おれ、なにが起きたかぜんぜん見えなかったよ。目つぶちゃったんだ。情けないなあ!」

彼は古代ギリシアのひとつみに、胸をかきむしって嘆く真似をした。セフィロスは声を立てて笑ったが、すぐに表情を引き締めて、ちよつと怖い顔を作った。

「クラウド」

クラウドはびんときて、直立不動になった。

「おまえは、自分がなにをしたか、どれだけ迷惑をかけたかわかっているのか?」

「……………ごめんなさい」

クラウドは絞りだすような声で謝った。

「いつもいつも謝って済むと思ったら大間違いだ。今度はかりは、まず迷惑をかけた相手がまずかった。国立捜査局が、おまえのためにいったい何人の捜査員を、夜通し働かせたと思っている」

クラウドは情けなくて、涙が出そうになった。

「あのひとのいいコランダー捜査官や、その友だちのビルヒエさんは、自分のせいだと思っている。ザックスだって、口には出さないが、胃に穴が空くほど心配したはずだ。おまえはどうして、そう自分勝手に行動するんだ。最低限の約束ことも規律も守れないような頭の回らないやつは、おれは大嫌いだ。調子に乗るのもいいかげんにしろ。身の程をわきまえろ。それもわからないようなら、死んでやりなおせ」

クラウドはありつた後の後悔で、そしてくやしきで、握りしめた拳がぶるぶる震えてきた。セフィロスのことばがいちいちぐさりと刺さった。わかっている。セフィロスと恋仲だって、ザックスと友だちだって、結局今回のような緊急事態には、その中には入れないんだということ。それと自分とは違うんだということ。セフィロスとザックスは、ソルジャーで、実力もあって、ツーカーで、ばりばり怪物にだって立ち向かっていけるし、捜査局と連携して仕事が出来ただけの判断力も、スキルもある。でも、クラウド・ストライフときたら! 十六歳の、兵役についているだけを取り柄の、ただのガキ。ちっぽけで、その場にいた

って周りに迷惑をかけるくらいのことしかできない。そんな自分が嫌で、そんな自分を変えたくて、田舎から出てきたのに。結局、その差は広がるばかりだ。ふたりのことを、肌身を感じるだけ。クラウドは打ちのめされていた。徹底的に。セフィロスがわざとそうしたのだ。でも、彼の云っていることは正しいし、その気持ちだってわかる。セフィロスだって、クラウドが心配なのだ。クラウドにむちやなことをされたらまず先に心臓が止まりそうになるのはセフィロスだ。そして彼は、全体の秩序を乱すことをなによりも嫌う。そのことによる損害があまりに大きいことを、知っているからだ。

クラウドは泣かないように、一滴だって涙がこぼれてこないように、唇を噛んで、息を止めた。セフィロスの腕なんか待つていない。彼の手がこちらへ伸びてくることなんか、そんな優しさなんか、期待しているわけじゃない。それはずるいことだ。これは自分の問題なのだから。そこにセフィロスを、持ちこむべきじゃない。ひとりになったかった。いますぐに、どこかの部屋の隅っこで、ひとりで。でもこれも、やつてはいけないわがままなのだ。ふたりと

もいますべきは、ここから出て、みんなのところへ戻ることだ。だから、クラウドはいますぐ反省した、でも通常運転のクラウドに、戻る必要があった。目を不自然にしばたぐのはやめて。唇に力をこめたり、手のひらを痛いほど握りしめたりなんかしないで。

ああでも、セフィロスもやつぱり優しくかった。自分がすべきことを、彼もまた最後までちゃんと遂行できなかった。彼はクラウドを抱き寄せて、ぎゅっと抱きしめた。髪の毛に鼻先をうずめて、クラウドの背中を何度も撫でた。クラウドはもう我慢できなかった。これは半分セフィロスのせいだった。放っておいてくれたら、彼が優しさを出さずに、ちゃんと毅然としてくれていたら、クラウドだってこんなに子どもみたいに泣かなくてよかったのに。クラウドはものすごい力で、セフィロスをぎゅうっと抱きしめた。涙がぼろぼろこぼれた。安堵と、後悔と、羞恥と、そのほかいろいろのものがごたまぜになった涙。セフィロスは無言で、クラウドがしっかり落ち着いて、泣き止むまで、抱きしめていてくれた。なんにも云わずに。

「さあ、もういい。わかったな」



しばらくして、セフィロスはひどく優しくそう云った。声を発することでもなにかを壊してしまうかもしれない、おそれているみたいに。クラウドはこくこくうなずいて、大急ぎで自分の目と、頬を拭った。そうして、セフィロスを見た……あろうことかセフィロスは、盛大に吹き出した。

「ひどい顔だ」

クラウドは自分の顔が見られなかった。だからこれは、はなはだ不公平なことだと思った。彼はセフィロスを蹴飛ばした。でもセフィロスはひらりと避けてしまった。そうして、大笑いしながら歩き出した。

「記録的なひどさだ。おまえが自分の顔を見られないのが残念だ」

「なんだよ!」

クラウドは声を上げて、セフィロスに背後から飛びかかった。

そのとき、はるか頭上からのんきな声がした。

「ハロー、おふたりさん、だいじょぶ? 無事? 生きてる? ザックスちゃんよー!」

小さく見えるザックスが、ぶんぶん手を振ってこちらを

見下ろしていた。その後ろから、ケルバが「クエエ!」と云いながら、羽をばさばさやっているのが見えた。

## 第五章 事件のあと

クラウド熱を上げ、その効果的対処法が考案される

セフィロスとザックスとクラウドは、ふたたび例の保養地のコテージへ戻ってくる事ができた。捜査局への説明や、教授たちへのお詫びやあれやこれやで、みんなくたくただった。さすがのセフィロスも、少し疲れたような顔をして、クラウドを風呂に入れ、自分も風呂に入ると、その晩はすぐに眠ってしまった。

真夜中に、セフィロスは妙な熱さで目が覚めた。そうして仰天した。クラウドが隣で顔を真っ赤にして、うんうんうなっているのだった。

「クラウド」

セフィロスは慌てて声をかけた。

『どうした。大丈夫か』

クラウドの額は燃えるように熱かった。呼吸は浅く早く、びっしょり汗をかいていた。これまでの疲れが出たにして

は、症状が過剰なような気がした。脈が早く、それから間もなくして、せきこみはじめた。セフィロスは必死にクラウドの背中をさすって落ちつかせ、大急ぎで冷えたタオルをこしらえて、クラウドの額に乗せた。それから彼のパジャマを脱がせて身体を拭いてやり、新しいのに取り替えた。そして、大慌てでピエントさんのところに電話をした。夜中の二時半すぎだったが、ピエントさんは電話に出てくれ、クラウドのことを聞きつけるや飛び上がって、すぐに医者を手配してくれた。医者は一時間後に、ピエントさんとその奥さんをともなつてやってきた。黒くていちじるしく濃い眉をした、驚鼻の、六十がらみの男だった。彼はクラウドの胸の音を聞いたり、脈をとったり、口の中を調べたりして、非常に濃い眉をしかめた。

「気管支炎と、軽度の肺炎にかかっているのは間違いありません。これはいわゆるウィルスによるもので、風邪の重症なやつです。こうなるまでほつといたのはなぜです？ それにしても」

濃い眉がびくびく動いた。

「この早い脈と、極度の発汗、全身の新陳代謝が不自然に

促進されているような症状は、うまいこと説明できません……」

セフィロスは、これを聞いてはつとした。思い当たるふしがあった。彼は医者を、クラウドが寝ている寝室ではなく、一階のリビングへ連れて行った。ピエントさんの奥さんが火を入れてくれたので、リビングはいくらか暖まっていた。

「魔晄の影響？」

医者は濃い眉をいちじるしく痙攣させた。

「そうです。おそらくそうでしょう。ちよつと、昼間いろいろありまして」

医者は目をしばたいた。

「そんなら、それはわたしの専門外ですよ！ 遺憾ながらね！ 気管支炎と肺炎なら受け持てますが、魔晄とは……確かに、ある体質の人間が、そのエネルギーに過剰反応することは医学的にも広く知られています。非常に少数派ですがね。しかし、この分野の研究はいわば、医学の分野からは切り離されているのでして、おわかりでしょう？ われわれ一般の医者は、知ることが許されないのです。そう

と思われる症例を見たら、首を振り、そして、医者の良心に従って治したいと思つたら……あなたがのところへ連絡を入れる」

「ええ、わかっています」

セフィロスは重々しくうなずいた。

「そして患者は相当な確率で、二度と戻つてこない」

今度は医者が重苦しく首を縦に振つた。

「そういうことです。よつて、わたしは通常の気管支炎と肺炎治療のための薬を処方しましょう。しかし、薬を飲ませてもいいかどうかの判断はできません。それはあなたに任せますよ。それと、水分補給のために点滴をしなければいけません。とりあえず一本置いていきますが、これではとても足りませんから、明日また来ます。ついでながら、通常あんな患者の往診を頼まれたら、入院沙汰ですよ！」

ひとのいい医者は点滴用の針を差し、大きな生理食塩水のパックを、壁に打ちつけてあつたフックを利用してそこへかけた。ピエントさんの奥さんは、自分がかつて看護師をしていたことを医師に打ち明け、点滴の交換くらいならまだできると主張した。医師は、それはたいへんありがた

いことだが、明日の朝早くまた来るから、今晚はどうか眠ってくれるように、と奥さんを押しとどめた。最後に、お医者はクラウドに君は若いのだから頑張るようにと云いきかせて、出ていった。クラウドはベッドの上でせえせえ云っていた。

「どういうことなんでしょうか？」

ピエントさんが心配そうな顔で訊ねてきた。セフィロスは首を振った。ピエントさんはセフィロスを見て、なにかを察したように何度もうなずいた。

「少し落ちつきましょう。家内がなにか飲み物をくれますよ」

ふたりは一階のリビングへ移動した。ピエントさんの奥さんが、暖かいココアを持ってきた。

「自分の責任です」

セフィロスは絞りだすような声で云った。

「あの子がこういう体質であることは知っていました。クラウドは魔晄エネルギーに、過剰反応してしまう体質なのです」

ピエントさん夫妻は、真剣な顔でセフィロスを見ていた。

「魔晄エネルギーというのは、便利な反面、非常に危険なものでもある。これは、神羅が公表しないようにしているのであまり知られていないことですが事実です。今日のつびきならぬ事情があつて、魔法を使いました。魔法というのは、たいへん大雑把に云つて、魔晄エネルギーを高濃度に凝縮したものと考えてください。それが媒体となつて、この星のあらゆる現象に働きかけ、それを引き起こすことができる。魔晄への感度や相性といったものにはいちじるしい個人差があつて、純粹に体質の問題です。過剰反応するからといって、別に欠陥というわけではない。一種のアレルギー反応のようなものだと思います。これを感じとると、彼の場合、身体がそれを受けつけまいとして必死に抵抗します。その結果、新陳代謝が過度に促進され、高熱が出て、汗をかき、脈拍は早まる。完全にその影響下から逃れられれば体調も回復するでしょうが、どこかが損なわれてしまつて、免疫機能がうまく働かなくなれば、もうだめでしょう。クラウドの身体は、いまある種のショック状態にある。おとといからの緊張が重なつて、それが解けて風邪を引きかけていたところへ、間近で高濃

度の魔晄エネルギーを凝縮するような魔法をぶっぱなししてしまったものだから、彼は……」

ピエントさん夫妻は、なにも云わなかった。ピエント夫人は立ち上がって、太い身体をゆすりながら台所に立ち、消費されずに捨てられたってかまうもんですか、と思いがら、クラウドのための栄養満点のスープを作った。ピエント夫妻は明け方、そろそろと戻っていった。セフィロスはクラウドのそばを離れなかった。彼の手を握りしめ、それに唇を当てて、熱に浮かされているためにクラウドの目じりからこぼれる涙をそっとぬぐってやった。彼は無意識に、何度も謝罪と哀願のことを口にしていった。

早朝これを知ったザックスは、大慌てでセフィロスのコテージへ駆けこんできた。

「閣下！」

と云ってドアを開け、ベッドに走り寄って、りんごみたいに赤い顔をしたクラウドを見て仰天し、セフィロスになにかできることはないか訊いた。

「特にない」

セフィロスは微笑した。

「この子の若さか、あるいはしぶとさに期待することだ」

ザックスはいたたまれなくなつて、ぎゅつと眉をしかめた。そうして友だちの荒々しい呼吸と、そのいかにも苦しそうな寝顔を見、唇を噛み締めた。それからセフィロスを見た。なんでもないように振る舞っているが、彼の神経も相当参っているはずだった。

「……なあ、あんたちよつと休んだら？」

ザックスは云った。

「おれはもうゆうべひと晩ですっかり元気になっちゃったからさ」

セフィロスはザックスを見、首を振った。

「すまないな。だが寝たい気分じゃないんだ」

「なら、いいけどさ」

ザックスはそう云って、壁にもたれかかった。

ゆうべのお医者が点滴スタンドをがらがら云わせながらやってきて、点滴を取り替え、絶対安静のクラウドのためにカテーテルを挿入した。そして点滴の取替えとカテーテルにまつわる諸々の仕事はピエント夫人に引き継がれた。

クラウドはときおり激しく咳こみ、目を覚まして、あたりをぼんやり見つめることはできたが、自力で起き上がるのはどうしたって無理だった。彼は自分がどうなっているのかわからないで、ときどきトイレに行きたいとかすれ声で云ったが、すぐにまた眠りこんでしまった。

二日経った。クラウドは相変わらずせえせえ云って、高い熱を出してうなっていた。ときどき目を開けて、鼻を鳴らし、なにかから逃れようとするかのようにセフィロスにしがみついた。セフィロスはクラウドの身体を抱きしめながら、肝心なときになんの力にもなれない自分を呪っていた。

その日の午前中にピエント夫人が太った身体をゆすってやってきて、点滴を取り替え、部屋の空気を少し入れ替えながら、小声でセフィロスに……クラウドが眠っていたので……なにげなくこう云った。

「この子、お母さんはいるの？ ニブルヘイム？ そりゃあ遠いわねえ！ ほんと云うと、こういう弱った子どもには、母親が一番の薬なのよ。わたしの息子が大学生で、ひとり暮らしをしていたとき、あの子ったらたちの悪い流感

にかかって、ひどい熱を出して寝こんだの。そのとき息子の彼女が……いまの奥さんだけど……わたしに電話してきて、できたら様子を見に来てくさいって云ったのよ。気の利く子なのよ、とつても。それで、わたし出かけていたわ。息子ときたら！ ひどい顔して、うなっていたの。

でも、わたしがあの子が風邪をひくたんびにやってきたやり方で、湿布をしてあげて、煎じ薬を飲ませて、熱いスープを食べさせたら、みるみるよくなったわ。わたしは看護師をしてたけど、自分の家族には病院の薬を使わせなかったの。結局ね、母親の看病より強力な薬ってないのよ。男の子は特にそうなの。これくらい、まだ子どもなのに母親と別れ別れで暮らしてる男の子なんて、特にそうだわ」

ピエント夫人はため息をつきながら部屋を出ていった。セフィロスはこのピエント夫人の助言で、クラウドの看病にかまけて大事なことを忘れていたことに気がついた。彼の母親！ クラウドのこの状況を、彼女に説明しなくては！

それはセフィロスには気が重いことだった。彼はため息をつき、せえせえ云っているクラウドのそばを離れ、電話

をかけるために一階へ降りていった。ちょうどそのとき、ザックスが食料袋を手に抱えてやってきた。彼はシェフの役目を忘れていなかったのだ。

「電話？」

ザックスが陽気な調子で云った。

「ああ、クラウドの母親に」

ザックスはぎよつとした顔で振り返った。

「クラウドの母ちゃん？ そっか！ おれそんな大事なことも忘れてた！ そりゃあ、あんたにだけ任しくわけいかない。おれもひとこと云わなきゃ。あとで代わってくれら？」

セフィロスは曖昧に微笑んで、受話器を取り上げた。

彼とクラウドの母親とは、実にいわくのある関係だ。息子のことになるとうきりばかりになってしまふクラウドの母さんは、今年の夏、とうとう我慢できなくなって息子に会いに都会にやってきた。そのとき以来、彼女はしょっちゅう電話をしてきて、クラウドの下着の数や、靴下の穴の空き具合を知りたがる。そういうのを管理しているのはもっぱらセフィロスなので、彼はあるときは直接、また別

のときにはクラウドの口を介して、たとえば、チョコボ柄のパンツはもうゴムがゆるくなつたとか、空色のハンカチをなくして、もう切らしてしまつたとかいうことを母親に報告する。するとクラウドの母さんは、大急ぎでそれを見繕い、郵便屋を脅しあげて、特急で荷物を届けさせるのだ。息子のためなら骨身を惜しまない、いつも明るい、クラウドの母さん。そんなひとの顔を曇らせるような大罪を犯すとは……セフィロスはため息をついた。

電話の呼び出し音が、ひとつひとつ神経に堪えて、拷問のように感じられた。

「もしもし？」

クラウドの母さんが出た。セフィロスは一瞬ことばに詰まつた。

「……もしもし？」

それで、こんな間の抜けたことを云ってしまった。でもクラウドの母さんは、「あら、あんたなの？」と明るく云って、けたけた笑った。それがセフィロスの心を余計に重たくした。

「あんたから電話なんて、はじめてじゃない？ ちょっと

待って、いま椅子持ってくるから……よつこしょつと。いまね、ちょうどクラウドに新しく帽子を編んでるとこなの。ニットの、耳カバーのあるかわいいやつよ。耳あっためるだけで、あったかいでしょ？　ところで、あの子元氣？」

セフィロスは、もしも生まれつきの強固な自制心がなかったら、泣きだしてしまうところだった。泣き崩れて、こう叫んでしまうところだ……お母さん！　わたくしめをお許し下さい！

でも、セフィロスは泣かなかった。そして叫びを上げるよりも、理性的に話をするところを選んだ。彼は説明した……これまでのあいだにあったこと、クラウドがその中で果たした役割、そして自分の失態。いつの間にかザックスが台所から出てきていて、そばに立って話を聞いていた。クラウドの母さんは電話の向こうで、長い長いため息をついた。

「……あつそう。そうなの。あんたたち、そんなややこしいことに取りくんできたわけ」

彼女は云った。

「すまない。おれの責任だ」

ザックスが、もう我慢できないといったふうで、代わってくれという身振りをした。セフィロスが迷っていると、ザックスは強引に電話を取り上げてしまった。

「もしもし？　クラウドの母ちゃんですか？　おれ、ザックスです」

声でわかるわよ、とクラウドの母さんが云った。

「セフィロスだけのせいじゃないんです。おれのせいでもあるんです。おれが気がついて、意地でもあいつのこと外に連れ出してたら……」

「ああーもう！　やめてやめて！」

クラウドの母さんが突然叫んだ。

「あのさ。あんたたちの方の電話スピーカーボタンについてる？　ついてんなら押して。ふたりに話したいから。ある？　押した？　あつそう。あのね。あんたたち、自分がなに云ってんのかわかってんの？」

セフィロスとザックスは顔を見合わせた。

「あんたたちが責任感じるのほそりや、勝手よ。実際、ないとも云えないかもね。でもさ、ちょっと考えたらどう？　今回のことで、誰が一番責任感じると思う？　クラウドで



しょ？ 考えたらわかんない？ 自分が具合が悪くてさ、ただでさえいろんなひとに迷惑かけてんのに、あんたたちがお通夜みたいな顔して、自分のせいだなんてわめいてたら、そういうの、すごくむかつく。偽善者面してるやつらと紙一重って感じ。自分の責任強調することで、よけいに相手をいたたまれない気持ちにさせんの。いるでしょ？ そういうの。次あたしに向かってそんなこと云つたら、鼓膜破れるまで張り飛ばすよ。いい？」

ふたりは黙りこんだ。

「で？ あたしのクラウドはどうなの？ 死んじゃうの？」  
セフィロスはまだわからない、と云った。

「あつそ。じゃ、あたしクラウドに会いに行く。そういう権利はあるわよね？ 荷物送っていい？ あの子に薬とか下着とか、持ってってあげなきゃ」

「……それなんですけど」

ザックスが云った。

「あのう、いま思いついたんだけど、高いところ、平気ですか？」

「平気。どつちかっていうと大好きよ。気分いいもんね」

ザックスはセフィロスに目ませした。

「じゃ、おれ迎えに行きます……空から」

「レーノちゃん、ザックスちゃんよ、げーんき？」

「ああん？」

退屈なデスクワークに就いていたレノは、突然かかってきた電話に眉をしかめた。

「うっせこのタコ。気色悪い声出してんじゃねえぞ、と。働いてもねえくせに、気安く電話してくんなよ、と」

「やーね、つんつんしちゃってもう。ねーえ、ヘリ一台ちよーつと手配してもらえないかなあ？」

「はあ？ テメエ寝ぼけてんのか？ おれ様忙しいんだぞ、と。寝言ならテレクラのお姉ちゃんに云えよ、と。じゃあな」

「あらー？ いいのかなあ？ ザックスちゃんにそんなふうに冷たくしちゃうてー。ぼくこないだ、レノちゃんが貳番街を、金髪のきれーなお姉ちゃんと歩いてるところ見ちゃったんだよなあ。あれ、ラブホ街のあたりだったのよねえ。アンナちゃんに云っていいのかなあ？ ぼく、彼女の番号」

知って……」

「ああーっと、ちょっと待った、ちょっと待った、やだなあ、と。冗談じゃないのよ、と。レノちゃんが、大のお友だちのザックスちゃんのお願ひ、断るわけじゃないじゃないのお」

「そーよねえ？ ぼくたち、友だちだもんねー」

「そそそ、大親友だもんね、と」

電話を切ったレノは「ちくしょう死ぬこのゴンガガ類人猿が！」と叫びながら、自分の仕事を全部相棒に押しつけて、席を立った。一方、受話器の向こうのザックスはにやにや笑い、ピエントさんにチョコボ車を手配してもらうべく電話をかけた。

意気揚々とチョコボ車に乗りこむザックスに、セフィロスは声をかけた。ザックスは陽気に「はいよ」と云つて振り返った。

「おまえ、これから先退屈だろう」

ザックスは肩をすくめた。

「まっさか！ 閣下のこともあるし」

「いや、退屈になるはずだ。遊び相手は熱にうなされてい

るし、このあたりにおまえが遊び歩くような施設はない。そこでだ、提案がある」

ザックスはチョコボ車の上でセフィロスに向かって身体をまっすぐにした。

「なんだね、セフィロスくん」

「おまえ、クラウドの母親を連れてくるついでに、彼女も一緒に連れてくるといい」

ザックスは目を丸くした。

「だめだめ、それはだめ。だってあんた……」

「いや、最後まで聞いてくれ」

セフィロスは猛然と抗議しにかかったザックスを押しとどめた。

「そもそも、出だしからおれは不公平だと思っていた。おれは一にも二にも退屈しないが、三人なんて中途半端だし、いざというとき誰が余るか」と云つたらおまえだしな。それに、おれはこの上おまえまで沈んでいるのを見るのは耐えられない」

ザックスがもぞもぞ尻を動かした。

「彼女がいれば、少しは気晴らしにならないか？ おれが

沈んでいるからといっておまえまで一緒になっている必要はないし、もちろん、おまえもクラウドのことは気がかりだろうが、こういうときははじけた方がいいタイプだ、おまえは。そしてその方が、おれの胃と精神にとつても優しい。おれは間違っているだろうか？」

ザックスは眉をしかめ、唇を突き出し、ちよつとのあいだ尻をもぞもぞさせていたが、やがて頭をかきむしって、「ん、もう！」と云った。

「わかつたよ！　じゃあおれお通夜ごつこから一抜けた！　恨みつこなしよ。おれ、エアリスちゃんと一緒にうんとこ楽しんじゃう。でさ、結局、おれが楽しめば閨下の健康にいいってなもんなのよね。世の中つて不思議とそうなんだよな。不謹慎とかさ、不道徳とかつて、なんなんだろうな！」

セフィロスは目を細めて微笑した。

「大いに疑問だな。どちらかという、それがあること自体が不謹慎であり、不道徳であつたりする」

ザックスはこの逆説に大いにやついた。

「じゃ、おれちよつと行つてくるよ。今日の夜には戻れると思う。あんだ、腹減つたら冷蔵庫の中にいろいろあるか

ら食つてよ。ちゃんと食うのよ！　おれ帰ってきたらチエックするからね！　昼寝できたらするのよ！　閨下にはつかまつてないで、たまには本読むなり、散歩するなりしなさい」

「はい、お母さん」

セフィロスは厳肅な態度で云つた。チョコボ車は走り去つた。

## 息子と母親のための一章

「二時間後、四番街にある神羅エクセレントってしようもない名前の商業ビルにカモン！ 添付地図参照、屋上にヘリポートがあるから、そこまで来てね！ 何日か旅行するつもりで！ ザックン」

というメールを受け取って、エアリス嬢は大慌てで準備を開始した。男っていつもこう！ 女の都合なんて、ぜんぜん考えてない！ 世の中を、すごく単純に見てる。それでこつちがちよつと文句を云うと、君のためだったのに、とか云って恩着せがましく怒るのだ。もちろん、ザックスもそんなだなんて云わないけど……ぶつぶつ文句を云いながら、それでもなんとなく心が浮き足立ってしまうのも、また仕方のないことだ。なにしろ、もしこれが旅行だとしてたら、ふたりにとってはじめての旅行だった……相当、変な出だしだけだ。

さらに変なことに、エアリス嬢の母さんが、彼女を急かした。

「ほら、早く行きなさいな！ 時間ないんだろ？ そんな

寝聞着なんてなんだっていいからいいから、買ってもらえば……それくらい甲斐性のある男じゃなきゃねえ」

エアリス嬢は、母親のそのひとことでちよつと赤くなつた。

ヘリポートは、だだっ広くて、コンクリートの冷たい床がざりざりした感じで、なんとなくひとを落ちつかない気分にはさせる。エアリス嬢はかわいい花柄の旅行かばんを持ち、右肩からまた別の、茶色の皮カバンをぶら下げて、そわそわと立っていた。どんな格好をしてくればいいのかまったくわからなかつたから、とりあえずのワンピースと、コートとブーツ、それにマフラーをしてきたけれど、こんな格好で大丈夫だっただろうか？

数分間所在なげに待っていたら、上空からバラバラという音が聞こえてきて、それがしだいに近くなってきた。エアリス嬢は上を見上げた。中型のヘリコプターが、ヘリポートに近づいてきた。ものすごい風圧で、エアリス嬢はワンピースの裾を押さえるのに、すごく苦労した。

ヘリが空中で停まった。梯子がおろされ、ザックスがドアを開けていかにも慣れた調子で降りてきた。

「やつほつほー。久しぶりなんだかよくわかんないけど、ちよつとこいつで一緒にお散歩しない？ だいじょぶだって、壊れないから」

エアリス嬢は、不覚にもザックスを一瞬かつこいと思つてしまった。そして、あわてて自分のそんな乙女思考を頭から追いやつて、あくまでむくれているふりをした。

「ザックスつて、すつごーく、勝手」

ザックスは頭を掻いた。

「うん、そうね、ちよつと急だつたかな？」

「ちよつと？」

エアリス嬢は眉をしかめ、ザックスの顔をのぞきこんだ。

「わたし、なんにもわからなくて、荷物まとめるのにすごく、苦労したんですけど」

ザックスは両手を挙げ、降参！ と云つた。

「わかつたよ、わかつたよ謝るよ！ あとで殴つていいよ。正面からがつんと一発。ザックス、もんどり打って倒れる。

ああ、どうかお慈悲を！ お慈悲をー！」

エアリス嬢はたまらず吹き出してしまった。

「わたし、へりつて乗るの、はじめてなの」

「だろうね。たいがいの女の子は、乗つたことないと思うよ」

「それにね、わたし、友だちみんなの中で、はじめて空を飛んだ女、つてことになるの！ はじめて夜景の見えるレストランでお食事した、とか、はじめて婚約指輪もらった、とかいうんじゃないのよ。そんなありきたりなの、まっぴら！ わたし、うれしいー！」

エアリス嬢はザックスに飛びついた。

「うわーお」

ザックスは云い、口笛を吹いた。

「エアリスちゃんつて、刺激的な子だったのね。ザックスちゃん、またまたびつくりよ」

彼はエアリス嬢の旅行カバンを左肘にひっかけ、皮カバンを自分の肩にかけると、エアリス嬢のお尻をつかんで抱え上げた。エアリス嬢はザックスの肩におつかぶさつて折りたたまれたような格好で、げらげら笑つた。ザックスは蜘蛛みたいに梯子をよじ登つて、へりの中に入つていった。

クラウドの母さんは、郵便屋と戦争をおっぱじめるとこ

ろだった。とてもじゃないが女ひとりで郵便局まで運べうにない量だったので、彼女はまず荷物を取りに来てくれるように頼んだ。そうしてひよこひよこやってきたのはまだ若い、今年の春ニブルヘイム支局に赴任したばかりの、のつぽな、ちよつと頭の回らない、まだ少年と呼んで差し支えない歳の男だった。クラウドの母さんは段ボール箱四つにわたる荷物を指さし、これを明日か明後日にはアイシクルエリアに配送されるようにしてもらうには、いくら払えばよいかと訊ねた。男はポケットから折りたたまれた紙を取り出し、小学生のように唇を動かしてから、アイシクルエリアには特急便で出しても配送までに最低四日かかるので、どうしたってそれはできないと云った。クラウドの母さんは食い下がった。

「あのね。人間が二日で行けるのに、それより軽い荷物が四日かかるなんて、そんなばかな話ないでしょうが。あたしはね、息子に会いに行くの。これ、息子のための荷物。あの子、かわいそうに北のすごく寒いところで死にかけてんの。いい？ どうしたって、明後日には届けてもらうから。金なんかいいのよ。いくらかかったって。問題はそれでし

よ？ もつたいぶつてないで云いなさいよ」

この憐れな若い郵便局員は、そのへんの大人の事情をまだはつきりとは把握していなかった……それに、そんなことを知るには若すぎるとも云えた。彼はにっちもさつちもいかなくなつて、局へ電話した。クラウドの母さんはお化粧をはじめた。局長が飛んできた。ストライフ夫人にはいつもはらはらさせられる。彼女はしよつちゅう息子に荷物を送るので、ニブルヘイム支局にしては大のお得意さんだったが、たいていの母親のように息子のこととなつたらばかになつてしまつて、やれ明日までに届くようにしろだの、順番はこうしろだの、無理難題をふつかけてくるので有名だった。しかし、彼女はたいていの母親よりも若く、美人だった。それは間違ひなく大事なことだった。いつもはストライフ夫人からの電話は、ぬかりなく局長に回されることになつていた。でも今日はなんの手違いか、間抜けな新入りが自分で電話を取り、自分で処理することにしてしまったらしいのだ。

局長はほぼお化粧を終え、極上の美人なつたストライフ夫人に、うやうやしく非礼を詫びた。彼女は長い金髪を優

雅に肩に垂らし、身体にびったりした丈の短いニットワンピースを着ていた。すばらしい形の脚が、レース柄のタイツにくるまれて伸びていた。香水をつけているのか、どことなくエキゾチックな甘い香りがした。夫人は、荷物はちゃんと届くのかと訊ねた。局長はもちろんだと云い、いつものように、特別割増の料金を掲示した。ストライフ夫人は鼻を鳴らし、受け渡し書にサインし……

そのとき、来客を告げるベルが鳴った。ストライフ夫人は「どうぞ！ 開いてるから」と声を上げた。黒髪を逆立てた男がにこにこしながら入ってきて、「お迎えに上がりました、マダム！」と叫んだ。彼はものすごい力持ちで、大きな荷物をひよいひよいと担ぎ上げ、どこかへ運び去ってしまった。ストライフ夫人は外出用の黒いブーツに履き替え、「わるいんだけどさ、どうも、荷物送らなくてもよくなつたみたい。また今度お願いするわ」と云った。局長と若い局員は、すぐごと引き下がった。

へりは近所の空き地の上空でホバリングしていた。夫人は、当然、自力で梯子を登るなんてことはしたくないし、そんなことはこのようにスカートを履いた女がするべきこ

とじゃないと云った。で、ザックスは彼女をうやうやしく抱き上げ、へりに運びこんだ。

「なんだかなあ！」

ザックスは考えた。

「しかし、閣下の母ちゃん、美人だよなあ！ 閣下にそっくりだけど。でも、友だちの母ちゃんを抱き上げちゃうなんて、なんだかなあ！」

へりの中には先客がいた。茶色い巻き髪、いまどき珍しい清楚な感じの女の子がザックスの彼女だということは知っていた。それからへりの操縦をしている、ニンジンみたいな赤毛の男を見た。

「あんたさ、小学校のときのあだ名、ニンジンだったでしょ？」

ストライフ夫人は容赦なく云った。

「あたしのクラスにもいた。あんたみたいなものすごい赤毛。そばかすでさ。あんた、彼女いる？」

タークスのレノはこれでも一応、女性にもてる方だったし、またそれなりに経験も積んでいるものと自負していた。でも、初対面で会ったそばから彼女の有無を訊かれたのは

これがはじめてだった。彼は仰天し、間に合っていると云った。

「違うわよ、ばかね。あたしは、こんなだから割と誤解されやすいの。彼女がいる男と絡もうもんならもう修羅場だから誰にでも訊いとくの。だって相手に悪いでしょ?」

レノは赤くなつてうつむいた。ザックスは笑いをこらえるのに必死だった。

クラウドの母さんは、ザックスがしだした湿っぽい話題……つまり彼女の息子についての話題……をすぐに脇へ押しつけてしまった。

「いいのいいの、うちの子のことは。なんか楽しい話しない?」

と云つて、道中のべつ毒舌と猥談を振りまいた。クラウドの母さんは、恋愛談がなによりも好きだった。ザックスとエアリス嬢に向かつて、やれいつからつきあっているのかだの、告白はどっちからだの、初デートの場所や性生活のことまで聞き出そうとした。今度はザックスが赤くなり、レノが笑いをこらえる番だった。エアリス嬢は案外あっけらかんとして、ますますザックスを赤くさせたり青くさせ

たりした。エアリス嬢はへりを降りたあと、こつそりザックスにこう云つたものだ……「あのひと、すっごく個性的ね。楽しいひとだけど」

「息子見りゃわかんじゃん」

というのがザックスの弁だった。

女性ふたりと大量の荷物とザックスを降ろし、レノはふたたびミッドガルに帰っていった。あたりはすっかり暗くなっていた。もう夜の八時を回っていた。ストライフ夫人はへりを降りたとたん、「くそ寒いってのはこのことね」と云い、からから笑った。エアリス嬢はこんなに寒いところに連れてこられるとは思っていなかったで、そうと知っていたら、自分の上着、もしくは下着をもう少し工夫できたと考え、ザックスにぷりぷり怒った。ザックスは頭をかき、エアリス嬢を自分の借りているコテージへ連れていき、クラウドの母さんはピエントさん夫妻に託した。クラウドのあの状態をエアリス嬢にまで見せるのは、あまり賢い判断とは思えなかったし、それにクラウドの気持ちを考えたら、自分の弱つているところを見られるのは最低限の人間にとどめておきたいはずだった。



ピエントさん夫妻はストライフ夫人を明るく歓迎した。ことにピエントさんの奥さんは、息子思いな母親として、同じく息子思いな母親に共感を寄せ、クラウドが寝ているコテージへ向かうあいだじゅう、クラウドのことについてあれこれしゃべりまくった。

「ほんつとにかわいいお子さんで。それにあんな歳で母親から独立して……なんて健気なこと！」

この話題は、ストライフ夫人の専門分野、彼女だけが専門とすることを許された領域だった。ストライフ夫人はすっかり気をよくし、お返しにピエント夫人の息子さんのことも訊いて、褒めまくった。

「大学出てる！ あたしの息子なんか義務教育終えたつきりなの？ 優秀なんですなぁ！」

でもあとで彼女はセフィロスにこっそりこう云った。「だってあのおばさんにいい印象持たれなきゃ、やってけないじゃないの。迷惑かけてるんだしさ。それに、クラウドのこと気に入ってくれてるみたいだし」

ともかくも、ストライフ夫人は無事コテージへ到着した。ピエントさんがやや緊張した面持ちで、荷物持ちを引き受

けた。なにしろ彼にとっては、奥さん以外の久方ぶりの、レディだったのだ。

セフィロスが玄関に立っていて、ストライフ夫人を見ると、実に複雑な微笑を浮かべた。彼女は無言でセフィロスに近づき、同じような微笑を浮かべて云った。

「ま、そんなに気をもまないのよ！ あんたが死にそうみたいな顔してんじゃないの！」

それから彼の頬をべしべし叩き（こんなことができる女性はこの世にストライフ夫人だけだった）、図体のかい、もしかしたら将来自分の息子になるかもしれない男をハグしにかかった。そして、自分のかわいい、いい子のクラウドを見せてくれと云った。

「母親が来る、という話はない」

階段を登りながら、セフィロスは云った。

「あの子意識はあるわけ？」

セフィロスはそれは保証するが、寝ている時間が多いのだと云った。クラウドの母さんは鼻を鳴らした。

セフィロスが寝室のドアを開けた。クラウドの母さんはすぐに、自分の息子ののびきならない状態を見て取った。

息子の頬は、りんご病をやったときみたいに赤かった。彼は点滴を打たれて、頭に白いタオルを載せ、氷嚢を頭の下に敷いて、か細い息をしていた。額にはびっしり汗が浮かんでいる。

セフィロスは、クラウドの母さんがショックを起こしたり、倒れたりすることまで覚悟していた。でも、クラウドの母さんは気丈だった。息子みたいに。目を見開いたのはほんの一瞬で、すぐに顔を引き締め、鼻をすすると、ずんずん寝室の中へ入っていった。そして、燃えるように熱い息子の手を取った。

「クラウド」

母さんと呼んだ。クラウドはうなされているひとみたいに細くうなってから、目を開けた。その目はほんやりして、焦点があつていなかった。

「わかる？ あんたのママよ！」

そう云って、ポケットから白いものを取り出した。布マスクだった。

「ゾウがついてるやつよ。水色の。ぐるぐるストローのトップ持ってきた。シヨーンじいさんの山羊のミルク飲む？」

ひどい顔ねえ！ 湿布貼らないとね。にがーい煎じ薬飲ませるから覚悟しなさいよ！ それから、ゾウのランチョンマット持ってきた。あんたのカップもよ！ あんたのこと話したらさ、お菓子屋さんの奥さん、若い方じゃなくてよ、あんたにつて、パウンドケーキと、シュトーレンくれたの。毎日切つて食べなさいつて。お砂糖どつさりのやつよ！」

クラウドは母さんがしてくれたマスクを弱々しい手で外して、ひっくり返して見た……マスクの右下のところに、空色のゾウのアップリケがついている。いつも風邪のときにしていたマスク。さあ！ クラウドは、すっかり胸がいっぱいになってしまった。母さんだ！ クラウドは、すんでのところで泣いてしまうところだった。彼は男なので、泣いてはいけなかった。でも、どうしても我慢できなくて、母さんに弱々しく腕を伸ばしてしまった。母さんはかがみこんで、クラウドをぎゅっと抱きしめた。クラウドは母さんの胸と頬に顔をさはまれるような形になった……母さんのおいがした。クラウドは心の中で何回も母さん、を云った。口に出すには喉が痛かったし、それに恥ずかしかった。

「いい子ちゃん！」

母さんは云った。

「あんた、頑張ったんだって？　ひとりで百人ぶん働いたわけね！　いつものことだけど。あんたって、目端が利きすぎるのよ。もうちょつと鈍感に産んであげたらよかったかもね」

クラウドが盛大に鼻をすすった……そして、盛大過ぎて激しく咳こんだ。母さんはクラウドの背中をさすりながら、なだめるように「シート」と小さく息を吐きだした。それはクラウドに、子どものときにかかったひどい流感や、そのほかいくつもの病気のことを思い出せた。そして、そういうことを思い出しながら、彼は不思議とすごく安らかな気持ちになった。病気には、主にふたつの思い出がある。症状の不快な記憶と、それに看病された甘ったるい記憶。クラウドは母さんのおいを嗅ぎながら、十年くらいの間を一気にさかのぼった。クラウドは二ブルの家にいた。クラウドは病気で、母さんがなんでも世話を焼いてくれる。窓の外を見ると、雪が猛烈に降っている。でもベッドの中はとても暖かい。クラウドの熱のせいだ。クラウドは体温

計を口に加え、胸のところにユーカリとハッカのにおいのするスーサーする湿布を貼っている。額にはタオル。ベッド横のサイドボードには、クラウドの大好きな空色のコップに、山羊のミルクを入れて置いてある。こぼれてもいいように、その下には空色のゾウがついたランチョンマットが敷かれている。ベッドにはおもちゃがたくさん並べられている。クラウドがどつちに転がってもおもちゃに当たるように、母さんが並べてくれるのだ。まん丸の赤い鼻のピエロはお気に入りだ。手触りのいいウサギと、かつこいいロケットも。クラウドは早くよくなつて、木馬に乗りたくなあとと思う。ちよつと口を開いた、つぶらな瞳の木馬は友だちだから、クラウドが乗らないと、すごく寂しい思いをするのだ……

目を開けたとき、クラウドは自分の記憶にあるとおりの自分のベッドには寝ていなかったけれど、枕元には見覚えのあるおもちゃが並べられていたし、喉元からは湿布のにおいがして、サイドボードにはコップとランチョンマットがあった。クラウドはいまは、チョコボのアップリケがついたマスクをしていた。そして、母さんがベッドの横に椅

子を持ちこんで座っていて、編み物をしていた。それで一瞬、クラウドは自分が実家にいるのか、どこにいるのかあやふやになった。でも記憶をたどって、あたりを見回して、ここが間違いないあのコテージだつてことに確信を持った。そしてそこに、母さんがいる。母さんは、ニブルからわざわざ来たんだろうか？ クラウドはすぐくうれしくなつて、母さんをじつと見た。母さんはかぎ針を器用にすいすい動かして、赤と黒の糸で、長方形のなにかを編んでいた。その姿は、クラウドにはすっかりおなじみだった。母さんは、冬はいつもこんな感じで編み物をしている。クラウドが学校から帰ってきたり、外で遊んでから帰ってきたりしたときは、母さんは居間でこんな感じに座つて、鼻歌なんか歌いながら、針を動かしているのだ。

「起きたの？」

母さんが編み物から目を離さずに云つた。クラウドはくすぐったい気分になつて、ちよつと布団に潜りこんでいった。母さんには、どうしてばれてしまうんだろう？ それに、もつと不思議なのは、母さんはクラウドが夜起きると、必ずすぐに目をさますことができるということだ。たぶん、

母さんつて、テレバシーなんか使えるのだろう。

「どうなの、気分は」

母さんは立ち上がつて、クラウドの横にやつてきた。喉の痛みは引いている。クラウドは用心しいしい、声を出してみた。

「だいぶいいよ」

ちよつとかすれていたけれど、思ったよりひどい声じゃなかった。母さんはクラウドの額に手を当て、自分のと比べた。

「うん、だいぶいい。まだちよつと熱いけど、でもねえ、予言するわ。七度台の、真ん中より下。賭けてもいいわよ。ほら、熱測りな。その前に山羊ミルク飲む？」

クラウドはこくんとうなずいて、ふらふらしながらも母さんに支えてもらつて、ベッドの頭板にもたれて身体を起こした。そして空色のコップから自分でミルクを飲んだ。冷たくてすぐおいしかった。ニブルで飲んでいたので同じ味だ。それを云うと、母さんは笑つた。

「だって、それションじいさんちの山羊のミルクだもん。あたし持つてきたのよ。こーんなでつかい、五リットル入

るタンクに入れてさ！」

それでクラウドは、大好きな空色のコップに三杯飲んだ。それから熱を測った。母さんの予言は正しかった……：……いっただって正しいのだ。クラウドの熱は、七コンマ四だった。クラウドはまだ病人だった。そして、本人の気持ちに従えば、より幸福な病人になった。ひどいときよりも具合がいいが、まだ完全ではなく、でもある程度回復しているので、自分の意志を示して、あれこれ注文をつけたり、甘えたりすることができると。

「いま何時？」

クラウドは母さんに袖を持ってもらって、ばんざいしてバジャマを脱ぎながら訊いた。

「午後二時半よ」

「もうすぐおやつだね。今日って十二月十四日？」

母さんはクラウドの体を拭く手を止め、めんくらった顔をした。それから、笑い出した。

「あんたねえ！　かわいそうな子！　今日は十七日！　クリスマスまであと一週間と一日！」

「うそだ」

クラウドは両手で頬を抑えて叫んだ。急に酷使された声帯がびっくりして、咳が出た。

「あんたったら、あたしが来てからまるまる三日、昏々と眠り続けたもんね。失った時間は取り戻せないけどさ、ま、しょうがないわよ。こんな年もある」

クラウドはみるみる悲しそうな顔になった。風邪のせい（と本人は思いこんでいた）でめちやくちゃだ！　貴重な休暇なのに！

母さんはいかにも同情した顔になって、「ねえ！」と云った。

「あんたがなに考えてるか、わかる気がする。でもね、だめよ、起きたら。まだ熱があるんだし」

クラウドはあんまり悲しいので、鼻をすすって、「あんまりだよ」と云った。

「おれ、なんで三日も寝てたの？　っていうか、五日も寝てたの？　信じられないよ！」

母さんは笑いだした。

「あんた、すごくかわいそうだったのよ。顔は真っ赤で、うなされてさ、熱なんて、九度もあった。猩紅熱みたいだ

ったわよ。あたしあんたに障害が残ったらどうしようって  
思ったのよ！ ほら、それよかましでしょ？」

クラウドは救急車とか消防車とか、いろんな車のイラストがプリントされている青いパジャマを着せられて、再び  
寝かしつけられた。

「風呂に入りたいよ」

母さんは笑った。

「お医者がいって云ったからね。そりやそうと、あんたの  
ダーリン、いま外にいるの。なにしてるかは知らないけど。  
呼んでくる？」

クラウドは首を横に振った。だって、セフィロスはだ  
いたい一緒にいられるけれど、母さんとはまた別れ別れに  
ならなくちゃいけないのだ。それを考えると、クラウドは  
いまからすぐくつらかった！ ニブルを出てきたときより、  
もっともつとつらかった。風邪のせいで、ほんとにめちゃ  
くちゃだ！

母さんはクラウドが寝ている横に腰かけた。それで、ク  
ラウドは母さんの太股のつけ根のあたりと、ベッドの間に  
鼻先をつつこんだ。母さんはクラウドの金髪を優しく撫で

た。

「ときどきさ、あんたのこと、外に出すんじゃないかって  
て思うの。でもそう思ったすぐあとに、だけどクラウドは  
男の子なんだし、どうしたっていつかは出ていくんだって  
思うわけよ。でしょ？ あんた、ひとりでなかなかうまく  
やれてるじゃない。それって、大事なことももんね。だけ  
どだからって、あたしたち、なにかが変わったわけじゃな  
いでしょ。成長するってさ、そういうこと。どつかで、痛  
い思いしなくちゃいけないわけよ、お互いに」

クラウドは目をつぶった。クラウドは、母さんからひと  
り立ちした。男なら、当然だ。でも、ときどきは子どもの  
クラウドに戻ったっていいし、だからいまは別にいいんだ。  
そう思いながら、クラウドはうとうとしはじめた。もうす  
ぐ眠っちゃうなあ、と思いながら、クラウドは母さんがそ  
つとクラウドの頭を枕の上に戻すのを感じた。湿布のにお  
いに包まれて、クラウドはすやすや眠った。病気のための  
眠りではなくて、疲労回復のための眠り。

セフィロスがコテージへ戻ってくると、クラウドの母さ

んが台所で料理をこしらえていた。

「あら、おかえり。あのさ、帰ってきて早々悪いんだけど、医者呼んでくれない？ あの子、さっき目覚ましたの。熱がなんと七コンマ四まで下がったわけよ。すごいと思わない？」

セフィロスは氷のようになった鼻をそつと指先であたためていたが、これを聞いて目を見開いた。クラウドの母さんはにやにや笑った。

「悪いね。でも母親の特権って、これくらいしかないわけよ」

セフィロスはもちろん、はなつから、母さんと勝負するつもりはこれっぽっちもなかった。母親と恋人では、役割がまるで違うのだ……混同している男もいるが。この三日間、絶えずクラウドのそばにつきそい、彼のためにあれこれ世話を焼いたのはクラウドの母さんだった。だから彼女には、自分の息子と真つ先に会話を交わす権利がある。当然だが、彼女は慣れたものだった！ クラウドの母さんなので、クラウドが病気のとときにどうするべきか、彼女は全部知っていた。クラウドの子どものものを全部持つ

ているので、彼のベッドのまわりを見慣れた品で取り囲むことだってお手のものだった。そしてクラウドにとつて、そういうのはとても大事なことになるのだ。彼は、ものに執着する子なので。もちろん、クラウドは新しいことが好きで、刺激が好きで、変化が好きだ。でも、彼はそれと同じくらい、見慣れた、自分のものになったものが好きなのだった。耳あてひとつとってもそうだ。彼は心底気に入ってしまったら、もう意地でもそれを変えたくないのだ。自分の身体が大きくなつたとか、歳がいくつになつたとか、そんなことは関係がない。だから、母さんがきてからクラウドの調子がだんだんよくなったのは、非常に納得できることだった。本人が心からのびのびして安心できる環境にいると、しだいに不調の方でひとりで居づらくなって、出ていってしまうものなのだ。

いちじるしく眉毛の濃い医者が、いつぞやみたいにピエントさんと奥さんをともなつてやって来た。クラウドはうとうとしていたが、ドアが開く音で目を覚まして、自分の主治医がいかに個性的な眉を持っているかはじめて知るに至った。そうして吹き出しそうになったが、どうにかそ

れをこらえた。クラウドの熱は七コンマ一まで下がっていた。

「峠は越えたようですね」

お医者さんはぴくぴく眉を動かしながら云った。

「気管支炎もだいぶいい。若さというものは、ねえ！ 君」

お医者さんは感慨深げに云うと、クラウドの身体をぼんぼん叩いた。

「母親の力ですよ、あたしに云わせれば」

ピエントさんの奥さんは満足そうに小声で云った。クラウドの母さんは肩をすくめた。医者是否定しなかった。

「あの、ご飯食べてもいいですか？ それから、風呂に入ってもいいですか？」

クラウドが云うと、医者は笑い出した。

「食事は消化のいいスープからにしないさい。お母さんから作ってもらってね。君のお腹は五日もからっぽだったんだよ！ ゆっくり、少しずつ！」

「でも、おれさつき、山羊ミルクコップに三杯飲んじゃいました」

お医者さんはもっと笑った。そして、もう少し体力が回復し

なければ入浴はとても認められないと云った。

点滴の管とカテーテルが外された。クラウドは自分ひとりでトイレに行けるようになった。で、行ってみることにしたが、立ち上がるとふらふらした。歩くのも変な感じだった。たった五日で、彼の筋肉に重篤な変化が起きてしまったらしかった。セフィロスが見かねて腕を取り、ついていった。

「おれ、頭洗いたいよ。もう限界だよ」

クラウドが唇をとんがらかして云った。セフィロスは、たしかになかなか見事にへたりこんでいると云った。

「母さんに、お湯の要らないシャンプーと、シャンプーハット持っていないか訊いてくれない？ きつと、母さん忘れてないと思うけど」

クラウドはなんとかトイレに行って、セフィロスに支えられながら、洗面台で、大好きなメロン味の練り粉で歯磨きをした。クラウドはでも、自分で歯磨きすることを早々に放棄して、セフィロスにやってもらった。彼は甘えていた。母さんに甘えるよりもっとストレートに、どぎつく、甘えていた。本人曰く立派なおとなの、十六歳のクラウド



として。彼は歯ブラシをくわえたまま、何回もセフィロスにべったりくっつくこうとするので、セフィロスにしてみたら、やりにくいことこの上なかった。でも彼は我慢して、クラウドのしたいようにさせた……というより、これが通常運転のクラウド・ストライフだった。クラウドはようやく、ちょっとばかり元気になったのだ。丁寧に歯を磨いてやり、クラウドがいつも家で使っているブタのコップでぶくぶくがいをするのを見守りながら、セフィロスはそれを嘔みしめていた。

たくさんのお見舞いと、同じくらいたくさんの勧誘

クラウドがよくなったといっているので、真っ先にやってきのはやっぱりザックスだった。用心して、エアリス嬢のことはコテージへ置いてきた。

「だって、男にとつてはよ、自分がベッドで寝たきりのところなんて、女の子に見せたくないもんなのよ……」

エアリス嬢は、男のこのどうにもしようのないプライドについて、賢明にもくすくす笑うにとどめた。

ザックスは部屋に入ってきて、ベッドに横になっている友だちを見ると、一瞬泣きそうな笑顔を浮かべた。そしてすぐにいつものにかにかした顔になって、大股で部屋を横切り、枕元に立った。

「おまえってさあ、運がいいんだかなんなんだか、さーっぱり、わかんねえのなあ！」

クラウドは自分は運がいい子だと思っていた。だから、ザックスのこのことばに抗議した。

「おれは運がいいんだよ」

「ま、そうかもねえ」

ザックスはにやつきながら云い、クラウドと、母さんを交互に眺めた。それから、クラウドの母さん（と自分の彼女）をどのようにして遠方から運んできたか説明した。クラウドは自分の彼女までも連れてきたザックスを大いにからかってから、ヘリに乗りたくて、足をばたばたさせた。

「おれ、来年になったらヘリの操縦免許取るんだ。運転中は酔わないし」

クラウドは部屋じゅうのひとに……そこにはセフィロスと母さんがいたが……宣言するように云った。

「それで、マチェットじいさんに、ヘリの中身がどうなってるか、教えてもらうんだよ」

ザックスはそれで、マチェットじいさんからの伝言を思い出した。

「そうだった。じいさんが、おまえによろしくつて。早くあとを継ぐ決意を固めてくれつてさ」

クラウドはもったいぶった顔をした。

「うーん、でもなあ、おれ、まだわかんないよ」

かわいそうなマチェットじいさん！ 彼はまた待たされるのだ。そのうちに、彼の寿命が尽きてしまったなんてこ

とになったら、笑い話にもならない。でも、たぶん彼はあと二十年は大丈夫だろう。

翌日、クラウドはベッドの上で、膝の上にゾウのランチヨンマットを敷き、ページュの陶器の、取っ手がふたつついたスープマグで、朝ごはんは母さんが作ってくれた、じやがいもをすりつぶしたポタージュスープを飲んでいた。クラウドの身体はじやがいもと山羊のミルクがあれば、問題なくやっていける。彼の体温はもう六コンマ八まで下がっていた。これはほとんど普通だ。彼は早くフライにしたイモが食べたくて、母さんにいつになったら食べられるのか訊いているところだった。セフィロスはまたどこかへ出かけていた。

玄関の呼び鈴が鳴った。母さんは立ち上がって、ちょっと折れ曲がっていたランチョンマットを直し、部屋を出ていった。そしてピルヒエさんとコランダー捜査官を連れて戻ってきた。ピルヒエさんは「よう、坊主！」と明るく云い、腕を振り回した。

「聞いてくれよ！ おれはどうとう、おじいちゃんになっちゃったよ！」

「この六日のあいだにですか？」

クラウドは面食らった。

「おお、そうなんだ。娘が妊娠してるって話はしただろ？それがな、産みやがったんだ！ 男の子だ！ まったく、妙な気持ちだよ。だって、おれはその男の子の母親が、おれの奥さんの腹から生まれてくるところ、見てるんだからな！ それで、こう思ったんだ。おれもな、昔、誰かの娘をこんなふうにしちまったんだ、ってな」

ピルヒエさんは肩をすくめた。

「子どもの前でそんな話するもんじゃないよ」

コランダー捜査官がたしなめた。

「この子は子どもじゃないよ」

ピルヒエさんが云った。クラウドはすぐうれしくて、スープを全部飲んだ。母さんが、みんなにあったかいお茶を持ってきて、クラウドのマグとスプーンを片づけた。ピルヒエさんは陽気にハンチング帽を持ち上げて、ストライフ夫人にお礼を云った。

「まったく君には、はらはらさせられたよ」  
コランダー捜査官が笑いながら云った。

「あの、おれ迷惑かけちゃってほんとにすみません。おれのせいで夜通し働かされた捜査官のみなさんに、おれからって謝ってもらえませんか？」

クラウドはちよつとぼつが悪そうに云った。コランダー捜査官はうなずいた。

「心配ないよ。もつとくだらない理由で警察の手をわずらわせるやつはうんざりするくらいいるからね。君のはまあ、正当な理由があつたからねえ。おかげで、男の子つてものがどんなものか、身にしてみて思い出したよ」

「おれは、坊主みたいなのやつ悪かないと思うけどね」

ビルヒエさんはいたずらっぽく笑った。

「勇み足つてのは、歳を取りやたいがい落ちついてくるもんだけど、最初からその意気込みもないやつは、歳を取つたつてやっぱりだめなんだ。坊主みたいなのは、新聞記者に向いてるかもしれないよ。なんにでも鼻つつらつっこんでく勇氣と好奇心こそ必要な商売なんだ。もしもその氣になつたら、アイシック・リポートに電話かけて、おれを呼び出しなよ。特別に、おれが面接するよ」

クラウドの母さんは相変わらず窓辺に置いた椅子で編み

物をしながら、これを聞いて密かにほくそえんだ。うちのクラウドだったら、その氣になりや、なんだつてできるじゃないの！

「君が具合を悪くしていた五日のあいだに」

コランダー捜査官はお茶をおいしそうに飲みながら、その間の出来事を説明してくれた。

「ザックス・フェア君が機転を利かせて奪還してくれた鏡は、無事ラスカお嬢さんのところに戻つたよ。彼女はひどく喜んでた。もちろん、その恋人もね。ふたりは今日の午後、ようやくマグリムさんの父親に会いに、ミディールへ出発するそうだ。クリスマスは向こうで過ごすそうだよ。それから君がアジトに潜りこんだふたり組の男は、拘留所に送られて、毎日取り調べを受けてるよ。どうやら、彼らが所属する犯罪組織は、ふたりのことを切り捨てることにしたらしいね。ザックス・フェア君が取引をしたんだ。大した男だよ、彼は。うちに欲しいよ。」

それでだね、君が寝てるとこ悪いと思つたんだが、こないだみんなで話し合いをしたんだ。その結果、広く世間一般に向けては、こういう筋書きを押し通すのはどうだろう

かという話になった。犯罪組織に鏡を盗み出すように依頼したのはシノザキ助手でね……これはある意味事実だろう？ 彼は、自分がウータイ系だという理由で、出世に関して差別を受けてると思ひこんでた。そして、教授が自分を妨害しているんだと思ひこんでいたんだ。ちよつとおかしくなっていたんだね。これも事実だろう？ それで、教授の鼻を明かしてやろうと、彼の研究資料を盗み見たわけだよ。で、ラスカさんの鏡に行きついた。彼はそれをふたり組の男を通じて盗み出して隠しておき、学術調査に向かった。ここからがポイント」

捜査官は咳払いした。クラウドの耳がびくびく動いた。「ところが、ラスカさんの鏡があの神殿の謎を解く重要な鍵だったというのは、シノザキ助手の見当違いだったんだ」

クラウドは目を丸くして、口を開いた。

「そうなんだ。これは非常に残念な、そしてわれわれにとつては幸いな間違いだった。あの鏡は、なんてことない出土品のひとつで、おばあさんからの遺品にふさわしい程度の価値を持つものにすぎなかったんだ。これは悲劇だね。そして、シノザキ助手はあの神殿で自分の致命的な勘違い

に気がついたんだ。彼はもともと、ちよつと頭のねじが締まりすぎていて、やぶれかぶれになっていた。彼は死のうとしていたんだよ。教授が研究するつもりだった神殿を台無しにして、彼に復讐しようとも考えていた。なにしろ、自分が出世できないのは教授のせいだってことになってたからね。それで、助手は荷物と見せかけてひそかに大量のダイナマイトを持ちこんでいて……」

クラウドが両手を頬に当てて、声にならない悲鳴をあげた。

「どっかん、と神殿は吹き飛んでしまいましたとさ」

ピルヒエさんが結んだ。

「おれが考えたんだぜ。どうだい？」

ピルヒエさんはにやにや笑いながら云った。

「小説家になれそうなんじゃないか。ま、ここだけの話、一時期なろうとしたんだがね。結局、才能がないことに気づいたんだ。いまとなつちゃ、よかったよ」

「天才的ですね」

クラウドは興奮して、口をばくばくさせた。

「おれ、その小説読みたいです……あのう、でも、できれ

ばマンガで」

ひとのいいピルヒエさんは大笑いした。

「じゃ、主人公は君だな。少年記者で、どこにでもいそうな子なんだけど勇気があつて、ちよつと向こう見ずで勇み足なんだけど、でもいざとなつたらすぐく機転が利く。こりゃ、いけるんじゃないかな？」

実際、ピルヒエさんはその話を書いた……定年後に。で、それは大当たりして、世界中の冒険精神あふれる男の子たちの目を輝かせたのだが、それはまたうんと別のお話だ。

「それから、大事なことがある。この件に、君や、君の上司や、友だちは一切関与していないことになる。これは君の上司や友だちの意見だ。事件は、最初から最後まで捜査局が独自に捜査し、解決したことになる……心苦しいがね。でも、その方がいいとわれわれは判断した。そこで、この筋書きを採択し、公表するにあたっては、関わったみんなの同意が必要だ。いまのところ、ほかのみんなは同意してくれているが、君がもし反対するなら、われわれはまた考えなおす必要がある」

捜査官は云った。

「いろんな意見を尊重しなくてはいけないからね。たとえば、やむを得ない事情があつてのことにせよ、教授だつて悪いことをしているのだから、それを罰しないのはおかしい、というのは立派な意見だ。教授はたしかに社会的地位もある。すぐれた研究者でもある。でもだからつて、われわれはそういう人間をみんな見逃していいと思っているわけじゃないよ。われわれがそういう筋書きでまとめたのはひとえに、教授のひとがらのためなんだ。わかるかね？」

クラウドはこくんとうなずいた。教授とピルヒエさんと三人で面会したときのことを、そのときの教授のすこし寂しそうな顔を、クラウドはよく覚えていた。彼が好きなか、クラウドにもおぼろげながらわかった。

「ではそこを理解してもらつた上で、君の意見を聞こう。難しい問題だ。でも遠慮することはないよ。君は、われわれの筋書きに同意してくれるかい？ それとも、別な意見があるかね？」

クラウドは真剣な顔になって、別の意見はありません、と云った。ピルヒエさんは微笑んだ。コランダー捜査官は、

表情を動かさず、うなずいただけだった。

「では、これで決まりだ」

「おれは、明日の朝刊向けに急いで記事を書くよ」

ピルヒエさんはもう立ち上がっていた。

「民衆はいつだって真実を知りたがってるからね」

そうしてクラウドの母さんに丁寧に挨拶し、コートを着てハンチング帽をかぶると、部屋を出て行くこととして、慌てて戻ってきた。

「おまえにやるよ、坊主」

彼はクラウドの手のひらに小さな銀色のものを置いた。

「記者クラブの紋章なんだ。こいつがどういふことかわかるかい？ ええ？」

そうして、非常に含みのあるウィンクをしてよこした。

つまり、クラウドはその気になったら、それをちよつと悪用してもいいのだ！ もちろん、もう少し大きくなったら、クラウドはぼうつとなつて、手の中を覗きこんだ。銀色の羽ペンの形をした紋章が、鈍く光っている。

「じゃ、わたしも失礼するよ」

捜査官は立ち上がって、これまたクラウドの母さんに「す

ばらしい息子さんをお持ちですね」と云つて、丁寧に挨拶をすると、ピルヒエさんがくれた紋章の隣に、もう型が古くなつてしまつた警察のバッヂを置いた。銀色にぴかぴか光る、かつこい星型のバッヂで、クラウドは目を輝かせてそれを受け取つた。

「わたしはもう少し常識的な人間だからね」

捜査官は楽しそうに云つた。

「責任ある大人として、こう云つとくよ。悪用しちゃうよ！」

クラウドは敬礼した。捜査官は笑いながら出ていった。

セフィロスが戻ってくると、クラウドは大はしゃぎでそれを見せた。パジャマの胸に紋章とバッヂをつけ、ガス・ピストルを持ちだして、西部劇の保安官みたいに高飛車に振舞い、口汚くののしる真似をした。そして、七コンマ三まで熱が戻つてしまつた。セフィロスは怖い顔をして、クラウドをベッドに寝かしつけた。

「テンガロンハットがほしいよ。ほんとに十ガロン水が入るか確かめるんだ」

クラウドは懲りずに云つた。

「寝なさい」

セフィロスは怒った声を出した。

午後からは、ひっきりなしにひとがやってきた。まず、マグリム氏とマティルダ嬢だ。ふたりは旅行カバンを持っていて、もうミディールへ向けて出発するところだった。

「あなたの具合がよくなるのを待ってたのよ」

マティルダ嬢がくすくす笑いながら云った。

「だって、あなたもこの鏡が戻るのに、協力してくれたひとりなんですもの。ほんとは趣味が悪い鏡なのかもしれないけど、でもわたしにとっては、やっぱりおばあちゃんの大事な鏡だわ。ありがとう」

マティルダ嬢が裏に独特の模様がある、例の丸い鏡を取り出した。クラウドはそれをちよつと複雑な気持ちで眺めた。

「ともかく、君が治ってよかった」

マグリム氏がやれやれというふうに眉をつり上げた。

「だって、鏡が戻ったからぼくたちだけは万々歳だなんて、世の中、そんなわけにいかないからさ。君が治ってくれな

かったら、ぼくたち、どうしようかと思ってたよ。ほんとによかった。それから、彼女の鏡のために力を尽くしてくれてありがとう」

マグリム氏はクラウドに手を差し出した。クラウドはそれをおさるおさる握った。マグリム氏は、しっかりクラウドの手を握り返した。それは、つまり、男どうしの握手だった。相手を認め、尊敬する男が求めてくる握手だった。クラウドはちよつと感激して、赤くなった。

「それから、君が鉄道模型にはまってるって聞いてね……」

マグリム氏はいたずらっぽく笑った。

「気に入ってくれるといいんだけど」

マグリム氏はクラウドに、高級そうな濃いブルーの包装紙に包まれた箱を差し出した。クラウドがマグリム氏を見ると、彼はうなずいたので、クラウドは包装紙を破って箱を開けた。プラスチックの透明な保存ケースが出てきた。中に入っているのを見て、クラウドは目を丸くした。

「ぼくたちが先日乗ったコンチネンタルだけど、見て、ここにコンチネンタル開通記念車両ってあるだろう？ シリアルナンバーもついてる。ベルクリン社が、主に関係者に



配るために五百台だけ作ったんだよ。ぼくはオークションでこれを買ったんだけど、今回の記念品にちょうどいいと思わないかい？」

クラウドは一見、ほとんど話を聞いていないかに見えた。ぼうつとして、顔を赤らめ、唇は半開きで、目はなにか途方もないものを見たときの、うつろな、焦点の合わない感じだった。

「白状するとね」

マグリム氏は頭を掻いた。

「ぼくも好きなんだ。たまらないよね。暇があると、H Oゲージのをいつもいじってるよ。走らせたり、風景をこしらえたり……飽きないんだ」

「……これ、あることは知ってたんです。写真で見ました」

クラウドはようやく細かい声でつぶやいた。

「いいなあって思ってたよ。でも、ほんとに実物を見られるとは思ってませんでした」

それから頭をぶんぶん振って、大慌てで包装紙で箱を包み直した。

「だめです、もらえません」

クラウドは厳しい顔で云った。

「もらうには貴重品すぎます！」

マグリム氏はちよつと困ったように笑って、婚約者の顔を見た。

「ねえ、わたしたち、話し合って決めたのよ。あなたにこれをあげようって。だから、あなたが受け取ってくれないと、わたしたちすごく困ってしまうの」

クラウドは音がしそうなくらい首を振った。ふたりはまた困った顔をした。成り行きをじっと見守っていたクラウドの母さんが、かぎ針を持ったまま椅子から立ち上がった。「はいはい、ストップ。息子のことがばうんじゃないけど、この場合は、うちの子の意見が正しいかもね。だってさ、あのね、法外な値段のプレゼントするってことが別に悪いってんじゃないけど、問題なのは、今回の場合は、その金額に値するようないとしてないってこの子が思ってるってこと。それってすごく重荷なわけ。特に、湯水みたいに金を使えるような環境で育ったわけじゃない人間にしたらよ。そのことで、あんなたちに対する気持ちを変えたくないわけよ。気持ちよくつきあいたい。最後まで。そういうの、

尊重してくれない?」

マグリム青年とマティルダ嬢は、ふたたび目を見合わせた。セフィロスは微笑していた。マグリム青年が頭を掻き、肩をすくめた。

「わかりました」

彼はきつぱりと、晴れやかな顔で云った。

「どうやら、ぼくが間違っていたみたいです。じゃあこれは、相変わらずぼくのものでいいんですね? でもそうしたら、君にはどうやって気持ちを示したらいいんだろ!」

「テンガロンハット持つてませんか?」

クラウドは訊いた。しつこいやつだ。

「テンガロンハット? 悪いんだけど、持つてないなあ。でも、来年コスモキヤニオン方面に行く用事があるから、そのとき本場のやつを探してみるよ」

セフィロスはもしその本場のテンガロンハットとやらが届いたら、クラウドの保安官ごっこにどれだけつき合わせるかしないと考えて、早やため息をついた。それからみんな、汽車の時間まで、お茶とクラウドの母さんが焼いたベリーケーキと一緒におしゃべりした。

クラウドの母さんは、ふたりが帰ってから、ふたりについて例の毒舌を振るつた。

「超お坊ちゃんとお嬢じゃない。世間知らずっていうか、純粹っていうのか。でも、ま、世の中幸せなことにあれで生きていける人間っているのよね。そういうのもいなきゃ、救いようがないわよ」

お次に、ホープニツツエル教授と、カドバン准教授がやってきた。

「わたしとは初対面ですね」

カドバン准教授はクラウドに手を差し出して、握手を求めた。

「でも、君のことはよく知ってますよ。いろいろ聞かされたから」

カドバン准教授はいたずらっぽく笑った。

「君が新聞記者じゃないと知ったときは驚いたよ」

ホープニツツエル教授が肩をすくめた。

「だって君、どこからどう見ても見習い記者って感じだったからねえ!」

クラウドは目を輝かせた。

「おれの変装、うまくいつてましたか？」

「大したもんだったよ。あのキャスケットとニッカポッカはよかった。伝統的なスタイルだからね」

クラウドはうれしくて、むふ、と鼻息を漏らした。

「われわれは、今日これからミッドガルへ戻るんだ」

教授が少し物憂い顔つきで云った。

「研究するものがなくなってしまうからね。でも、これでよかったんだと思っているよ。今度のことは、いい教訓になった。自分ひとりが責任を負えばいいと思って、こっそりものごとを解決しようとしたってそうはいかないってことだね。カドバン君やみんなに打ち明けて、調査を中止するべきだったんだよ。君も今回は、似たようなこと反省したんじゃないかな？」

クラウドは首をすくめた。みんな笑った。母さんは教授たちが帰ってから、

「そういえば、あんたの変装写真見たわよ！ もう、胸がつぶれそうになるくらいかわいかった！」

と云った。

それから、ゲインシユタルトさんが来た。クラウドは興

奮して、チョコボを見たいと云ったが、外に出るなんてまだだめ、と母さんが云ったため、渋々あきらめた。

「坊主、おまえ、ほんとにおれの下で修行する気ないかい？ 坊主なら、いいチョコボ使いになれると思うんだがなあ！ 奥さん、どうです？ この仕事は、ちいっとばつか稼ぎがいいですよ。景気にもそれほどべらぼうに左右されるものじゃねえし。息子さんに非常に向いてると思うんですがねえ」

これでクラウドは一日のうちに三つの職業に勧誘されたわけだった。整備士、新聞記者、そして馭者。

ビルヒエさんが書いた事件の記事が、翌朝のアイシツク・リポート紙の一面に掲載された。「本紙独占！ 貴重な古代種遺跡、失われる！ 研究助手の暴走……その心の闇」セフィロスはベッド横の椅子でこれをクラウドに読んで聞かせながら、ビルヒエさんは社会派の本格記事も得意だが、こういうごてごてのゴシップ趣味満載の記事も実にうまいものだと評した。

「彼は楽しんでるな。読者の好奇心をくすぐるポイント

をことごとく押さえ、しかし文体の品位を保っている。やたらと過激なのは見出しだけで、中身は大したものだ。ミッドガルの新聞社に、こんな記事を書ける記者がいるかどうか」

クラウドはじゃがいものポタージュと、卵とハムのガレット、母さん手作りのフルーツグラノラ、それに薄く切った焼き菓子のシュトーレンを食べていた。彼の胃袋は、もうほとんど回復していた。

『ビルヒエさんって、すごいひとなんだね。あのひと、息子がいてさ、脚本家になりたいんだって……演劇の』

セフィロスは眉をつり上げた。

「文章家一家か。おれもそういう家に生まれていたら、なにかが違っていたかもしれない。書く文章の大半が、走行距離無慮千五百料、などというもののばかりでは気が滅入るというものだ」

「じゃああんたも書けばいいだろ。小説かなんか。こういうのどう？　主人公は男でさ、恋人が十も年下なんだ。で、すごくかわいらしくて、魅力的で、けなげで、いい子なんだ」

セフィロスはそんな人物では小説にならないと云った。クラウドは小説って、つまんないの、と思った。

「あんたさあ、毎日、外になにに行つてんの？」

このところセフィロスが毎日のように何時間も外出しているの、クラウドは訊いた。

「いろいろだ。今回の事後処理やなんか」

「それって、おれに云えない薄暗い感じのこと？　あと、

そうだ、四次元ポケット見せてよ」

「まあ、なにもかも、おまえの具合がすっかりよくなったらな。ほら、熱を計っておけ」

クラウドは体温計をくわえたまま、顔をしかめてみせた。クラウドの熱は、もう六コンマ五、つまり、平熱だった。

その日もいろいろなひとが来た。クラウドはもうベッドから起きて、一階の居間でみんなを歓迎した。捜査局の面々が入れ替わり立ち代りクラウドのところへ来て、彼を励まして行つた。ライオネル捜査官なんか、最後に敬礼までしてくれた。みんないいひとたちだった。自分の命が危険に晒される仕事をしているひとたちに限っていいひとが多いのは、人類の損失だ。クラウドはそう考えた。だって、み

んな普通よりいいひとなのに、普通より高い確率で死んでしまう。ザックスだってそうだ。いいひとなのに、好んで自分の命を危険にさらしている。そのザックスは、エアリス嬢を連れて遊びに来た。クラウドの母さんはみんなにチエリーパイをふるまった。クラウドも食べた。わいわいやっていたら、呼び鈴が鳴って、ピエントさんが入ってきた。「お客さんをお連れしましたよ」

ピエントさんの後ろから入ってきたのは、ずり落ち帽子の老紳士、エリック・エリックソンさんだった！ セフィロスとクラウドとザックスはびっくりして目を丸くした。クラウドの母さんとエアリス嬢は、誰だかわからずきよとんとした。ザックスがふたりに彼のことを説明した。

「やあやあ、みなさん。このたびは、大変でしたね」

エリックソンさんは慣れた調子でコートを脱ぎ、例のずり落ち帽子を取って、ソファに座った。

「だけど、わっかんないなあ！　なんでピエントさんがエリックソンさんと一緒に来るんですか？　知り合いなんですか？」

ザックスが明るく云った。

「推測してみてくださいよ」

ピエントさんが楽しそうに云った。

「いつだかみたいだね。あれがもう随分前のことのような気がしますな！」

セフィロスが独特の微笑を浮かべて口を開いた。

「推測するに、エリックソンさんこそ、この保養地の所有者なのではないでしょうか？　あなたは一般には、エリック・ヴラデミロスの名で通っている、事業家の方だ。より正確に云えば、ヴラデミロス・ガス会社の会長でしょう。総従業員数四万人を超える、アイシクル一の巨大企業です」

「……すごい」

ピエントさんがぼかんとした顔で云った。

「また当たりましたな」

エリックソンさん……否ヴラデミロス会長は、目を細めて微笑み、クラウドの母さんがくれたお茶をすすった。

「まあ、そういう見方もできますね。それはもちろん、わたしの一部ですが、全部ではありませんよ」

「他にもありますよ。クラブS・O・Nの会長もあなたでしよう？」

セフィロスがにやつきながら云った。

「まあね」

ヴラデミロス会長は肩をすくめた。

「そういう一面もありますねえ、確かに。わたしはヴラデミロス家の養子ですから。もともとの名字はエリクソンです。そして、わたしはこの名字にいまだに深い愛着を持っていますよ」

「エリクソンさん！」

ザックスが叫んだ。

「ひとが悪いなあ！ 云ってくれればよかったのに」

「云われてわかったか？」

セフィロスが意地悪を云った。

「ま、なんのこっちゃらわかんなかったけどさ」

ザックスはひとがよさそうに肩をすくめた。

「ピエントさんからずっと、いろいろな話を聞いてましてね。君の具合がよくなってよかったですよ。心配してましたからね」

エリクソンさんはクラウドに微笑みかけた。クラウドはちよっと恥ずかしくて肩をすくめた。まったくみんなにこ

んなふうにもてはやされると、調子が狂ってしまう。クラウド個人の見解としては、クラウドをもてはやすのは、母さんとセフィロスで十分だった。

「しかし、わたしは感心しましたよ。いまだきの若い子の中にも、まだこういう勇氣と狭義心のある、氣骨のある子がいるんですね」

「やだなあ、エリクソンさん。素直に無鉄砲だって云っていいんですよ」

ザックスが混ぜっ返した。エリクソンさんは笑って、親しげに首を振りながら、クラウドの母さんの方を向いた。

「きつと、あなたの育て方がよかったんでしょね。差し支えなければ、どのように教育なさったのか教えていただけますか？ 従業員を抱える手前、わたしは教育というものに非常に興味を持っているのです」

クラウドの母さんは編み物の手を止め、肩をすくめた。

「別に特別なことはなにもしてないけど……この子になんかあるとしたら、それは純粹にこの子の持ち物だと思っし。あたしが伸ばしたわけじゃないし、縮めたわけでもないし。損なわないように注意しただけで」

「それがなかなかできないんですよ……普通はね」

クラウドの母さんはもう一度肩をすくめ、エリクソンさんに、一緒に昼食を食べるかどうか訊いた。いただきますということだったので、クラウドの母さんは準備のために台所へ行った。

「実は君を勧誘に来たんですよ」

エリクソンさんはクラウドの母さんが作ったチーズオムレツを猛烈に美味しいと云ってから、クラウドに内緒話をするように話しかけた。

「ピエントさんから、君がたいへん器用だという話を聞いてね。実はうちの工場で、ガスを掘り出すための新しい機械を開発することになったんです。そうじゃなくても、うちはいつでも優秀な技師を求めている。生来手先が器用なのに加えて、粘り強くて、こだわり屋で、意志の強いのは、いい技術者になります。経験からして、これは間違いない。

君は、どうもそういう子だと思うんですね。ですから、その気があれば、うちの会社に入ってもらって……もちろん君が傭兵のままでいたいというなら、いいんですよ。でもその仕事は一般に云って危険が大きいし、決して軍隊をば

かにするわけではありませんが、君のようなひとがそういう種類の仕事に就いているのは社会的に大きな損失です」

クラウドはこれで、都合四つの職業に勧誘されたことになる！クラウドはすっかりこんがらがってしまった。セフィロスは笑い出した。クラウドの母さんはやにやした。ザックスは「ひゃあ！ 閣下ったら、モッテモテ！」とやじを飛ばし、クラウド本人は顔をしかめ、頭をかきむしった。だって、こんなに悲しいことがあるだろうか？クラウドは傭兵をやっている。自分で選んではじめたのだ。でも、その分野では彼はほとんど注目されない。それなのに、いわば本職以外の職種には、こんなに重宝がられるなんて！クラウドはうなづいた。そして、ちょっと考えさせてください、と便秘のときの女のひとみたいな顔をして云った。エリクソンさんは、「まあ、急ぎませんよ」と云い、「しかし、おいしいオムレツですね！」と叫んだ。

「あたしに社員食堂のコックかなんかの口ありません？」

クラウドの母さんが云った。みんな笑い転げた。

クラウドがほとんど回復したので、セフィロスはクラウ

ドと同じベッドで安眠できるようになった。クラウドは母さんが持ってきた大きな星柄のパジャマを着て、ぶーたれていた。

「いらいらしちゃうよ。だって、誰もおれにいまの仕事続けなさいって云ってくれないんだ！ おれこれでも、自分で仕事選んだんだよ！ それなのにさ、みんな別の仕事ばかり薦めてきて、ばかにしてるよ！ おまけに母さんまで、まああと二年くらいぶらぶらしたっていいんじゃないなんて無責任なこと云うし」

セフィロスは穏やかに微笑した。

「だが、クラウド」

彼は静かに云った。

「結局、決めるのはおまえなんだ。周りの人間は、好き勝手に云う。でも、決めるのはおまえだ。おまえの人生だから。仕事も恋人も家も家具も、自分で選べる。でも、選ぶということには、ほかを切り捨てるということがともなう。そこを越えるのに、長いことかかるんだ。おれは十年近くかかった」

クラウドはぼんやりした顔でセフィロスを見た。セフィ

ロスはうなずいた。

「いいんだ。おまえはおまえの気持ちにだけ従えば。いつか、自然にいまの仕事を辞めたいと思うかもしれない。それか、やればやるだけはまだこんでいくかもしれない。そんなことは、おまえくらいの年齢と経験で、判断しろと云うほうが間違っている」

クラウドは、ちよつと泣きそうな顔をした。こういうことを云ってくれるのがセフィロスだった。セフィロスは、自分が散々悩み多き人生を送ってきたので、他人の迷いや優柔不断に、すごく優しいのだった。手出ししないで、ただ黙って、あるがままに任せて、見ていてくれる。母さんと、根っこは同じだ。でもちよつと違う。経験と、感じ方の差で。

クラウドはセフィロスに向かって腕を伸ばした。彼はこちらを抱きこんで、ぎゅつとしてくれた。クラウドはベッドに潜りこんで、うとうとしながら、セフィロスと一緒にいられるって、なんて運のいいことなんだろうと思った。



クリスマスとこのお話のしまい

クリスマスまであと三日になり、クラウドはようやくすっかり元気になった。ピエントさんは、クリスマス用の櫂の木を切りに行くのを、クラウドがよくなるまで待つてくれた。それで、クラウドはザックスとピエントさんと一緒にそりを引いて森へ出かけ、中くらいの櫂の木を、合計三本手に入れた。ピエントさんのと、ザックスのところのと、クラウドのところのだ。木を一本切るたびにそりの中へ転がして、うんうん云いながらそりを引かなくてはならなかったのだ、この仕事には一日かかった。三人はすっかりくたびれて、汗をかいたのでみんな頭から湯気が出ていた。

その次の日は、みんなで連れ立ってトルギボリの街へ買い物に行った。ピエントさん夫妻も一緒だった。街はクリスマスを待ちわびるムードが絶頂で、爆発寸前だった。あちこちでトナカイやサンタクロースが手を振り上げたり、首を振ったり、そりを引いたりしていた。ちかちかするきれいなクリスマスツリーがいたるところにあった。クラウド

ドはまたグロリア未亡人からもらったボラロイドを持ちだして、そういうのをいちいち写真に収めた。学校が休みに入った子どもたちが大勢はしゃぎまわっていた。山高帽をかぶったおしゃれな男性や、分厚いコートを来た女性が、両手に紙袋をいっぱいぶら下げて歩いたりしていた。一行は集合時間を決めてめいめい食料品店やおもちゃ屋などに駆けこみ、他のひとに負けじと櫂の木に飾りつけるための電球や、いろんなひとへのプレゼントや、七面鳥や、サンタクロースのための靴下を買いこみ、両手を荷物でいっぱいにした。

「煙突があるんだから、サンタクロースゼッタイ来るよ」靴下屋に入って行って、戻ってきたクラウドが、例のよくずれる耳あてを直しながら云った。

「だって、ニブルの家にも煙突があつてさ、毎年、靴下の中にプレゼントが入ってた。ミッドガルでサンタが来なかったのは、煙突がなかったせいだよ。違う？」

「おまえ、サンタクロース信じてんの？」

ザックスがびつくりしたように云った。

「あら、わたしも信じてるけど」

その横にいたエアリス嬢が首を傾けて云った。

「どうして、いないって断言できるの？」

ザックスは黙りこみ、クラウドと色違いのもこもこした毛糸の靴下を買った。

クラウドの母さんやピエントさんの奥さんは張り切って、クリスマススクッキーの材料や、クリスマスのごちそう用の食材をこれでもかとばかりに買いこんだ。ふたりにはちよつとした計画があった。お互いに、地元流の料理を作って、披露しあうのだ。クラウドの母さんは前日の夜こっそり息子に、「見てなよ。太った中年より上の女だけが料理がうまいなって云わせないからさ！ あのでっぷりした旦那の体重ひと晩で二キロくらい増やしてやるわよ」と一種の宣戦布告をしたのだった……。

みんなきらきらしたイルミネーションに包まれた商店街をぶらぶら歩きながら、いろんなものを買った。クラウドは立派な角がついたトナカイの被りものを買った。クリスマスのパークティーでかぶるためだ。テンガロンハットを見て、すごく欲しかったけれど、それはマグリム青年が買ってくれることになっているので、それまで我慢しなけ

ればならなかった。クラウドはセフィロスがなにを買ったのか気になって、フェルト帽をかぶっている黒い背中に体当たりして、紙袋の中身を見せてくれるように云ったが、セフィロスは応じなかった。クラウドはないしょにしておいていいから、しましまの棒キャンディーを買ってくれるように云った。で、五分後にはにこにこしながら白と赤のしまのキャンディーをなめていた。

クラウドはすごく幸せだなと思った。母さんとクリスマスの買い物をするのは三年ぶりのことだったし、セフィロスとははじめてだった。彼は、ミッドガルではあまり出歩かないので、クラウドはほんとのことを云うと、セフィロスとこういうことがしたかったのだ。でもセフィロスは都会派じゃないし、買い物はあんまり好きじゃない。クリスマス準備はほとんどグロリア未亡人がすすめてくれていて、ふたりがやることといったら飾りつけくらいのものであった。でも、今年はなにかも違う。全部みんなで作るのだ。こんなにひとがいるクリスマスというのをはじめてのことだ。セフィロスも、ザックスもその彼女も、母さんも揃っている。それにひとのいいピエントさん夫妻も。今

年は、みんなでパーティーをするのだ。クリスマススイブには、たぶんめいめいが好きに過ごさだろう。でも、クリスマスの日には、クラウドの母さんとピエントさんの奥さんの料理を食べ比べながら、わいわいやることになる。クラウドはトナカイの被りものをかぶって、ザックスとセフィロスはたぶん、赤いサンタ帽子をかぶって。ああ、サンタクロースは来るだろうか？ こんな寒い北国の、煙突のある家になら、きつと来るはずだ。ニブルのときみたいに。

「サンタクロースは親だ、と学校に行っていたときクラスの生意気な男の子が云っていたけれど、そんなのうそにきまっている。だって、もしそうだとしたら、母さんはプレゼントをふたつも用意してくれていたことになる。パーティーのときにクラウドがもうやつと、靴下の中に入っているやつと。ほんとはクラウドだって、きつと母さんなんだろうな、と心の隅っこの方であうけれど、でもそんなこと、考えないほうが幸せなのだ。」

いつの間にか、あたりはすっかり暗くなっていた。大きなパブの前で、巨大なサンタクロースの人形が電気の力で懸命にダンスをしていた。ピエントさんはその横に立って、

腰を揺すりながら真似をした。その奥さんも真似をした。通りがかりのひとたちがみんな笑った。クラウドの母さんが「あたしに踊らせたら警察が来るわよ」とにやにやしながら云った。

「知ってるよ」

クラウドは云った。

「母さんの踊りって、ダイナマイト級だもんね」

「あたし、ほんとのこと云うと、踊る用の服見かけたから、買っちゃったの」

母さんはウィンクした。

「どぎついやつ？」

「パンツ見えそうなやつよ」

母さんはけらけら笑った。

翌日は樅の木の飾りつけや、母さんの料理の手伝いや、あれやこれやであつという間に過ぎてしまった。そうしてクリスマススイブの夜、母さんはひとりで街に行くと云って、クラウドを面食らわせた。

「なんで？」

クラウドはびよんびよん飛び上がって云った。

「あのねえ、イブつてのは、なんのためにあるか知ってる？  
あんたたちみたいな連中のためにあんのよ！」

母さんは笑って、セフィロスと、クラウドを交互に見た。  
ふたりは顔を見合わせた。

「明日はみんなで楽しむ日。で、今日はしつぱりやる日。  
なんていうかさ、公にコンドーム大量消費する許可が出る  
ようなもんよね」

クラウドは眉をつり上げ、セフィロスは心なしに、顔が  
青くなった。

「だから、あたしは街に行って、独身の男拾って楽しむの。  
あたしあのザックスちゃんに超ハジけちゃうゴムあげたん  
だけど、あんたたちもいる？」

セフィロスはめっそうもないと首を振った。母さんはげ  
らげら笑った。

「じゃあ、そういうわけだね。明日の朝には帰るからね。  
心配しないでいいのよ！ メリークリスマスイブ！」

母さんは叫ぶと、ものすごいハイヒールを靴につっこ  
んで、出ていった。

「あーあ」

クラウドは閉まったばかりのドアを見て、ため息をつい  
た。

「母さん、たぶん、今日べろんべろんになるんだろうなあ。  
酔っ払うってわかってるなら、あんなハイヒール履こうと  
しなきゃいいのに。それでさ、靴がかわいいから迎えに来  
て、とかやってるんだ。女のひとって、なんであなの？」

「知らない。知りたくない」

セフィロスはまだ少し青ざめた顔で云った。

でもふたりは気を取り直して、クリスマスイブの小規模  
なパーティーの準備に入った。いつもクラウドがパーティ  
ーのときにやっているみたいに、おもちゃを全部テーブル  
の周りに並べ、テーブルの上にろうそくを置いて、昨日の  
うちに、家の壁という壁にぶら下げておいた豆電球のスイ  
ッチを入れ、母さんが作ってくれたミートパイとポテトサ  
ラダを出し、母さんがニブルからしよってきたどぎつい赤  
ワインをソーダで割ってシャンパンっぽくして、乾杯した。  
クリスマスに飲む酒は身体にいいと母さんが云うので、ク  
ラウドはクリスマスには飲酒が許可されているのだ。母と

息子の取り決めには、総理大臣だつて割つて入ることはできない。もちろん、セフィロスにも。クラウドはプレイヤーの中を漁つて、クリスマスの音楽をかけた。街で買つてきたケーキをもりもり食べて、赤ワインソーダ割りをぐいぐい飲み、げらげら笑う。暖炉の火が赤々と燃えている。セフィロスは腹がよじれるような冗談を真面目な顔で云つたり、物憂げに笑つたりする。

食事のあと、ふたりは家の外の樅の木を見て気分に入るために、外へ出た。雪は降つていなかった。そのかわり、空気が澄んでいて、とてもきれいな月が浮かんでいた。セフィロスが少し散歩しないかと云つた。クラウドはこくんとうなずいた。

彼はほろ酔いだったので、頬に当たる冷たい澄んだ空気をとても心地よく感じた。ふたりはさつきまでの馬鹿騒ぎを恥じるかのように、黙りこくつて、静かに歩いた。ふたりの足の下で雪がぎゅつぎゅつと音を立てた。

彼らは森の中に入つていった。夜の森は月明かりが届かず暗くて、木の陰が不気味にあたりに広がり、あんまり静かで、そら恐ろしい感じがした。こういうときに突然おそ

われる恐怖について、古代のひとびとはパーン神によるものと考え、そこからパニックということばが生まれたが、クラウドもその気に当てられて、思わずセフィロスのコート袖をつかんだ。セフィロスはしっかりとクラウドの腕をつかまえた。それでクラウドは、そこまで怖くなくなつた。

木々のあいだをゆつくりと歩く。セフィロスは湖の方へ向かつているらしかった。クラウドは黙つて彼に片腕を任せて歩いた。セフィロスが寒くないか訊いてきた。クラウドは平気だと答えた。

湖は木々をかきわけた先に、ふいに現れる。表面がすっかり凍りついていて、青白い月の光を写して、幻想的に濡れ光つていた。クラウドはそのあまりの美しさに、しばしことばを失つたくらいだった。だから、湖の真ん中に、見慣れないなにかがあることに気がつくまでに、一、二分を要した。なにか、おそらくかなり大きなものが氷の上に置かれていた。それは湖の水と同じ、月明かりの色をしていた。いまいる場所からでは遠くてよく見えなかった。

「あれ、なんだろう？」

セフィロスは微笑して、歩き出した。クラウドの腕を相変わらずしっかりとつかんで。まるで、クラウドが氷の上になんか乗ったこともなくて、すぐに転んでしまうと思っ  
ているみたいに。

湖のほとりを過ぎ、氷の上に乗出し、少し歩いたところで、クラウドは目を見開き、足を止めてしまった。湖の上にあるものの全体像が見えてきたからだ。

それは、チョコボ車だった。雪でできたチョコボ車、いわば雪像のチョコボ車だった。ほとんど実物大ではないかと思われるチョコボが、ひとり用の屋根のない車を引いている。ふたつの大きな車輪が、氷の上に実に慎重に接していた。チョコボは片脚をちよつと折り曲げ、まっすぐ前を向いて、いまにもそこから歩き出しそうだ。誰もいない森の中の氷の上に、この動かない、しかしいまにも動き出しそうな、確かな躍動感と生命力を持った雪像は、不思議な調和を見せていた。クラウドは胸がつまって、なにも云うことができなかった。雪像を作るのがどれだけ大変か、クラウドはよく知っている。雪を運び、水をかけて凍らせて引きしめながら、雪のひとかたまりをつないでいくという、

いつ果てるともしれない途方もない一步を、ただひたすら繰り返す。まっすぐなところはまっすぐに、曲がったところは曲がったなりに、ラインとその表面を整え、完成度を高めていく。

「おまえが母親に看病されているあいだ」

セフィロスは苦笑しながら云った。

「おれは、することがなかったのだからこんな遊びをはじめたわけだ。遊び……というのかどうか。おれはなにか、無心になれるものを探していた。無心になって、没頭できるものを。そうして、きつかけをもう忘れてしまったが、これを作ることを思いついたんだ。おまえが自分で動かしたがるようなチョコボ車。おまえならわかるだろう、人間には、これが完成したら、自分の願いも叶うに違いない、そういうふうに願かけをする、奇妙な習性がある。実際には、おれが約束した仕事を成し遂げるより先に、おまえは元気になったわけだが。でもはじめたものは、やり終えなくてはならないことも。とりあえず、今日のプレゼントだ。クリスマススイブおめでとう」

クラウドはまだ魔法にかかったみたいに、チョコボ車を

見つめてぼうつとしていた。やがて彼はゆつくりと、視線をセフィロスに移した。彼の目は、いまにも涙をこぼしうだった。でも、彼は泣かなかった。鼻をすすって、あわてて目をこすり、セフィロスにチョコボ車に乗っていいか訊ねた。セフィロスは崩れるかもしれないが、やってみたいと云った。クラウドは荷台の部分にうまく足をひっかけて、車の中に入った。そこには腰かけるための小さな段差が作ってあって、クラウドはそこに座った。お尻がひどく冷たくなるだろうが、そんなことは知ったことじやなかった。そして、まるでチョコボをあやつっているみたいに、手綱を引く真似をした。雪像は壊れなかった！クラウドは明日ぜつたいに、ここへカメラを持って来ると云った……でもいくら写真を撮っても、いまのこの幽玄な月夜の晩の思ひ出には、ぜつたいに敵わないだろうけれど。

クラウドはうれしくて、すごくうれしかったので、帰りはセフィロスの腕をぎゅうつとやった。真つ暗な森だつて、ぜんぜん怖くなかった。たぶん、バーンはエロースの力の前に、裸足で逃げたのだろう。家に入る前に、樅の木の前でセフィロスに冷たくなったズボンの尻をはたいもらっ

てから、クラウドは彼にキスした。セフィロスはおどけて眉をつり上げ、目玉をぐりぐり動かした。きんきらの星をつけたかつこいい樅の木は、たぶんそれを見ていただろうけれど、なんにも云わなかった。

クラウドはセフィロスに、手作りの立体風景を贈ってしまった。ほんとうは明日渡す予定だったけれど、あんなに感動したあとに、その気持ちを返さないのは人間のすることじゃないと思つたのだ。セフィロスはすごく優しく笑つて、クラウドをぎゅつとして、鼻先にキスした。それからふたりは風呂に入つて、ベッドに入った。そうしてクラウドが母さんの云いぶんに従つてベッドの中でぐずぐず云つているとき、その母さんかというと、街のクラブでどぎつい服を着て踊り狂つていた。彼女の周りには、警官ではなくて男たちが群がっていた。

ザックスは、エアリス嬢とコテージにいた。ふたりはささやかなパーティーをして、すっかり楽しんだあとなつた。ちよつとロマンチックな雰囲気か、ふたりのあいだに漂いはじめていた。

「あのさあ」

ザックスがふいに云った。エアリス嬢は、彼の肩に頭をのつけたまま、なあと云った。

「これ、おれからのプレゼントね」

ザックスは小さな箱を手渡した。エアリス嬢が急にしゃきとなった。

「開けてもいいの？」

「もち」

ザックスは笑った。エアリス嬢はその通りにした……そうして、目を丸くした。

「ザックス！」

彼女は叫んだ。箱の中には、青緑にきらきら光る指輪が入っていた。

「まあねえ」

ザックスは鼻の頭を掻いた。

「男ってさあ、プレゼント選ぶとなるとね、なかなか気が利かなくなっちゃうのよね。たぶん想像力欠如してんだな」

「ありがとう！」

エアリス嬢がふいに叫んで、ザックスに飛びついた。

「大事にするね。大事なときしか、しないの」

「それじゃあげた意味ないじゃないの」

エアリス嬢は「男って、こういう気持ちわっかんないのね！」と笑いながら云った。

「でも、この指輪、ミッドガルのものじゃなさそう。誰に教えてもらったの？」

ザックスはぎくりとした。

「なにが？」

「白状しなさい。どんな女の子に、教わったの？」

「やだなあ、あのさあ、別に……」

「いーいーなーさーいー。誰か、女の子に相談したでしょ？」

ザックスは頭をかきむしった。

「はい、しました」

彼は男らしく認めた。

「どんな子？」

「パプのウェイトレス」

「あーあ！ 油断も隙もないんだなあ！ なんて名前の

子？」

「……ライラちゃん」

「で、どうやって教えてもらったの？」



「……まあ、ちよつと、チップをはずみましてですね。何  
度かメールと。がめついたら、あの子。いい商売してく  
れちゃつてさ!」

エアリス嬢は笑い転げた。

それからザックスは、クラウドの母さんがくれた「最高  
にホットなゴム」を使うか使わないか、長いこと頭を悩ま  
した。

クリスマス本番のパーティーは、前日とは打って変わっ  
て、はちゃめちゃで、陽気なものになった。午前のまだ早  
いうちに、エアリス嬢がクラウドの母さんの料理の手伝い  
に来た。クラウドの母さんは二日酔いで頭痛がしているに  
もかわらず、彼女にときばき指示を飛ばし、自分も台所  
に立つて、いつも通りか、それ以上においしい料理をしっ  
かりこしらえた。みんなはピエントさんの家に、午後五時  
に集合した。ピエントさんの奥さんは素直においしいと認  
め、ピエントさんはたしかに、一キロか二キロは増えそう  
な勢いで、自分の妻と、他人の妻の料理を食べ比べた。ク  
ラウドの母さんはそれで、密かに鼻穴を膨らました。もち

ろん、ピエントさんの奥さんの料理も、どっこいどっこい  
なくらいおいしかった。

みんなことごとく陽気にやった。クラウドはトナカイの  
被りものをして器用にでんぐり返りをし、ダンスをした。  
クラウドの母さんは息子があんまりかわいいのでことばを  
失い、昨夜のアルコールがまだちよつと身体に残っている  
ことなどものともせずに、蛇口から水を飲むみたいにぐび  
ぐび赤ワインを飲んだ。ピエントさんとその奥さんは太っ  
た身体からは考えられないほどの華麗な、ほとんど一級品  
と云つていい足さばきで妖艶にタンゴを踊り、喝采を浴び  
た。ザックスはしゃべりまくった。エアリス嬢はそれに  
いちいち笑わずにいられないつつこみを入れた。そしてセフ  
イロスはというと、宴会芸なるものを持ち合わせていない  
ので、それらを眺めて黙っていた。でも、彼はそれでいい  
のだった。ただいるだけで、価値のある人間というのがい  
るものだ。たとえばその雰囲気であつたり、容姿であつた  
り、そのひとの気配というものが、ただそこにあるだけで  
他人を満足させてしまうような、不思議な魅力を持ったひ  
とというものが。

みんなたいへん食べて、飲み、酔っ払った。最終的に、酔っ払わずに残ったのはセフィロスだけになってしまった。みんな実にいるんなところで寝た。ソファの上、テーブルの上、椅子を二つ連結したものの上、台所の隅っこ。クラウドはというと、セフィロスの膝の上にトナカイの被りものをしたままの頭を載せて、すやすや眠っていた。時刻は午前一時を回っていた。セフィロスは宴のあとの光景を見直し、微笑して、そっとクラウドを抱き上げて、ピエントさんの奥さんが昼間のうちに用意してくれていた寝室へ上がっていった。せつかく客室が整えられているのに、そこにちゃんと寝ているのはふたりだけというのは、ちよつとかわいそうな話だった。それでセフィロスは思い直して、ザックスをたたき起こすことにした。

「やめて、おれ眠いの。いま招集かかって、おれ応じないからね……」

セフィロスはそうかと云つて、あつさり諦めた。

寝室へ戻つて、クラウドの隣のベッドに横になり、彼はふとなにかとても神聖な気持ちになつて……それはもしかすると真摯なクラウドの寝顔を見たためかもしれず、彼の

枕元に置いてあるトナカイの被りもののためかもしれず、あるいはさつきまでのどんちゃん騒ぎがうそのように静まり返った家の雰囲気のためかもしれない……眠り続けるクラウドを見つめた。そうして、この長いような短いような十日ばかりのあいだに起きた出来事を、いろいろ思い返した。まったく穏やかな休暇とはほど遠かった！クラウドのことでは死ぬほど心配したし、別に振るいたいとも思っていないかった刀を振り回すことにもなつてしまった。ザックスがいてくれて助かった……彼はいつでも役に立つ。どんな要求にも笑つて応じ、どんな事態にぶち当たつても自分を明るくすることを忘れない。彼みたいな男には、エアリス嬢のような、ノリのいい、でも繊細なところを持つた女性が必要だ。ザックスだつて、三百六十五日明るくタフな男でいられるわけではない。彼がほんのちよつと物憂い気持ちに襲われたとき、それを敏感に感じながらも放置できる我慢強さがあつて、でもとことんひどくなるまでは放つておかぬような、そんなひとが必要なのだ。そしてクラウドの母さん……彼女はほんとうに個性の極みみたいなひとだが、とても素晴らしいひとだ。いい母親をやろう

なんて思ってもいないのに、とんでもなくいい母親だ。明るくて、へこたれなくて……向こう気の強いところなんかはクラウドにそっくりだ。ピエント夫妻もお茶目でいいひとたちだ。それにクラウドが友だちになったらいい、ハンチング帽のビルヒエさんはぜったいに作家の才能がある。その友だちのコランダー捜査官はすばらしいボスだ。相棒のライオネル捜査官は、今回のようなことを何度も経験して、きつと上司のようないい捜査官になるだろう。捜査局のみんな。ひとのために自分の命を懸けられる人間は、みんなとびきりいいひとばかりだ。クラウドを勧誘してきたチョコボ車の馭者ゲインシュタルトさん。クラウドは、たぶんその仕事に向いているのではないか？ ゲインシュタルトさんのようなひとのもとで、大自然の中で、チョコボと一緒に暮らしたら、クラウドはきつとミッドガルにいるより三百倍も幸せだろう。彼の相棒のケルバとバンゴ。クラウドはこの二匹のことがすっかり好きになってしまった。マグリム青年とマティルダ嬢は、いまごろはミディールでよろしくやっているだろう。彼らはきつと、来年あたり結婚して子どもができるだろう。ホープニツツエル教授とそ

の研究仲間、それにカドバン准教授は、研究対象が壊滅的被害を被ったのでミッドガルに帰ってしまったが、かわいそうなことをした！ シノザキ助手はあまり好きになれそうにない人物だったが、しかし死んでしまったからには、できるだけ心穏やかな魂（という表現は文法上おかしいだろうか？）として過ごしてほしいものだ。心優しいエリクソンさんのことも忘れてはならない。帰りの汽車に乗ったら、きつとまたウィリアム・ウィリアムソンさんに会うだろうから、彼に忘れずにクラブS、O、Nのことを説明しなくては。

身内だけの穏やかな、静かな休暇は、いいものだ。でも、たくさんひとに出会い、いろんな経験をする休暇もまたいいものだ。特に、クラウドのようなまだ若い子にとっては。今回のことで、クラウドもちよつとは成長したのだろうか？ でもクラウドは、いまのままでもう十分にいい子なのだ。これ以上どうにもならなくてもいいくらい。セフィロスと、それからたぶん、彼の母親にとっては。しかしほんとうに、クラウドはなんてかわいい鼻をしているのだろう！ それにきれいな金髪！

セフィロスはいろいろな思い出や印象に浸りながら、うとうとした。

年明けすぐに、ザックスが緊急の電話を受けた。ミッドガルに帰る必要はないと云われたらしいが、みんなのためにできるだけすみやかに帰ってやりたいと主張したので、彼に合わせてみんな帰ることにした。セフィロスもクラウドも、クラウドの母さんも、エアリス嬢もみんな。

ピエントさんがすごく悲しそうな顔でチョコボ車を手配し、ゲインシユタルトさんがやつてきた。みんな乗りこみ、ピエントさん夫妻と別れを惜しんだ。

「またぜひいらしてください」

ピエントさんは云った。

「あんな楽しいクリスマスは、ここ最近なかったですよ」

「息子がようやく休暇がとれたっていうの。明日から来るのよ」

ピエント夫人はストライフ夫人にうれしそうに云った。

「あなたたちが帰るのは寂しいけど、でも息子に会えるのはやっぱりうれしいわ」

「そりゃあそうよ」

クラウドの母さんは云った。

「なんてたつて、この世で一番かわいいもんね。ねえ、あなたのキャベツの酢漬け、すごくおいしかった。今度レシビ送ってくれない？」

ふたりの夫人は、仲良しになっていたのだった！クラウドは、女つてわっかんないなあ！ と思い、耳あてを直した。最後にみんなで写真を撮り、チョコボ車は出発した。

トルギボリの駅で、ゲインシユタルトさんと、その相棒のケルバとバンゴと別れた。クラウドはすごく悲しくて、あやうく泣きそうになった。

「坊主、忘れんなよ。職に困ったら、トルギボリのゲインシユタルトさんのとこだ。それから、おまえにこれやるよ」

ゲインシユタルトさんは、クラウドに馭者用のあつたかいボンチヨをくれた。ちよつと、チョコボくさいやつだ。

クラウドはうれしくて、すぐにそれを着てみた。割とよく似合っていた。クラウドはそれを着たまま、ゲインシユタルトさんと、チョコボたちに挟まれて写真を撮った。

そしてさらに今度は、クラウドの母さんとクラウドが別

れなくてはならなかった。ミッドガルとニブルヘイムでは、  
帰る方向がぜんぜん違っていた。みんなはミッドガルに向  
かうコンチネンタルの乗車ホームに向かい、クラウドと母  
さんはその反対のホームに歩いていった。クラウドは母さ  
んと別れるのがほんとにつらかった！でも、男なら我慢  
しなくてはいけない。

「いい、あんた、腹出して寝るんじゃないわよ」

クラウドはこくんとうなずいた。

「同じパジャマ一週間も着てたらダメよ。せいぜい三日く  
らいで洗濯に出しな。あたしに送ってもいいから。それか  
ら、靴下に穴があいたらすぐに云つてよこすのよ。ハンカ  
チも持ち歩いて。いい？ ティッシュと一緒によ。なるべ  
くピーマン食べな。身体にいいから。それと、あんた、お  
菓子ばかり食べたらダメだからね。寝る前に食べちゃダ  
メ。歯磨きしたら、すぐ寝るの。いい？ ドライヤーあん  
まり使い過ぎないでね、あんたの金髪痛むから……」

もし大陸の西側へ向かう汽車がホームに来なかったら、  
クラウドの母さんはいつまでも息子に注意し続けていただ  
ろう。でも、汽車が来てしまったので、クラウドの母さん

は息子をぎゅうつとやって、ほつべたと鼻の頭と額にキス  
してから、汽車に乗りこんだ。ドアが閉まった。クラウド  
は汽車と一緒にホームを走った。そうして汽車が見えなく  
なっても、ずっと手を振っていた。クラウドの母さんは、  
汽車の中で、ハンカチを取り出して目頭を押さえていた……。

クラウドはちよつと翳のある顔で……でも、そんなふう  
に思われぬように注意していつもどおりに装いながら、  
みんなのところへ戻った。セフィロスもザックスも、クラ  
ウドをいつもどおり、そつけなく思えるくらいの態度で出  
迎えた。こういうとき変に気を遣われるのはきまりが悪い  
ということ、みんな知っていた。女性には珍しいことだ  
が、エアリス嬢もそのへんをわきまえていて、クラウドに  
ちよつと含みのある笑みを見せただけで、それ以上あれこ  
れ云わなかった。

コンチネンタルが、休暇に出かけたときと同じように、  
もくもくと煙を吐きながらホームに滑りこんできた。クラ  
ウドは今度も、グロリア未亡人からもらったボラロイドで  
写真を撮ったが、煙突によじ登ることはしなかった。みん

なはずぐずしないで汽車に乗りこんだ。ここは始発駅でも終着駅でもないの、停車時間はそれほど長くなかった。

乗車口では制服を着たクルーたちが一列に並んで、客を出迎えていた。セフィロスはザックスもクラウドも、もう勝手知つたるもので、クルーに乗車券を見せ、いかにも物慣れた調子で中に入つていった。エアリス嬢だけははじめての体験だったので、あちこち見回して、豪華さに驚いてみせていた。

セフィロスはまたも特別室だった！ ということは、そういうことなのだ……男三人はにやにやしながら顔を見合わせた。

「閣下、おまえ、準備できてる？」

「もち」

閣下は云つた。ちょうどそのときだった。

「皆さま、お待ちしておりました」

また彼の登場だ！ 黒の給仕服をびしっと着こなし、頭を寸分の狂いもなくわけて丁寧に撫でつけた、ウィリアム・ウィリアムソン氏が特別室の前で頭を下げた。

「ウィリアムソンさん」

クラウドもザックスも、昔の同級生に会つたみたいに彼に駆け寄つて、握手を求めた。

「お元氣そうでなによりです」

ウィリアムソン氏は微笑んだ。

「お部屋へお入りくださいませ。間もなく発車いたします。このホームでは、発車いたしますと、少々強く揺れます」

みんなウィリアムソン氏の指示に従つた。

また、あの部屋だった。部屋をふたつぶちぬいた、四人は寝られる部屋。セフィロスは行きるときと同じようにクラウドの荷物を整理し、部屋の中を居心地のいいように整えた。ウィリアムソン氏がアフタヌーンティーセットを持つて入つてきた。

「お茶でございます！」

ウィリアムソン氏は完璧に訓練された給仕の腕でお茶を入れ、お菓子をふるまつた。となりの部屋からザックスとエアリス嬢がやつてきた。

「ウィリアムソンさん」

ザックスは云つた。

「おれたちもここで食つていいかなあ？」

「もちろんでございます。では、わたくし横着しまして、こちらのお部屋でまとめてサービスさせていただきます」

ザックスとエアリス嬢は、反対側のソファに腰を下ろした。

「ウィリアムソンさん、おれたち、旅行中にちよつと面白いひとに会ったんです」

ザックスがにやにやしながら云った。

「さようでございますか？」

ウィリアムソン氏は抑制された声で答えた。

「そのひと、エリック・エリックソンさんっていうんです」

で、そのひとは、クラブ S. O. N っていうのに入ってるんです」

クラウドが手足をばたつかせながら云った。

「どのようなクラブなのかお訊きしてよろしいでしょうか？」

「考えてみてください！」

ザックスが云った。

「ウィリアムソンさんも、そのクラブに入る資格があるんです」

ウィリアムソンさんはちよつと顔をしかめ、それからすぐには、目を開いた。

「おやおや！ それはそれは！」

「そのクラブには、ドナルド・ドナルドソンとか、ニック・ニクソンなんてひとが、うじゃうじゃいるんです。で、あちこちに支部があつて、交流するらしいです」

クラウドはエリックソンさんにもらった名刺を、ウィリアムソンさんに手渡した。

「わたくしは、この仕事を終えましたら、すぐにこのクラブに入らねばなりません」

ウィリアムソンさんは強い調子で云った。

「わたくし、これまでの人生で、何度似たような不幸な名前を持った同志に出会えたらと思つたことでしょう！」

ザックスが、でもウィリアムソンさんの名前は悪くないと云つて彼を励ました。それで彼は調子を取り戻し、給仕を終えて、引き下がろうとしたが、ふいになにか思いついたようにドアの前で立ち止まって、

「ところで、みなさま、休暇は楽しゅうございましたか？」

「もつちろんです」

ザックスとクラウドが声をそろえた。セフィロスとエアリス嬢は、くすくす笑った。

おしまい